
2022年度 前期～後期

4.0単位

応用社会システム論演習（1年次）

大角 盛広

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

修士論文作成の準備を行う。

< 到達目標 >

テーマに沿った学術文献・論文を入手できる。

学術論文を読み内容を要約して報告することができる。

数理的な視点から問題をとらえることができる。

新しい問題について数式による定式化ができる。

< 授業の進め方 >

毎回、研究テーマに関する文献・論文を読みその内容を説明してもらう。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方や成績評価の方法等について説明を受ける

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究テーマ検討2

研究テーマを言語化していく

第4回 研究テーマ検討3

研究テーマの絞り込みを行う

第5回 研究テーマ検討4

研究テーマの絞り込みを行う

第6回 文献・論文のサーベイ1

研究テーマにかかわる文献・論文の調査を行う

第7回 文献・論文のサーベイ2

研究テーマにかかわる文献・論文の調査を行う

第8回 文献・論文のサーベイ3

研究テーマにかかわる文献・論文の調査を行う

第9回 文献・論文のサーベイ4

研究テーマにかかわる文献・論文の調査を行う

第10回 中間報告1

これまでのまとめを行い報告する

第11回 文献・論文の読み込み1

研究テーマに深く関連する文献・論文を読み込む

第12回 文献・論文の読み込み2

研究テーマに深く関連する文献・論文を読み込む

第13回 文献・論文の読み込み3

研究テーマに深く関連する文献・論文を読み込む

第14回 文献・論文の読み込み4

研究テーマに深く関連する文献・論文を読み込む

第15回 中間報告2

読み込んだ論文をふまえ、新しい問題設定等について報告する

第16回 論文の読み込み1

修士論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第17回 論文の読み込み2

修士論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第18回 論文の読み込み3

修士論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第19回 論文の読み込み4

修士論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第20回 中間報告3

修士論文の核となる新しい問題を具体的に報告する

第21回 論文の読み込み1

修士論文の作成を念頭に、先行研究の論文を読み込む

第22回 論文の読み込み2

修士論文の作成を念頭に、先行研究の論文を読み込む

第23回 論文の読み込み3

修士論文の作成を念頭に、先行研究の論文を読み込む

第24回 論文の読み込み4

修士論文の作成を念頭に、先行研究の論文を読み込む

第25回 中間報告4

既存の論文・問題と比較しつつ自分の取り組む問題のオリジナリティについて報告する

第26回 問題の定式化1

数式による問題の定式化を行う

第27回 問題の定式化2

数式による問題の定式化を行う

第28回 問題の定式化3

数式による問題の定式化を行う

第29回 問題の定式化4

数式による問題の定式化を行う

第30回 まとめ

全体のふりかえりとまとめを行う

文献・論文を読むために毎回3時間程度の学修が必要です。また、2年生で必要になるプログラミングについても予習しておくことが強く望まれます。

毎回の文献・論文の内容報告および中間報告により評価します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

応用社会システム論演習（2年次）

大角 盛広

< 授業の方法 >

オンライン授業

< 授業の目的 >

修士論文を作成する。

< 到達目標 >

定式化された問題の解法を考えるとともにその正当性を示すことができる。

解法アルゴリズムを実装することができる。

数値実験により解法の有効性を示すことができる。

修士論文が作成できる。

< 授業の進め方 >

毎回、定式化や解法、および数値実験の進捗等について説明してもらう。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方や成績評価の方法等について説明を受ける

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 解法の探求2

前年度の定式化に基づき解法を考える

第4回 解法の探求3

前年度の定式化に基づき解法を考える

第5回 解法の探求4

前年度の定式化に基づき解法を考える

第6回 解法の探求5

前年度の定式化に基づき解法を考える

第7回 解法の探求6

前年度の定式化に基づき解法を考える

第8回 解法の証明1

解法に対する正当性を証明する

第9回 解法の証明2

解法に対する正当性を証明する

第10回 解法の証明3

解法に対する正当性を証明する

第11回 中間報告

これまでのまとめを行い報告する

第12回 解法の実装1

解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの作成を行う

第13回 解法の実装2

解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの作成を行う

第14回 解法の実装3

解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの作成を行う

第15回 解法の実装4

解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの作成を行う

第16回 数値実験1

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第17回 数値実験2

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第18回 数値実験3

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第19回 数値実験4

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第20回 論文の作成1

これまでの研究成果を修士論文としてまとめる

第21回 論文の作成2

これまでの研究成果を修士論文としてまとめる

第22回 論文の作成3

これまでの研究成果を修士論文としてまとめる

第23回 論文の作成4

これまでの研究成果を修士論文としてまとめる

第24回 論文の作成5

これまでの研究成果を修士論文としてまとめる

第25回 論文の作成6

これまでの研究成果を修士論文としてまとめる

第26回 論文の確認1

修士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第27回 論文の確認2

修士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第28回 論文の確認3

修士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第29回 論文の確認4

修士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第30回 まとめ

全体のふりかえりとまとめを行う

論文作成のため毎回3時間程度の学修が必要です。また、アルゴリズムの実装と数値実験ではプログラムの作成とデバッグに毎回5,6時間程度が必要になるでしょう。

毎回の報告と中間報告、および最終的な修士論文の内容により評価します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

応用社会システム論特殊研究

大角 盛広

< 授業の方法 >

オンライン授業

< 授業の目的 >

単一施設配置問題および競合施設配置問題を例に取り数理最適化問題をヒューリスティクスにより数値的に解く手法について理解し、実際に動作するプログラムを作成できるようになることが目的である。

特に遺伝的アルゴリズム、粒子群最適化アルゴリズムによる解法を詳しく学ぶとともに、OpenMPまたはCUDAによるプログラムの動作の高速化手法についても学ぶ。

なお、この授業の担当者は、IT企業で8年間の実務経験のある教員であるので、より実践的な観点からシステムについて解説する。

< 到達目標 >

1. 単一施設配置問題および競合施設配置問題の典型問題とその応用について理解する。
2. 遺伝的アルゴリズムおよび粒子群最適化アルゴリズムの原理を理解する。
3. 施設配置問題に対して遺伝的アルゴリズムまたは粒子群最適化アルゴリズムを適用したプログラムを作成できる。
4. OpenMPまたはCUDAによる処理の並列化手法について理解する。
5. 新しくモデル化した施設配置問題について高速に解を求めるアルゴリズムを開発しそれを実装する。

< 授業の進め方 >

パソコンを使った実習を主体とする。

< 履修するにあたって >

ノートパソコンを持参することが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

授業内容の説明

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 競合施設配置問題1

既存施設と競合する施設配置問題について学ぶ

第4回 競合施設配置問題2

既存施設と競合する施設配置問題について学ぶ

第5回 競合施設配置問題3

Nash均衡モデルについて学ぶ

第6回 競合施設配置問題4

Stackelberg均衡モデルについて学ぶ

第7回 遺伝的アルゴリズムによる解法

問題を遺伝的アルゴリズム向けにコーディングする方法と、どのように解が求められるかを学ぶ

第8回 遺伝的アルゴリズムの実装1

簡単な単一施設配置問題を解ける遺伝的アルゴリズムを実装する

第9回 遺伝的アルゴリズムの実装2

簡単な競合施設配置問題を解ける遺伝的アルゴリズムを実装する

第10回 粒子群最適化アルゴリズムによる解法

問題を粒子群最適化アルゴリズム向けにコーディングする方法と、どのように解が求められるかを学ぶ

第11回 粒子群最適化アルゴリズムの実装1

簡単な単一施設配置問題を解ける粒子群最適化アルゴリズムを実装する

第12回 粒子群最適化アルゴリズムの実装2

簡単な競合施設配置問題を解ける粒子群最適化アルゴリズムを実装する

第13回 粒子群最適化アルゴリズムの実装3

簡単な単一施設配置問題を解ける粒子群最適化アルゴリズムを実装する

第14回 ベンチマーク関数による最適化アルゴリズムの評価手法1

作成した遺伝的アルゴリズムと粒子群最適化アルゴリズムの性能を評価するためのベンチマーク関数について学びパラメータを変えながら実験することを学ぶ

第15回 ベンチマーク関数による最適化アルゴリズムの評価手法2

作成した遺伝的アルゴリズムと粒子群最適化アルゴリズムの性能を評価するためのベンチマーク関数について学びパラメータを変えながら実験することを学ぶ

第16回 OpenMPによる並列化の手法

OpenMPを使った並列化・高速化の手法について学ぶ

第17回 CUDAによる並列化の手法1

CUDAを使った並列化・高速化の手法について学ぶ

第18回 CUDAによる並列化の手法2

CUDAを使った並列化・高速化の手法について学ぶ

第19回 新しい施設配置問題の定式化1

既存論文などを参考に施設配置問題の新しいモデルを考え定式化を行う

第20回 新しい施設配置問題の定式化2

既存論文などを参考に施設配置問題の新しいモデルを考え定式化を行う

第21回 新しい施設配置問題の定式化3

既存論文などを参考に施設配置問題の新しいモデルを考え定式化を行う

第22回 新しい施設配置問題の定式化4

既存論文などを参考に施設配置問題の新しいモデルを考え定式化を行う

第23回 新しい施設配置問題の定式化5

既存論文などを参考に施設配置問題の新しいモデルを考え定式化を行う

第24回 新しい施設配置問題の解法と実装1

定式化を行った問題について可能な範囲で数理的な解法を考えると同時にヒューリスティクスで解けるようなコーディングを行う

第25回 新しい施設配置問題の解法と実装2

定式化を行った問題について可能な範囲で数理的な解法を考えるとともにヒューリスティクスで解けるようなコーディングを行う

第26回 新しい施設配置問題の解法と実装3

数値実験が可能なようにアルゴリズムの実装を行う

第27回 新しい施設配置問題の解法と実装4

数値実験が可能なようにアルゴリズムの実装を行う

第28回 新しい施設配置問題の解法と実装5

数値実験が可能なようにアルゴリズムの実装を行う

第29回 新しい施設配置問題における数値実験

パラメータを変えながら数値実験を行い、解の精度について検討する

第30回 定式化、解法、数値実験結果についてまとめる論文としてまとめることを念頭に結果をまとめる論文や文献の読み込み、およびコーディングとデバッグ。

毎回5～6時間程度の時間外学修が必要となる。

実装したプログラムによる数値実験結果とそれに関するレポートを提出してもらう。

理解度の確認のため授業中に随時質問やミニテストを行う。その回答50%、最終課題50%によって評価する。特定のテキストは用いない。論文・参考文献等を授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

応用社会システム論特殊講義

大角 盛広

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

コンピュータ・シミュレーションの基礎的な手法を学び、実際に自分でシミュレーションプログラムが作れるようになる。

人工知能の一分野である機械学習の基礎的な手法を学び、その原理に基づいたプログラムが作れるようになる。

なお、この授業の担当者は、IT企業で8年間の実務経験のある教員であるので、より実践的な観点からシステムについて解説する。

< 到達目標 >

コンピュータ・シミュレーションの基礎的な手法を理解する。

コンピュータ・シミュレーションの限界や問題点について理解する。

簡単なシミュレーションプログラムの作成ができる。

ニューラル・ネットワークによる機械学習の原理を理解する。

ニューラル・ネットワークによる機械学習のプログラムが作成できる。

ディープ・ラーニングの仕組みを理解する。

< 授業の進め方 >

パソコンを使った実習を主体とする。

< 履修するにあたって >

ノートパソコンを持参することが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

授業内容の説明

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 確定系シミュレーションの例

確定系のシミュレーションプログラムの例を学ぶ

第4回 確率系モデル

確率系の基礎的なモデルについていくつか学ぶ

第5回 確率系シミュレーションの例

確率系のシミュレーションプログラムの例を学ぶ

第6回 コンピュータ言語の概要

コンパイラとインタープリタ、およびスクリプト言語の特徴について学ぶ

第7回 変数

変数とその型の概念を学び自分で応用プログラムが書けるようになる

第8回 制御構造1

基本的な制御構造について学ぶ

第9回 制御構造2

基本的な制御構造とその応用について学び自分で応用プログラムが書けるようになる

第10回 静的データ構造

配列構造について学ぶ

第11回 入出力

入出力の種類およびバッファリングについて学ぶ

第12回 確定系モデルのシミュレーションプログラム作成1

今までに学んだ知識を活用し自分で確定系モデルのプログラムを作成する

第13回 確定系モデルのシミュレーションプログラム作成2

今までに学んだ知識を活用し自分で確定系モデルのプログラムを作成する

第14回 確率系モデルのシミュレーションプログラムの作成1

今までに学んだ知識を活用し自分で確率系モデルのプログラムを作成する

第15回 確率系モデルのシミュレーションプログラムの作成 2

今までに学んだ知識を活用し自分で確率系モデルのプログラムを作成する

第16回 動的データ構造1

リンク構造とメモリについて学ぶ

第17回 動的データ構造2
リスト構造について学ぶ
第18回 動的データ構造3
ツリー構造について学ぶ
第19回 ニューラル・ネットワークの基礎
行列演算とバックプロパゲーションの手法について学ぶ
第20回 ニューラル・ネットワークの応用例
単純な画像(数字)を識別させる方法について学ぶ
第21回 ニューラル・ネットワークにおける学習1
画像(数字)認識を例に取り実際に学習させることを学ぶ
第22回 ニューラル・ネットワークにおける学習2
画像(数字)認識を例に取り実際に学習させることを学ぶ
第23回 ディープ・ラーニングの概要
ニューラルネットワークをさらに進めたディープラーニングの考え方について学ぶ
第24回 課題作成
自分で設定した問題を解くもしくはシミュレートするプログラムを作成する
第25回 課題作成
自分で設定した問題を解くもしくはシミュレートするプログラムを作成する
第26回 課題作成
自分で設定した問題を解くもしくはシミュレートするプログラムを作成する
第27回 課題作成
自分で設定した問題を解くもしくはシミュレートするプログラムを作成する
第28回 課題作成
自分で設定した問題を解くもしくはシミュレートするプログラムを作成する
第29回 課題作成
自分で設定した問題を解くもしくはシミュレートするプログラムを作成する
第30回 課題発表・提出
作成したプログラムを提出し内容について発表するコーディングとデバッグ。特に後期は毎回3時間程度の時間外学修が必要となる。
最終課題として作成したプログラムを提出してもらう。理解度の確認のため授業中に随時質問やミニテストを行う。その回答50%、最終課題50%によって評価する。特定のテキストは用いない。参考文献等を授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

応用社会システム論特別演習（1年次）

大角 盛広

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

博士論文作成に向けて、まず学術雑誌に投稿可能な論文を書くための準備を行う。

< 到達目標 >

投稿論文の内容が固まる

< 授業の進め方 >

毎回、研究テーマに関する文献・論文を読みその内容を説明してもらい。投稿論文の作成に取りかかると、研究・論文の進捗について報告してもらい、それについて討論・指導を行う。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方や成績評価の方法等について説明を受ける

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究テーマ検討2

研究テーマの絞り込み

第4回 文献・論文のサーベイ1

研究テーマにかかわる文献・論文の調査を行う

第5回 文献・論文のサーベイ2

研究テーマにかかわる文献・論文の調査を行う

第6回 文献・論文のサーベイ3

研究テーマにかかわる文献・論文の調査を行う

第7回 文献・露文の読み込み1

研究テーマに深く関連する文献・論文を読み込む

第8回 文献・露文の読み込み2

研究テーマに深く関連する文献・論文を読み込む

第9回 文献・露文の読み込み3

研究テーマに深く関連する文献・論文を読み込む

第10回 中間報告1

読み込んだ論文をふまえ、新しい問題設定・モデル等について報告する

第11回 先行研究の調査1

投稿論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第12回 先行研究の調査2

投稿論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第13回 先行研究の調査3

投稿論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第14回 中間報告2

投稿論文の核となる新しい問題・モデルを具体的に報告する

第15回 先行研究の調査4

投稿論文の作成を念頭に、先行研究の論文を読み込む

第16回 先行研究の調査5
投稿論文の作成を念頭に、先行研究の論文を読み込む
第17回 先行研究の調査6
投稿論文の作成を念頭に、先行研究の論文を読み込む
第18回 中間報告3
既存の論文・問題・モデルと比較しつつ自分の取り組む
問題のオリジナリティについて報告する
第19回 問題の定式化1
数式による問題の定式化を行う
第20回 問題の定式化2
数式による問題の定式化を行う
第21回 問題の定式化3
数式による問題の定式化を行う
第22回 解法の探求1
定式化に基づき解法を考える
第23回 解法の探求2
定式化に基づき解法を考える
第24回 解法の探求3
定式化に基づき解法を考える
第25回 解法の探求4
定式化に基づき解法を考える
第26回 解法の探求5
定式化に基づき解法を考える
第27回 解法の探求6
定式化に基づき解法を考える
第28回 解法の証明1
解法に対する正当性を証明する
第29回 解法の証明2
解法に対する正当性を証明する
第30回 まとめ
これまでのまとめを行い報告する
文献・論文を読むために毎回3時間程度の学修が必要です。
毎回の報告および中間報告の内容により評価します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

応用社会システム論特別演習（2年次）

大角 盛広

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

学術雑誌に投稿可能な論文を書き上げる。

2本目の投稿論文を書く準備をする。

研究者として自立できる下地を作る。

< 到達目標 >

学術雑誌に論文を投稿する。

< 授業の進め方 >

毎回、研究・論文の進捗について報告してもらい、それ

について討論・指導を行う。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方や成績評価の方法等について説明を受ける

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 解法の実装2

前年度の解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの作成を行う

第4回 解法の実装3

前年度の解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの作成を行う

第5回 解法の実装4

前年度の解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの作成を行う

第6回 数値実験1

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第7回 数値実験2

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第8回 数値実験3

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第9回 中間報告1

これまでのまとめを行い報告する

第10回 論文の作成1

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第11回 論文の作成2

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第12回 論文の作成3

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第13回 論文の作成4

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第14回 論文の確認1

投稿論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第15回 論文の確認2

投稿論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第16回 別モデルの検討1

別の新しい問題設定・モデルについて考える

第17回 別モデルの検討2

別の新しい問題設定・モデルについて考える

第18回 先行研究の調査1

投稿論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第19回 先行研究の調査2

投稿論文の作成を念頭に、研究テーマに深く関連する論文を読み込む

第20回 中間報告2

新しく取り組む問題・モデルのオリジナリティについて
報告する

第21回 問題の定式化1

数式による問題の定式化を行う

第22回 問題の定式化2

数式による問題の定式化を行う

第23回 問題の定式化3

数式による問題の定式化を行う

第24回 解法の探求1

定式化に基づき解法を考える

第25回 解法の探求2

定式化に基づき解法を考える

第26回 解法の探求3

定式化に基づき解法を考える

第27回 解法の探求4

定式化に基づき解法を考える

第28回 解法の証明1

解法に対する正当性を証明する

第29回 解法の証明2

解法に対する正当性を証明する

第30回 まとめ

全体のふりかえりとまとめを行う

論文を書くために毎回5,6時間程度の学修が必要です

論文の内容により評価します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

応用社会システム論特別演習（3年次）

大角 盛広

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

博士論文を書くことと、研究者として自立できることを
目的とする。

< 到達目標 >

学術雑誌に複数の論文を投稿する。

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる。

研究の進め方、発表の仕方、その他研究倫理等、研究者
としての最低限の基礎を身につける。

< 授業の進め方 >

毎回、研究・論文の進捗について報告してもらい、それ
について討論・指導を行う。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方や成績評価の方法等について説明を受ける

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 解法の実装2

前年度の解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの
作成を行う

第4回 解法の実装3

前年度の解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの
作成を行う

第5回 解法の実装4

前年度の解法アルゴリズムが実際に動作するプログラムの
作成を行う

第6回 数値実験1

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第7回 数値実験2

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第8回 数値実験3

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第9回 数値実験4

解法の有効性を実証するための数値実験を行う

第10回 論文の作成1

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第11回 論文の作成2

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第12回 論文の作成3

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第13回 論文の作成4

これまでの研究成果を投稿論文としてまとめる

第14回 論文の確認1

投稿論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第15回 論文の確認2

投稿論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第16回 中間報告

博士論文の内容・構成等を報告する

第17回 論文の作成1

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第18回 論文の作成2

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第19回 論文の作成3

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第20回 論文の作成4

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第21回 論文の作成5

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第22回 論文の作成6

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第23回 論文の作成7

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第24回 論文の作成8

これまでの研究成果を博士論文としてまとめる

第25回 論文の確認1

博士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第26回 論文の確認2

博士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第27回 論文の確認3

博士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第28回 論文の確認4

博士論文の内容の検証・チェック・推敲を行う

第29回 博士論文の最終チェック

博士論文の全体的な最終チェックを行う

第30回 まとめ

全体のふりかえりとまとめを行う

論文を書くために毎回5,6時間程度の学修が必要です。

中間報告および最終的な博士論文の内容により評価します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

会計学演習（1年次）

島永 和幸

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本演習では、経済学研究科のDPで示された経営学に関する高度な専門知識を有し（知識・理解）、経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができ（思考・判断）、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり（関心・意欲）、修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる（技能・表現）ことを達成するために、会計学に関する高度な専門知識を身に着け、研究することを目的とする。

< 到達目標 >

本演習では、2年次の修士論文作成に向けて、問題設定能力、資料収集能力、文献分析能力、修士論文作成能力、プレゼンテーション・スキル等を身に着けることを到達目標とする。

< 授業のキーワード >

会計学

< 授業の進め方 >

演習形式で進める。必要に応じて、レポート等を提出する。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

本演習の目的や到達目標、授業の進め方などを理解する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究課題の探索

各自の関心に基づいて課題を探索する。

第4回 研究課題の探索

各自の関心に基づいて課題を探索する。

第5回 研究課題の探索

各自の関心に基づいて課題を探索する。

第6回 中間報告

各自の関心に基づいて探索した課題について報告・討論を行う。

第7回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第8回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第9回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第10回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第11回 中間報告

先行研究のレビュー内容について報告・討論を行う。

第12回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第13回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第14回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第15回 中間報告

各自で研究課題の分析内容について報告・討論を行う。

第16回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第17回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第18回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第19回 先行研究レビュー

課題に関する先行研究を探索し、レビューする。

第20回 中間報告

各自の関心に基づいて探索した課題について報告・討論を行う。

第21回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第22回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第23回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第24回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第25回 中間報告

各自で研究課題の分析を行う。

第26回 まとめ

最終報告（プレゼン）に向けた取り組みを行う。

第27回 まとめ

最終報告（プレゼン）に向けた取り組みを行う。

第28回 まとめ

最終報告（プレゼン）に向けた取り組みを行う。

第29回 最終報告会

1年間の研究活動成果をプレゼンする。

第30回 ふりかえり

1年間の演習の活動を振り返り、2年次の演習に向けたアナウンスを行う。

研究活動に必要な資料収集や文献研究、論文作成、プレゼンの準備などを行う必要がある。（3～4時間以上）

適宜、指示する。

発表・討論への参加態度 50% 報告・研究内容 50%で総合的に勘案して評価する。 適宜、指示する。

適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

会計学演習（2年次）

島永 和幸

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本演習では、経済学研究科のDPで示された経営学に関する高度な専門知識を有し（知識・理解）、経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができ（思考・判断）、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり（関心・意欲）、修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる（技能・表現）ことを達成するために、会計学に関する高度な専門知識を身に着け、研究することを目的とする。

< 到達目標 >

本演習では、修士論文完成に向けて、問題設定能力、資料収集能力、文献分析能力、修士論文作成能力、プレゼンテーション・スキル等を身に着けることを到達目標とする。

< 授業のキーワード >

会計学

< 授業の進め方 >

演習形式で進める。修士論文を完成する。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

本演習の目的や到達目標、授業の進め方などを理解する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第4回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第5回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第6回 中間報告

各自の関心に基づいて探索した課題について報告・討論を行う。

第7回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第8回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第9回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第10回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第11回 中間報告

各自の関心に基づいて探索した課題について報告・討論を行う。

第12回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第13回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第14回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第15回 中間報告

各自で研究課題の分析内容について報告・討論を行う。

第16回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第17回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第18回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第19回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第20回 中間報告

各自で研究課題の分析内容について報告・討論を行う。

第21回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第22回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第23回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第24回 研究課題の分析

各自で研究課題の分析を行う。

第25回 中間報告

各自で研究課題の分析内容について報告・討論を行う。

第26回 まとめ
最終報告（プレゼン）に向けた取り組みを行う。
第27回 まとめ
最終報告（プレゼン）に向けた取り組みを行う。
第28回 まとめ
最終報告（プレゼン）に向けた取り組みを行う。
第29回 最終報告会
1年間の研究活動成果をプレゼンする。
第30回 修士論文提出
修士論文を完成し、提出する。
研究活動に必要な資料収集や文献研究、修士論文作成、
プレゼンの準備などを行う必要がある。（3～4時間以上）
適宜、指示する。
発表・討論への参加態度 50% 報告・研究内容 50%で総合的に勘案して評価する。 適宜、指示する。
適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

会計学特殊研究

島永 和幸

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

本研究は、経済学・経営学の高度な専門知識を修得することに関し、具体的には、統合報告や無形資産会計および人的資本会計等に関する先行研究をレビューし、考察を行うことを目的とする。また、わが国における統合報告書のベストプラクティスを理解し、考察することを目的とする。

< 到達目標 >

近年の統合報告や無形資産会計等に関する内容を理解し、具体的に説明できるようになる。（知識）

インターネットや図書館等を通じて文献を収集し、レポートにまとめることができる。（技能）

< 授業のキーワード >

統合報告 無形資産会計 人的資本会計 知的資産会計

< 授業の進め方 >

講義と質疑応答を行う。

< 提出課題など >

第1-2回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

統合報告や無形資産会計のバックグラウンドを理解する。

< 参考図書 >

第3-5回

< 授業計画 >

第6-8回 人的資本会計
IFRSやFASB等における人的資本会計について理解する。
第9-11回 知的資産会計
知的資産会計について理解する。
第12-14回 統合報告
統合報告について理解する。
第15回 前期のまとめ
前期の内容をふりかえる。
第16-18回 統合報告書
わが国の統合報告書のベストプラクティスを理解する。
第19-21回 ビジネスモデル
統合報告書におけるビジネスモデルのベストプラクティスを理解する。
第22-24回 財務資本・製造資本
統合報告書における財務資本・製造資本のベストプラクティスを理解する。
第25-27回 知的資本・人的資本
統合報告書における知的資本・人的資本のベストプラクティスを理解する。
第28-29回 社会・関係資本・自然資本
統合報告書における社会・関係資本・自然資本のベストプラクティスを理解する。
第30回 本研究のまとめ
本研究で学習した内容をふりかえる。
インターネットや図書館等で情報収集し、レポートを作成する。（約2～4時間）
講義中に課された課題について、指定期日までにレポートにまとめてくること。
レポート80%、報告・討論20% 最初の講義日に指定する。
適宜、指定する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

会計学特殊講義

島永 和幸

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この科目は、経済学研究科のDPに示す、経済学・経営学に関する高度な専門知識を有し、修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができるよう総合的に学修することを目指す。本講義は、知的資産の会計と人的資本の会計に関する理論と実践を踏まえて、最新の企業レポートとしての統合報告について、その基本的考え方と仕組みを理解し、具体的事例に関心をもって接し、適切なコメントができるようになることを目的とする。

< 到達目標 >

知的資産の会計や人的資本の会計に関する基本的考え方

について説明できる。(知識・理解)、知的資産の会計や人的資本の会計に関して意見を述べるができる。(技能・表現)

<授業のキーワード>

知的資産の会計、人的資本の会計、統合報告

<授業の進め方>

講義中心の授業であるが、対話式の授業方式を重視し、受講生からの意見や疑問点について自発的な発言を求める。受講者がレジユメを作成して、報告することを求める場合がある。必要に応じて、レポート課題を提出することを求める。状況に応じて、進捗度や授業内容を調整することがある。

<履修するにあたって>

2年次に履修することを想定している。

1年次に、「財務会計論特殊講義」を履修済であることが望ましい。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

イントロダクション

<テキスト>

授業の目的、到達目標、授業の進め方、成績評価方法・基準について理解する。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 知的資産会計の生成基盤(2)

知的資産会計の生成基盤を理解する。

第4回 知的資産会計の生成基盤(3)

ナレッジ型経済と知的資産マネジメントを理解する。

第5回 知的資産会計の理論的枠組み(1)

知的資産会計の論点と課題を理解する。

第6回 知的資産会計の理論的枠組み(2)

知的資産の資産性と認識可能性を理解する。

第7回 知的資産会計の理論的枠組み(3)

知的資産の評価と公正価値会計を理解する。

第8回 知的資産会計の理論的枠組み(4)

ブランドの認識と評価を理解する。

第9回 知的資産会計の理論的枠組み(5)

知的資産とナレッジ型会計のゆくえを理解する。

第10回 知的資産の戦略的利用と資金調達(1)

知的資産の戦略的利用と金融機関の資金調達スキームの枠組みを理解する。

第11回 知的資産の戦略的利用と資金調達(2)

知的財産権と担保融資の構造を理解する。

第12回 知的資産の戦略的利用と資金調達(3)

ベンチャー・キャピタルと知的資産情報の有用性を理解する。

第13回 知的資産のレポートと知的資産報告書(1)

知的資産情報の拡充化と知的資産報告書を理解する。

第14回 知的資産のレポートと知的資産報告書(2)

知的資産のマネジメントとレポートを理解する。

第15回 知的資産のレポートと知的資産報告書(3)

知的資産のレポートと知的資産報告書を理解する。

第16回 知的資産のレポートと知的資産報告書(4)

知的資産のレポートと知的財産報告書を理解する。

第17回 知的資産のマネジメントと測定・開示(1)

未来価値創造と知的資産報告書を理解する。

第18回 知的資産のマネジメントと測定・開示(2)

無形財と新測定アプローチを理解する。

第19回 知的資産のマネジメントと測定・開示(3)

ハイテク産業と知的資産レポートを理解する。

第20回 統合報告登場の背景

統合報告登場の背景を理解する。

第21回 IIRCの統合報告フレームワーク

IIRCの統合報告フレームワークを理解する。

第22回 人的資本の会計(1)

人的資本の会計の基本的視座を理解する。

第23回 人的資本の会計(2)

人的資本の資産性と公正価値測定を理解する。

第24回 人的資本の会計(3)

負債パースペクティブと人的資本の使用権モデルに基づく認識アプローチを理解する。

第25回 人的資本の会計(4)

自己創設無形資産会計と人的資本への適用可能性を理解する。

第26回 人的資本の会計(5)

コスト・アプローチと人的資本の認識・測定 CAREモデルとTDLモデルの人的資本への適用を理解する。

第27回 人的資本の会計(6)

人的資本としての個人のれんの識別と評価

第28回 ケーススタディ(1)

統合報告実施企業の事例分析を行う。(1)

第29回 ケーススタディ(2)

統合報告実施企業の事例分析を行う。(2)

第30回 本講義のまとめ

全体のまとめを行う。

事前学習として、テキストを読み込んでおくこと。(目安として1時間)、レジユメの作成やレポート課題の作成を求めることがある。(目安として2時間)

レジユメの作成や与えられた課題に対するレポートを作成し、提出すること。

授業中の質疑・発表50%、レポート50%を基礎として、総合的に勘案して評価する。・古賀智敏『知的資産の会計<改訂増補版>』千倉書房、2012年、3,888円。

・島永和幸『人的資本の会計-認識・測定・開示-』同

文館出版、2021年、4,290円。

・古賀智敏(責任編集)・池田公司(編著)・沖野光二・島永和幸・戸田統久・付馨・島田佳憲(共著)『統合報告革命 - ベスト・プラクティス企業の事例分析』税務経理協会、2015年、3,996円。

・古庄修編『国際統合報告論 - 市場の変化・制度の形成・企業の対応 - 』同文館出版、2018年、3,888円。

2022年度 前期～後期

4.0単位

会計学特別演習 (1年次)

島永 和幸

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本演習は、経済学研究科のDPで示された経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つことを目指して、博士課程論文の作成にあたって、各自の問題意識に基づいて、会計学に関する専門文献を収集し、考察し、発表し、討論するための知識やスキル、能力を獲得することを目的とする。

< 到達目標 >

博士課程論文の作成に必要な知識やスキル、能力を獲得できる。

< 授業の進め方 >

各自が設定した研究課題について、指導教員の指導を受けながら、研究を遂行し、報告し、討論する形式で進めていく。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

本演習の目的や進め方などについて理解する。

< 参考図書 >

第2～28回

< 授業計画 >

第29～30回 研究成果のまとめ

1年間の研究成果を最終レポートにまとめ、プレゼンを行い、討論する。

各自が設定した研究課題について、資料収集や論文作成などを行う。博士課程在籍中に学会報告や論文投稿も必要となる。

報告回のレポートや最終レポートを提出する。

提出レポート60%、プレゼンテーション40%で総合的に評価する。 適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

会計学特別演習 (2年次)

島永 和幸

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本演習は、経済学研究科のDPで示された経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つことを目指して、博士課程論文の作成にあたって、各自の問題意識に基づいて、会計学に関する専門文献を収集し、考察し、発表し、討論するための知識やスキル、能力を獲得することを目的とする。

< 到達目標 >

博士課程論文の作成に必要な知識やスキル、能力を獲得できる。

< 授業の進め方 >

各自が設定した研究課題について、指導教員の指導を受けながら、研究を遂行し、報告し、討論する形式で進めていく。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

本演習の目的や進め方などについて理解する。

< 参考図書 >

第2～28回

< 授業計画 >

第29～30回 研究成果のまとめ

1年間の研究成果を最終レポートにまとめ、プレゼンを行い、討論する。

各自が設定した研究課題について、資料収集や論文作成などを行う。博士課程在籍中に学会報告や論文投稿も必要となる。

報告回のレポートや最終レポートを提出する。

提出レポート60%、プレゼンテーション40%で総合的に評価する。 適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

会計学特別演習 (3年次)

島永 和幸

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本演習は、経済学研究科のDPで示された経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つことを目指して、3年間の集大成としての博士課程論文を作成することを目的とする。

<到達目標>

指導教員からの指導・助言を得て、博士課程論文を作成することができる。

<授業の進め方>

各自が設定した研究課題について、指導教員の指導を受けながら、研究を遂行し、報告し、討論する形式で進めていく。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

イントロダクション

<テキスト>

本演習の目的や進め方などについて理解する。

<参考図書>

第2～28回

<授業計画>

第29～30回 博士課程論文の完成

指導教員の指導に従って、博士課程論文を完成する。指導教員から最終チェックを受け、許可を得て、定められた提出期間に所定の手続きに基づいて論文を提出する。各自が設定した研究課題について、資料収集や論文作成などを行う。博士課程在籍中に学会報告や論文投稿も必要となる。

論文の作成状況40%、博士課程論文60%で総合的に評価する。適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

管理会計論演習（1年次）

吉田 康久

<授業の方法>

対面式授業

<授業の目的>

（主題）

研究題目をもとに、管理会計における管理工学的な技法を、調査・研究成果し、その成果を課題研究報告書として制作する。2年次においては、修士論文を作成するため、その布石となる成果を求める。

研究課題を、調査・研究し、革新的な論理を新たに導き出すことが、演習の目的である。そのためには、自由な解釈や思想、そして発想を持ち合わせることが重要である。調査・研究の方法は、文献研究やデータ分析、ネット検索など多様な方法を活用する。

（目標）

課題における革新的な論理を、根拠をもって概説し、実態組織に適用（準用）する場合の実施可能性を提唱でき、修士論文の執筆に寄与するほどの完成度を達成させることである。

<到達目標>

修士論文への布石となる成果が必要であり、そこには管理工学的見地が含有されていなければならない。

管理会計は、実社会では、唯物論ではない技法であるため、個人的な見解を持ち合わせ、その見解を提唱できなければならない。

<授業のキーワード>

マネジメントアカウンティング・コストマネジメント・テクニカルマネジメント・ヒューマンマネジメント

<授業の進め方>

自らが選定した研究テーマを、自律的に進めて行く。研究の方法や情報収集の仕方、さらに集約の仕方などについて、適時に指導する。

<履修するにあたって>

別段の理由がない限り、欠席を想定していない。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

研究題目の設定における概説を行う。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 研究題目の識別

目的適合性に合わせた技法を類別する。

第4回 研究題目の調査・研究対象の選定

調査・研究対象とする技法を選定する。

第5回 研究題目の調査・研究対象の情報収集

文献等やデータの収集を行う。インターネットも活用する。

第6回 研究題目の調査・研究対象の分析

文献等やデータによって情報収集された結果を分析する。

第7回 研究題目の調査・研究対象の視点整理

調査・研究対象の解すべき視点や論点を洗い出す。

第8回 研究題目の調査・研究結果の報告レポート作成

洗い出された視点や論点をレポートにまとめる。

第9回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第10回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第11回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第12回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第13回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。
第14回 調査・研究の展開
調査・研究をさらに深化させる。
第15回 中間報告会
調査・研究の経緯とこれまでの成果を考察する。
第16回 調査・研究対象の検討会
調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。
第17回 調査・研究対象の検討会
調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。
第18回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。
第19回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。
第20回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。
第21回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。
第22回 研究報告書・作成手順の検討
研究成果を報告書として作成するための要点について検討する。
第23回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。
第24回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。
第25回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。
第26回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。
第27回 調査・研究成果の発表会
発表をもとに議論を行う。
第28回 調査・研究成果の発表会
発表をもとに議論を行う。
第29回 調査・研究成果の発表会
発表をもとに議論を行う。
第30回 最終報告会
調査・研究の成果を諮問する。
多くの書籍を図書館で活用すること。
適時に、提出を課す。
調査・研究の成果を評価する。 随時、指導する。
指定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

管理会計論演習（2年次）

吉田 康久

< 授業の方法 >

対面式授業

< 授業の目的 >

（主題）

研究題目をもとに、管理会計における管理工学的な技法を、調査・研究成果し、その成果を課題研究報告書として制作する。2年次においては、修士論文を作成するため、その布石となる成果を求める。

研究課題を、調査・研究し、革新的な論理を新たに導き出すことが、演習の目的である。そのためには、自由な解釈や思想、そして発想を持ち合わせる事が重要である。調査・研究の方法は、文献研究やデータ分析、ネット検索など多様な方法を活用する。

（目標）

課題における革新的な論理を、根拠をもって概説し、実態組織に適用（準用）する場合の実施可能性を提唱でき、修士論文の執筆に寄与するほどの完成度を達成させることである。

< 到達目標 >

修士論文への布石となる成果が必要であり、そこには管理工学的見地が含有されていなければならない。

管理会計は、実社会では、唯物論ではない技法であるため、個人的な見解を持ち合わせ、その見解を提唱できないなければならない。

< 授業のキーワード >

マネジメントアカウンティング・コストマネジメント・テクニカルマネジメント・ヒューマンマネジメント

< 授業の進め方 >

自らが選定した研究テーマを、自律的に進めて行く。研究の方法や情報収集の仕方、さらに集約の仕方などについて、適時に指導する。

< 履修するにあたって >

別段の理由がない限り、欠席を想定していない。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

研究題目の設定における概説を行う。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究題目の識別

目的適合性に合わせた技法を類別する。

第4回 研究題目の調査・研究対象の選定

調査・研究対象とする技法を選定する。

第5回 研究題目の調査・研究対象の情報収集

文献等やデータの収集を行う。インターネットも活用する。

第6回 研究題目の調査・研究対象の分析

文献等やデータによって情報収集された結果を分析する。

第7回 研究題目の調査・研究対象の視点整理

調査・研究対象の解すべき視点や論点を洗い出す。

第8回 研究題目の調査・研究結果の報告レポート作成

洗い出された視点や論点をレポートにまとめる。

第9回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論
報告をもとに討論を行う。

第10回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論
報告をもとに討論を行う。

第11回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論
報告をもとに討論を行う。

第12回 調査・研究の展開
調査・研究をさらに深化させる。

第13回 調査・研究の展開
調査・研究をさらに深化させる。

第14回 調査・研究の展開
調査・研究をさらに深化させる。

第15回 中間報告会
調査・研究の経緯とこれまでの成果を考察する。

第16回 調査・研究対象の検討会
調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第17回 調査・研究対象の検討会
調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第18回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第19回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第20回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第21回 調査・研究の実施
検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第22回 研究報告書・作成手順の検討
研究成果を報告書として作成するための要点について検討する。

第23回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。

第24回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。

第25回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。

第26回 研究報告書の作成
選定した管理会計技法の研究成果を報告書にまとめる。

第27回 調査・研究成果の発表会
発表をもとに議論を行う。

第28回 調査・研究成果の発表会
発表をもとに議論を行う。

第29回 調査・研究成果の発表会
発表をもとに議論を行う。

第30回 最終報告会
調査・研究の成果を諮問する。
多くの書籍を図書館で活用すること。
適時に、提出を課す。
調査・研究の成果を評価する。 随時、指導する。
指定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

管理会計論特殊研究

吉田 康久

< 授業の方法 >

対面式で授業を実施します。

< 授業の目的 >

(主題)

研究課題を、調査・研究し、革新的な論理を新たに導き出すことが目的であるできるように、基礎的な会計理論を修学する。修学においては、自由な解釈や思想、そして発想を持ち合わせることが重要である。調査・研究の方法は、文献研究やデータ分析、ネット検索など多様な方法を活用する。

(目標)

課題における革新的な論理を、根拠をもって概説し、実態組織に適用(準用)する場合の実施可能性を提唱でき、博士論文の執筆に寄与するほどの完成度を達成させることである。

< 到達目標 >

管理工学的見地が含有され、博士論文の執筆を前提とした成果が必要である。

管理会計は、実社会では、唯物論ではない技法であるため、個人的な見解を持ち合わせ、その見解を提唱できないなければならない。

< 授業のキーワード >

マネジメントアカウンティング・コストマネジメント・テクニカルマネジメント・ヒューマンマネジメント

< 授業の進め方 >

自らが選定した研究テーマを、自律的に進めて行く。研究の方法や情報収集の仕方、さらに集約の仕方などについて、適時に指導する。

< 履修するにあたって >

別段の理由がない限り、欠席を想定していない。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

研究題目の設定における概説を行う。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究題目の識別

目的適合性に合わせた技法を類別する。

第4回 研究題目の調査・研究対象の選定

調査・研究対象とする技法を選定する。

第5回 研究題目の調査・研究対象の情報収集

文献等やデータの収集を行う。インターネットも活用する。

第6回 研究題目の調査・研究対象の分析

文献等やデータによって情報収集された結果を分析する。

第7回 研究題目の調査・研究対象の視点整理

調査・研究対象の解すべき視点や論点を洗い出す。

第8回 研究題目の調査・研究結果の報告レポート作成

洗い出された視点や論点をレポートにまとめる。

第9回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第10回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第11回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第12回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第13回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第14回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第15回 中間報告会

調査・研究の経緯とこれまでの成果を考察する。

第16回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第17回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第18回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第19回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第20回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第21回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第22回 研究論文・作成手順の検討

研究成果を論文として作成するための要点について検討する。

第23回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第24回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第25回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第26回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第27回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第28回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第29回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第30回 最終報告会

調査・研究の成果を諮問する。

多くの書籍を図書館で活用すること。

適時に、提出を課す。

調査・研究の成果を評価する。 随時、指導する。

指定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

管理会計論特殊講義

吉田 康久

< 授業の方法 >

対面式授業

< 授業の目的 >

(主題)

管理会計における管理工学的な技法のなかで、基本的概念を選定し、その管理観を修学する。管理工学的な論理は画一的概念ではないため、多義的な解釈を許容する。大学院での講義であることに鑑みれば、受講生の自らによる調査・研究によって、理解を深めることが必要である。

(目標)

管理技法の理念・思想を理解し、実態組織でどのようにカスタマイズできるかを、根拠をもって概説できる能力を会得する。

< 到達目標 >

到達目標は、従来の原価管理との理念上の違いや共通性を認識し、その優位性を理解することによって、現実の組織に適用する場合に、どのような考慮要因が生じるかを提起できることである。

< 授業のキーワード >

原価対象・活動原価・キャパシティー

< 授業の進め方 >

講義前に、予習として書籍を章ごとに熟読し、レポートにまとめて臨むこと。講義中は、議論を互に行い、自由な見解を求める。

< 履修するにあたって >

別段の理由がない限り、欠席を想定していない。(原則 3 回以下)

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

管理技法の概説

< テキスト >

管理会計に体系について概説する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 管理技法の展開
管理技法の多様性について概説する。

第4回 管理技法の概念
管理とシステムの蓋然性について説明する。

第5回 管理技法様相の概念
管理概念の由来について説明する。

第6回 原価差異の認識
管理会計の基本管理対象である原価差異を説明する。

第7回 キャパシティーコスト
経営資源の維持コストについて説明する。

第8回 アイドルキャパシティーコスト
経営資源の遊休コストについて説明する。

第9回 損益分析の構造
利益図表の仕組みについて説明する。

第10回 損益分析の計算技法
損益分岐点分析の計算方法について説明する。

第11回 責任会計
階層構造による会計責任について説明する。

第12回 業績評価
業績評価の概念と方法論を説明する。

第13回 利益管理
利益管理において検討すべき事項について説明する。

第14回 加重平均資本コスト
WACCについて説明する。

第15回 経済的付加価値
EVAについて説明する。

第16回 経営意思決定概念
経営意思決定の認識上の理念について説明する。

第17回 経営意思決定の機構
経営意思決定の体系について説明する。

第18回 経営意思決定の技法
経営意思決定の計算技法について説明する。

第19回 価格決定の概念
価格決定の方法論について説明する。

第20回 価格決定の技法
価格決定の計算技法と構造について説明する。

第21回 期待値
属性による期待値の変動性について説明する。

第22回 プロダクトミックス
複数製品販売における利益管理について説明する。

第23回 特殊原価
諸種の原価概念について説明する。

第24回 EOQ分析
経済的発注量分析について説明する。

第25回 予算管理
予算編成と予算統制について説明する。

第26回 キャッシュフロー
当期利益を現金残高に修正する技法について説明する。

第27回 キャッシュコンバージョン
財務健全性の観点について説明する。

第28回 活動原価会計
管理概念の多義的な解釈論について説明する。

第29回 管理会計工学
管理客体の認識観について説明する。

第30回 管理工学の展開
題目に従ってレポートを作成する。
平易な書籍を読み、概要を熟知しておくこと。
年1回、レポートを課す。
調査・研究への取組み姿勢や積極的参加度により評価する。
適時に指導する。
指定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

管理会計論特別演習（1年次）

吉田 康久

<授業の方法>

対面式授業

<授業の目的>

（主題）

研究題目をもとに、管理会計における管理工学的な技法を、調査・研究成果し、その成果を論文として執筆する。3年次においては、博士論文を作成するため、その布石となる成果を求める。

研究課題を、調査・研究し、革新的な論理を新たに導き出すことが、演習の目的である。そのためには、自由な解釈や思想、そして発想を持ち合わせることが重要である。調査・研究の方法は、文献研究やデータ分析、ネット検索など多様な方法を活用する。

（目標）

課題における革新的な論理を、根拠をもって概説し、実態組織に適用（準用）する場合の実施可能性を提唱でき、博士論文の執筆に寄与するほどの完成度を達成させることである。

<到達目標>

博士論文への布石となる成果が必要であり、そこには管理工学的見地が含有されていなければならない。

管理会計は、実社会では、唯物論ではない技法であるため、個人的な見解を持ち合わせ、その見解を提唱できなければならない。

<授業のキーワード>

マネジメントアカウンティング・コストマネジメント・テクニカルマネジメント・ヒューマンマネジメント

<授業の進め方>

自らが選定した研究テーマを、自律的に進めて行く。研究の方法や情報収集の仕方、さらに集約の仕方などについて、適時に指導する。

<履修するにあたって>

別段の理由がない限り、欠席を想定していない。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

研究題目の設定における概説を行う。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究題目の識別

目的適合性に合わせた技法を類別する。

第4回 研究題目の調査・研究対象の選定

調査・研究対象とする技法を選定する。

第5回 研究題目の調査・研究対象の情報収集

文献等やデータの収集を行う。インターネットも活用する。

第6回 研究題目の調査・研究対象の分析

文献等やデータによって情報収集された結果を分析する。

第7回 研究題目の調査・研究対象の視点整理

調査・研究対象の解すべき視点や論点を洗い出す。

第8回 研究題目の調査・研究結果の報告レポート作成

洗い出された視点や論点をレポートにまとめる。

第9回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第10回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第11回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第12回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第13回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第14回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第15回 中間報告会

調査・研究の経緯とこれまでの成果を考察する。

第16回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第17回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第18回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第19回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第20回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第21回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第22回 研究論文・作成手順の検討

研究成果を論文として作成するための要点について検討

する。

第23回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第24回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第25回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第26回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第27回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第28回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第29回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第30回 最終報告会

調査・研究の成果を諮問する。

多くの書籍を図書館で活用すること。

適時に、提出を課す。

調査・研究の成果を評価する。 随時、指導する。

指定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

管理会計論特別演習（2年次）

吉田 康久

< 授業の方法 >

対面式で授業を実施します。

< 授業の目的 >

（主題）

1年次で設定した研究題目をもとに、調査・研究成果し、その成果を論文として執筆する。博士課程では、学術誌等に発表することが求められる。そして、3年次においては、博士論文を作成するため、その布石となる成果を求める。

研究課題を、調査・研究し、革新的な論理を新たに導き出すことが、演習の目的である。そのためには、自由な解釈や思想、そして発想を持ち合わせる事が重要である。調査・研究の方法は、文献研究やデータ分析、ネット検索など多様な方法を活用する。

（目標）

課題における革新的な論理を、根拠をもって概説し、実態組織に適用（準用）する場合の実施可能性を提唱でき、博士論文の執筆に寄与するほどの完成度を達成させることである。

< 到達目標 >

博士論文への布石となる成果が必要であり、そこには管理工学的見地が含有されていなければならない。また、学術誌での公表が不可欠となる。

< 授業のキーワード >

マネジメントアカウンティング・コストマネジメント・
テクニカルマネジメント・ヒューマンマネジメント

< 授業の進め方 >

自らが選定した研究テーマを、自律的に進めて行く。研究の方法や情報収集の仕方、さらに集約の仕方などについて、適時に指導する。

< 履修するにあたって >

別段の理由がない限り、欠席を想定していない。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

研究題目の設定における概説を行う。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究題目の識別

目的適合性に合わせた技法を類別する。

第4回 研究題目の調査・研究対象の選定

調査・研究対象とする技法を選定する。

第5回 研究題目の調査・研究対象の情報収集

文献等やデータの収集を行う。インターネットも活用する。

第6回 研究題目の調査・研究対象の分析

文献等やデータによって情報収集された結果を分析する。

第7回 研究題目の調査・研究対象の視点整理

調査・研究対象の解すべき視点や論点を洗い出す。

第8回 研究題目の調査・研究結果の報告レポート作成

洗い出された視点や論点をレポートにまとめる。

第9回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第10回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第11回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第12回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第13回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第14回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第15回 中間報告会

調査・研究の経緯とこれまでの成果を考察する。

第16回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第17回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第18回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第19回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第20回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第21回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第22回 研究論文・作成手順の検討

研究成果を論文として作成するための要点について検討する。

第23回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第24回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第25回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第26回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第27回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第28回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第29回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第30回 最終報告会

調査・研究の成果を諮問する。

多くの書籍を図書館で活用すること。

適時に、提出を課す。

調査・研究の成果を評価する。 随時、指導する。

指定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

管理会計論特別演習（3年次）

吉田 康久

< 授業の方法 >

対面式で授業を実施します。

< 授業の目的 >

（主題）

3年次では、研究の成果を博士論文として執筆する。内容は、すでに学術誌等で発表したものを深く展開させる。博士論文は、公開が義務化されているため、高い完成度が必要である。

（目標）

課題における革新的な論理を、根拠をもって概説し、実態組織に適用（準用）する場合の実施可能性を提唱でき、博士論文として、さらに学術書籍として発行に至るほどの質・量を備えなければならない。

<到達目標>

博士論文としての完成度が具備すること。将来的には、書籍として発行可能性を担保する。

<授業のキーワード>

マネジメントアカウンティング・コストマネジメント・テクニカルマネジメント・ヒューマンマネジメント

<授業の進め方>

継続的な執筆を続け、内容につき加筆修正を繰り返し、理論を構築していく。

<履修するにあたって>

別段の理由がない限り、欠席を想定していない。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

研究題目の設定における概説を行う。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 研究題目の識別

目的適合性に合わせた技法を類別する。

第4回 研究題目の調査・研究対象の選定

調査・研究対象とする技法を選定する。

第5回 研究題目の調査・研究対象の情報収集

文献等やデータの収集を行う。インターネットも活用する。

第6回 研究題目の調査・研究対象の分析

文献等やデータによって情報収集された結果を分析する。

第7回 研究題目の調査・研究対象の視点整理

調査・研究対象の解すべき視点や論点を洗い出す。

第8回 研究題目の調査・研究結果の報告レポート作成

洗い出された視点や論点をレポートにまとめる。

第9回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第10回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第11回 研究題目の調査・研究結果の報告会と討論

報告をもとに討論を行う。

第12回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第13回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第14回 調査・研究の展開

調査・研究をさらに深化させる。

第15回 中間報告会

調査・研究の経緯とこれまでの成果を考察する。

第16回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第17回 調査・研究対象の検討会

調査・研究対象の論点整理の方向性を検討する。

第18回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第19回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第20回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第21回 調査・研究の実施

検討会で認識された論点を継続して調査・研究を行う。

第22回 研究論文・作成手順の検討

研究成果を論文として作成するための要点について検討する。

第23回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第24回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第25回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第26回 研究論文の作成

選定した管理会計技法の研究論文にまとめる。

第27回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第28回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第29回 調査・研究成果の発表会

発表をもとに議論を行う。

第30回 最終報告会

調査・研究の成果を諮問する。

多くの書籍を図書館で活用すること。

適時に、提出を課す。

調査・研究の成果を評価する。 随時、指導する。

指定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業経済論演習（1年次）

井上 善博

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

DPに掲げるように、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献できるようになることを本講義の目的とする。

企業経済論(経営学)に関する論文を執筆するための基礎を学ぶこと。

<到達目標>

現代企業の経営戦略や経営組織について理解できること。

< 授業のキーワード >

ベンチャービジネス・ソーシャルビジネス・競争戦略・マーケティング

< 授業の進め方 >

経営学に関するレジメをつくりながら，修士論文の作成準備に入ります。

< 履修するにあたって >

修士論文のテーマを徐々に明確にしていくこと。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

現代企業の諸形態

< テキスト >

株式会社とは

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 株式会社の統治

コーポレートガバナンスとは何か

第4回 ステークホルダー

社会的課題と社会的責任

第5回 企業倫理

誠実な経営とは

第6回 環境経営

持続可能な経営を目指して

第7回 開発途上国と企業

BOPビジネス

第8回 社会的企業

ソーシャルイノベーション

第9回 長寿企業のビジネスモデル

日本のファミリービジネス

第10回 リスクに備える経営

経営における多様なリスク

第11回 NPO経営

NPO経営の課題，目標

第12回 新たな出資形態(1)

公共サービスの民営化とPFI

第13回 新たな出資形態(2)

クラウドファンディング

第14回 経営戦略とは(1)

経営環境を見つめなおす

第15回 経営戦略とは(2)

事業ドメインの設定

第16回 多角化戦略

関連多角化と非関連多角化

第17回 競争戦略(1)

自社にとってのライバルは？

第18回 競争戦略(2)

コストリーダーシップ・差別化・集中化

第19回 M&A

敵対的買収と買収防衛策

第20回 戦略提携

資本提携，技術提携，販売提携

第21回 中小企業(1)

日本経済を支える中小企業

第22回 中小企業(2)

戦後の中小企業の発展経路

第23回 ベンチャービジネス

イノベーションを生み出すベンチャー

第24回 情報技術と経営

経営の合理化？効率化？

第25回 ビッグデータを活かす経営

正しい情報と誤った情報を見極める

第26回 経営組織の基本

共通目的，貢献意欲そして，コミュニケーション

第27回 ウェーバーの官僚制

人間は生命のない機械か？

第28回 テイラーの科学的管理法

怠業をいかにして防止するか

第29回 人間関係論

組織では人間関係が大事

第30回 リーダーシップ

魅力的なリーダーとなるために

現代企業の諸活動に関心をもっていくこと。1コマにつき，1時間必要。

特にありません。

レジメの作成50%，発表50%で評価します。 適宜指示します。

高橋伸夫『経営の再生』有斐閣(2016)

他、修士論文執筆時に指示します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業経済論演習（2年次）

井上 善博

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

DPに掲げるように，修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり，社会の発展に貢献できるようになることを本講義の目的とする。

企業経済論に関する論文を執筆するための基礎を学ぶこと。

< 到達目標 >

修士課程2年目の目標は，神戸学院大学大学院経済学研究科の執筆要綱に

基づいて修士論文を完成させ，提出すること。

< 授業のキーワード >

ベンチャービジネス・ソーシャルビジネス・競争戦略・マーケティング

< 授業の進め方 >

毎回、論文執筆状況を報告してください。

その内容に対して、適宜、修正などの助言をします。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

不確実性の時代の経営

< テキスト >

10X型企業の特徴

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 新たなレンズで企業探索

探求の旅の始まり

第4回 10X型リーダー

行動パターンの特徴

第5回 どうしたら10X型企業になれるのか-1

規律を守る

第6回 どうしたら10X型企業になれるのか-2

実証的創造力

第7回 どうしたら10X型企業になれるのか-3

建設的パラノイア

第8回 どうしたら10X型企業になれるのか-4

情熱

第9回 どうしたら10X型企業になれるのか-5

大義ある目標

第10回 成果を10倍にするリーダー

行動の一貫性と価値観

第11回 持続可能な経営-1

逆境をチャンスにする

第12回 持続可能な経営-2

成果から生まれる自信

第13回 持続可能な経営-3

リスクの回避

第14回 持続可能な経営-4

制御不可能な環境で経営を持続するには

第15回 持続可能な経営-5

セルフコマンド-自制する

第16回 精度未調整の砲撃

未知なる魅力と危険

第17回 砲撃の精緻化へ

実証的有効性を求める

第18回 アップルの復活

コンピュータから携帯端末へのビジネス転換

第19回 危機を避けるリーダーシップ-1

余裕ある舵取り

第20回 危機を避けるリーダーシップ-2

経営リスクをチャンスへ

第21回 SMsCレシピ-1

Specific 具体的に考える

第22回 SMsCレシピ-2

Methodical 整然としている

第23回 SMsCレシピ-3

Consistent 一貫している

第24回 リーダーのストレス

変化の時代の一貫性は経営成果に結びつくのか

第25回 運の利益率-1

成功は運なのか能力なのか？

第26回 運の利益率-2

運の役割を適正評価する

第27回 運の利益率-3

最高の運とは何か

第28回 運の浪費

幸運なのに低リターン

第29回 回避しなければならないパターン

悪運で低リターン

第30回 10X型リーダーの輝き

不運なのに高リターン

授業1コマにつき2時間必要。

修士論文の内容100%で評価します。

ジム・コリンズ/モートン・ハンセン『ビジョナリーカンパニー 自分の意志で偉大になる』日経BP社。

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業経済論特殊研究

井上 善博

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

DPに掲げるように、経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行うこと。

現代企業経営における雇用や労働にかんする問題についてより専門的なテーマを探求すること。

< 到達目標 >

1. 企業経営における労働の価値について理解できる。
2. 労働の適正な評価の方法について理解できる。
3. 現代経営における雇用慣行の諸問題を理解できる。

< 授業のキーワード >

ベンチャービジネス・ソーシャルビジネス・競争戦略・マーケティング

< 授業の進め方 >

受講者の関心のあるテーマについて、報告をしてください。それにもとづいて、議論し、新たな視点を見つけ出します。発想、議論、分析、執筆のサイクルを回して、授業を進めます。

< 履修するにあたって >

経営学理論全般についても、講義していきます。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

現代の雇用問題

< テキスト >

終身雇用制は維持されているのか

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 現代の雇用問題

同一労働・同一賃金は実現するのか

第4回 現代の雇用問題

ブラック企業と長時間労働

第5回 現代の雇用問題

日本の労働生産性は高いのか - 国際比較と歴史的視点から

第6回 労務管理に関する理論

テイラーの科学的管理法

第7回 労務管理に関する理論

マックス・ウェーバーの官僚制

第8回 労務管理に関する理論

バーナードの協働理論

第9回 労務管理に関する理論

フォレットの統合の理論

第10回 労務管理に関する理論

ファヨールの社会体理論

第11回 働き方改革

政府による働き方改革とは

第12回 働き方改革

ワークライフバランス

第13回 アライアンス

ネットワーク時代の新しい雇用

第14回 人材を活かすには

起業家タイプの人材

第15回 コミットメント

誠実な対話と信頼

第16回 ミッション

企業の核となるミッションと価値観はなにか
第17回 協力

社員、上司、会社間での整合性を目指す

第18回 対話

マネージャーの助言

第19回 環境変化

想定外の事態に対処する

第20回 ネットワーク

ネットワークで情報収集をする社員を支援する

第21回 人脈

人脈は社員のパワーを強化する

第22回 退職者のコントロール

退職者による企業投資

第23回 退職金

退職金をどのように試算するのか

第24回 人材の発掘

退職者が有能な人材を発掘する

第25回 社員の評価

社員評価の方向性

第26回 社員の評価

賃金はコストか投資か

第27回 社員の評価

社員のパフォーマンスを測る

第28回 賃金

能力給と年功給

第29回 賃金

企業業績を社員の賃金に反映させることの正当性

第30回 誠実な経営

信頼のマネジメント - 労使間での雇用・賃金・労働に関する信頼の共有

経営学説に関する考察をすること。2時間/1回の授業につき

資料の作成50%、考察とプレゼンの内容50%で評価します。

リード・ホフマン/ベン・カスノーカ&クリス・イエ著
篠田真貴子監訳・倉田幸信訳『ALLIANCE - 人と企業が信頼で結ばれる新しい雇用』

ダイヤモンド社、2015年。

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業経済論特殊講義

井上 善博

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

DPに掲げるように、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献できるようになることを本講義の目的とする。

<主題>本講義では、企業やマネジメントを研究対象にして、経営学の歴史的発展と現代的な諸課題について講義します。

<目的>特に、社会における企業の存在意義や経営成果を発揮するためのマネジメント(経営管理の手法)について理解することを講義の目的とします。

<到達目標>

経営学の諸理論を理解すること、そして、現代社会の中で企業の活動が、我々消費者にどのような影響を与えているかを理解することを本講義の目標とします。また、現代的な課題として、企業による不祥事や経営リスクの管理について理解を深めていくことも目標とします。特に、以下の点を到達目標とします。

企業経営の課題について理解できる。

経営者、労働者、消費者という視点から、企業を分析できる。

企業と社会の関係性について理解できる。

<授業のキーワード>

経営学説・競争戦略・企業の社会的責任・組織文化・リスクマネジメント・ベンチャービジネス・ソーシャルビジネス・マーケティング

<授業の進め方>

原則として、報告者にレジメを作成してもらい、それのもとに、授業時間内に議論を深める。特に関心のあるテーマについて、議論を深める。

<履修するにあたって>

現代企業における諸問題やイノベーションの方向性について関心を持ちましょう。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

企業とマネジメント

<テキスト>

企業の存在意義と企業を存続せさせていくためのマネジメント手法について

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 競争のための差別化戦略

他社との差別化における付加価値の重要性 - トヨタプリウスの事例について

第4回 ドメインの認識

企業の事業領域を再認識して、競争相手を見極める

第5回 多角化戦略とポートフォリオ

多様な事業領域に最適に資源配分する手法について

第6回 企業と市場、そして戦略提携

市場取引、内部取引、戦略提携の選択

第7回 国際化戦略

企業が国際化する理由

第8回 企業の国際化に関する諸理論

バーノンのプロダクトサイクル理論と内部化理論

第9回 研究開発の国際化

消費市場の国際化に応じた研究開発国際化の必要性

第10回 資本構造とマネジメント

直接金融、間接金融、内部金融の意味と資本コスト

第11回 雇用構造とマネジメント

日本企業の雇用構造の特徴 - 年功序列・企業別労働組合・終身雇用

第12回 組織と個人

企業組織の強さと、企業組織が労働者に働きかけること

第13回 組織構造

基本的な組織構造 - 職能別組織の合理性

第14回 組織構造

権限の委譲と事業部制組織・カンパニー制

第15回 動機づけ理論

労働者は何を欲するのか - マズローの欲求5段階説

第16回 人間関係論

感情の論理によって支配される非公式組織への関心

第17回 バーナード組織論

2人以上の人々が共通の目的に向かって協働する組織について

第18回 計画とコントロール

経営を制御する、計画とコントロールの役割

第19回 経営理念

経営理念と組織の統制

第20回 組織文化

組織内で共有される価値観や行動規範

第21回 リーダーシップ論

変革型リーダーの条件

第22回 人材育成

優秀な人材はいかにして育てられるのか

第23回 企業の成長要因

失敗の教訓を活かす企業の成長

第24回 経営者の資質

企業を成長に導く経営者の思考と哲学

第25回 コーポレートガバナンス論

経営者の行動と経営成果をチェックする規律

第26回 コーポレートガバナンスの国際比較

日本・ドイツ・アメリカにおける統治機構の国際比較

第27回 企業の社会的責任

社会と企業の持続的発展を目指す経済的枠組み - SDGs

第28回 リスクマネジメント

常にリスク意識を持ち、経営危機に陥った時の対策を整えておくことの重要性

第29回 ソーシャルマネジメント

利潤と社会的価値の創造を同時に追求する工夫

第30回 ソーシャルキャピタルと企業経営

弱い紐帯の力強さについて

経営学の諸問題に関するテーマについてまとめておくこと。60分/講義1回につき
報告資料の作成50%とプレゼンテーション50%で評価します。佐久間信夫『よくわかる企業論(第2版)』ミネルヴァ書房

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業経済論特別演習 (1年次)

井上 善博

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

DPに掲げるように、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献できるようになることを本講義の目的とする。

企業経済論(経営学)に関する論文を執筆するための基礎を学ぶこと。

< 到達目標 >

企業の経営戦略や経営組織について理解できること。

< 授業の進め方 >

レジメをつくりながら、博士論文の作成準備に入ります。

毎回、論文執筆状況を報告してください。

その内容に対して、適宜、修正などの助言をします。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

現代企業の諸形態-1

< テキスト >

企業の法律形態と経済形態

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 日本の会社機関とコーポレートガバナンス-1

株主総会の機能

第4回 日本の会社機関とコーポレートガバナンス-2

1990年代までの取締役会の問題点

第5回 アメリカの会社機関とコーポレートガバナンス

エンロンの破綻と企業改革法

第6回 現代企業の社会的責任-1

社会的責任が重視されるようになった背景

第7回 現代企業の社会的責任-2

企業の社会的責任とSDGs国連SDGs

第8回 現代の企業倫理-1

アメリカの企業倫理

第9回 現代の企業倫理-2

日本における企業倫理制度化

第10回 現代企業の環境経営-1

世界の環境規制

第11回 現代企業の環境経営-2

新しい環境ビジネス

第12回 経営戦略の理論体系-1

ポジショニングアプローチ

第13回 経営戦略の理論体系-2

リソースベースアプローチ

第14回 3つのレベルの経営戦略-1

全社戦略

第15回 3つのレベルの経営戦略-2

事業戦略

第16回 3つのレベルの経営戦略-3

職能別戦略

第17回 科学的管理法-1

課業管理

第18回 科学的管理法-2

科学的管理への批判論

第19回 管理過程論

企業管理と管理教育

第20回 人間関係論

非公式組織の存在

第21回 近代組織論-1

バーナードの人間観

第22回 近代組織論-2

個人と組織

第23回 近代組織論-3

協働体系と公式組織

第24回 近代組織論-4

合理的に意思決定するには

第25回 経営組織の基本形態

ライン組織・ラインアンドスタッフ組織・事業部制組織

第26回 現代企業における情報管理

日本企業の情報管理

第27回 現代の国際経営

世界的独占企業の台頭

第28回 多国籍企業の生成

経済の発展と多国籍企業の発展経路

第29回 ビジネスのグローバル化と組織構造

国際事業部制からトランスナショナル組織へ

第30回 創造的企業

知識創造企業のSECIモデル

授業1コマにつき2時間必要です。

課題の報告内容100%で評価します。

佐久間信夫編著『経営学原理(改訂新版)』創成社

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業経済論特別演習（2年次）

井上 善博

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

DPIに掲げるように、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献できるようになることを本講義の目的とする。

企業経済論(経営学)に関する博士論文を執筆するための準備を進めることを

授業の目的とする。

< 到達目標 >

企業の経営戦略や経営組織について理解できること。

経営学説を理解できること。

< 授業の進め方 >

毎回、論文執筆状況を報告してください。

その内容に対して、適宜、修正などの助言をします。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

経営学における理論

< テキスト >

効果と効率、実践性と学際性

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 動機づけの管理

ホーソン実験と行動科学の誕生

第4回 管理と組織の理論

近代組織理論

第5回 近代組織論の進化

コンティンジェンシー理論

第6回 経営戦略の理論-1

経営多角化戦略と事業部制

第7回 経営戦略の理論-2

PPM戦略

第8回 経営戦略の理論-3

競争戦略の理論

第9回 官僚制論の系譜-1

なぜマックス・ウェーバーを出発点とするのか

第10回 官僚制論の系譜-2

近代官僚制論の構造

第11回 官僚制論の系譜-3

官僚制の逆機能説

第12回 官僚制論の系譜-4

1960年代の官僚制-官僚制理論の普遍妥当性

第13回 官僚制論の系譜-5

官僚制の社会と文化への影響

第14回 管理過程論-1

ファヨールの管理過程論

第15回 管理過程論-2

ニューマン・クンツ・オドンネルの管理過程論

第16回 管理過程論-3

学際化時代の管理過程論

第17回 近代組織論の展開-1

バーナードの組織論

第18回 近代組織論の展開-2

サイモンの組織論

第19回 近代組織論の展開-3

マーチ=サイモンの組織論

第20回 組織の経済学

ウィリアムソンの取引コスト理論

第21回 リーダーシップ論-1

リーダーシップへの関心

第22回 リーダーシップ論-2

リーダーシップの矮小化

第23回 リーダーシップ論-3

経営における統治の必要性

第24回 モチベーション論の展開-1

産業革命とモチベーション理論

第25回 モチベーション論の展開-2

フォレットの統合理論

第26回 モチベーション論の展開-3

人間関係論の知見

第27回 モチベーション論の展開-4

組織行動論

第28回 コンティンジェンシー理論の系譜-1

生産技術と組織構造

第29回 コンティンジェンシー理論の系譜-2

課業の不確実性と組織デザイン

第30回 コンティンジェンシー理論の系譜-3

経営組織と環境適応

授業1コマにつき2時間必要です。

課題の報告内容100%で評価します。

大澤・一寸木・津田・土屋・二村・諸井『現代経営学説の系譜-転換する理論と科学性と実践性』

有斐閣

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業経済論特別演習（3年次）

井上 善博

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

DPに掲げるように、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献できるようになることを本講義の目的とする。

企業経済論(経営学)に関する論文を執筆するための基礎を学ぶこと。

< 到達目標 >

神戸学院大学大学院経済学研究科の博士論文執筆要綱に基づき、

博士論文を執筆し、完成させること。

< 授業の進め方 >

毎回、論文執筆状況を報告してください。

その内容に対して、適宜、修正などの助言をします。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

合理性の追求-1

< テキスト >

ヘンリー・フォードの生産管理

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 合理性の追求-3

アンリ・ファヨールの管理機能論

第4回 人間性の追求-1

エルトン・メーヨーの非公式組織

第5回 人間性の追求-2

リッカートの重複集団型組織モデル

第6回 人間性の追求-3

マグレガーのX理論とY理論

第7回 人間性の追求-4

ハーズバーグの職務満足の研究

第8回 システム性の追求-1

バーナード革命

第9回 システム性の追求-2

サイモン-限定された合理性と組織

第10回 システム性の追求-3

サイアート=マーチの企業の行動理論

第11回 システム性の追求-4

トリストの社会・技術システム論

第12回 条件性の追求-1

ドラッカーによる働く人間と仕事の管理

第13回 条件性の追求-2

チャンドラ - - 組織は戦略に従う

第14回 条件性の追求-3

ペロー = トンプソンによる不確実性の克服

第15回 適応性の追求-1

スタイナーによる包括的経営計画論

第16回 適応性の追求-2

アンゾフの企業家的行動と戦略的マネジメント

第17回 適応性の追求-3

エコフによる企業と環境との融合説

第18回 適応性の追求-4

オズベカーン=ドロアによる政策科学の意義

第19回 協調性の追求-1

ニックリッシュの経営共同体と資本主義論

第20回 協調性の追求-2

フィッシャー-労資協調の時代

第21回 生産性の追求-1

シュマーレンバッハ-応用科学としての経営経済学

第22回 生産性の追求-2

自由主義経済のメルクマール

第23回 生産性の追求-3

自由経済の終焉

第24回 生産性の追求-4

ゲーテンベルク-復興と繁栄の時代

第25回 生産性の追求-5

収益法則の否定

第26回 生産性の追求-6

ゲーテンベルクパラダイム

第27回 生産性の追求-7

ハイネン-多様化の時代と企業目的システム論

第28回 経営学説研究の意義-1

時代背景と経営学

第29回 経営学説研究の意義-2

管理と創造の経営学

第30回 経営学説研究の意義-3

現代経済と新しい経営学説

授業1コマにつき2時間必要です。

博士論文の執筆内容100%で評価します。

北野利信編『経営学説入門』有斐閣新書

2022年度 前期～後期

4.0単位

企業論特殊講義

小澤 優子

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

近年、グローバル化による企業経営の効率性重視や企業不祥事の多発により、コーポレート・ガバナンス(企業統治)に関する議論がさまざまな観点から行われている。本講義の主題は、このようなコーポレート・ガバナンスの問題について、日本やアメリカ、ドイツでの議論を理論と実践の両側面から捉え、明確化していくことである。このことを通じて、各国の株式会社の仕組みを明確化すること、さらには、コーポレート・ガバナンスの議論における制度的側面を理解することを目的とする。

< 到達目標 >

・株式会社をはじめ、さまざまな企業形態について説明することができる。また、他国の会社制度について議論することができる。

・コーポレート・ガバナンス（企業統治）の意味や問題領域を理解し、それに関連した記事やニュースに対して適切なコメントをすることができるようになる。

・企業経営がどのようになされるべきであるのか、自らの意見を述べることができる。

<授業のキーワード>

株式会社、株主総会、取締役会、監査役会、コーポレート・ガバナンス、ステイクホルダー

<授業の進め方>

演習形式で進めます。指定した図書の輪読を行い、そのうえで、実践と関連付けたディスカッションを行います。

<履修するにあたって>

遅刻や欠席は原則認めません。また、積極的に授業に参加することを求めます。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

イントロダクション

<テキスト>

授業の進め方や参考文献などを説明する。また、輪読のための分担を決める。

<参考図書>

第2～4回

<授業計画>

第5～7回 日本の株式会社の特徴

日本の株式会社におけるトップ・マネジメント組織の構造について学習する。

第8～10回 アメリカの株式会社の特徴

アメリカの株式会社におけるトップ・マネジメント組織の構造について学習する。

第11～13回 ドイツの株式会社の特徴

ドイツの株式会社におけるトップ・マネジメント組織について理解する。

第14・15回 事例研究とまとめ

実際の企業におけるトップ・マネジメント組織の構造を明らかにする。また、前期で学習した企業形態や株式会社の特徴についてのまとめを行う。

第16～18回 コーポレート・ガバナンスの意味と問題領域

コーポレート・ガバナンス（企業統治）論の意味や問題領域について学習していく。

第19・20回 日本でのガバナンスの議論

日本企業におけるガバナンスの議論を明確化していく。

第21・22回 アメリカ企業でのガバナンスの議論

アメリカ企業におけるガバナンスの議論を明確化していく。

第23・24回 ドイツ企業でのガバナンスの議論

ドイツ企業におけるガバナンスの議論について理解していく。

第25・26回 日本企業とドイツ企業の制度比較

まずは日本で近年議論されていることを再度確認し、そののちに、ドイツにおける議論との比較・検討をしていく。日本とドイツのガバナンスの議論における類似点や相違点を明確化する。

第27・28回 事例研究

企業が明らかにしているガバナンスレポートや有価証券報告書、統合報告書を取り上げ、実際の企業組織におけるガバナンスの問題に対する取り組みを検討していく。

第29回 報告会

前回までに検討した企業の取組について報告し、議論をしていく。

第30回 講義のまとめ

講義全体のまとめとして、今後の株式会社や企業統治のあり方について考えていく。

輪読をしてもらうので、担当個所の報告準備は必須です。また、報告の担当以外の人も指定した文献を読んでもらうなどの1時間程度の事前学習が必要になります。また、全ての内容が連続していることから、毎回1時間程度事後学習をすることによって理解を深めていることが不可欠です。

授業中に複数回、小レポートの提出が必要となります。また、期末の最終レポートの提出を求めます。

以下3点から総合的に判断します。なお、履修者の人数によっては方法・基準の変更をしますので注意すること。

担当個所の報告（30%）

期末最終レポート（30%）

授業中のディスカッションなどへの参加状況（40%） 土屋守章・岡本久吉(2003)『コーポレート・ガバナンス論』有斐閣。

久保広正・海道ノブチカ(2013)『EU経済の進展と企業・経営』勁草書房。

吉田和夫・大橋昭一(2015)『最新・基本経営学用語辞典』同文館出版。

その他、必要に応じて適宜指示します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

金融論演習（1年次）

三宅 敦史

2022年度 前期～後期

4.0単位

金融論特殊研究

三宅 敦史

2022年度 前期

4.0単位

金融論特殊講義

三宅 敦史

2022年度 後期

4.0単位

金融論特殊講義

石田 裕貴

2022年度 前期～後期

4.0単位

金融論特別演習（1年次）

三宅 敦史

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営科学演習（1年次）

塩出 省吾

< 授業の方法 >

講義授業

< 授業の目的 >

この演習では「意思決定」について数理的に学習する。社会では様々な場面で意思決定に迫られることがある。そのとき合理的な意思決定とは何かについて学習する。このようにして得られた意思決定は意思決定にかかわっている他のメンバーから見ても納得できるものである。

< 到達目標 >

- ・ 数理的な意思決定に使う数学が理解できる。
- ・ 様々な場面で数理的な意思決定を使用することができる。

< 授業のキーワード >

意思決定・数理統計

< 授業の進め方 >

数理的な意思決定の手法を学び、実際の問題に適用する方法を学ぶ。

< 履修するにあたって >

普段の生活の中でどのような意思決定の場面があるかについて意識しておく。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

1年間で学習することについて説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第4回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第5回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第6回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第7回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第8回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第9回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第10回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第11回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第12回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第13回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第14回 数理統計学

意思決定に必要な数理統計学を学習する。

第15回 前期の復習とまとめ

前期で学んだ数理統計学のまとめをし、理解度のチェックをする。

第16回 ゲーム理論とその応用

意思決定で用いるゲームの理論について学習する。

第17回 ゲーム理論とその応用

意思決定で用いるゲームの理論について学習する。

第18回 ゲーム理論とその応用

意思決定で用いるゲームの理論について学習する。

第19回 ゲーム理論とその応用

意思決定で用いるゲームの理論について学習する。

第20回 ゲーム理論とその応用

意思決定で用いるゲームの理論について学習する。

第21回 ゲーム理論とその応用

意思決定で用いるゲームの理論について学習する。

第22回 ゲーム理論とその応用

意思決定で用いるゲームの理論について学習する。

第23回 数理的な意思決定

様々な数理的意思決定問題について学習する。

第24回 数理的意思決定

様々な数理的意思決定問題について学習する。

第25回 数理的意思決定

様々な数理的意思決定問題について学習する。

第26回 数理的意思決定

様々な数理的意思決定問題について学習する。

第27回 数理的意思決定

様々な数理的意思決定問題について学習する。

第28回 数理的意思決定

様々な数理的意思決定問題について学習する。

第29回 数理的意思決定

様々な数理的意思決定問題について学習する。

第30回 1年間のまとめ

1年間の学習した成果を報告する。

平素から新聞等を読んで意思決定が行われた記事を集める。

1年間学習したまとめのレポートを提出する。

発表が60%、レポートが40%で評価する。 必要に応じて指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営科学演習（2年次）

塩出 省吾

< 授業の方法 >

講義授業

< 授業の目的 >

経営における意思決定問題を具体的に掘り起こし、それをテーマとして研究し修士論文を作成する。

< 到達目標 >

・経営において様々な意思決定問題が存在することが認識できる。

・具体的な意思決定問題に数理統計学を使ったアプローチができる。

< 授業のキーワード >

数理統計学・数理的意思決定

< 授業の進め方 >

経営における意思決定問題を掘り起こし、数理統計学や意思決定理論を駆使して問題解決に向けた学習をする。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

1年間の学習に対する取り組みについて説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 テーマ選び

経営における様々な問題にアプローチし、研究課題となるテーマを掘り起こす。

第4回 テーマ選び

経営における様々な問題にアプローチし、研究課題となるテーマを掘り起こす。

第5回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第6回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第7回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第8回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第9回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第10回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第11回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第12回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第13回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第14回 資料集め

研究に必要な資料を検索・収集する。

第15回 前期のまとめ

前期のまとめをし、夏休みの課題について議論する。

第16回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第17回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第18回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第19回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第20回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第21回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第22回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第23回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第24回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第25回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第26回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第27回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第28回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第29回 研究指導

研究の指導を行う。途中で中間報告をする。

第30回 まとめ

2年間の演習の総まとめをする。

普段から新聞等を読み関心のあるテーマを意識する。

発表40%、最終成果物60%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営科学特殊研究

塩出 省吾

< 授業の方法 >

講義授業

< 授業の目的 >

経営の問題において意思決定は重要である。どのような場面でも、適切な意思決定をするための手法を数理的に扱うことにより、システム化され専門でもない人でも同様な意思決定ができるようになるのである。このように熟練した人でも簡単に扱えない問題に、それほど経験が豊富でない人でも優れた意思決定ができるようにするのが経営科学の目的である。

< 到達目標 >

1. 意思決定の高度な理論と応用を理解することができる。
2. 具体的な経営の意思決定問題に適切な手法を用いることができる。
3. 経営の意思決定問題に関心を持ち、適切な解法を用いて最適な意思決定を生み出す。研究成果は学会等の発表および投稿を経て博士論文としてまとめる。

< 授業の進め方 >

研究課題について資料収集をして、研究成果を積み重ねていく。

< 履修するにあたって >

意思決定の問題はいろいろな場面で現れるので、新聞等に関心を持って、取り組む必要がある。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

意思決定とは

< テキスト >

意思決定とは何かを考える。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 スタティックな意思決定

スタティックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第4回 スタティックな意思決定

スタティックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第5回 スタティックな意思決定

スタティックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第6回 スタティックな意思決定

スタティックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第7回 ダイナミックな意思決定

ダイナミックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第8回 ダイナミックな意思決定

ダイナミックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第9回 ダイナミックな意思決定

ダイナミックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第10回 ダイナミックな意思決定

ダイナミックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第11回 ダイナミックな意思決定

ダイナミックな意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第12回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第13回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第14回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第15回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第16回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第17回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第18回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第19回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第20回 不確実性下の意思決定

不確実状況下の意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第21回 多数決の意思決定

意思決定者が多数のときの意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第22回 多数決の意思決定

意思決定者が多数のときの意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第23回 多数決の意思決定

意思決定者が多数のときの意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第24回 多数決の意思決定

意思決定者が多数のときの意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第25回 多数決の意思決定

意思決定者が多数のときの意思決定問題に対して最適化手法の適用を学習する。

第26回 研究課題に関する調査・研究

取り組む研究課題について調査・研究し報告する。

第27回 研究課題に関する調査・研究

取り組む研究課題について調査・研究し報告する。

第28回 研究課題に関する調査・研究

取り組む研究課題について調査・研究し報告する。

第29回 研究課題に関する調査・研究

取り組む研究課題について調査・研究し報告する。

第30回 まとめ

1年間の研究のまとめをする。

日常で新聞等をチェックしてどのような場面・状況で意思決定がどのように行われているかを調べる。

レポートを課する。

100%レポート課題で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営科学特殊講義

塩出 省吾

< 授業の方法 >

講義授業

< 授業の目的 >

経営の問題において意思決定をしなければならない場面で、適切な意思決定をするための手法を数理的に扱うことにより、システム化され専門でもない誰でも同様な意思決定ができるようになる。このように経験が豊富でない人にも優れた意思決定ができるようにするのが経営科学の目的である。

< 到達目標 >

1. 意思決定の理論と応用を理解することができる。
2. 具体的な経営の意思決定問題に適切な手法を用いる

ことができる。

< 授業の進め方 >

テキストを決めて輪読しながら実例を交えて学習を進める。

< 履修するにあたって >

意思決定の問題はいろいろな場面で現れるので、新聞等を注意して見ておく必要がある。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

意思決定とは

< テキスト >

意思決定とは何かを説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 意思決定の基礎理論

時間とともに変化する状況での意思決定について学習する。

第4回 意思決定の基礎理論

不確実状況の下での意思決定について学習する。

第5回 ダイナミックな意思決定

不平等な状況における意思決定について学習する。

第6回 ダイナミックな意思決定

前期に学習した内容で与えられた課題のレポートを作成する。

第7回 ダイナミックな意思決定

多数決原理での意思決定や選挙の意思決定問題について学習する。

第8回 不確実性下の意思決定

確定的な状況での意思決定が、どのような応用があるかを講義する。

第9回 不確実性下の意思決定

曖昧な状況での意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第10回 不確実性下の意思決定

確率的変動がある場合の意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第11回 不平等下の意思決定

不平等な状況における意思決定について学習する。

第12回 不平等下の意思決定

不平等な状況における意思決定について学習する。

第13回 不平等下の意思決定

不平等な状況における意思決定について学習する。

第14回 中間課題のレポート作成

前期に学習した内容で与えられた課題のレポートを作成する。

第15回 中間課題のレポート作成

前期に学習した内容で与えられた課題のレポートを作成する。

第16回 多数決の意思決定

多数決原理での意思決定や選挙の意思決定問題について学習する。

第17回 多数決の意思決定

多数決原理での意思決定や選挙の意思決定問題について学習する。

第18回 多数決の意思決定

多数決原理での意思決定や選挙の意思決定問題について学習する。

第19回 意思決定理論の応用

確定的な状況での意思決定が、どのような応用があるかを講学する。

第20回 意思決定理論の応用

確定的な状況での意思決定が、どのような応用があるかを講学する。

第21回 意思決定理論の応用

確定的な状況での意思決定が、どのような応用があるかを講学する。

第22回 不確定状況下の意思決定理論の応用

曖昧な状況での意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第23回 不確定状況下の意思決定理論の応用

曖昧な状況での意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第24回 不確定状況下の意思決定理論の応用

曖昧な状況での意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第25回 不確定状況下の意思決定理論の応用

確率の変動がある場合の意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第26回 不確定状況下の意思決定理論の応用

確率の変動がある場合の意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第27回 不確定状況下の意思決定理論の応用

確率の変動がある場合の意思決定にはどのような応用があるかを学習する。

第28回 最終課題のレポート作成

意思決定の応用に関して課題を与え、レポート作成をする。

第29回 最終課題のレポート作成

意思決定の応用に関して課題を与え、レポート作成をする。

第30回 最終課題のレポート作成

意思決定の応用に関して課題を与え、レポート作成をし、最後にまとめる。

毎日新聞等をチェックしてどのような場面・状況で意思決定がどのように行われているかを調べる。

年2回のレポートを提出すること。

発表が60%、レポートが40%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営学原理演習（2年次）

千田 直毅

< 授業の方法 >

演習形式

< 授業の目的 >

本講義では、経営学における基礎理論を体系的に理解し、現実の様々な経営管理現象をそれらの理論を用いながら、各自の研究関心に即した修士論文を作成する

< 到達目標 >

経営学における基礎理論を習得する事に加え、修士論文作成のための文献収集の仕方や読み方、論文の書き方についての基礎的なスキルを習得し、修士論文を完成させる

< 授業の進め方 >

各人の研究テーマ即した修士論文執筆進捗発表を行う。

< 提出課題など >

第1回～第10回

< 成績評価方法・基準 >

修士論文作成準備

< テキスト >

各自の研究関心に即した研究課題設定と先行研究の整理等についてゼミで発表し、研究の深掘りを図る

< 参考図書 >

第11回～第20回

< 授業計画 >

第21回～第30回 修士論文の執筆

修士論文の執筆を進める。ゼミでの進捗報告を行いながら、教員からの指導に基づき適宜論文のブラッシュアップを図り、修士論文を完成させる。

毎日3時間以上

適宜講義内で指示する

修士論文作成進捗に関する発表内容および修士論文で評価する（100%）

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営学原理演習（1年次）

千田 直毅

< 授業の方法 >

演習形式

< 授業の目的 >

本講義では、経営学における基礎理論を体系的に理解し、現実の様々な経営管理現象をそれらの理論を用いて説明することを目的とする。

< 到達目標 >

経営学における基礎理論を習得する事に加え、修士論文作成のための文献収集の仕方や読み方、論文の書き方についての基礎的なスキルを習得することを目指す。

< 授業の進め方 >

基礎的な文献の輪読、発表と各人の研究テーマに関する発表を行う。

< 提出課題など >

第1回～第7回

< 成績評価方法・基準 >

経営学の基礎的文献の輪読

< テキスト >

主に経営学の古典とよばれる、基礎的な管理論研究、組織論研究等についての代表的文献を輪読する

< 参考図書 >

第8回～第15回

< 授業計画 >

第16回～第25回 研究テーマの策定と

先行研究の検討

各自の関心のある研究テーマを設定するために、文献収集や先行研究の整理等を行う

第26回～第30回 修士論文作成準備

各自の研究関心に即した研究課題設定と先行研究の整理等についてゼミで発表し、研究の深掘りを図る

毎日3時間以上

適宜講義内で指示する

輪読及び修士論文作成進捗に関する発表内容で評価する(100%)

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営学原理特殊研究

千田 直毅

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

経営学における基礎理論、学説について、代表的な文献を読み込む事を通じて体系的に理解することを目的とする。

< 到達目標 >

講義で学んだ理論や知識を用いて経営現象を体系的に把握できる能力を身につけることを目標とする。

< 授業の進め方 >

経営学諸領域の論文・資料等の輪読、報告形式で進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

講義の進め方・課題等について説明を行う

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 企業の特徴

経営学が前提とする企業概念の共通的な特徴や類型について学ぶ

第4回 科学的管理論

経済人モデルと経営管理の関連、科学的管理法の要諦について学ぶ

第5回 人間関係論

社会人モデルと経営管理の関連、人間関係論の要諦について学ぶ

第6回 行動科学と統合理論

行動科学論の台頭と、それが経営管理の理論に与えた影響、関連について学ぶ

第7回～第9回 近代管理論からコンティンジェンシー理論

近代組織論の要諦とコンティンジェンシー理論について学ぶ

第10回 組織構造

企業における基本的な組織形態とその機能性について学ぶ

第11回 組織文化

組織文化に関する理論について学ぶ

第12回～14回 モチベーションとリーダーシップ

モチベーションとリーダーシップに関する理論について学ぶ

第15回 前半のまとめ

これまでの講義のまとめと復習を行う

第16回～18回 経営戦略

ポジショニング、RBVなど、経営戦略に関する理論について学ぶ

第19回～21回 生産システム

伝統的大量生産システムの発生経緯、日本型生産方式の特徴などについて学ぶ

第22回～23回 サプライヤシステム

主に日本型サプライヤシステムに関する理論について学ぶ

第24回～26回 人的資源管理

採用、配置・異動、人材育成、評価・処遇などの人的資源管理に関する理論について学ぶ

第27回～29回 現代社会と企業

グローバル経営、ITと企業経営の関連などの現代的トピックスについて学ぶ

第30回 全体のまとめ

これまでの講義全体のまとめと復習を行う

2時間の予習復習

事前・事後課題レポートおよび期末レポート

事前または事後課題レポート(100%) 講義中に適宜指示する

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営学原理特殊講義

千田 直毅

< 授業の方法 >

講義形式

< 授業の目的 >

経営学における基礎的な理論とその系譜を理解する。

< 到達目標 >

講義で学んだ理論や知識を用いて経営現象を体系的に把握できる能力を身につけることを目標とする。

< 授業の進め方 >

経営学諸領域の論文・資料等の輪読、報告形式で進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

講義の進め方・課題等について説明を行う

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 人間モデルの変遷と経営管理

経済人モデルと経営管理の関連について学ぶ

第4回 人間モデルの変遷と経営管理

社会人モデルと経営管理の関連について学ぶ

第5回 人間モデルの変遷と経営管理

自律人モデルと経営管理の関連について学ぶ

第6回 人間モデルの変遷と経営管理

自己実現人モデルと経営管理の関連について学ぶ

第7回～第9回 組織構造

官僚制組織、機能別組織、事業部制組織など組織構造の基礎について学ぶ

第10回 組織と環境

主にコンティンジェンシー理論について学ぶ

第11回 組織文化

組織文化に関する理論について学ぶ

第12回～14回 モチベーションとリーダーシップ

モチベーションとリーダーシップに関する理論について学ぶ

第15回 前半のまとめ

これまでの講義のまとめと復習を行う

第16回～18回 経営戦略

ポジショニング、RBVなど、経営戦略に関する理論について学ぶ

第19回～21回 生産システム

伝統的大量生産システムの発生経緯、日本型生産方式の

特徴などについて学ぶ

第22回～23回 サプライヤシステム

主に日本型サプライヤシステムに関する理論について学ぶ

第24回～26回 人的資源管理

採用、配置・異動、人材育成、評価・処遇などの人的資源管理に関する理論について学ぶ

第27回～29回 現代的トピックス

グローバル経営、ITと企業経営の関連などの現代的トピックスについて学ぶ

第30回 全体のまとめ

これまでの講義全体のまとめと復習を行う

2時間の予習復習

事前・事後課題レポートおよび期末レポート

事前または事後課題レポート（100%） 講義中に適宜指示する

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営学原理特別演習（1年次）

千田 直毅

< 授業の方法 >

演習形式

< 授業の目的 >

本講義では、経営学における基礎理論、応用理論を体系的に理解し、現実の様々な経営管理現象をそれらの理論を用いて説明することを目的とする。

< 到達目標 >

経営学における基礎理論、応用理論を習得する事に加え、博士論文作成のための文献収集の仕方や読み方、論文の書き方についての基礎的なスキルを習得することを目指す。

< 授業の進め方 >

基礎的な文献の輪読、発表と各人の研究テーマに関する発表を行う。

< 提出課題など >

第1回～第7回

< 成績評価方法・基準 >

経営学の基礎的文献の輪読

< テキスト >

主に経営学の古典とよばれる、基礎的な管理論研究、組織論研究等についての代表的文献を輪読する

< 参考図書 >

第8回～第15回

< 授業計画 >

第16回～第25回 研究テーマの策定と

先行研究の検討

各自の関心のある研究テーマを設定するために、文献収集や先行研究の整理等を行う

第26回～第30回 博士論文作成準備

各自の研究関心に即した研究課題設定と先行研究の整理等についてゼミで発表し、研究の深掘りを図る

毎日4時間以上

適宜講義内で指示する

輪読及び博士論文作成進捗に関する発表内容で評価する(100%)

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営学原理特別演習 (2年次)

千田 直毅

< 授業の方法 >

演習形式

< 授業の目的 >

本講義では、経営学における基礎理論、応用理論を体系的に理解し、現実の様々な経営管理現象をそれらの理論を用いながら、各自の研究関心に即した博士論文を作成する

< 到達目標 >

経営学における基礎理論、応用理論を習得する事に加え、博士論文作成のための文献収集の仕方や読み方、論文の書き方についての基礎的なスキルを習得し、博士論文を執筆する。

< 授業の進め方 >

基礎的な文献の輪読、発表と各人の研究テーマに関する発表を行う。

< 提出課題など >

第1回～第10回

< 成績評価方法・基準 >

博士論文作成準備

< テキスト >

各自の研究関心に即した研究課題設定と先行研究の整理等についてゼミで発表し、研究の深掘りを図る

< 参考図書 >

第11回～第20回

< 授業計画 >

第21回～第30回 博士論文の執筆

博士論文の執筆を進める。ゼミでの進捗報告を行いながら、教員からの指導に基づき適宜論文のブラッシュアップを図る。

毎日4時間以上

適宜講義内で指示する

博士論文作成進捗に関する発表内容で評価する(100%)

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営学原理特別演習 (3年次)

千田 直毅

< 授業の方法 >

演習形式

< 授業の目的 >

本講義では、経営学における基礎理論、応用理論を体系的に理解し、現実の様々な経営管理現象をそれらの理論を用いながら、各自の研究関心に即した博士論文を作成する

< 到達目標 >

経営学における基礎理論、応用理論を習得する事に加え、博士論文作成のための文献収集の仕方や読み方、論文の書き方についての基礎的なスキルを習得し、博士論文を執筆、完成させる。

< 授業の進め方 >

各人の研究テーマに即した博士論文執筆進捗発表を行う。

< 提出課題など >

第1回～第10回

< 成績評価方法・基準 >

博士論文作成準備

< テキスト >

各自の研究関心に即した研究課題設定と先行研究の整理等についてゼミで発表し、研究の深掘りを図る

< 参考図書 >

第11回～第20回

< 授業計画 >

第21回～第30回 博士論文の執筆

博士論文の執筆を進める。ゼミでの進捗報告を行いながら、教員からの指導に基づき適宜論文のブラッシュアップを図り、博士論文を完成させる。

毎日4時間以上

適宜講義内で指示する

博士論文作成進捗に関する発表内容および博士論文で評価する(100%)

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営史特殊講義

赤坂 義浩

< 授業の方法 >

演習形式で実施します。

< 授業の目的 >

わが国経済は、19世紀末のアジア諸国の中でいち早く近代化に成功し、経済発展に成功した。戦後の高度成長期を経て、わが国の国民総生産は、それまで目標としてき

たイギリス、フランス、ドイツを上回るに至った。その道のりは、近代産業分野における多くの企業家たちの積極的な企業者活動、経営諸制度の発展の道のりでもある。

そこで本講義では、そのようなわが国の経済発展における企業者活動や経営諸制度の普及・発展の経緯をたどり、わが国における経営発展の歴史を知ることによって、現在の企業経営の仕組みや企業が直面している諸問題をより深く理解できるようにすることを目標とする。

<到達目標>

受講者が、日本企業の経営システムのメカニズム、あるいは諸問題について歴史的に理解し、より深く現状を理解出来るようになることが目標である。

<授業のキーワード>

日本経営史、企業者史、日本経済史

<授業の進め方>

毎回、報告者がテキストの所定の範囲についてレジュメを作成し、内容を要約して報告する。その後、受講者の間で、ディスカッションを行う。

<履修するにあたって>

歴史系の講義であるため、多数の文献資料を読むことが必要である。受講を希望される方は、その点について必ず認識しておいて欲しい。

<成績評価方法・基準>

江戸期 - 1880年代 / 商人の富の蓄積と企業形態

<テキスト>

幕末の開港からわが国経済の近代化と経済発展、経営発展が始まるが、それが成功するかどうかは、近代化を開始する際の初期条件による。そこで、第1回では、近代化の準備期間としての江戸時代の経済システムとそこでの経営発展、とりわけ都市大商人の出現と商家経営について学ぶ。

<授業計画>

雇用制度と労務管理

第3回は、近世都市商家における雇用制度と労務管理制度について学ぶ。これも近代以降の企業における雇用制度、労務管理制度との連続性がみられる。

会計組織と簿記技法

商家の規模が大きくなり、取引高・頻度も著しく増大すると、大福帳的な原始記録では経営状態を把握できなくなる。そこで、整理記録としての会計システム、簿記技法が発達した。第4回では、そうした商家の会計システムについて学ぶ。

経営理念の近世的特色

近世の商家には「家訓」と呼ばれる、経営方針を明文化した冊子がある。近世商家の当主たちは、この家訓に書かれた経営方針の遵守を求められた。そこで第5回では、そうした家訓書に見られる近世商家の経営に対する考え方や経営思想について学ぶ。

近世的パラダイムの転換と経営

幕末にかけて、経営環境としての幕藩制的経済構造の大

きな変化が生じたが、それに各経営がどのように対応したのかを、各地の事例研究を通じて学ぶ。

概説1880年代 - 1915年 / 経営発展の基盤整備

開港後の工業化開始とその後の推移、近代工業の経営に不可欠な社会資本の整備過程について学ぶ。

企業勃興と近代経営・在来経営

明治初期から中期にかけ、近代産業分野の企業が多数設立されたほか、近世から続く在来産業の分野でも、技術革新や企業形態の変更、会社制度の急速な普及が見られた。第8回では、地方における資産家であり企業家でもあった地方名望家と彼らの投資・企業者活動を通じて、企業勃興期における地方経済の変容について学ぶ。

工業化と商社・海運・金融

近代産業や輸出産業の発展を支えたインフラとして、商社、近代海運業、銀行をはじめとする近代的金融システムの発展について学ぶ。

重化学工業化と技術者

西欧諸国より遅れて近代化を開始したわが国では、特に近代産業は江戸時代に経験のない技術を使用する分野であることから、技術移転の問題を解決する必要があった。そこで、技術移転・定着・普及・発展の担い手である技術者の育成と彼らが果たした役割について学ぶ。

明治の資産家と会社制度

株式会社制度の普及と発展を支えた投資家には、どのような人物がいたのであろうか。第11回では、そうした投資の担い手である資産家の実態と、会社制度の普及、そこでの所有と経営の関係について学ぶ。

工場制度の定着と労務管理

わが国における工業化の進展とは、すなわち工場という作業単位の導入、普及と、そこでの労務管理の技術の導入、普及が進んでいくことを意味する。そこで、近代にわが国で発展した工場制度と工場労働者の発生、定着過程について学ぶ。

概説1915-37年 / 大企業の構造と財閥

開港から進められてきたわが国の工業化は、第1次大戦ブーム期にさらに著しく進展する。そこで、第13回では、第1次大戦ブームとその後の昭和初期における工業化の進展、変化について学び、財閥の成立と大企業の出現、その構造について学ぶ。

技術導入から開発へ

第1次大戦期以降には、それまで西欧先進諸国からの移入に依存していた近代産業における製造技術の開発・発展は、技術者育成の進展とともに、次第に独自の国産技術の開発が可能になっていった。そこで、第14回では、技術移転問題のその後として、国産技術開発を可能にした条件は何かについて学ぶ。

工場管理システムの近代化と組織能力

工場制度の普及と発展に伴い、工場における労務管理技術や近代的工場管理法の導入と普及、労使関係管理の新たな展開がみられた。第15回では、第1次大戦期以降の

電気メーカー各社における工場管理と工場内の労務管理、労使関係の変化について学ぶ。

戦間期のマーケティングと流通機構

近代産業における製品は、近世のわが国ではまったく普及していなかった製品であることから、その流通やマーケティング技術も新たに構築、確立しなければならなかった。そこで、西洋紙の製紙業、製薬業、耐久消費財（ミシン）を事例に、戦間期わが国近代産業企業における新たな流通機構の確立や革新、マーケティングのあり方について学ぶ。

大企業の資金調達

第1次大戦ブーム期以降に、わが国の近代産業、重化学工業分野の諸企業は急速に発展した。そのことは、それら各企業に対して、金融システムが経営資金を供給して経営発展を資金面で支えたことを意味する。ここでは、企業の財務、資金調達の問題を各企業がどのように解決したのかについて学ぶ。

経営者の企業観・労働観

企業経営においては、経営者、企業家がどのような経営理念を持ち、どのように良好な労使関係を築くのが、その企業の発展を大きく左右する。そこで第18回では、戦間期のわが国大企業において、経営者がどのような経営理念を持っていたか、労使関係がどのようなものであったかについて学ぶ。

概説1937-55年 / 専門経営者の制覇

開港以来のわが国の経済発展と経営発展の内実は、世界恐慌期とそこから脱出過程、そしてその後の戦時統制経済期に大きく変容した。そこで、第19回では、まず背景として昭和初期から第2次大戦期の戦時統制経済について学び、さらに戦中戦後のコ・ポレートガバナンスの変容について学ぶ。

日本的生産システムの形成

戦後わが国経済の高度成長期に、トヨタ自動車をはじめ重化学工業企業を中心に、わが国企業の国際競争力を大きく高める生産方式、いわゆる「日本的生産システム」が形成された。そうした優れた生産システムは、どのようにして形成され、変容してきたのか。それは戦中戦後の各企業の生産システムに源流がある。そこで今回は、重化学工業企業における戦中戦後の生産方式が戦後の日本的生産システムにどのように変化していくのか、について学ぶ。

アメリカ経営管理技法の日本への導入と変容

前回学んだように、戦後わが国の重化学工業企業は、品質、価格とも高い国際競争力を持つに至ったが、それらは戦中戦後にアメリカからの近代的経営管理技法の導入が寄与している。そこで、今回は、各企業におけるアメリカ型経営管理技法の導入と変容について学ぶ。

日本的雇用関係の形成

わが国大企業の高い国際競争力の源泉とされたいわゆる「日本的経営」のひとつに、企業別労働組合を通じた良

好な労使関係もあげられる。そこで今回は、戦間期、戦時期の労使関係のあり方を学び、その連続性について理解する。

中間組織の変容と競争的寡占構造の形成

戦後の日本経済では、競争的寡占構造と呼ばれる、各業種ごとに一部の大企業が競争しつつも、それら数社の大企業による市場の寡占構造が形成されて来たと言われる。その形成過程には、市場と組織の中間に位置する、いわゆる「中間組織」（財閥 企業集団、融資系列、業界団体など）が果たす役割が、そうした競争的寡占構造の形成に寄与したと言われている。そこで今回は、そうした中間組織と経営発展との関係について学ぶ。

戦後型産業政策の成立

戦後わが国重化学工業企業の成長は、政府の各種産業政策が後押しした。そこで、戦中戦後から高度成長期にかけて、政府がどのような産業政策を展開し、それがどのように経営発展に寄与したのかについて学ぶ。

概説1955-90年代 / 長期相対関係と企業系列

戦後わが国企業は著しく国際競争力を高めて大きく成長し、わが国経済の高度成長をもたらした。そこで今回は、高度成長期の内容と、高度成長期わが国企業の国際競争力の源泉はどこにあったかについて学ぶ。

戦後日本のトップマネジメント

戦後わが国経済の高度成長期に大きく成長した企業では、どのようなビジネスリーダーがどんな経営活動を行ったのか。今回は、高度成長をもたらした大企業のリーダーたちの動向について学ぶ。

戦後日本の金融システム

高度成長期における企業の大きな成長は、各企業における積極的な設備投資によってもたらされた。そこで今回は、そうした企業の活発な設備投資の資金はどのようにして供給されたのか、金融システムが企業の資金調達面で経営発展に果たした役割について学ぶ。

国際化と日本的経営

わが国経済の高度成長と企業の経営発展は、輸出の急増をもたらし、各国で貿易摩擦を生んだ。そこで、輸出産業企業においては、そうした貿易摩擦を回避するためにも、国際化を推進した。今回は、そうしたわが国大企業の高度成長期における国際化の推移について学ぶ。

企業と政府

高度成長期における政府の産業政策は、どのように産業界のニーズを把握し、どのように形成され、どのように実施され、どのような効果をもたらされたのだろうか。今回は、わが国政府の戦後の産業政策の形成方法と、その下での企業行動について学ぶ。

共通幻想としての日本型システムの出現と終焉

高度成長期におけるわが国経済の発展と企業の成長をもたらしたいわゆる「日本的経営システム」は、優れた面もあるが、不合理な面もあった。その後の円高等マクロ経済の変化に際して、そうした日本的経営システムの不

合理的側面が、1990年代の不況期にむしろ経営桎梏になったと言われている。そこで今回は、「日本の経営システム」の合理性と非合理性が、高度成長期から90年代の経営環境の変化に際して、企業経営にどのようにプラスに働き、どのようなマイナスをもたらしたかについて学ぶ。

不明なことがあれば、事前に調べておくこと。

提出課題は、次の通りである。

(1) 毎回テキスト輪読範囲のレジュメ（報告用）

(2) 前期末、後期末にそれぞれ、学修内容に関するレポート（前期、後期各1回、合計2回）

以上の2種類である。(2)のテーマや詳細なレポート作成要領については、その都度講義内で指示する。毎回の報告、プレゼンテーションが50%、前期と後期それぞれ1回ずつ（計2回）提出してもらうレポート、課題が各25%（計50%）として成績を評価する。全講義回数3分の2以上の出席が必須要件となる。無断欠席は、欠席回数にかかわらず単位を出さないこととするので、注意すること。テキストは、下記のものを使用する。

(1) 安岡重明、天野雅敏編著『日本経営史1 - 近世的経営の展開』（岩波書店）

(2) 宮本又郎、阿部武司編著『日本経営史2 - 経営革新と工業化』（岩波書店）

(3) 由井常彦、大東英祐編著『日本経営史3 - 大企業時代の到来』（岩波書店）

(4) 山崎広明、橘川武郎編著『日本経営史4 - 「日本的」経営の連続と断絶』（岩波書店）

(5) 森川英正、米倉誠一郎編著『日本経営史5 - 高度成長を超えて』（岩波書店）

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営情報システム論特殊研究

小川 賢

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この講義では、データの取扱いに関する倫理、法令、技術について講義する。

様々な活動によって作成される大量のデータをどのように取り扱っていくか、

効率的な取り扱い、イノベーション、経済活性化等様々な目的でデータの活用が重要視されている。

この講義では、データを取り扱ううえで理解しておくべき、倫理、法令、技術について講義を通して基本的な知識を学び、データを取扱う上での留意事項について理解を深めることを目的とする。

< 到達目標 >

データを扱う上で関連する法令について説明できる。

データを扱う上で求められる倫理について説明できる。
データを扱う上で利用される技術について説明できる。

< 授業の進め方 >

データを扱う上での様々な事例を教材として講義を進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

講義の進め方について説明する。

< 授業計画 >

データ・AIに関連する法令

データ・AIに関連する法令（個人情報保護法）について理解する。

データ・AIに関連する法令

データ・AIに関連する法令（著作権法）について理解する。

データ・AIに関連する法令

データ・AIに関連する法令（民法）について理解する。

データ・AIに関連する法令

データ・AIに関連する法令（不正競争防止法）について理解する。

データ・AIに関連する法令

データ・AIに関連する法令（不正アクセス禁止法）について理解する。

データ・AIに関連する法令

データ・AIに関連する法令（GDPR）について理解する。

データを扱う上で求められる倫理

データを扱う上で求められる倫理（ELSI）について理解する。

データを扱う上で求められる倫理

データを扱う上で求められる倫理（ELSI）について理解する。

データを扱う上で求められる倫理

データバイアスについて理解する。

データを扱う上で求められる倫理

アルゴリズムバイアスについて理解する。

データを扱う上で利用される技術

データを扱う上で利用される技術（機密性）について理解する。

データを扱う上で利用される技術

データを扱う上で利用される技術（完全性）について理解する。

データを扱う上で利用される技術

データを扱う上で利用される技術（可用性）について理解する。

データを扱う上で利用される技術

データを扱う上で利用される技術（匿名加工情報）につ

情報の格付け
可用性の観点からの格付けの演習を行い、格付けについての理解を深める。

情報の格付け
行った格付けについて比較し、再格付けの必要性について理解する。

データの暗号化
簡易な方法によるデータの暗号化を行う。

データの暗号化
データの暗号化を行う。

データの復号化
簡易な方法によるデータの復号化を行う。

データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

セキュリティポリシー
公開されているセキュリティポリシーを集め、比較する。

セキュリティポリシー
セキュリティポリシーを比較する

セキュリティポリシー
セキュリティポリシーを策定する場合の要点を議論する。

セキュリティポリシー
セキュリティポリシーを策定する場合の要点を議論する。

ワーク
データ・AIを扱う上での留意事項について課題を見つけ解決方法を考察する。

まとめ
データ・AIを扱う上での留意事項について学んだ内容をまとめて報告する。

予習：テキストに目を通しておくこと。必要であれば、統計学のテキストを復習しておくこと。

復習：講義で学修した統計処理、数理計画法を復習し、内容の理解に努めること。

1時間程度の授業時間外が目安である。

単位認定は授業回数の3分の2以上の出席が前提となる。

レポートによって評価する。 必要に応じて指示する。

2022年度 前期～後期
4.0単位
経営情報システム論特別演習（2年次）
小川 賢

< 授業の方法 >
演習
< 授業の目的 >

この講義では、データの取扱いに関する倫理、法令、技術について演習を通して理解を深める。

様々な活動によって作成される大量のデータをどのように取り扱っていくか、
効率的な取り扱い、イノベーション、経済活性化等様々な目的でデータの活用が重要視されている。

この講義では、データを取り扱ううえで理解しておくべき、倫理、法令、技術について講義を通して基本的な知識を学び、データを扱うことを通して、データの取り扱いについて理解を深めることを目的とする。

< 到達目標 >
データを扱う上で関連する法令や倫理、技術について理解し、適切にデータ・AIを扱うことができる。

< 授業の進め方 >
データを扱う上での様々な事例を教材として演習を進める。

< 提出課題など >
第1回
< 成績評価方法・基準 >
ガイダンス
< テキスト >
講義の進め方について説明する。

< 授業計画 >
データの収集
データの収集を行う。
データの収集
データの収集を行う。
データの収集
データの収集を行う。
データの収集
データの収集を行う。
データの収集
データの収集を行う。
データの収集
データの収集を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
データバイアスに留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
データバイアスに留意したデータの加工の演習を行う。

情報の格付け
機密性の観点からの格付けの演習を行い、格付けについての理解を深める。

情報の格付け
完全性の観点からの格付けの演習を行い、格付けについ

ての理解を深める。
情報の格付け
可用性の観点からの格付けの演習を行い、格付けについ
ての理解を深める。
情報の格付け
行った格付けについて比較し、再格付けの必要性につい
て理解する。
データの暗号化
簡易な方法によるデータの暗号化を行う。
データの暗号化
データの暗号化を行う。
データの復号化
簡易な方法によるデータの復号化を行う。
データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。
データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。
データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。
データを扱う
包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。
セキュリティポリシー
公開されているセキュリティポリシーを集め、比較する。
セキュリティポリシー
セキュリティポリシーを比較する
セキュリティポリシー
セキュリティポリシーを策定する場合の要点を議論する。
セキュリティポリシー
セキュリティポリシーを策定する場合の要点を議論する。
ワーク
データ・AIを扱う上での留意事項について課題を見つけ
解決方法を考察する。
まとめ
データ・AIを扱う上での留意事項について学んだ内容を
まとめて報告する。
予習：テキストに目を通しておくこと。必要であれば、
統計学のテキストを復習しておくこと。
復習：講義で学修した統計処理、数理計画法を復習し、
内容の理解に努めること。
1時間程度の授業時間外が目安である。
単位認定は授業回数の3分の2以上の出席が前提となる。
レポートによって評価する。 必要に応じて指示する。

2022年度 前期～後期
4.0単位
経営情報システム論特別演習（3年次）
小川 賢

< 授業の方法 >
演習

< 授業の目的 >
この講義では、データの取扱いに関する倫理、法令、技術
について演習を通して理解を深める。
様々な活動によって作成される大量のデータをどのよう
に取り扱っていくか、
効率的な取り扱い、イノベーション、経済活性化等様々
な目的でデータの活用が重要視されている。
この講義では、データを取り扱ううえで理解しておくべ
き、倫理、法令、技術について講義を通して基本的な知
識を学び、データを扱うことを通して、データの取り扱
いについて理解を深めることを目的とする。
< 到達目標 >
データを扱う上で関連する法令や倫理、技術について理
解し、適切にデータ・AIを扱うことができる。
< 授業の進め方 >
データを扱う上での様々な事例を教材として演習を進め
る。
< 提出課題など >
第1回
< 成績評価方法・基準 >
ガイダンス
< テキスト >
講義の進め方について説明する。
< 授業計画 >
データの取集
データの取集を行う。
データの取集
データの取集を行う。
データの取集
データの取集を行う。
データの取集
データの取集を行う。
データの取集
データの取集を行う。
データの取集
データの取集を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
個人情報に留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
データバイアスに留意したデータの加工の演習を行う。
データの加工
データバイアスに留意したデータの加工の演習を行う。
情報の格付け
機密性の観点からの格付けの演習を行い、格付けについ
ての理解を深める。
情報の格付け

完全性の観点からの格付けの演習を行い、格付けについての理解を深める。

情報の格付け

可用性の観点からの格付けの演習を行い、格付けについての理解を深める。

情報の格付け

行った格付けについて比較し、再格付けの必要性について理解する。

データの暗号化

簡易な方法によるデータの暗号化を行う。

データの暗号化

データの暗号化を行う。

データの復号化

簡易な方法によるデータの復号化を行う。

データを扱う

包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

データを扱う

包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

データを扱う

包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

データを扱う

包絡分析法DEAを用いてデータを分析する。

セキュリティポリシー

公開されているセキュリティポリシーを集め、比較する。

セキュリティポリシー

セキュリティポリシーを比較する

セキュリティポリシー

セキュリティポリシーを策定する場合の要点を議論する。

セキュリティポリシー

セキュリティポリシーを策定する場合の要点を議論する。

ワーク

データ・AIを扱う上での留意事項について課題を見つけ解決方法を考察する。

まとめ

データ・AIを扱う上での留意事項について学んだ内容をまとめて報告する。

予習：テキストに目を通しておくこと。必要であれば、統計学のテキストを復習しておくこと。

復習：講義で学修した統計処理、数理計画法を復習し、内容の理解に努めること。

1時間程度の授業時間外が目安である。

単位認定は授業回数の3分の2以上の出席が前提となる。

レポートによって評価する。必要に応じて指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済情報システム論演習（1年次）

毛利 進太郎

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済情報システム論演習（2年次）

毛利 進太郎

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営情報システム論演習（1年次）

小川 賢

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この授業では、データ分析の基礎的な内容の理解を目的とします。目的（自身が主張したいこと）を明らかにするために、どのような結論が必要で、そのためにはどのような分析が必要で、そのためにはどのようなデータが必要かを理解し、データ収集から分析までが行えるようになることを目的とする。

<到達目標>

重回帰分析ができる

因子分析ができる

クラスター分析ができる

仮説検定ができる

SPSSやRを活用できる

目的に応じた分析方法を適切に用いることができる

<授業の進め方>

演習を中心に、必要に応じて講義形式で進めていく。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

授業の進め方、評価方法について説明する。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 重回帰分析 1

重回帰分析について理解する。

第4回 重回帰分析 2

重回帰分析を用いたデータ分析について理解する。

第5回 重回帰分析 3

重回帰分析による結果の解釈方法について理解する

第6回 重回帰分析 4

重回帰分析の結果に基づく、再計算の必要性について理解する。

第7回 重回帰分析 5

よりよい分析結果を得るための改善方法について理解す

る。

第8回 仮説検定 1
仮説検定を行う上での留意点について理解する。

第9回 仮説検定 2
仮説の立て方について理解する。

第10回 仮説検定 3
仮説検定の演習を行い、検定方法を理解する。

第11回 仮説検定 4
よりよい分析結果を得るための改善方法について理解する。

第12回 因子分析 1
因子分析を用いたデータ分析について理解する。

第13回 因子分析 2
因子分析による結果の解釈方法について理解する。

第14回 因子分析 3
因子分析の結果に基づく再計算の必要性について理解する。

第15回 クラスタ分析 1
クラスタ分析について理解する。

第16回 クラスタ分析 2
クラスタ分析による結果の解釈方法について理解する。

第17回 主成分分析 1
主成分分析を用いたデータ分析について理解する。

第18回 主成分分析 2
主成分分析による結果の解釈方法について理解する。

第19回 多変量解析
よりよい分析結果を得るための複数の分析方法の組み合わせについて理解する。

第20回 SPSS 1
SPSSを用いた重回帰分析について理解する。

第21回 SPSS 2
SPSSを用いた因子分析について理解する。

第22回 SPSS 3
SPSSを用いた主成分分析について理解する。

第23回 R 1
Rを用いた重回帰分析について理解する。

第24回 R 2
Rを用いた因子分析について理解する。

第25回 R 3
Rを用いた主成分分析について理解する。

第26回 R 4
Rを用いたクラスタ分析について理解する。

第27回 データ分析と倫理
データ分析における倫理について理解する。

第28回 データ分析における留意点
データ収集における諸問題について理解する。

第29回 演習課題
これまで学んだ内容を活用して自身のテーマに基づいたデータ分析について報告・議論し、理解を深める。

第30回 まとめ

講義を総括する。
予習：テキストに目を通しておくこと。必要であれば、統計学のテキストを復習しておくこと。
復習：講義で学修した統計処理、数理計画法を復習し、内容の理解に努めること。
1時間程度の授業時間外が目安である。
単位認定は授業回数の3分の2以上の出席が前提となる。
レポートによって評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営情報システム論演習（2年次）

小川 賢

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この授業では、データ分析の基礎的な内容の理解を目的とします。目的（自身が主張したいこと）を明らかにするために、どのような結論が必要で、そのためにはどのような分析が必要で、そのためにはどのようなデータが必要かを理解し、データ収集から分析までが行えるようになることを目的とする。

< 到達目標 >

重回帰分析ができる

因子分析ができる

クラスタ分析ができる

仮説検定ができる

SPSSやRを活用できる

目的に応じた分析方法を適切に用いることができる

< 授業の進め方 >

演習を中心に、必要に応じて講義形式で進めていく。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

授業の進め方、評価方法について説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 重回帰分析 1

重回帰分析について理解する。

第4回 重回帰分析 2

重回帰分析を用いたデータ分析について理解する。

第5回 重回帰分析 3

重回帰分析による結果の解釈方法について理解する

第6回 重回帰分析 4

重回帰分析の結果に基づく、再計算の必要性について理解する。

第7回 重回帰分析 5
よりよい分析結果を得るための改善方法について理解する。

第8回 仮説検定 1
仮説検定を行う上での留意点について理解する。

第9回 仮説検定 2
仮説の立て方について理解する。

第10回 仮説検定 3
仮説検定の演習を行い、検定方法を理解する。

第11回 仮説検定 4
よりよい分析結果を得るための改善方法について理解する。

第12回 因子分析 1
因子分析を用いたデータ分析について理解する。

第13回 因子分析 2
因子分析による結果の解釈方法について理解する。

第14回 因子分析 3
因子分析の結果に基づく再計算の必要性について理解する。

第15回 クラスタ分析 1
クラスタ分析について理解する。

第16回 クラスタ分析 2
クラスタ分析による結果の解釈方法について理解する。

第17回 主成分分析 1
主成分分析を用いたデータ分析について理解する。

第18回 主成分分析 2
主成分分析による結果の解釈方法について理解する。

第19回 多変量解析
よりよい分析結果を得るための複数の分析方法の組み合わせについて理解する。

第20回 SPSS 1
SPSSを用いた重回帰分析について理解する。

第21回 SPSS 2
SPSSを用いた因子分析について理解する。

第22回 SPSS 3
SPSSを用いた主成分分析について理解する。

第23回 R 1
Rを用いた重回帰分析について理解する。

第24回 R 2
Rを用いた因子分析について理解する。

第25回 R 3
Rを用いた主成分分析について理解する。

第26回 R 4
Rを用いたクラスタ分析について理解する。

第27回 データ分析と倫理
データ分析における倫理について理解する。

第28回 データ分析における留意点
データ収集における諸問題について理解する。

第29回 演習課題
これまで学んだ内容を活用して自身のテーマに基づいた

データ分析について報告・議論し、理解を深める。

第30回 まとめ
講義を総括する。
予習：テキストに目を通しておくこと。必要であれば、統計学のテキストを復習しておくこと。
復習：講義で学修した統計処理、数理計画法を復習し、内容の理解に努めること。
1時間程度の授業時間外が目安である。
単位認定は授業回数の3分の2以上の出席が前提となる。
レポートによって評価する。

2022年度 前期～後期
4.0単位
経営情報システム論特殊講義
小川 賢

<授業の方法>
講義と演習

<授業の目的>
様々な情報を収集し、指標として効率性を測定することは、重要である。
この講義では、効率性の測定手法として評価されている包絡分析法（DEA）の活用方法やDEAを用いた効率性分析の実情について理解することを目的とする。
修得した包絡分析法に関する高度な専門知識を用いることで社会の諸問題に応用する意欲を持つ。

<到達目標>
包絡分析法（DEA）の基本的な数理モデルを説明できる。
コンピュータを用いてDEAによる効率性の測定ができる。
DEAを用いて分析対象の相对比较ができる。

<授業の進め方>
テキストの読解と実データを用いた実習を中心として講義を進める。

<提出課題など>
第1回
<成績評価方法・基準>
ガイダンス
<テキスト>
講義の進め方について説明する。
<授業計画>
DEA分析の基礎1
分数計画法について理解する。
DEA分析の基礎1
線計画法と分数計画法の違いについて理解し、効率性の概念への拡張を理解する。
DEA分析の基礎2
CCRモデルについて理解する。
DEA分析の基礎2
BCCモデルについて理解する。

<テキスト>

理論構築の方法について

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 研究計画

研究の構想と内容の検討

第4回 研究計画

研究の構想と内容の検討

第5回 研究計画

研究の構想と内容の検討

第6回 研究対象(1)

研究対象とする産業や市場の検討

第7回 研究対象(1)

研究対象とする産業や市場の検討

第8回 研究対象(1)

研究対象とする産業や市場の検討

第9回 研究対象(2)

研究対象とする企業の検討

第10回 研究対象(2)

研究対象とする企業の検討

第11回 研究対象(2)

研究対象とする企業の検討

第12回 環境分析(1)

産業・市場に関する分析

第13回 環境分析(1)

産業・市場に関する分析

第14回 環境分析(1)

産業・市場に関する分析

第15回 環境分析(2)

競争環境や競合他社に関する分析

第16回 環境分析(2)

競争環境や競合他社に関する分析

第17回 環境分析(2)

競争環境や競合他社に関する分析

第18回 企業分析(1)

企業戦略に関する分析

第19回 企業分析(1)

企業戦略に関する分析

第20回 企業分析(1)

企業戦略に関する分析

第21回 企業分析(2)

企業組織に関する分析

第22回 企業分析(2)

企業組織に関する分析

第23回 企業分析(2)

企業組織に関する分析

第24回 企業分析(3)

経営資源に関する分析

第25回 企業分析(3)

経営資源に関する分析

第26回 企業分析(3)

経営資源に関する分析

第27回 研究・考察(1)

結論と提言に関する考察

第28回 研究・考察(2)

今後の課題と展望に関する考察

第29回 総括

研究のまとめ

第30回 総括

研究のまとめ

自己の研究テーマに沿って、自主的に文献研究・資料収集等を行い、それらの情報を分析・考察し、論文にまとめて行く作業を自ら行う。

成果物(レポート等)70%、研究発表(プレゼンテーション・ディスカッション等)30%の割合で、成績評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営戦略論演習(2年次)

田中 康介

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

本演習では、理論と実践の両面から、企業経営や経営戦略、及び経営組織を理解する事を目的とする。そのため、理論研究と共に実際の企業行動(ケース)を分析する事によって、仮説の導出や検証、またそれらの理論的な説明を試みる。或いは、既存の理論に対する問題提起を行って、ケース研究を通じて、その反証や理論的説明を試みる場合もある。何れにせよ、理論研究とケース分析を通じての、理論と実践の両面での研究を前提とする。

<到達目標>

1. 理論と実践の両面から企業の経営や戦略、組織を説明できる。
2. 実在する産業や企業を現実的に説明できる。
3. 実地に調査、研究した事を論理的に記述できる。

<授業の進め方>

ディスカッションやプレゼンテーションを通じて、それらの成果を論文にまとめて行く。そのプロセスでは、各自の自主性を尊重する。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

導入講義

<テキスト>

理論構築の方法について

<参考図書>

第2回
 < 授業計画 >
 第3回 研究計画
 研究（修士論文）の構想と内容の検討
 第4回 研究計画
 研究（修士論文）の構想と内容の検討
 第5回 研究計画
 研究（修士論文）の構想と内容の検討
 第6回 研究対象（1）
 研究対象とする産業や市場の検討
 第7回 研究対象（1）
 研究対象とする産業や市場の検討
 第8回 研究対象（1）
 研究対象とする産業や市場の検討
 第9回 研究対象（2）
 研究対象とする企業の検討
 第10回 研究対象（2）
 研究対象とする企業の検討
 第11回 研究対象（2）
 研究対象とする企業の検討
 第12回 環境分析（1）
 産業・市場に関する分析
 第13回 環境分析（1）
 産業・市場に関する分析
 第14回 環境分析（1）
 産業・市場に関する分析
 第15回 環境分析（2）
 競争環境や競合他社に関する分析
 第16回 環境分析（2）
 競争環境や競合他社に関する分析
 第17回 環境分析（2）
 競争環境や競合他社に関する分析
 第18回 企業分析（1）
 企業戦略に関する分析
 第19回 企業分析（1）
 企業戦略に関する分析
 第20回 企業分析（1）
 企業戦略に関する分析
 第21回 企業分析（2）
 企業組織に関する分析
 第22回 企業分析（2）
 企業組織に関する分析
 第23回 企業分析（2）
 企業組織に関する分析
 第24回 企業分析（3）
 経営資源に関する分析
 第25回 企業分析（3）
 経営資源に関する分析
 第26回 企業分析（3）
 経営資源に関する分析

第27回 研究・考察（1）
 結論と提言に関する考察
 第28回 研究・考察（2）
 今後の課題と展望に関する考察
 第29回 総括
 研究のまとめと修士論文の完成
 第30回 総括
 研究のまとめと修士論文の完成
 自己の研究テーマに沿って、自主的に文献研究・資料収集等を行い、それらの情報を分析・考察し、論文にまとめて行く作業を自ら行う。
 成果物（修士論文）70%、研究発表（プレゼンテーション・ディスカッション等）30%の割合で、成績評価する。尚、本演習全体を通じての成果物として、修士論文の提出を必須（単位修得のため）とする。

 2022年度 前期～後期

4.0単位

経営戦略論特殊研究

田中 康介

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本研究では、理論と実践の両面から、企業経営や経営戦略、及び経営組織を理解する事を目的とする。そのため、理論研究と共に実際の企業行動（ケース）を分析する事によって、仮説の導出や検証、またそれらの理論的な説明を試みる。或いは、既存の理論に対する問題提起を行って、ケース研究を通じて、その反証や理論的説明を試みる場合もある。何れにせよ、理論研究とケース分析を通じての、理論と実践の両面での研究を前提とする。

< 到達目標 >

1. 理論と実践の両面から企業の経営や戦略、組織を説明できる。
2. 実在する産業や企業を現実的に説明できる。
3. 実地に調査、研究した事を論理的に記述できる。

< 授業の進め方 >

ディスカッションやプレゼンテーションを通じて、それらの成果をまとめて行く。そのプロセスでは、各自の自主性を尊重する。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

導入講義

< テキスト >

理論構築の方法について

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究計画
研究の構想と内容の検討
第4回 研究計画
研究の構想と内容の検討
第5回 研究計画
研究の構想と内容の検討
第6回 研究対象(1)
研究対象とする産業や市場の検討
第7回 研究対象(1)
研究対象とする産業や市場の検討
第8回 研究対象(1)
研究対象とする産業や市場の検討
第9回 研究対象(2)
研究対象とする企業の検討
第10回 研究対象(2)
研究対象とする企業の検討
第11回 研究対象(2)
研究対象とする企業の検討
第12回 環境分析(1)
産業・市場に関する分析
第13回 環境分析(1)
産業・市場に関する分析
第14回 環境分析(1)
産業・市場に関する分析
第15回 環境分析(2)
競争環境や競合他社に関する分析
第16回 環境分析(2)
競争環境や競合他社に関する分析
第17回 環境分析(2)
競争環境や競合他社に関する分析
第18回 企業分析(1)
企業戦略に関する分析
第19回 企業分析(1)
企業戦略に関する分析
第20回 企業分析(1)
企業戦略に関する分析
第21回 企業分析(2)
企業組織に関する分析
第22回 企業分析(2)
企業組織に関する分析
第23回 企業分析(2)
企業組織に関する分析
第24回 企業分析(3)
経営資源に関する分析
第25回 企業分析(3)
経営資源に関する分析
第26回 企業分析(3)
経営資源に関する分析
第27回 研究・考察(1)
結論と提言に関する考察

第28回 研究・考察(2)
今後の課題と展望に関する考察
第29回 総括
研究のまとめ
第30回 総括
研究のまとめ
自己の研究テーマに沿って、自主的に文献研究・資料収集等を行い、それらの情報を分析・考察し、分析結果や考察内容をまとめて行く作業を自ら行う。
成果物(レポート等)70%、研究発表(プレゼンテーション・ディスカッション等)30%の割合で、成績評価する。尚、本研究全体を通じての、最終的な成果物として、博士論文の提出を必須とする。

2022年度 前期～後期
4.0単位
経営戦略論特殊講義
田中 康介

<授業の方法>
講義
<授業の目的>
本講義では、経営戦略に関する基礎的な理論や知識の修得とともに、様々な新しい視点から、現代の経営戦略論について理解することを目的とする。
<到達目標>
1. 経営戦略に関する基礎的な理論を説明できる。
2. 新しい視点からも経営戦略を説明できる。
3. 経営戦略と組織の関係を説明できる。
4. どのように組織内で戦略は形成されるのかを説明できる。
5. 組織メンバーの戦略行動について説明できる。
6. 経営戦略の新しい理論モデルを説明できる。
<授業のキーワード>
環境適応、意思決定、ドメイン、多角化、資源展開、競争戦略、分析型戦略、プロセス型戦略、経営革新、戦略・組織の関係、組織戦略、戦略行動、戦略形成プロセス、戦略的学習、戦略論の新展開
<授業の進め方>
「授業の方法」「遠隔授業情報」参照。講義中心の授業ですが、より実践的な理解を促進するため、必要に応じて、実際の企業事例(映像等)を用いて説明します。詳しく(後期授業の方法・内容等)は、初回に説明します。
<履修するにあたって>
授業中は、座って聴講するだけでなく、積極的に発表や討議に参加することが望まれる。
<提出課題など>
第1回
<成績評価方法・基準>
経営戦略と環境適応

<テキスト>

企業（組織）は、環境に適応することによって、存続と成長を確保できる。こうした企業の環境適応において、カギとなるのが経営戦略である。そして、企業ごとの経営戦略の違いが、環境適応の成否を左右する。第1講（初回）では、企業の環境適応における経営戦略の意義について理解する。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 戦略的意思決定

戦略的意思決定とは、まず「わが社はどのような事業を行い、どのような製品を開発し、どのような市場に進出するか」を決めることである。ここでは、戦略的意思決定の意味を理解した上で、更に戦略的意思決定が企業の存続・成長にどのような影響を及ぼすのかについて理解する。

第4回 経営戦略の本質

企業は何のために経営戦略を策定・実行するのか、という問に答えるならば、創造や革新のためである。ある高名な経済学者によれば、企業や企業家の起こす創造的革新が経済や社会の発展をもたらすという。ここでは、経営戦略の本質である創造や革新の意味・意義を理解する。

第5回 経営戦略の概念と構想

経営戦略に関する基本的な考え方（概念）を理解した上で、経営戦略を構造的に分解し、全社戦略、事業（競争）戦略、機能別戦略など、それぞれについて理解する。加えて、経営戦略の基盤となる経営理念やビジョン、更に全社的な戦略構想についても理解する。

第6回 ドメインの定義と多角化戦略

戦略構想の第一歩であるドメイン（事業領域）が定義されると、まず企業はそのもとで事業を展開していく。ある事業を集中的に行っていく企業もあれば、事業を拡大したり或いは事業を多様化・多角化したりする企業もある。ここでは、特に企業の多角化戦略に焦点を当て、その方向や類型について理解する。

第7回 資源展開の戦略

企業（組織）は、その目的を達成するために、必要な経営資源を蓄積し調達するとともに、ドメインを構成する事業分野のそれぞれに、その資源を配分していくことが求められる。ここでは、特に財務的資源（資金）の配分に焦点を当て、その戦略手法について理解する。

第8回 競争戦略論

企業には、全社的に事業を調整・管理することが必要である一方、それぞれの事業ごとの戦略、とりわけ市場や競合他社に目を向けると、競争戦略が不可欠となる。競争戦略を策定する際の決め手は、まず自社の競争（市場）環境を分析することにある。ここでは、市場の競争要因分析とその手法を理解する。

第9回 競争戦略論

企業は、競争（市場）環境やそこに含まれる要因を分析した上で、自らがどのような競争戦略を採れば良いのかを決定しなければならない。ここでは、企業の採るべき競争戦略の基本的類型について理解する。

第10回 競争戦略論

市場戦略（マーケティング）の視点からも、市場実態に則し競争ポジション（地位）を設定し、その各ポジションに応じた競争戦略が類型化されている。ここでは、それら市場競争の戦略類型について理解する。

第11回 分析的アプローチの限界

これまで検討してきた理論（例えば多角化戦略、資金配分、競争戦略など）は、事前の分析を重視する「分析型戦略論」と呼ばれる理論体系である。しかし、分析もやり過ぎると却って役に立たないといわれ、近年では、その限界も指摘されている。ここでは、分析型戦略論の限界説について理解する。

第12回 組織論的アプローチの台頭

現実の世界では、事前に分析した通り単純に物事が運ぶわけではない。現実の企業（組織）では、多様な人々が経営戦略の策定や実行に関与しながら、複雑なプロセスを形成している。こうした観点から、ここでは、経営戦略論の新潮流「プロセス型戦略論」の考え方について理解する。

第13回 経営戦略論の新潮流

現代企業が経営戦略をどのように捉え実践していくべきか、について考察する。そのために、上記プロセス型戦略論の枠組みに基づき、様々な企業事例を取り上げ、経営戦略の全体的プロセス（策定・実行・実現）を具体的に理解する。

第14回 経営戦略と経営革新

現代企業の戦略プロセスについて考察する。先に検討したように（第4講）、経営戦略の本質は創造的革新にあり、ここでは特に、企業（組織）が革新を遂行していくための制度や方法などについて検討する。そして今一度、経営戦略の意味・意義を再考する。

第15回 前半の総括

前半の講義内容について復習し、その理論体系について総括し理解する。

第16回 経営戦略と組織

経営戦略の実行主体である、経営組織とは何か、を理解する。組織とは人の集まりであるが、各人が勝手に行動しているわけではなく、人々は共通の目的を持ち、それを達成するために組織を構築し、協働している。第1講（初回）では、そのような経営組織の意味を理解した上で、組織の構造や形態などについて理解する。

第17回 戦略と組織の関係

組織は、より効率的・効果的に目的を達成しようと、そのための戦略を策定し実行する。その場合、組織にとって適切な戦略が策定されなければならないし、逆に戦略を実行するための適切な組織が構築されなければならない

い。ここでは、そのような戦略と組織の関係について理解する。

第18回 組織戦略

経営戦略の本質は、創造的革新にあるといわれる。つまり経営戦略は、創造や革新を実現するために策定、実行されるものであり、組織もそれらの実現に向けて構築、運営されなければならない。ここでは、革新を起こすべく創造的な組織をいかに構築するか、そのための方法（戦略）について理解する。

第19回 組織戦略

環境は絶え間なく変化しており、従来と同じ戦略・組織のもとで企業活動を続けていくには、環境に適応できなくなる。企業は、環境変化にうまく対応できるような、或いは環境変化をうまく先取りできるような戦略を臨機応変に採り、その実行・実現のために、従来の組織を革新していかなければならない。ここでは、組織革新のための戦略について理解する。

第20回 トップの戦略行動

戦略を策定・実行していく上で、トップ・マネジメント（経営者・経営陣）が組織（メンバー）をどのようにリードしていくか、という問題は極めて重要である。トップの行動次第で、組織の存否が左右されるといっても過言ではない。ここでは、戦略実現のための、トップの役割やリーダーシップについて理解する。

第21回 ミドルの戦略行動

戦略を実現するためには、上述のトップのみならず、ミドル・マネジメント（中間管理者）も重要な役割を担っている。ミドルは、現場とトップの、或いは組織内外の結節点として、自らの行動を通じて、戦略の実現に貢献していくことが求められる。ここでは、戦略実現のための、ミドルの役割やリーダーシップについて理解する。

第22回 組織の戦略形成プロセス

現実の企業（組織）では、上記トップやミドルその他のメンバーも含め、多様な人々が経営戦略の策定や実行に関与しながら、複雑なプロセスを形成している。こうした観点から、ここでは、様々な企業事例を取り上げ、組織とそのメンバーの戦略形成プロセスについて、具体的に理解する。

第23回 戦略的学習

現代的な経営戦略の考え方では、戦略が形成されるプロセスで最も重視されるのは、いわゆる「戦略的学習」である。環境に長期的に適応していくためには、組織やそのメンバーは、自らの行動によって、継続的に学習を行っていくことが求められる。ここでは、戦略の実行を通じて、組織がどのように学習するのかについて理解する。

第24回 戦略的学習

引き続き、戦略的学習について考察する。戦略の実行プロセスにおいて、組織やそのメンバーは、様々なことから学習する。組織内の出来事や人々から学習することもあれば、組織内だけではなく、必要に応じて、組織外の

顧客や他社からも学習することもある。ここでは、様々な企業事例を取り上げ、顧客や他社からの学習について理解する。

第25回 経営戦略論の新展開

従来の経営戦略論は、戦略策定に際し精緻な分析手法を求める考え方であった。それに対し近年、分析・策定だけでなく、組織（メンバー）が実際に戦略を実行・実現していくプロセスを考察しようとするアプローチが主張され、特に組織の経営資源やそれらを基に形成された能力の視点から経営戦略を考察しようとする、「資源ベースの戦略論」なるものが台頭している。ここでは、その考え方について理解する。

第26回 経営戦略論の新展開

最近、いわゆる「サプライ・チェーン・マネジメント」の議論も盛んに行われている。サプライ・チェーンとは、顧客 - 小売 - 卸 - 製造 - 部品・資材サプライヤ等の供給活動の連鎖構造であり、そのチェーン（連鎖）全体をいかに最適化するかがマネジメントの重要課題とされている。ここでは、それらサプライ・チェーンについて、戦略的視点から理解する。

第27回 経営戦略論の新展開

製品やビジネス・プロセスなどを、構成部品や工程、或いは部分的プロセスなどに分割し、それらに機能を配分して、それによって必要となる部品（工程）・プロセス間のインタフェースをいかに設計（アーキテクチャ）するかについて検討する、いわゆるアーキテクチャ研究も最近、盛んである。ここでは、アーキテクチャのタイプ及び、その設計思想や構想などの、戦略的な意味・意義を理解する。

第28回 経営戦略論の新展開

最近の様々な企業事例から、プラットフォーム・ビジネスなる事業モデルが析出されている。プラットフォーム・ビジネスとは、誰もが明確な条件で提供を受けられる商品やサービスの供給を通じて、第三者間の取引を活性化させたり、新しいビジネスを起こす基盤を提供したりする役割を、ビジネスとして行っている存在のことである。ここでは、このプラットフォーム・ビジネスの事業戦略について理解する。

第29回 経営戦略論再考

これまで見て来たように、経営戦略と経営（企業）組織は、当然ながら密接な関係を持っている。経営戦略とは、組織が環境に適応していくための、いわば設計図であり、進むべき方向、資源展開のパターンなどを定めたものである。そして、この戦略を実行していくのが組織である。講義の最終段階では、経営戦略とともに組織にも焦点を当て、戦略と組織との関係、戦略を実行する際の組織のあり方、組織メンバーの戦略行動などについて今一度、再考する。

第30回 全体総括

講義内容全般にわたり復習し、その全体的な理論体系に

ついて総括し理解する。

授業計画の各回で示されている教材(プリント)の個所を、丹念に繰り返し読むこと。

事前学習として、講義の対象となる教材(プリント)の個所を読み込んでおくこと。(目安として1時間程度)

事後学習として、講義の対象であった教材(プリント)とビデオ教材等の内容を再確認すること。(目安として1時間程度)

学期末総括レポート(前・後期の各期末に1回ずつ:合計2回実施予定)、中間レポート(前・後期それぞれ中間~後半の時点で1回ずつ:合計2回実施予定)

学期末総括レポート:50%、中間レポート:30%、授業中の討議・発表等:20%の割合で、成績評価する。オリジナル教材(プリント)を使用しますが、教材や資料は適宜配布します。

産能大学経営研究会編著『現代企業と経営』産能大学出版部、奥村昭博著『経営戦略』日経文庫(日本経済新聞社)、ゲイリー・ハメル他『コア・コンピタンス経営』(日本経済新聞社)その他、必要に応じて指示する。

2022年度 前期~後期

4.0単位

経営戦略論特別演習(1年次)

田中 康介

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

本演習では、経営の問題を総合的に分析・解析できる知識・技能を修得することを目的とする。そのため、理論と実践の両面から、企業経営や経営戦略、及び経営組織を理解する事を目指す。方法として、理論研究と共に実際の企業行動(ケース)を分析する事によって、仮説の導出や検証、またそれらの理論的な説明を試みる。或いは、既存の理論に対する問題提起を行って、ケース研究を通じて、その反証や理論的説明を試みる場合もある。何れにせよ、理論研究とケース分析を通じての、理論と実践の両面での研究を前提とする。

<到達目標>

1. 理論と実践の両面から企業の経営や戦略、組織を説明できる。
2. 実在する産業や企業を現実的に説明できる。
3. 実地に調査、研究した事を論理的に記述できる。

<授業のキーワード>

経営戦略、経営組織、業界研究、環境分析、事例研究(ケース・スタディ)

<授業の進め方>

ディスカッションやプレゼンテーションを通じて、調査研究の内容や成果をまとめて行きます。各自の自主性を尊重します。

<履修するにあたって>

履修者には、調査や研究に対する積極的な取り組みが望まれます。また、現象や事象、事例等に関して、深い洞察や考察が求められます。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

イントロダクション~研究の構想と計画

<テキスト>

研究の内容や展開をどのようなものにするか検討し、研究計画を構想する。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 イントロダクション~研究の構想と計画

研究の内容や展開をどのようなものにするか検討し、研究計画を構想する。

第4回 研究計画の構想と策定

研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第5回 研究計画の構想と策定

研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第6回 研究計画の構想と策定

研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第7回 研究計画の構想と策定

研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第8回 調査研究と分析・考察

研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第9回 調査研究と分析・考察

研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第10回 調査研究と分析・考察

研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第11回 調査研究と分析・考察

研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第12回 調査研究と分析・考察

研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第13回 調査研究と分析・考察

研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第14回 調査研究と分析・考察

研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第15回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第16回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第17回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第18回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第19回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第20回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第21回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第22回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第23回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第24回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第25回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第26回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第27回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第28回 総括
調査研究のまとめ

第29回 総括
調査研究のまとめ

第30回 総括
調査研究のまとめ

演習以外の時間でも、自主的・積極的に調査研究や分析・考察を行って下さい。
調査研究プロセスの要所・要所で、必要に応じて、課題(レポート等)を課します。
成果物(レポート等)50%、研究発表(プレゼンテーシ

ョン・ディスカッション)等50%の割合で、成績評価します。フィードバックに関しては、研究発表は発表後(授業中)、講評し、成果物は疑義や質問があれば適宜、行います。 特になし
特になし

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営戦略論特別演習 (2年次)

田中 康介

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

本演習では、1年次に引き続き、経営の問題を総合的に分析・解析できる知識・技能を修得することを目的とする。そのため、理論と実践の両面から、企業経営や経営戦略、及び経営組織を理解する事を目指す。方法として、理論研究と共に実際の企業行動(ケース)を分析する事によって、仮説の導出や検証、またそれらの理論的な説明を試みる。或いは、既存の理論に対する問題提起を行って、ケース研究を通じて、その反証や理論的説明を試みる場合もある。何れにせよ、理論研究とケース分析を通じての、理論と実践の両面での研究を前提とする。

<到達目標>

1. 理論と実践の両面から企業の経営や戦略、組織を説明できる。
2. 実在する産業や企業を現実的に説明できる。
3. 实地に調査、研究した事を論理的に記述できる。

<授業のキーワード>

経営戦略、経営組織、業界研究、環境分析、事例研究(ケース・スタディ)

<授業の進め方>

ディスカッションやプレゼンテーションを通じて、調査研究の内容や成果をまとめて行きます。各自の自主性を尊重します。

<履修するにあたって>

履修者には、調査や研究に対する積極的な取り組みが望まれます。また、現象や事象、事例等に関して、深い洞察や考察が求められます。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

イントロダクション～研究の構想と計画

<テキスト>

研究の内容や展開をどのようなものにするか検討し、研究計画を構想する。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 イン트로ダクション～研究の構想と計画
研究の内容や展開をどのようなものにするか検討し、研究計画を構想する。

第4回 研究計画の構想と策定
研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第5回 研究計画の構想と策定
研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第6回 研究計画の構想と策定
研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第7回 研究計画の構想と策定
研究計画(目的・方法・結論等)を構想・策定し、研究計画書を作成(提出)する。

第8回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第9回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第10回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第11回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第12回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第13回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第14回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第15回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第16回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第17回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第18回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第19回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行

う。

第20回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第21回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第22回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第23回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第24回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第25回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第26回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第27回 調査研究と分析・考察
研究計画(テーマ)に基づき、調査研究や分析・考察を行う。

第28回 総括
調査研究のまとめ

第29回 総括
調査研究のまとめ

第30回 総括
調査研究のまとめ

演習以外の時間でも、自主的・積極的に調査研究や分析・考察を行って下さい。

調査研究プロセスの要所・要所で、必要に応じて、課題(レポート等)を課します。

成果物(レポート等)50%、研究発表(プレゼンテーション・ディスカッション)等50%の割合で、成績評価します。フィードバックに関しては、研究発表は発表後(授業中)、講評し、成果物は疑義や質問があれば適宜、行います。 特になし

特になし

2022年度 前期～後期
4.0単位
経営戦略論特別演習 (3年次)
田中 康介

<授業の方法>
演習
<授業の目的>

本演習では、経営の問題を総合的に分析・解析できる知識・技能を、博士論文の作成を通じて、修得することを目的とする。博士論文は、3年間の学業の集大成として、各自がテーマを定め、これまでの調査研究等で得られた知見を基に、博士の学位を得るに相応しい論文の作成を目指す。

<到達目標>

論文の作成を通じて、演習を担当する教員（指導教員）から、専門性の高い助言を受け、それらを各自が理解し、更に論文をブラッシュアップする事により、学術的な思考力に加え、問題解決能力を高める事を目標とする。

<授業のキーワード>

メディアリテラシー、論文執筆の作法、独自の視座

<授業の進め方>

担当教員による個別指導

<履修するにあたって>

博士論文の詳細な提出様式、方法及び期限については、別途定める。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

博士論文を作成する意味と作成に関する注意事項の説明。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 論文作成の個別指導

各自のテーマに沿った情報探索、資料収集、調査研究等を行う。

第4回 論文作成の個別指導

各自のテーマに沿った情報探索、資料収集、調査研究等を行う。

第5回 論文作成の個別指導

各自のテーマに沿った情報探索、資料収集、調査研究等を行う。

第6回 論文作成の個別指導

各自のテーマに沿った情報探索、資料収集、調査研究等を行う。

第7回 論文作成の個別指導

各自のテーマに沿った情報探索、資料収集、調査研究等を行う。

第8回 論文作成の個別指導

各自のテーマに沿った情報探索、資料収集、調査研究等を行う。

第9回 論文作成の個別指導

論文の論理構成と章建てを行い、指導教員のチェックを受け、発表等を行う。

第10回 論文作成の個別指導

論文の論理構成と章建てを行い、指導教員のチェックを

受け、発表等を行う。

第11回 論文作成の個別指導

論文の論理構成と章建てを行い、指導教員のチェックを受け、発表等を行う。

第12回 論文作成の個別指導

論文の論理構成と章建てを行い、指導教員のチェックを受け、発表等を行う。

第13回 論文作成の個別指導

論文の論理構成と章建てを行い、指導教員のチェックを受け、発表等を行う。

第14回 論文作成の個別指導

論文の論理構成と章建てを行い、指導教員のチェックを受け、発表等を行う。

第15回 論文作成の個別指導

論文の論理構成と章建てを行い、指導教員のチェックを受け、発表等を行う。

第16回 論文作成の個別指導

各自の進捗状況を指導教員に報告すると共に、必要に応じて論文の補筆修正を受ける。

第17回 論文作成の個別指導

各自の進捗状況を指導教員に報告すると共に、必要に応じて論文の補筆修正を受ける。

第18回 論文作成の個別指導

各自の進捗状況を指導教員に報告すると共に、必要に応じて論文の補筆修正を受ける。

第19回 論文作成の個別指導

各自の進捗状況を指導教員に報告すると共に、必要に応じて論文の補筆修正を受ける。

第20回 論文作成の個別指導

各自の進捗状況を指導教員に報告すると共に、必要に応じて論文の補筆修正を受ける。

第21回 論文作成の個別指導

各自の進捗状況を指導教員に報告すると共に、必要に応じて論文の補筆修正を受ける。

第22回 論文作成の個別指導

各自の進捗状況を指導教員に報告すると共に、必要に応じて論文の補筆修正を受ける。

第23回 論文作成の個別指導

指導教員のチェック（補筆修正）を終えた原稿を基に、各自で論文を完成させる。

第24回 論文作成の個別指導

指導教員のチェック（補筆修正）を終えた原稿を基に、各自で論文を完成させる。

第25回 論文作成の個別指導

指導教員のチェック（補筆修正）を終えた原稿を基に、各自で論文を完成させる。

第26回 論文作成の個別指導

指導教員のチェック（補筆修正）を終えた原稿を基に、各自で論文を完成させる。

第27回 論文作成の個別指導

指導教員のチェック（補筆修正）を終えた原稿を基に、各自で論文を完成させる。

第28回 論文作成の個別指導

指導教員のチェック（補筆修正）を終えた原稿を基に、各自で論文を完成させる。

第29回 最終指導

指導教員の最終指導を受ける。

第30回 論文の提出

指導教員より完成の確認を得て、所定提出期間に提出要項に従った手順で、博士論文を提出する。

各自が設定した論文テーマについて、調査・資料収集・草稿作成などを行う。

提出様式に則り完成させた博士論文

博士論文の内容100%で評価する。演習担当教員は、所定の期間に所定の手続きを経て提出された完成論文を、主査として厳密に審査する。その審査に合格し、研究科委員会・評議会等で承認されれば、博士の学位が授与される。フィードバックに関しては、疑義や質問があれば適宜、行う。 特になし

担当教員が必要に応じて選定・紹介する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

経営組織論特殊講義

福井 直人

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

本科目経営組織論特殊講義は、経営学の基本的知識が修得済みであることを前提として、企業組織の管理に重点をおいて知識を深めることを目的とします。そして、学生諸君が経営組織の概念や理論を理解することを目指します。企業をはじめとする組織の活動は、そこで働く人々を共通目的のために方向づけることで機能しています。この共通目的の達成のために、組織全体の仕事をどのように人々で分担（分業）し、かつそれらを纏め上げるか（調整）を考える学問領域こそが、経営組織論です。すなわち、組織の構造はどのように作られるか、組織はどのようなプロセスで動いているか、またそれを管理するために経営者は何をしなければならぬかを、経営学の諸学説を検討するなかで学びます。

本科目は通年科目であり、前期と後期とに分かれます。前期は経営組織論の概論的内容について学びます。後期はその発展的内容にまで踏み込んでいきます。前期後期で各1冊、計2冊の教科書を使用するので、両方とも購入し授業に臨んでください。

経済学研究科におけるDPとの関連でいえば、経営組織の専門的知識を習得するという点で「DP1：知識・理解、経済学・経営学に関する高度な専門知識を有

する。」「DP2：思考・判断、経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」がかかわってきます。また現代は組織社会であることを鑑みると、本科目の内容は企業組織を超えて社会に通ずるものとなります。ゆえに「DP3：関心・意欲、修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。」につながります。

< 到達目標 >

1. 経営組織の基礎的概念について説明できる。
2. 組織変革に成功した企業の情報を独力で収集できる。
3. 身近な組織（家庭、サークル、アルバイトなど）に本科目の知見を応用し実践できる。

< 授業のキーワード >

経営組織、組織構造、組織過程、組織成果

< 授業の進め方 >

各回1章ずつ教科書を読み進めます。各回1名ずつ報告者を割り当てますので、報告者は1つの章についてレジュメを作成し報告することが求められます。報告者以外の人も必ず教科書は熟読してきてください。その内容についてディスカッションを行いたいと思います。もちろん難しい内容については福井から説明することもあります。

< 履修するにあたって >

経営学の内容全般を復習しておいてください。本科目と非常に関連性の高い科目は経営学原理特殊講義ですので、そちらも併せて受講ください。

受講を検討されている方には、前期の教科書を事前に読んでみることを強く推奨する。その内容の理解が少しでもできるようであれば受講を歓迎するが、まったく理解ができない場合などは担当教員（福井）まで一度相談していただくことが望ましい。やはり初学者（経営学を学んだことのない人など）には厳しい内容ではないかと思う。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

経営組織論への招待

< テキスト >

前期使用の教科書を概観しつつ、経営組織論とはどのような学問かを説明します。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 組織の基本原則（組織構造）

組織における分業と調整のあり方について考えます。（教科書第2章）

第4回 物事を決める（意思決定）

バーナード組織論とサイモン意思決定論を中心に、限定合理性を克服すべく組織的意思決定がいかになされるかを学習します。（教科書第3章）

第5回 メンバーのやる気を高める（モチベーション）
組織のメンバーのやる気をいかに高めるか、モチベーション論を中心に考察します。（教科書第4章）

第6回 メンバーを引っ張る（リーダーシップ）
組織のメンバーを組織目的に向けるために、いかに影響を及ぼしていくか、リーダーシップ論の観点から考えます。（教科書第5章）

第7回 チームを組む（チームワーク）
複数の人々による協働をいかにして促進させるか、チームワークの観点から考えていきます。（教科書第6章）

第8回 組織の形を変える（組織形態）
環境や戦略に応じて、組織の形をどのように設計するかを検討します。（教科書第7章）

第9回 文化を捉える（組織文化）
組織のメンバーに共有された意味の体系である組織文化について、その定義や機能を学びます。（教科書第8章）

第10回 情報・知識を捉える（知識創造）
組織がいかにして情報を処理し、知識を創造するのかを学びます。（教科書第9章）

第11回 革新をおこす（イノベーション）
組織におけるイノベーションの意義について確認し、いかにしてイノベーションを促進するかを考えます。（教科書第10章）

第12回 他組織と協力する（ネットワーク）
組織は単独で活動するのではなく、他の組織と協働することもあります。この章では組織間関係をネットワークの観点から分析します。（教科書第11章）

第13回 組織を変える（組織変革）
組織は環境変化に応じて、その構造や文化を変革することに迫られます。この章では組織変革のあり方について学びます。（教科書第12章）

第14回 経営組織論を学ぶ視点（学問論）
諸科学における経営学の位置づけを確認するとともに、経営学における経営組織論の役割を熟考します。（教科書補章）

第15回 前期の総まとめ
前期ここまでの14回を振りかえるとともに、実際の企業において経営組織論の知見がいかに役立つかを事例を交えて説明します。

第16回 前期の復習および後期のスタート
後期使用の教科書を開始し、なぜ組織について学ぶのか、組織にはどういった側面が存在するかを再確認します。（教科書序章）

第17回 組織の定義
ここから数回は、バーナードによる組織論を学びます。まずは同氏による組織の定義から入り、組織の本質を捉えます。（教科書第1章）

第18回 組織目的
バーナードによる組織成立の3要件を確認し、この回で

はそのうち組織目的について学びます。同時に組織均衡論の考え方も紹介します。（教科書第2章）

第19回 コミュニケーションと調整
組織のコミュニケーションという観点から、組織における分業と調整のあり方を考えます。（教科書第3章）

第20回 貢献意欲
ともすれば組織目的と個人目的は一致しないことが多いですが、組織メンバーから貢献意欲を引き出すには何が必要かを考えます。（教科書第4章）

第21回 合理システムの設計
最も合理的な組織の理念型とされる官僚制組織の設計原理について学びます。（教科書第5章）

第22回 自生的システムの設計
非公式組織や人的ネットワーク、組織文化といった自然発生的に生まれる組織現象について学習します。（教科書第6章）

第23回 組織プロセス
組織の中の人間行動として、リーダーシップやコンフリクト、グループダイナミクスといった概念について学習します。（教科書第7章）

第24回 経営資源としての変化する人
組織に所属する人そのものについての理解を深めるため、モチベーションや組織社会化、経験学習といった概念について検討します。（教科書第8章）

第25回 環境と組織
組織が環境にいかにして適応してその形を変えるか、コンティンジェンシー理論や資源依存理論に注目して議論します。（教科書第9章）

第26回 戦略と組織学習
戦略と組織の連関についてチャンドラーによる見解を理解した後、組織による能動的学習である組織学習の概念を学習します。（教科書第10章）

第27回 イノベーションと組織
イノベーションを創出するためには組織の構造やプロセスをいかに管理するかを考えます。また、組織間関係についても言及します。（教科書第11章）

第28回 変化を続ける組織
持続的イノベーションと破壊的イノベーションを両立させるためには何が必要か、両利きの経営に関する議論について検討します。

第29回 組織行動論の考え方
担当教員の専門領域に近い組織行動論について、最新の研究潮流を俯瞰的に捉えます。この回は論文を配布するので教科書は使用しません。

第30回 後期の総まとめ
後期ここまでの14回を振りかえるとともに、実際の企業において経営組織論の知見がいかに役立つかを事例を交えて説明します。

事前に教科書の指定された箇所を読み、分からない語は辞典で調べる。（目安として1時間）

事後に配布資料およびノートを見直す。必要に応じて教科書に立ち返る。(目安として1時間)

とくにありません。

報告25%、各回の小課題25%、期末レポート50%

期末レポートでは、現実の企業における実態と学術的な理論の往復ができるかという観点から、論述問題を出題します。問題は教科書の章末問題におそらく準じます。

前期使用：上林憲雄・庭本佳子編(2020)『経営組織入門』文真堂。(2,090円)

後期使用：高尾義明(2019)『はじめての経営組織論』有斐閣。(2,090円)

安藤史江・稲水伸行・西脇暢子・山岡徹(2019)『ベシックプラス経営組織』中央経済社。(2,640円)

鈴木竜太(2018)『経営組織論』東洋経済新報社。(2,420円)

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済情報システム論特殊研究

毛利 進太郎

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済情報システム論特殊講義

毛利 進太郎

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済情報システム論特別演習 (1年次)

毛利 進太郎

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済情報システム論特別演習 (2年次)

毛利 進太郎

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済情報システム論特別演習 (3年次)

毛利 進太郎

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済政策演習 (1年次)

伴 ひかり

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済政策演習 (2年次)

伴 ひかり

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済政策特殊研究

伴 ひかり

2022年度 後期

4.0単位

経済政策特殊講義

伴 ひかり

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済政策特別演習 (1年次)

伴 ひかり

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済政策特別演習 (2年次)

伴 ひかり

2022年度 前期～後期

4.0単位

経済政策特別演習 (3年次)

伴 ひかり

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際会計論演習 (1年次)

安井 一浩

<授業の方法>

演習室において対面の演習形式で行う。

< 授業の目的 >

修士論文の主題の選択及び論文作成のための基礎となる知識を身に付けることを目的とする。

< 到達目標 >

修士論文を作成するために選択した対象について、基礎的な知識を身に付け問題点を把握したうえで議論ができることを目標とする。

< 授業の進め方 >

各回の授業において資料をもとに説明を行い、そののちに議論を行う。

また必要に応じて新聞等で報道された内容に関して議論を行う。

< 提出課題など >

第1回～第5回

< 成績評価方法・基準 >

主題選択

< テキスト >

修士論文の主題を選択するために教科書をもとに財務会計のおもな論点について議論を行う。

< 参考図書 >

第6回～第10回

< 授業計画 >

第11回～第15回 財務会計の論点（その2）

論文作成のために必要な財務会計の基礎知識を身に付けるために、対象を選択し教科書を基に議論を行う。

第16回～第20回 先行研究のレビュー（その1）

論文作成のために必要な財務会計の基礎知識を身に付けるために、対象を選択し先行研究を基に議論を行う。

第21回～第25回 先行研究のレビュー（その2）

論文作成のために必要な財務会計の基礎知識を身に付けるために、対象を選択し先行研究を基に議論を行う。

第26回～第30回 論点整理

修士論文を作成するために必要な論点の整理を行う。

演習中に行った議論を復習することが必要となる。

毎回の授業における議論への貢献度により評価を行う。

桜井久勝著「財務会計講義」（中央経済社）

開講日現在の最新版とする。

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際会計論演習（2年次）

安井 一浩

< 授業の方法 >

演習室において対面の演習形式で行う。

< 授業の目的 >

修士論文の作成を目的とする。

< 到達目標 >

修士論文を完成させることを目標とする。

< 授業の進め方 >

毎回、修士論文の構成及び表現について議論を通じた指導を行う。

< 提出課題など >

第1回～第5回

< 成績評価方法・基準 >

論文指導（その1）

< テキスト >

修士論文の構成、導入部分、問題意識のについて議論を行ったうえで指導を行う。

< 参考図書 >

第6回～第10回

< 授業計画 >

第10回～第14回 論文指導（その3）

修士論文について先行研究のレビューおよびまとめについて議論を行ったうえで指導を行う。

第15回 中間報告

修士論文の中間発表会を行う。

第16回～第29回 論文指導（その4）

中間報告での指摘をもとに論文の最終仕上段階における指導を行う。

第30回 最終報告

修士論文の最終報告会を行う。

毎回の指導に基づき論文の文書を作成すること。

論文の完成度に応じて評価を行う。

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際会計論特殊研究

安井 一浩

< 授業の方法 >

演習室において対面の演習形式で行います。

< 授業の目的 >

博士論文を作成するために必要な国際財務報告基準（IFRS）に関する知識を身に付けることを目的とします。

< 到達目標 >

英語で記載された国際財務報告基準（IFRS）本文および結論の背景、国際会計基準審議会から公表されるIFRSに関連する資料、先行研究を読解することができることを目標とする。

< 授業のキーワード >

IASB IFRS

< 授業の進め方 >

各回の授業において指定した資料をもとに説明を行い、そののちに議論を行う。

また必要に応じて新聞雑誌等で報道された内容に関して議論を行う。

< 提出課題など >

第1回～第5回

< 成績評価方法・基準 >

概念フレームワーク

<テキスト>

IASBから公表された概念フレームワーク（英語版）およびこれを対象とした先行研究をもとに説明および議論を行う。

<参考図書>

第6回～第10回

<授業計画>

第11回から第15回 IFRSs（その2）

IASBから公表されたIFRSおよびIASのうち受講者が論文作成にあたり必要なものを対象として英語版の本文及び結論の背景をもとに議論を行う。

第16回から第20回 IFRSs（その3）

IASBから公表されたIFRSおよびIASのうち受講者が論文作成にあたり必要なものを対象として英語版の本文及び結論の背景をもとに議論を行う。

第21回から第25回 IFRS関連資料

IASBから公表されたIFRSおよびIASに関する討議資料および公開草案等の資料のうち受講者が論文作成に必要なものを対象として議論を行う。

第26回～第30回 先行研究のレビュー

IFRSsに関する内外の先行研究のうち受講者が論文作成に必要なものを対象に議論を行う。

授業内容の復習及び授業時間中に終わらなかった部分について読解を行うこと。

毎回の授業における意見発表70%

レポート30% 英語版のIFRSsおよび関連資料。

（IASBのウェブサイトから入手可能であるが、ユーザー登録が必要である。授業開始日までに登録すること。）

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際会計論特殊講義

安井 一浩

<授業の方法>

講義を対面形式で行う。

<授業の目的>

この授業の目的は、国際財務報告基準とそれに対応する日本の会計基準に関する知識を身に付けることである。そのためには以下の点について意識し受講することが望まれる。

- ・国際財務報告基準の役割と目標を理解する。
- ・国際財務報告基準の構造と規定内容を理解する。
- ・国際財務報告基準と日本の会計基準との対応関係を理解する。

上記の目的を達成するために、テキストに基づいて各IASおよびIFRSの規定内容を説明し、そののちに日本の会計基準について対比しながら説明を行う。また必要に応

じて英文（原文）を用いて説明を行う。

<到達目標>

IFRSを導入した企業あるいは導入を検討している企業において経理担当者として勤務すること、が可能な知識を身につけることを目標とする。あるいは研究者を目指す受講者にとっては、研究対象としてのIFRSに関する知識を深めることを目標とする。

<授業のキーワード>

IFRS, 国際財務報告基準, 会計基準

<授業の進め方>

各回の授業において教科書をもとに説明を行い、そののちに議論を行う。

また必要に応じて新聞等で報道された内容に関して議論を行う。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

講義の進め方と、本授業の主題と目標、評価基準などを説明する。

<参考図書>

第2回～4回

<授業計画>

第5回～15回 国際財務報告基準の規定内容と日本の会計基準

(1)

国際財務報告基準のIAS1「財務諸表の表示」からIAS27「個別財務諸表」までうち重要な規定について日本の会計基準と比較しながら説明を行う。なお複数のIASおよびIFRSにまたがって規定されている内容については、内容ごとに説明を行う。また必要に応じて英文（原文）を用いて説明を行う。

第16回～28回 国際財務報告基準の規定内容と日本の会計基準

(2)

国際財務報告基準のIAS28「関連会社と共同支配企業に関する投資」からIFRS13「公正価値測定」までうち重要な規定について日本の会計基準と比較しながら説明を行う。なお複数のIASおよびIFRSにまたがって規定されている内容については、内容ごとに説明を行う。また必要に応じて英文（原文）を用いて説明を行う。

第29回～30回 IFRSの問題点

これまで学んだ内容をもとにIFRSの問題点について議論を行う。

新聞記事等によるIFRS導入に関する報道に注目すること。また日本企業における導入事例を把握しておくこと。必要に応じて設定されたテーマについて、適宜レポートを提出してもらいます。

毎回の授業における意見発表70%
レポート30% テキスト「国際会計基準」桜井久勝編著
白桃書房
なお開講日現在の最新版とする。
「財務会計講義」桜井久勝著中央経済社
なお開講日現在における最新版とする。

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際会計論特別演習（1年次）

安井 一浩

< 授業の方法 >

演習形式で行う。

< 授業の目的 >

博士論文を完成させるための知識と考え方を身に付けることを目的とする。

< 到達目標 >

博士論文の全体構想を持つことができることを目標とする。

< 授業の進め方 >

各回の授業において資料をもとに説明を行い、そののちに議論を行う。

なお受講者の希望を取り入れかつ進捗状況を考慮して進める。

< 提出課題など >

第1回～第5回

< 成績評価方法・基準 >

論文指導（その1）

< テキスト >

博士論文作成に必要な基礎知識の説明、これまで修士論文の成果の確認を行う。

< 参考図書 >

第6回～第20回

< 授業計画 >

第20回～第30回 論文指導（その3）

収集した資料の基づき博士論文の全体構想について指導を行い議論を行う。

各回の指導をもとに論文の全体構想を持てるように復習を行うこと。

また可能であれば論文の一部に取り掛かること。

目標に対する到達度を確認し評価を行う。

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際会計論特別演習（2年次）

安井 一浩

< 授業の方法 >

演習形式で行う。

< 授業の目的 >

博士論文を完成させる能力を身に付けることを目的とする。

< 到達目標 >

博士論文の全体構想が完成し本文の三分の二以上が完成に近い状態であること、また日本会計研究学会をはじめとする諸学会、その他の研究会で報告することができる能力を身に付けることを目標とする。

< 授業の進め方 >

各回の授業において資料および先行研究をもとに議論を行う。

< 提出課題など >

第1回～第10回

< 成績評価方法・基準 >

論文指導（その1）

< テキスト >

収集した資料および先行研究をもとに議論を行う。また博士論文のうち書き終えた部分について指導を行う。

< 参考図書 >

第11回～第20回

< 授業計画 >

第21回～第30回 論文指導（その3）

収集した資料および先行研究をもとに博士論文作成のための議論を行い、博士論文のうち書き終えた部分について指導を行う。また学会、研究会での報告を行うための指導を行う。

各回の指導をもとに博士論文の作成を行うこと。

目標に対する到達度を確認し評価を行う。

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際会計論特別演習（3年次）

安井 一浩

< 授業の方法 >

演習形式で行う。

< 授業の目的 >

博士論文を完成させ研究者として研究を遂行する能力を身に付けることを目的とする。

< 到達目標 >

博士論文を完成させ審査に合格すること。また日本会計研究学会をはじめとする諸学会、その他の研究会で報告することができる能力を身に付けることを目標とする。

< 授業の進め方 >

各回の授業において資料および先行研究をもとに議論を行う。

< 提出課題など >

第1回～第10回

< 成績評価方法・基準 >

論文指導（その1）

< テキスト >

収集した資料および先行研究をもとに博士論文作成のための議論を行い博士論文のうち書き終えた部分について指導を行う。また学会、研究会での報告を行うための指導を行う。

< 参考図書 >

第11回～第20回

< 授業計画 >

第3回 論文指導（その3）

収集した資料および先行研究をもとに博士論文作成のための議論を行い、博士論文の完成へ向けての最終的な指導を行う。また学会、研究会での報告を行うための指導を行う。なお適宜、学内での報告会を開催する。

各回の指導をもとに博士論文、学会報告資料および研究会報告資料の作成を行うこと。

目標に対する到達度を確認し評価を行う。

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際経営論特殊講義

藤原 由紀子

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

本講義では、国際経営論の理論と実践を学ぶことで経済学・経営学に関する高度な専門知識を修得し、その知識や分析方法を使って自ら設定した課題を総合的に考察できることの2つを目的とする。

大企業に加え、中堅・中小企業でも国境を越えてビジネスを展開している企業が増えている。本講義では国際経営論に関する理論や基礎的知識を学ぶことで、現実の経営活動やその背後にある戦略を理解、分析する力を養う。ビジネス環境として考慮すべき国の違いについても理解を深める。

< 到達目標 >

修得した理論や知識を使って、特定のテーマや企業について分析したり、検討できるようになることを目標とする。

具体的には、

- ・国や地域の特徴を掴み、それが多国籍企業のビジネスに及ぼしている影響について説明できる。
- ・現実の国際経営活動の課題を分析し、それに対して自

分なり解釈を加えたり、提言をすることができる。

< 授業のキーワード >

多国籍企業、国際ビジネス、国や地域の特徴、戦略、事業運営

< 授業の進め方 >

テキストの輪読を行う。輪読に加えて、受講者による調査、分析結果の発表と議論も行う。

但し、受講者数によっては、授業の進め方を変更する可能性がある。

< 履修するにあたって >

新聞や日経ビジネスなどを通じて、現実の社会の動きや企業活動を理解するよう努めてください。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

本講義の概要、進め方について説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 国による違い1

国による政治・経済体制の違いを理解する。体制の違いによって多国籍企業がどのような問題に直面し、それにどう対応しているのかを学ぶ。

第4回 国による違い2

国による文化の違いや地理的な隔たりについて理解する。そのなかで多国籍企業がマーケティングや経営管理上、どのような問題に直面し、それにどう対応しているのかを学ぶ。

第5回 事例研究

受講者による報告とディスカッション。CAGEフレームワークを使って特定の国を分析し、その中で日本企業が直面している問題やそれへの対応について報告、検討する。

第6回 海外直接投資の理論1

企業はなぜ、海外進出するのか。海外進出した先で現地企業との競争に勝つためには、外国企業であることの不利を上回る何かしらの優位性をその企業が持っている必要がある。ここではハイマーの優位性の命題を説明し、海外進出の決め手となる「優位性」とは何かを理解する。

第7回 海外直接投資の理論2

海外進出する際の3つの形態を説明する。その上で、それぞれの取引コストを比較することで企業が進出形態を決めていると考える内部化理論について説明する。

第8回 海外直接投資の理論3

海外進出する際、どの国を選ぶべきなのか。決め手は、進出先の国にどのような優位性があるのかである。これを立地優位性と言う。海外進出の目的によって、どのよ

うな立地優位性が求められるのかを考える。

第9回 海外直接投資の理論4

企業のもつ優位性と、その国の立地優位性、進出形態の3つを総合して海外進出のパターンを説明するOLIパラダイムについて学ぶ。

第10・11回 事例研究

海外直接投資の理論を使って日本に進出している外資系企業の事例を分析し、その結果を報告してもらう。理論によって現実を説明しにくいケースにどのようなものが考えられるか議論する。

第12・13回 多国籍企業の組織構造

国際経営活動の進展に合わせて組織構造がどのように変化するのか、戦略と組織構造の適合性について説明する。

第14・15回 グローバル統合と現地適応

多国籍企業が世界中で活動をするうえで、事業や機能を世界中で標準化するべきか現地の状況に合わせるべきなのかを考える必要がある。このグローバル統合と現地適応という問題と、この問題を考える際の枠組みとなるI-Rフレームワークについて学ぶ。

第16・17回 国際経営のタイプと組織モデル

I-Rフレームワークをもとにして分類される経営の4つのタイプの特徴について学ぶ。経営のタイプに適した組織モデルについて説明する。

第18～20回 国際マーケティング

マーケティングの基礎知識を復習する。その上で、国内マーケティングと国際マーケティングの違いを説明する。国際マーケティングで考慮すべき標準化と適応化の問題について考える。

第21回 事例研究

多国籍企業を1つ選択し、日本国内のマーケティングミックスと海外のマーケティングミックスを調査し、共通点と相違点について報告する。共通点と相違点が生じた理由について考察する。

第22回 国際的なものづくりの展開1

日本的生産システムの特徴について学ぶ。

第23・24回 国際的なものづくりの展開2

日本的な技術移転の特徴と、それによって日本企業がどのような課題に直面しているのかを学ぶ。

第25回 国際生産ネットワーク

海外工場の立ち上げから複数の海外工場をいかに管理、連携すべきなのかについて考える。

第26・27回 海外子会社のコントロール

海外子会社の統制のあり方を経営者の経営姿勢から4つのタイプに分類したパールミュッターのEPRGプロファイルについて学ぶ。この考え方を使用し、日本と外国企業の海外子会社のコントロールの違いについて考える。

第28・29回 国際経営と言語

国際ビジネスの共通言語は英語であるが、日本企業の国際経営では日本語も使用されている。なぜ日本語が使用

されるのかを説明する。また日本企業が英語を公用語にすることについて考える。

第30回 総括

これまでの振り返りを行う。

日ごろから新聞や日経ビジネスなどの雑誌を読んで、現実の企業活動への理解と関心を深めてください(1時間)。講義で学んだ知識や理論を使って、現実の企業活動を解釈する練習をしてください。

事例研究のレポート(3回)

単位の認定には、半期ごとに5分の4以上の出席が前提となる。その上で、事例研究のレポート(各25%で3回分、75%)と授業中の発言や議論への参加状況(25%)で評価する。 初回授業で連絡する。

適宜指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際貿易論演習 (1年次)

石本 眞八

<授業の方法>

対面授業

<授業の目的>

演習(1年次)の目的は、修士論文のテーマを選び、その下で基礎的な研究を進め、修士論文の構想を立てることである。その過程で、経済学研究科修士課程のDPに掲げる、「1.知識・理解：経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。」、「2.思考・判断：経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」、「3.関心・意欲：修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。」、「4.技能・表現：修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる」をある程度達成する。なお、この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている。

<到達目標>

- ・修士論文のテーマを確定する。
- ・関連する文献を整理し、修士論文の一部を構成できるようまとめておく。
- ・修士論文の構想を発表し、2年次4月末に提出する研究計画書の準備をする。

<授業の進め方>

ゼミ生の報告と討論を中心にすすめる。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

演習(M1)の進め方, 研究倫理等

< 参考図書 >

第2回～第6回

< 授業計画 >

第7回 基本的文献の整理

基本文献の要約の作成

第8回 文献リストの作成

研究テーマの絞り込み、関連する文献のリストアップ

第9回～第13回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第14回 関連文献の整理

関連文献の概要の作成

第15回 前半のまとめ

前半のまとめと後半に向けた計画の検討

第16回～第18回 研究テーマの確定

修士論文の研究テーマの確定

第19回～第22回 先行研究との関連

先行研究との関連性を検討する

第23回～第27回 理論構築

先行研究をもとに独自の理論展開を行う

第28回～第29回 問題点の整理と修正

構築した理論の問題点を明らかにする

第30回 論文の構想

論文の構想と修正箇所の確認

学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には15時間以上が必要となる。

演習での報告や討論、提出物などを総合的に評価する。

必要に応じて適宜指示する

2022年度 前期～後期

4.0単位

国際貿易論演習（2年次）

石本 眞八

< 授業の方法 >

対面授業

< 授業の目的 >

演習(2年次)の目的は、テーマに沿った研究をさらに進め、修士論文として完成させることである。その過程で、経済学研究科修士課程のDPに掲げる、「1.知識・理解：経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。」、「2.思考・判断：経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」、「3.関心・意欲：修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。」、「4.技能・表現：修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる」を達成する。なお、この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている。

< 到達目標 >

・経済学研究科学位論文審査基準や経済学研究科学位論

文作成細則に示された要件を満たす修士論文を完成させる。

< 授業の進め方 >

ゼミ生の報告と討論を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習(M2)の進め方、研究倫理等

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回～第7回 研究結果の報告

研究結果の報告と討論

第8回～第9回 問題点の整理

質疑応答を通じて問題点を整理する

第10回～第14回 修正内容の報告

修正すべき内容を報告し討論する

第15回 修正内容の整理

修正すべき内容を明確にする

第16回～第20回 執筆

執筆内容を逐次報告する

第21回 初稿の完成

初稿を提出し報告する

第22回～第24回 中間報告会の準備

中間報告会の準備を行う

第25回 中間報告会

修士論文の中間報告を発表する

第26回～第28回 最終校正

中間報告会でのコメントに対して修正を行う

第29回 要旨の作成

要旨を作成する

第30回 修士論文の完成

修士論文の提出

学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には30時間以上が必要となる。

修士論文で評価する

2022年度 前期

4.0単位

国際貿易論特殊講義

石本 眞八

< 授業の方法 >

対面による講義

< 授業の目的 >

国際貿易論の発展に沿って、まず2国2財の一般均衡モデルを理解し、その後不完全競争市場を前提にした "New Trade Theory" を理解し、さらに企業の生産性分布を基

にした "New New Trade Theory"を理解し、現実の様々な貿易問題を理論的に考える能力を身に付けることを目標とする。

<到達目標>

国際貿易に関する諸問題に対して独自の理論構築ができること

<授業の進め方>

専門論文を読解し随時報告し、期末にレポートを提出してもらいます

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

2国1財部分均衡モデル

<テキスト>

需要供給関数を基にした部分均衡モデルで貿易問題の本質を理解する

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 リカードモデル(2)

2財1要素経済の閉鎖経済均衡の特徴について理解する

第4回 リカードモデル(3)

2国2財1要素経済の貿易均衡の特徴について理解する

第5回 リカードモデル(4)

貿易利益および貿易による産業構造と所得分配の変化について理解する

第6回 ヘクシャーオリーンモデル(1)

2財2要素経済の生産構造について理解する

第7回 ヘクシャーオリーンモデル(2)

2財2要素経済の閉鎖経済均衡の特徴について理解する

第8回 ヘクシャーオリーンモデル(3)

2国2財2要素経済の貿易均衡の特徴について理解する

第9回 ヘクシャーオリーンモデル(4)

ストルパーサミュエルソン定理について理解する

第10回 ヘクシャーオリーンモデル(5)

リブチンスキー定理について理解する

第11回 ヘクシャーオリーンモデル(6)

要素価格均等化定理について理解する

第12回 ヘクシャーオリーンモデル(7)

貿易利益および貿易による産業構造と所得分配の変化について理解する

第13回 ヘクシャーオリーンモデル(8)

資本移動と技術移転の効果を理解する

第14回 ヘクシャーオリーンモデル(9)

貿易政策の効果について理解する

第15回 ヘクシャーオリーンモデル(10)

不完全競争や技術格差がある場合の影響について理解する

第16回 新しい貿易理論(1)

独占的競争市場均衡について理解する

第17回 新しい貿易理論(2)

独占的競争市場における貿易均衡を理解する

第18回 新しい貿易理論(3)

新しい貿易理論の現実的意義を理解する

第19回 新しい貿易理論(4)

新しい貿易理論の問題点を理解する

第20回 新・新しい貿易理論(1)

Melitz(2003)の論文の1・2節を理解する

第21回 新・新しい貿易理論(2)

Melitz(2003)の論文の3節を理解する

第22回 新・新しい貿易理論(3)

Melitz(2003)の論文の4節を理解する

第23回 新・新しい貿易理論(4)

Melitz(2003)の論文の5・6節を理解する

第24回 新・新しい貿易理論(5)

Melitz(2003)の論文の7節を理解する

第25回 新・新しい貿易理論(6)

Melitz(2003)の論文の8節を理解する

第26回 最新の研究動向

最新の論文を読解し、貿易理論の動向を理解する

第27回 応用(1)

現実の貿易問題について独自の理論構築を行う

第28回 応用(2)

現実の貿易問題について独自の理論構築を行う

第29回 応用(3)

独自の理論をレポートにまとめる

第30回 報告と質疑応答

レポートについて質疑応答を行う

内容にもよりますがテキストや専門論文の読解に毎日3時間以上は必要です

適宜レポートを提出してもらい、コメントにしたがって加筆・修正してもらいます

毎回の質疑応答の内容40%、レポート60%

必要に応じて適宜指示します

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学演習(2年次)

渡部 尚史

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この科目は経済学研究科のDPが示す関心・意欲「修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり社会の発展に貢献したいと考えている」を修得することを目指す。昭和、平成時代に実施された税制改正について、専門知識を習得することが目的である。

<到達目標>

税制改正の内容を理解でき、税制改正の流れを説明する

ことができる。

< 授業のキーワード >

税制改正

< 授業の進め方 >

報告を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

終戦から講和までの税制改正（1）

< テキスト >

『昭和財政史 終戦から講和まで 第7巻 租税（1）』の第1章～第4章を読み、昭和20、21年度の税制改正、財産税を理解する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 終戦から講和までの税制改正（3）

『昭和財政史 終戦から講和まで 第7巻 租税（1）』の第9章、第10章を読み、シャウブ勧告の作成過程を理解する。

第4回 終戦から講和までの税制改正（4）

『昭和財政史 終戦から講和まで 第8巻 租税（2）・税務行政』の第11章～第13章を読み、シャウブ勧告の体系を理解する。

第5回 シャウブ勧告（1）

シャウブ勧告の第1巻の第1～第3章を読み、当時の租税制度、国家財政と地方財政の関係を理解する。

第6回 シャウブ勧告（2）

シャウブ勧告の第1巻第4～第6章を読み、個人所得税、法人税に関する勧告の内容を理解する。

第7回 シャウブ勧告（3）

シャウブ勧告の第2巻を読み、資産の再評価、贈与税および遺産税、住民税、不動産税に関する勧告の内容を理解する。

第8回 シャウブ勧告後の税制改正

『昭和財政史 終戦から講和まで 第8巻 租税（2）・税務行政』の第14～第18章を読み、昭和25年度の税制改正、シャウブ第二次勧告、昭和26年度の税制改正の内容を理解する。

第9回 終戦から講和までの税務行政

『昭和財政史 終戦から講和まで 第8巻 租税（2）・税務行政』の税務行政の章を読み、昭和20～26年度の税務行政を理解する。

第10回 昭和27から48年度までの税制改正（1）

『昭和財政史 昭和27～48年度 第6巻 租税』の第1章を読み、昭和27～30年度の税制改正の内容を理解する。

第11回 昭和27から48年度までの税制改正（2）

『昭和財政史 昭和27～48年度 第6巻 租税』の第2章、第3章を読み、昭和31～37年度の税制改正の内容を理解する。

第12回 昭和27から48年度までの税制改正（3）

『昭和財政史 昭和27～48年度 第6巻 租税』の第4章を読み、昭和38～48年度の税制改正（所得税、法人税）の内容を理解する。

第13回 昭和27から48年度までの税制改正（4）

『昭和財政史 昭和27～48年度 第6巻 租税』の第5章を読み、昭和38～48年度の税制改正（間接税、土地税制）の内容を理解する。

第14回 昭和49から63年度までの税制改正（1）

『昭和財政史 昭和49～63年度 第4巻 租税』の第1章第1～7節を読み、昭和49～63年度の税制改正の内容を理解する。

第15回 昭和49から63年度までの税制改正（2）

『昭和財政史 昭和49～63年度 第4巻 租税』の第2章を読み、昭和49～54年度の税制改正の内容を理解する。

第16回 昭和49から63年度までの税制改正（3）

『昭和政史 昭和49～63年度 第4巻 租税』の第3章を読み、昭和55～63年度の税制改正の内容を理解する。

第17回 平成元年度から12年度の税制改正（1）

『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』の第1章第1～第8節を読み、平成元～7年度の税制改正の内容を理解する。

第18回 平成元から12年度までの税制改正（2）

『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』の第1章第9～第13節を読み、平成8～12年度の税制改正の内容を理解する。

第19回 平成元から12年度までの税制改正（3）

『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』の第2章第1～第4節を読み、平成元～7年度の所得税、法人税の税制改正を理解する。

第20回 平成元から12年度までの税制改正（4）

『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』の第2章第5～第7節を読み、平成元～7年度の消費税、間接税の税制改正の内容を理解する。

第21回 平成元から12年度までの税制改正（5）

『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』の第3章第1～第5節を読み、平成元～7年度の土地税制、相続税・贈与税の税制改正の内容を理解する。

第22回 平成元から12年度までの税制改正（6）

『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』の第3章第1～第5節を読み、平成8～12年度の所得税、法人税の税制改正の内容を理解する。

第23回 平成元から12年度までの税制改正（7）

『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』の第3章第6～第10節を読み、平成元～12年度の消費税、間接税、土地税制、相続税・贈与税の税制改正の内容を理解する。

第24回 平成13から15年度の税制改正

平成13～15年度の税制改正の内容を理解する。

第25回 平成16から18年度の税制改正

平成16～18年度の税制改正の内容を理解する。

第26回 平成19から21年度の税制改正
平成19～21年度の税制改正の内容を理解する。
第27回 平成22から24年度の税制改正
平成22～24年度の税制改正の内容を理解する。
第28回 平成25から27年度の税制改正
平成25～27年度の税制改正の内容を理解する。
第29回 平成28から30年度の税制改正
平成28～30年度の税制改正の内容を理解する。
第30回 令和元、2年度の税制改正
令和元年度、2年度の税制改正の内容を理解する。
事前学習として、テキストの該当部分を読む（2時間）
報告内容50%、討議内容50%で評価する。 [1] 大蔵省財政史室編『昭和財政史 終戦から講和まで 第7巻 租税（1）』東洋経済新報社、1977年。
[2] 大蔵省財政史室編『昭和財政史 終戦から講和まで 第8巻 租税（2）・税務行政』東洋経済新報社、1977年。
[3] 大蔵省財政史室編『昭和財政史 昭和27～48年度 第6巻 租税』東洋経済新報社、1990年。
[4] 財務省財務総合政策研究所財政史室編『昭和財政史 昭和49～63年度 第4巻 租税』東洋経済新報社、2003年。
[5] 財務省財務総合政策研究所財政史室編『平成財政史 平成元～12年度 第4巻 租税』大蔵財務協会、2014年。
「6」財務省『税制改正の解説』各年度版。

2022年度 前期～後期
4.0単位
財政学演習（2年次）
平井 健之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

【授業の概要】

受講者の研究計画に基づき、修士論文の完成に向けて論文の指導を行う。

【授業の目的】

受講者の研究テーマに基づき、その研究の成果を最終的に修士論文として完成させることを目的とする。この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学に関する高度な専門知識を有すること、さらに、経済学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することを目指している。

< 到達目標 >

財政、公共経済の分野において、より高度な専門的な知識と分析能力を身につけることができる。

研究テーマに関する修士論文を完成させることができる。

< 授業のキーワード >

歳入と歳出、租税、財政赤字、地方財政

< 授業の進め方 >

受講者に修士論文の執筆原稿を報告してもらい、修士論文の完成に向けた指導を行う。

< 履修するにあたって >

修士論文の作成に向けての作業を受講者自身で計画的に進めること。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

修士論文執筆要領の確認。

今後の作業の進め方に関する指導など。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第4回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第5回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第6回 修士論文の原稿の報告

各受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第7回 修士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第8回 修士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第9回 修士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第10回 修士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第11回 修士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第12回 修士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第13回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第14回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第15回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第16回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第17回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第18回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第19回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第20回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第21回 修士論文の原稿の報告
受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第22回 修士論文全体の報告
受講者は論文をひとつとおり完成させ、その原稿を報告する。

第23回 修士論文全体の報告
受講者は論文をひとつとおり完成させ、その原稿を報告する。

第24回 修士論文全体の確認
論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第25回 修士論文全体の確認
論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第26回 修士論文全体の確認
論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第27回 修士論文全体の確認
論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第28回 修士論文全体の確認
論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第29回 修士論文全体の確認
論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第30回 修士論文全体の確認
論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。
学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には10時間以上が必要となる。
提出期限内に修士論文を完成させて提出すること。

修士論文の内容のみで評価する。
なお、論文において、他の文献資料からの剽窃、盗用があった場合には単位を認定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学演習（1年次）

渡部 尚史

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この科目は経済学研究科のDPが示す関心・意欲「修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したと考えている」を修得することを目指す。予算制度、公共支出、国際・地方債、国税、地方税について、高度な専門知識を修得することを目的とする。

<到達目標>

専門論文の内容が理解でき、修士論文のテーマを選ぶことができるようになる。

<授業のキーワード>

租税

<授業の進め方>

受講生の報告を中心に進める。

<提出課題など>

第1回、第2回

<成績評価方法・基準>

租税の理念

<テキスト>

課税の基礎理念、租税原則に関する専門論文を読み、課税の基本理念、租税原則を理解する。

<参考図書>

第3回～第5回

<授業計画>

第6回、第7回 所得税における所得概念

所得概念に関する専門論文を読み、所得概念に関する議論を理解する。

第8回～第11回 所得税における所得区分

各種所得に関する専門論文を読み、所得区分に関する議論を理解する。

第12回、第13回 所得税における所得控除・税額控除

所得控除・税額控除に関する専門論文を読み、所得控除・税額控除に関する議論を理解する。

第14回、第15回 法人税における益金

益金に関する専門論文を読み、益金に関する議論を理解する。

第16回、第17回 法人税における損金（1）

損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第18回、第19回 法人税における損金（2）
損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第20回 同族会社
同族会社の課税問題に関する専門論文を読み、同族会社の課税問題に関する議論を理解する。

第21回 国際課税
国際課税に関する専門論文を読み、国際課税に関する議論を理解する。

第22回、第23回 相続税、贈与税
相続税・贈与税に関する専門論文を読み、相続税・贈与税の議論を理解する。

第24回～第26回 消費税
消費税に関する専門論文を読み、消費税に関する議論を理解する。

第26回～第28回 地方税
事業税、固定資産税に関する専門論文を読み、事業税、固定資産税に関する議論を理解する。

事前学習として、専門論文を読み、報告の準備を行う（2時間）。

報告内容50%、討論内容50%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学演習（2年次）

平井 健之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

【授業の概要】

受講者の研究計画に基づき、修士論文の完成に向けて論文の指導を行う。

【授業の目的】

受講者の研究テーマに基づき、その研究の成果を最終的に修士論文として完成させることを目的とする。この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学に関する高度な専門知識を有すること、さらに、経済学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することを目指している。

< 到達目標 >

財政、公共経済の分野において、より高度な専門的な知識と分析能力を身につけることができる。

研究テーマに関する修士論文を次年度において完成させることができる。

< 授業のキーワード >

歳入と歳出、租税、財政赤字、地方財政

< 授業の進め方 >

受講生の研究テーマに基づいて文献を選択し、輪読形式で受講生の発表と討論によって授業を進める。

< 履修するにあたって >

受講生はあらかじめ指定された文献の内容を予習することで報告の準備を行うこととする。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

授業で使用する文献の案内

今後の授業の進め方に関する指導など。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第4回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第5回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第6回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第7回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第8回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第9回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第10回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第11回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第12回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第13回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第14回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第15回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読

研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第16回 修士論文の執筆計画作成

修士論文の具体的な執筆計画を報告する。

第17回 修士論文の執筆計画作成

修士論文の具体的な執筆計画を報告する。

第18回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第19回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第20回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第21回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第22回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第23回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第24回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第25回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第26回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第27回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第28回 修士論文の作成に向けて、参考文献の講読

修士論文の作成に向けて、参考となる文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第29回 修士論文の執筆計画の再検討

修士論文の具体的な執筆計画を再検討する。

第30回 修士論文の執筆計画の再検討

修士論文の具体的な執筆計画を再検討する。

毎回、授業内容の予習と復習にそれぞれ5時間以上は必要である。

授業内容に関するレポートの提出。

授業での報告・討論の状況とレポートにより評価する。

特定のテキストは使用しない。適宜、授業で使用する文献を指示する。

授業中に適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特殊研究

渡部 尚史

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

この科目は経済学研究科のDPが示す「経済学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」ことを目指す。財政学の高度な知識を修得し、独創的な研究ができるようになることを目的とする。

<到達目標>

財政学の高度な専門知識を修得し、研究者として自らの意見を述べるようになる。

<授業のキーワード>

予算、公共支出、国債・地方債、国税、地方税

<授業の進め方>

講義と報告を中心に進める。

<提出課題など>

第1回? 第3回

<成績評価方法・基準>

国・地方の予算制度

<テキスト>

国・地方の予算制度について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

<参考図書>

第4回? 第6回

<授業計画>

第7回? 第9回 国債・地方債

国債・地方債について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

第10回? 第12回 所得税における所得区分

所得区分について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

第13回? 第15回 所得税の所得控除・税額控除

所得控除・税額控除について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

第16回? 第18回 法人税における益金

益金について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

第19回? 22回 法人税における損金

損金について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

第23回? 第25回 相続税・贈与税

相続税・贈与税の計算構造、財産評価について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

第26回? 第28回 消費税

消費税の仕組みについて高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

第29回、第30回 地方税

事業税、固定資産税、地方消費税について高度な専門知識を修得し、自らの意見を述べるようになる。

事前学習として、講義の内容を予習する(1時間)。事後学習として、講義の内容を復習すること(1時間)。筆記試験100%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特殊研究

平井 健之

< 授業の方法 >

講義と演習

< 授業の目的 >

この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つこと目指している。具体的には、政府の財政赤字と財政運営をめぐる実証分析(財政の持続可能性、政府の収入と支出の因果関係など)に関する研究を行うこととする。

< 到達目標 >

政府の財政運営に関する実証分析に必要な統計的な手法(時系列分析・パネル分析の手法)について身に付けることができる。

研究テーマに関する高度な専門知識を修得し、政府の財政運営に関する理論的・実証的な分析を通して分析結果を導き、財政運営のあり方について政策的な提言を行うことができる。

< 授業のキーワード >

財政の持続可能性、因果関係、時系列分析、パネル分析

< 授業の進め方 >

受講生の報告を中心に授業を進める。

< 履修するにあたって >

受講者は毎時間、報告の準備が必要である。

受講に当たっては統計学や計量経済学の基礎的な知識の修得を前提とする。

< 提出課題など >

第1回・第2回

< 成績評価方法・基準 >

研究テーマの設定

< テキスト >

政府の財政運営に関する研究テーマを設定する。

< 参考図書 >

第3回・第4回

< 授業計画 >

第5回・第6回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読
研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第7回・第8回 時系列分析・パネル分析に関する分析方法の学習

時系列分析またはパネル分析の内容を扱った計量経済学のテキストを購読することで、実証分析に必要な統計的な分析手法を習得する。

第9回・第10回 時系列分析・パネル分析に関する分析方法の学習

時系列分析またはパネル分析の内容を扱った計量経済学のテキストを購読することで、実証分析に必要な統計的な分析手法を習得する。

第11回・第12回 時系列分析・パネル分析に関する分析方法の学習

時系列分析またはパネル分析の内容を扱った計量経済学のテキストを購読することで、実証分析に必要な統計的な分析手法を習得する。

第13回・第14回 時系列分析・パネル分析に関する分析方法の学習

時系列分析またはパネル分析の内容を扱った計量経済学のテキストを購読することで、実証分析に必要な統計的な分析手法を習得する。

第15回・第16回 先行研究に関するサーベイ
研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第17回・第18回 先行研究に関するサーベイ
研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第19回・第20回 先行研究に関するサーベイ
研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第21回・第22回 先行研究に関するサーベイ
研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第23回・第24回 先行研究に関するサーベイ
研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第25回・第26回 日本の財政データを用いた実証分析
研究テーマについて、先行研究の分析方法を踏襲して、日本の財政データを用いた実証分析を行い、その分析結

果について検討する。

第27回・第28回 日本の財政データを用いた実証分析研究テーマについて、先行研究の分析方法を踏襲して、日本の財政データを用いた実証分析を行い、その分析結果について検討する。

第29回・第30回 日本の財政データを用いた実証分析研究テーマについて、先行研究の分析方法を踏襲して、日本の財政データを用いた実証分析を行い、その分析結果について検討する。

毎回の授業に対して、予習と復習にそれぞれ5時間以上は必要である。

授業での報告以外にレポートの提出を求める。

毎時間の発表内容とレポートによって評価する。授業中に適宜、指示する。

授業中に適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特殊講義

渡部 尚史

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

この科目は経済学研究科のDPが示す関心・意欲「修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている」を修得することを目指す。予算制度、公共支出、国債・地方債、国税・地方税について高度な専門知識を修得することを目的とする。

< 到達目標 >

財政に関する専門知識を基に、財政に関する専門論文の内容が理解できるようになる。

< 授業のキーワード >

予算、国税、地方税、国債、地方債

< 授業の進め方 >

講義を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回、第2回

< 成績評価方法・基準 >

国の予算制度

< テキスト >

国の予算制度（財政法等）に関する専門知識を修得し、専門論文の内容が理解できるようになる。

< 参考図書 >

第3回、第4回

< 授業計画 >

第5回、第6回 国の歳入・歳出

国の歳入・歳出について専門知識を修得し、専門論文の内容が理解できるようになる。

第7回、第8回 地方の歳入・歳出

地方の歳入・歳出に関する専門知識を修得し、地方公共団体の財政分析ができるようになる。

第9回、第10回 国債・地方債

国債・地方債制度、国債・地方債の発行状況に関する専門知識を修得し、専門論文の内容が理解できるようになる。

第11回 租税の基礎理論

租税根拠論と負担配分論、租税の目的、租税負担率と国民負担率に関する専門知識を修得し、専門論文の内容が理解できるようになる。

第12回 各種所得の内容（1）

利子所得・配当所得の内容と範囲に関する専門知識を修得し、裁判例を分析できるようになる。

第13回 各種所得の内容（2）

事業所得・給与所得・退職所得の内容と範囲に関する専門知識を修得し、裁判例を分析できるようになる。

第14回 各種所得の内容（3）

不動産所得・譲渡所得の内容と範囲に関する専門知識を修得し、裁判例を分析できるようになる。

第15回 各種所得の内容（4）

一時所得・雑所得の内容と範囲に関する専門知識を修得し、裁判例を分析できるようになる。

第16回、第17回 所得控除の内容

消費税における課税取引、仕入税額控除などに関する専門知識を修得し、専門論文の内容が理解できるようになる。

第18回 収入金額と必要経費

収入金額と必要経費に関する専門知識を修得し、専門論文の内容が理解できるようになる。

第19回 法人税における益金の額（1）

益金に算入すべき金額（資産の販売等の収益の額、資産の無償譲渡による収益の額、資産の無償譲受けによる収益の額）について理解する。

第20回 法人税における益金の額（2）

受取配当等、資産の評価益、受贈益の取扱いを理解する。

第21回 法人税における損金の額（1）

棚卸資産の売上原価の計算、減価償却資産の償却額の計算を理解する。

第22回 法人税における損金の額（2）

役員等の給与、交際費等の取扱いを理解する。

第23回 法人税における損金の額（3）

寄附金、繰越欠損金、引当金の取扱いを理解する。

第24回 相続税・贈与税（1）

相続税の課税財産、相続税の課税価格の計算を理解する。

第25回 相続税・贈与税（2）

財産評価の原則、法定評価、財産評価基本通達を理解する。

第26回 消費税（1）

課税の対象、課税対象となる国内取引・輸入取引、非課税と免税を理解する。

第27回 消費税（2）

課税標準と税率、仕入税額控除を理解する。

第28回 消費税（3）

納税義務者、小規模事業者の納税義務の免除、簡易課税制度を理解する。

第29回 地方税（1）

住民税・事業税制度（納税義務者、課税標準、税率）を理解する。

第30回 地方税（2）

固定資産税・地方消費税制度（納税義務者、課税標準、税率）を理解する。

事前学習として、講義の内容を予習すること（1時間）。

事後学習として、講義の内容を復習すること（1時間）。

講義内容に関する定期試験100%で評価する。 小村武

『予算と財政法（五訂版）』新日本法規、2016年。

金子宏『租税法（第23版）』弘文堂、2019年。

2022年度 前期

4.0単位

財政学特殊講義

平井 健之

< 授業の方法 >

講義と演習

< 授業の目的 >

【授業の概要】

わが国を含めて世界のほとんどの国の経済は、基本的には市場経済の仕組みにしたがっている。このような経済において、公共部門(政府)の果たす役割は今日ではさまざまな分野に及んでいる。この授業では、ミクロ経済学とマクロ経済学の理論を基礎にして、市場経済における公共部門(政府)の経済活動を理論的・実証的に分析し、公共部門(政府)のあり方について研究する。

そこで、財政・公共経済に関する経済学のテキストを選んで受講者の発表に基づき議論を行うとともに、受講者の理解が得られるように適宜、テキストの内容について解説を行う。

【授業の目的】

この授業の目的は、政府の経済活動を理論的に分析する能力を身に付けるとともに、市場経済において政府の果たすべき役割やさまざまな課題に対する政府の対応とその問題点について理解を深めることである。この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学に関する高度な専門知識を有すること、さらに、経済学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することを目指している。

< 到達目標 >

財政をめぐる政府の経済活動を経済学の理論に基づい

て分析し、評価することができる。

経済社会のさまざまな課題に対処するために、政府は、「何を行うか」、「どのように行えばよいか」について考えることができる。

< 授業のキーワード >

市場の失敗、公共財、消費税、所得課税、法人課税、自然独占、地方分権、財政赤字、公共投資、政府の失敗

< 授業の進め方 >

受講生の研究テーマや予備知識・理解度に応じてテキストを選択し、輪読形式で受講生の発表と討論によって授業を進める。

< 履修するにあたって >

受講生はあらかじめ指定されたテキストの内容を予習することで報告の準備を行うこととする。

< 提出課題など >

第1回・第2回

< 成績評価方法・基準 >

経済分析の基本ツール

< テキスト >

ミクロ経済学の基礎事項を学習する。

余剰の概念を学習する。

< 参考図書 >

第3回・第4回

< 授業計画 >

第5回・第6回 公共財の理論

公共財の自発的供給について学習する。

公共財の最適供給を実現するための供給方法を検討する。

第7回・第8回 公共財の理論

公共財の自発的供給について学習する。

公共財の最適供給を実現するための供給方法を検討する。

第9回・第10回 消費に対する課税

消費税の制度について学習する。

消費課税の転嫁と帰着について分析する。

第11回・第12回 消費に対する課税

消費課税の超過負担について理解する。

一般均衡の枠組みで、望ましい消費課税のあり方を検討する。

第13回・第14回 所得に対する課税

所得税の制度について学習する。

労働所得税の経済効果を分析する。

第15回・第16回 所得に対する課税

望ましい労働所得課税のあり方を検討する。

利子所得課税の経済効果について分析する。

第17回・第18回 法人に対する課税

法人税の制度について学習する。

法人税が企業の投資や資金調達に及ぼす影響を分析する。

第19回・第20回 自然独占と規制

自然独占産業における政府による規制の根拠を理解する。

自然独占産業における規制のあり方について検討する。

第21回・第22回 地方財政と政府間財政関係

国と地方の財政関係について学習する。

地方税の制度について学習する。

第23回・第24回 地方財政と政府間財政関係

地方公共財の理論を学習する。

望ましい政府間の補助金政策のあり方について検討する。

第25回・第26回 財政赤字の経済分析

財政赤字の負担をめぐる理論について学習する。

財政赤字の持続可能性について分析する。

第27回・第28回 公共投資

公共投資の経済効果について学習する。

最適な社会資本の供給のあり方について検討する。

公共投資の費用便益分析について学習する。

第29回・第30回 政府の失敗

政治過程における政府の意思決定のあり方を経済学的に分析する。

政府の失敗について理解する。

毎回、報告のためにテキストの内容を予習するとともに、授業の内容は毎回連続しているため、授業内容の理解を深めるために、授業時間後の復習が求められる。予習と復習にそれぞれ5時間以上は必要である。

授業内容に関するレポートの提出。

授業での報告・討論の状況とレポートにより評価する。

未定。受講生と相談してテキストを決定する。

土居丈朗 著『入門財政学 第2版』(日本評論社)、2021年

佐々木伯朗 編著『財政学 制度と組織を学ぶ』(有斐閣)、2019年

畑農鋭矢・林正義・吉田浩 著『財政学をつかむ 新版』(有斐閣)、2015年

西村幸浩・宮崎智視 著『財政のエッセンス』(有斐閣)、2015年

土居丈朗 著『入門公共経済学 第2版』(日本評論社)、2018年

小川光・西森晃 著『公共経済学 第2版』(中央経済社)、2022年

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特別演習 (1年次)

渡部 尚史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は経済学研究科のDPが示す「高度な専門知識

を修得し、独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」ことを目指す。予算制度、公共支出、国際・地方債、国税、地方税について、高度な専門知識を修得することを目的とする。

< 到達目標 >

専門論文の内容が理解でき、博士論文のテーマを選ぶことができるようになる。

< 授業のキーワード >

租税

< 授業の進め方 >

受講生の報告を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回、第2回

< 成績評価方法・基準 >

租税の理念

< テキスト >

課税の基礎理念、租税原則に関する専門論文を読み、課税の基本理念、租税原則を理解する。

< 参考図書 >

第3回～第5回

< 授業計画 >

第6回、第7回 所得税における所得概念

所得概念に関する専門論文を読み、所得概念に関する議論を理解する。

第8回～第11回 所得税における所得区分

各種所得に関する専門論文を読み、所得区分に関する議論を理解する。

第12回、第13回 所得税における所得控除・税額控除

所得控除・税額控除に関する専門論文を読み、所得控除・税額控除に関する議論を理解する。

第14回、第15回 法人税における益金

益金に関する専門論文を読み、益金に関する議論を理解する。

第16回、第17回 法人税における損金(1)

損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第18回、第19回 法人税における損金(2)

損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第20回 同族会社

同族会社の課税問題に関する専門論文を読み、同族会社の課税問題に関する議論を理解する。

第21回 国際課税

国際課税に関する専門論文を読み、国際課税に関する議論を理解する。

第22回、第23回 相続税、贈与税

相続税・贈与税に関する専門論文を読み、相続税・贈与税の議論を理解する。

第24回～第26回 消費税

消費税に関する専門論文を読み、消費税に関する議論を

理解する。

第26回～第28回 地方税

事業税、固定資産税に関する専門論文を読み、事業税、固定資産税に関する議論を理解する。

事前学習として、専門論文を読み、報告の準備を行う（2時間）。

報告内容50%、討論内容50%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特別演習（1年次）

平井 健之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

【授業の概要】

受講者の研究計画に基づき、博士論文の完成に向けて論文の指導を行う。

【授業の目的】

受講者の研究テーマに基づき、その研究の成果を最終的に博士論文として完成させることを目的とする。この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つこと目指している。

< 到達目標 >

財政、公共経済の分野において、より高度な専門的な知識と分析能力を身につけ、独創的な研究を行い、その成果を論文として発表することができる。

研究テーマに関する博士論文を最終年次において完成させることができる。

< 授業の進め方 >

研究テーマに基づいて文献を選択し、輪読形式で受講生の発表と討論によって授業を進める。

受講者は、定期的に自らの研究成果を論文として纏め発表する。

< 履修するにあたって >

博士論文の作成に向けての研究を受講者自身で計画的に進めること。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

受講者の研究テーマを確認し、今後の授業の進め方について説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第4回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第5回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第6回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第7回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第8回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第9回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第10回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第11回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第12回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第13回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第14回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第15回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第16回 研究報告

受講生が自らの研究内容について報告する。

第17回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第18回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第19回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第20回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第21回 研究報告
受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第22回 文献の講読
研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第23回 文献の講読
研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第24回 文献の講読
研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第25回 文献の講読
研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第26回 研究報告
受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第27回 文献の講読
研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第28回 文献の講読
研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第29回 文献の講読
研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第30回 研究報告
受講生が自らの研究内容について報告する。
学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には10時間以上が必要となる。
研究の成果を論文として発表することを求める。
授業での報告・討論の状況と発表する論文（レポート）により評価する。 未定。適宜、授業で使用する文献を指示する。
授業中に適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特別演習（2年次）

渡部 尚史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は経済学研究科のDPが示す「高度な専門知識を修得し、独創的な研究を行い、社会の発展に貢献する能力を持つ」ことを目指す。予算制度、公共支出、国際・地方債、国税、地方税について、高度な専門知識を修得することを目的とする。

< 到達目標 >

専門論文の内容が理解でき、博士論文のテーマを選ぶこ

とができるようになる。

< 授業のキーワード >

租税

< 授業の進め方 >

受講生の報告を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回、第2回

< 成績評価方法・基準 >

租税の理念

< テキスト >

課税の基礎理念、租税原則に関する専門論文を読み、課税の基本理念、租税原則を理解する。

< 参考図書 >

第3回～第5回

< 授業計画 >

第6回、第7回 所得税における所得概念

所得概念に関する専門論文を読み、所得概念に関する議論を理解する。

第8回～第11回 所得税における所得区分

各種所得に関する専門論文を読み、所得区分に関する議論を理解する。

第12回、第13回 所得税における所得控除・税額控除

所得控除・税額控除に関する専門論文を読み、所得控除・税額控除に関する議論を理解する。

第14回、第15回 法人税における益金

益金に関する専門論文を読み、益金に関する議論を理解する。

第16回、第17回 法人税における損金（1）

損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第18回、第19回 法人税における損金（2）

損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第20回 同族会社

同族会社の課税問題に関する専門論文を読み、同族会社の課税問題に関する議論を理解する。

第21回 国際課税

国際課税に関する専門論文を読み、国際課税に関する議論を理解する。

第22回、第23回 相続税、贈与税

相続税・贈与税に関する専門論文を読み、相続税・贈与税の議論を理解する。

第24回～第26回 消費税

消費税に関する専門論文を読み、消費税に関する議論を理解する。

第26回～第28回 地方税

事業税、固定資産税に関する専門論文を読み、事業税、固定資産税に関する議論を理解する。

事前学習として、専門論文を読み、報告の準備を行う（2時間）。

報告内容50%、討論内容50%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特別演習（2年次）

平井 健之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

【授業の概要】

受講者の研究計画に基づき、博士論文の完成に向けて論文の指導を行う。

【授業の目的】

受講者の研究テーマに基づき、その研究の成果を最終的に博士論文として完成させることを目的とする。この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つこと目指している。

< 到達目標 >

財政、公共経済の分野において、より高度な専門的な知識と分析能力を身につけ、独創的な研究を行い、その成果を論文として発表することができる。

研究テーマに関する博士論文を最終年次において完成させることができる。

< 授業の進め方 >

研究テーマに基づいて文献を選択し、輪読形式で受講生の発表と討論によって授業を進める。

受講者は、定期的に自らの研究成果を論文として纏め発表する。

< 履修するにあたって >

博士論文の作成に向けての研究を受講者自身で計画的に進めること。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

受講者の研究の進捗状況を確認し、今後の授業の進め方について説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第4回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第5回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第6回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第7回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第8回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第9回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第10回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第11回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第12回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第13回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第14回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第15回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第16回 研究報告

受講生が自らの研究内容について報告する。

第17回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第18回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第19回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第20回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第21回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第22回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第23回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第24回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第25回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第26回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第27回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第28回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第29回 文献の講読

研究テーマに関する文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第30回 研究報告

受講生が自らの研究内容について報告する。

学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には10時間以上が必要となる。

研究の成果を論文として発表することを求める。

授業での報告・討論の状況と発表する論文（レポート）により評価する。 未定。適宜、授業で使用する文献を指示する。

授業中に適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財政学特別演習（3年次）

渡部 尚史

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この科目は経済学研究科のDPが示す「高度な専門知識を修得し、独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」ことを目指す。予算制度、公共支出、国際・地方債、国税、地方税について、高度な専門知識を修得することを目的とする。

< 到達目標 >

専門論文の内容が理解でき、博士論文のテーマを選ぶことができるようになる。

< 授業のキーワード >

租税

< 授業の進め方 >

受講生の報告を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回、第2回

< 成績評価方法・基準 >

租税の理念

< テキスト >

課税の基礎理念、租税原則に関する専門論文を読み、課税の基本理念、租税原則を理解する。

< 参考図書 >

第3回～第5回

< 授業計画 >

第6回、第7回 所得税における所得概念

所得概念に関する専門論文を読み、所得概念に関する議論を理解する。

第8回～第11回 所得税における所得区分

各種所得に関する専門論文を読み、所得区分に関する議論を理解する。

第12回、第13回 所得税における所得控除・税額控除

所得控除・税額控除に関する専門論文を読み、所得控除・税額控除に関する議論を理解する。

第14回、第15回 法人税における益金

益金に関する専門論文を読み、益金に関する議論を理解する。

第16回、第17回 法人税における損金（1）

損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第18回、第19回 法人税における損金（2）

損金に関する専門論文を読み、損金に関する議論を理解する。

第20回 同族会社

同族会社の課税問題に関する専門論文を読み、同族会社の課税問題に関する議論を理解する。

第21回 国際課税

国際課税に関する専門論文を読み、国際課税に関する議論を理解する。

第22回、第23回 相続税、贈与税

相続税・贈与税に関する専門論文を読み、相続税・贈与税の議論を理解する。

第24回～第26回 消費税

消費税に関する専門論文を読み、消費税に関する議論を理解する。

第26回～第28回 地方税

事業税、固定資産税に関する専門論文を読み、事業税、固定資産税に関する議論を理解する。

事前学習として、専門論文を読み、報告の準備を行う（2時間）。

報告内容50%、討論内容50%で評価する。

2022年度 前期～後期
4.0単位
財政学特別演習（3年次）
平井 健之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

【授業の概要】

受講者の研究計画に基づき、博士論文の完成に向けて論文の指導を行う。

【授業の目的】

受講者の研究テーマに基づき、その研究の成果を最終的に博士論文として完成させることを目的とする。この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つこと目指している。

< 到達目標 >

財政、公共経済の分野において、より高度な専門的な知識と分析能力を身につけ、独創的な研究を行い、その成果を論文として発表することができる。

研究テーマに関する博士論文を完成させることができる。

< 授業の進め方 >

研究テーマに基づいて文献を選択し、輪読形式で受講生の発表と討論によって授業を進める。

受講者は、定期的に自らの研究成果を論文として纏め発表する。

< 履修するにあたって >

博士論文の作成に向けての研究を受講者自身で計画的に進めること。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

博士論文執筆要領の確認。

今後の作業の進め方に関する指導など。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第4回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第5回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第6回 研究報告

受講生が自らの研究内容について報告する。

第7回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第8回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第9回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第10回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第11回 研究報告

受講生が自らの研究内容について報告する。

第12回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第13回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第14回 研究報告

受講生が自らの研究の進捗状況について報告する。

第15回 研究報告

受講生が自らの研究内容について報告する。

第16回 博士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第17回 博士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第18回 博士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第19回 博士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第20回 博士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第21回 博士論文の原稿の報告

受講者に各章の原稿を報告してもらい、論文の完成に向けた指導を行う。

第22回 博士論文全体の報告

受講者は論文をひとつおりに完成させ、その原稿を報告する。

第23回 博士論文全体の報告

受講者は論文をひとつおりに完成させ、その原稿を報告する。

第24回 博士論文全体の報告

受講者は論文をひとつおりに完成させ、その原稿を報告する。

第25回 博士論文全体の確認

論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第26回 博士論文全体の確認

論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第27回 博士論文全体の確認

論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第28回 博士論文全体の確認

論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第29回 博士論文全体の確認

論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

第30回 博士論文全体の確認

論文の不備な点を確認して修正し、完成原稿を作成する。

学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には10時間以上が必要となる。

研究の成果を論文として発表することを求める。

最終的に提出期限内に博士論文を完成させて提出すること。

博士論文の内容のみで評価する。

なお、論文において、他の文献資料からの剽窃、盗用があった場合には単位を認定しない。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財務会計論演習（1年次）

宮本 幸平

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

財務会計演習では、修士の学位を得るにふさわしい論文を作成するために、テーマに関する文献の収集方法、論文の書き方、作成スケジュールについて習得する。

< 到達目標 >

指導教員から専門性の高い助言を受け、それらを各人が理解し、知識のブラッシュアップを行うことを通じて、学術的な思考にくわえて、問題解決能力を高めることを目標としている。

< 授業のキーワード >

知識習得、論文執筆の作法、オリジナリティー。

< 授業の進め方 >

指導教員による個別指導、研究成果の報告。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

修士論文の本質と作成に関する注意事項、作成スケジュールの説明。

< 参考図書 >

第2回～28回

< 授業計画 >

第29回～30回 研究成果のまとめ

文献研究と指導教員の指導を得て、その成果をレポートにまとめ、プレゼンテーションを行う。

各自が設定した論文テーマについて調査・資料収集・草

稿作成などを行う。

1年間の調査・研究の成果をまとめたレポートを提出する。

ゼミへの出席30%、提出レポート40%、最終のプレゼンテーション30%で評価する。 必要に応じて選定・紹介する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財務会計論演習（2年次）

宮本 幸平

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

財務会計演習（2年次）では、1年次に収集し研究した文献から得られた知識をベースにして、修士論文を作成する。

< 到達目標 >

指導教員から専門性の高い助言を受け、それらを各人が理解し、知識のブラッシュアップを行うことを通じて、学術的な思考にくわえて、問題解決能力および研究能力を高めることを目標としている。

< 授業のキーワード >

知識習得、論文執筆の作法、オリジナリティー。

< 授業の進め方 >

指導教員による個別指導、研究成果の報告。および修士論文のチェック。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

テーマの決定、論文作成スケジュール、作成に関する注意事項の説明。

< 参考図書 >

第2回～28回

< 授業計画 >

第29回～30回 論文の完成

指導教員から受けたチェックを勘案し、最終成果として修士論文を完成させる。指導教員の最終確認を得て、所定提出期間に論文提出要項にしたがった手順で、論文を提出する。

各自が設定した論文テーマについて調査・資料収集・草稿作成などを行う。

ゼミへの出席30%、提出論文70%で評価する。 必要に応じて選定・紹介する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財務会計論特殊研究

宮本 幸平

< 授業の方法 >

講義とともに課題を設定し、報告をしてもらう。

< 授業の目的 >

主題：概念フレームワークおよび企業会計基準各論の理解。

目標：FASBを中心とする企業会計の概念フレームワーク、IFRSで示された会計基準のの概要、およびわが国の会計基準（企業会計原則に基づく）についての理解を目標とする。また、博士論文作成のオリエンテーションにより、内容梗概と研究計画確定を目標とする。

ホームページ

<http://www13.plala.or.jp/kohei/>

< 到達目標 >

・財務会計の各論（資産・負債・純資産・利益・費用の各論）につき、含まれる理論を理解できる。

・国際会計基準および国際財務報告基準の近年の規定動向を理解できる。

< 授業の進め方 >

・講義を主たる方法とする。

・規定における理論の内容につき、質疑応答を行う。

・適宜、論文作成の助言を行う。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

オリエンテーション

< テキスト >

年間の講義内容について説明する。

< 参考図書 >

第2回～第4回

< 授業計画 >

第5

回～第7回 IASBの概念フレームワーク

国際会計基準（IAS）および国際財務報告基準（IFRS）の概要と、これまでのわが国の会計基準（企業会計原則に基づく）の相違点について説明する。

第8回～第10回 貨幣性資産

有価証券の期末評価、キャッシュフロー計算書、売上債権、棚卸資産について、主要論点を中心に説明する。

第11回～第13回 有形固定資産

有形固定資産の原価決定、減価償却、減損について、制度・理論を中心に説明する。

第14回～第15回 無形固定資産および繰延資産

無形固定資産、ソフトウェア制作費、のれんなどの無形固定資産、および繰延資産について説明する。

第15回～第16回 引当金

評価性引当金および負債性引当金について、網羅的に説明する。

第17回 資産除去債務

資産除去債務の理論および計算処理について説明する。

第18回～第20回

純資産

純資産の部の構成、株主資本、留保利益について、制度および理論の説明を行う。

第21回～第23回 企業結合・連結会計

パーチェス法、貸借対照表の連結および損益計算書の連結について、理論の説明を行う。

第24回～第26回 複式簿記論

複式計算構造の理論について説明する。

第27回～第29回 博士論文作成オリエンテーション

博士論文の作成につき、オリエンテーション（導入説明）を行う。

第30回 博士論文梗概報告

第27回～第29回の論文に関する説明に基づき、論文の内容梗概と研究計画を受講者に報告してもらう。

予め配布する資料につき、1時間の予習（目通し）をすること。

講義内容をまとめたレポートを、前期と後期に1回提出。前期レポート50%、後期レポート50%で採点する。教材をこちらで配布する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財務会計論特殊講義

宮本 幸平

< 授業の方法 >

講義を中心とし、その内容について課題を設定し、報告をしてもらう。

< 授業の目的 >

主題：概念フレームワークおよび企業会計基準各論の理解。

目標：FASBを中心とする企業会計の概念フレームワーク、IFRSで示された会計基準のの概要、およびわが国の会計基準（企業会計原則に基づく）についての理解を目標とする。また、修士論文作成のオリエンテーションにより、内容梗概と研究計画確定を目標とする。

< 到達目標 >

・財務会計の各論（資産・負債・純資産・利益・費用の各論）につき、含まれる理論を理解できる。

・国際会計基準および国際財務報告基準の近年の規定動向を理解できる。

< 授業の進め方 >

- ・ 講義を主たる方法とする。
- ・ 規定における理論の内容につき、質疑応答を行う。
- ・ 適宜、論文作成の助言を行う。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

オリエンテーション

< テキスト >

年間の講義内容について説明する。

< 参考図書 >

第2回～第4回

< 授業計画 >

第5

回～第7回 IASBの概念フレームワーク

国際会計基準（IAS）および国際財務報告基準（IFRS）の概要と、これまでのわが国の会計基準（企業会計原則に基づく）の相違点について説明する。

第8回～第10回 貨幣性資産

有価証券の期末評価、キャッシュフロー計算書、売上債権、棚卸資産について、主要論点を中心に説明する。

第11回～第13回 有形固定資産

有形固定資産の原価決定、減価償却、減損について、制度・理論を中心に説明する。

第14回～第15回 無形固定資産および繰延資産

無形固定資産、ソフトウェア制作費、のれんなどの無形固定資産、および繰延資産について説明する。

第15回～第16回 引当金

評価性引当金および負債性引当金について、網羅的に説明する。

第17回 資産除去債務

資産除去債務の理論および計算処理について説明する。

第18回～第20回

純資産

純資産の部の構成、株主資本、留保利益について、制度および理論の説明を行う。

第21回～第23回 企業結合・連結会計

パーチェス法、貸借対照表の連結および損益計算書の連結について、理論の説明を行う。

第24回～第26回 複式簿記論

複式計算構造の理論について説明する。

第27回～第29回 修士論文作成オリエンテーション

修士論文の作成につき、オリエンテーション（導入説明）を行う。

第30回 修士論文梗概報告

第27回～第29回の修士論文に関する説明に基づき、修士論文の内容梗概と研究計画を受講者に報告してもらう。

予め配布する資料につき、1時間の予習（目通し）をすること。

講義内容をまとめたレポートを、前期と後期に1回提出。前期レポート50%、後期レポート50%で採点する。教材をこちらで配布する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財務会計論特別演習（1年次）

宮本 幸平

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

財務会計論特別演習では、博士の学位を得るにふさわしい論文を作成するために、テーマに関する文献の収集方法、論文の書き方、作成スケジュールについて習得する。

< 到達目標 >

指導教員から専門性の高い助言を受け、それらを各人が理解し、知識のブラッシュアップを行うことを通じて、学術的な思考にくわえて、問題解決能力を高めることを目標としている。

< 授業のキーワード >

知識習得、論文執筆の作法、オリジナリティー。

< 授業の進め方 >

指導教員による個別指導、研究成果の報告。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

博士論文の本質と作成に関する注意事項、作成スケジュールの説明。

< 参考図書 >

第2回～28回

< 授業計画 >

第29回～30回 研究成果のまとめ

文献研究と指導教員の指導を得て、その成果をレポートにまとめ、プレゼンテーションを行う。

各自が設定した論文テーマについて調査・資料収集・草稿作成などを行う。

1年間の調査・研究の成果をまとめたレポートを提出する。

ゼミへの出席30%、提出レポート40%、最終のプレゼンテーション30%で評価する。必要に応じて選定・紹介する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財務会計論特別演習（2年次）

宮本 幸平

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

財務会計論特別演習では、博士の学位を得るにふさわしい論文を作成するために、テーマに関する文献の収集方法、論文の書き方、作成スケジュールについて習得する。

< 到達目標 >

指導教員から専門性の高い助言を受け、それらを各人が理解し、知識のブラッシュアップを行うことを通じて、学術的な思考にくわえて、問題解決能力を高めることを目標としている。

< 授業のキーワード >

知識習得、論文執筆の作法、オリジナリティー。

< 授業の進め方 >

指導教員による個別指導、研究成果の報告。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

修士論文の本質と作成に関する注意事項、作成スケジュールの説明。

< 参考図書 >

第2回～28回

< 授業計画 >

第29回～30回 研究成果のまとめ

文献研究と指導教員の指導を得て、その成果をレポートにまとめ、プレゼンテーションを行う。

各自が設定した論文テーマについて調査・資料収集・草稿作成などを行う。

1年間の調査・研究の成果をまとめたレポートを提出する。

ゼミへの出席30%、提出レポート40%、最終のプレゼンテーション30%で評価する。必要に応じて選定・紹介する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

財務会計論特別演習（3年次）

宮本 幸平

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

財務会計論特別演習（3年次）では、1年次・2年次を通じて収集し研究した文献から得られた知識をベースにして、博士論文を作成する。

< 到達目標 >

指導教員から専門性の高い助言を受け、それらを各人が理解し、知識のブラッシュアップを行うことを通じて、学術的な思考にくわえて、問題解決能力および研究能力を高めることを目標としている。

< 授業のキーワード >

論文執筆の作法、オリジナリティー。

< 授業の進め方 >

指導教員による個別指導、研究成果の報告。および修士論文のチェック。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

テーマの決定、論文作成スケジュール、作成に関する注意事項の説明。

< 参考図書 >

第2回～28回

< 授業計画 >

第29回～30回 論文の完成

指導教員から受けたチェックを勘案し、最終成果として博士論文を完成させる。指導教員の最終確認を得て、所定提出期間に論文提出要項にしたがった手順で、論文を提出する。

各自が設定した論文テーマについて調査・資料収集・草稿作成などを行う。

ゼミへの出席30%、提出論文70%で評価する。必要に応じて選定・紹介する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

産業組織論特殊研究

常廣 泰貴

2022年度 前期～後期

4.0単位

産業組織論演習（1年次）

常廣 泰貴

2022年度 前期～後期

4.0単位

産業組織論演習（2年次）

常廣 泰貴

2022年度 後期

4.0単位

産業組織論特殊講義

常廣 泰貴

2022年度 前期～後期

4.0単位

産業組織論特別演習（1年次）

常廣 泰貴

2022年度 前期～後期

4.0単位

産業組織論特別演習（2年次）

常廣 泰貴

2022年度 前期～後期

4.0単位

産業組織論特別演習（3年次）

常廣 泰貴

2022年度 前期～後期

4.0単位

システム分析論演習（1年次）

今野 勤

<授業の方法>

講義、演習

<授業の目的>

企業をひとつのシステムと見たときに、どのように分析し、問題点を明らかにし、そのシステムをどのように再構築するか、その方法論を習得する。システム分析論特殊講義で学んだ内容を、演習を通じて理解する。

なお、経済学研究科のディプロマポリシー

1.知識・理解

経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。

2.思考・判断

経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。

3.関心・意欲

修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。

4.技能・表現

修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる。

いずれにも対応している。

<到達目標>

シックスシグマの考え方、手法を理解することによって、企業におけるプロジェクトによる問題解決ができるようになる。

<授業のキーワード>

シックスシグマ DMAIC

<授業の進め方>

オリジナルパワーポイント資料による講義と、EXCELによる演習問題を解くことによって、プロジェクトによる問題解決の疑似体験する。

<履修するにあたって>

経営学部における基礎経営統計学を履修しているか、同等の知識があることが望ましい。

<提出課題など>

第1回～第5回

<成績評価方法・基準>

研究対象の設定

<テキスト>

DMAIC概要とDMAICストーリーに則った研究対象の設定と研究計画の作成

<参考図書>

第6回～第10回

<授業計画>

第11回～第15回 研究対象企業の問題点を分析する
研究対象企業の問題点には、自分でコントロールできるものとそうでないものがある。これらを分類・整理する。

第16回～第20回 自社のビジネスモデルを分析する
現状を認識するために、自社のビジネスモデルを分析する

第21回～25回 他社のビジネスモデルとの比較
問題を解決するために、他社のビジネスモデルと自社のビジネスモデルを比較し、解決策を検討する

第26回～第30回 新しいビジネスモデルの構築
新しいビジネスモデルを構築する

授業で出題される課題を自分で解くこと。目安の時間は、

1時間。

システム分析の課題を2回提出してもらう

出席回数及び受講態度50%、課題提出50%によって評価する。 オリジナルパワーポイント資料 オリジナル演習データ

2022年度 前期～後期

4.0単位

システム分析論演習（2年次）

今野 勤

<授業の方法>

講義、演習

<授業の目的>

企業をひとつのシステムと見たときに、どのように分析し、問題点を明らかにし、そのシステムをどのように再構築するか、その方法論を習得する。システム分析論特殊講義で学んだ内容を、演習を通じて理解する。

なお、経済学研究科のディプロマポリシー

1.知識・理解

経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。

2.思考・判断

経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。

3.関心・意欲

修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。

4.技能・表現

修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる。

いずれにも対応している。

<到達目標>

シックスシグマの考え方、手法を理解することによって、企業におけるプロジェクトによる問題解決ができるようになる。

<授業のキーワード>

シックスシグマ DMAIC

<授業の進め方>

オリジナルパワーポイント資料による講義と、EXCELによる演習問題を解くことによって、プロジェクトによる問題解決の疑似体験する。

<履修するにあたって>

経営学部における基礎経営統計学を履修しているか、同等の知識があることが望ましい。

<提出課題など>

第1~5回

<成績評価方法・基準>

新しいビジネスモデルの比較

<テキスト>

新しいビジネスモデルと類似ビジネスモデルの比較
ファイブフォース分析 SWOT分析

<参考図書>

第6~10回

<授業計画>

第11~15回 新しいビジネスモデルの修正

新しいビジネスモデルの問題点を対策する

第16~20回 新しいビジネスモデルの模擬実験

様々な経済環境を想定し、ビジネスモデルの頑健性をシミュレーションする

第21~25回 論文作成

これまでの研究成果を修士論文にまとめる

第26~30回 論文発表準備

論文の発表訓練と論文修正

授業で出題される課題を自分で解くこと。目安の時間は、1時間。

システム分析の課題を2回提出してもらう

出席回数及び受講態度50%、課題提出50%によって評価する。 オリジナルパワーポイント資料 オリジナル演習データ

2022年度 前期～後期

4.0単位

システム分析論特殊研究

今野 勤

<授業の方法>

講義、演習

<授業の目的>

企業をひとつのシステムと見たときに、どのように分析し、問題点を明らかにし、そのシステムをどのように再構築するか、その方法論を習得する。システム分析論特殊講義で学んだ内容を、演習を通じて理解する。

なお、経済学研究科のディプロマポリシー

1.知識・理解

経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。

2.思考・判断

経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。

3.関心・意欲

修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。

4.技能・表現

修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に

伝えることができる。

いずれにも対応している。

<到達目標>

シックスシグマ及びTQMの考え方、手法を理解することによって、企業におけるプロジェクト及び仕組みの改善による問題解決ができるようになる。

<授業のキーワード>

シックスシグマ DMAIC TQM

<授業の進め方>

オリジナルパワーポイント資料による講義と、EXCELによる演習問題及び、TQM実践事例の解説によって、新しい製造業のビジネスモデルを構築する。

<履修するにあたって>

システム分析論特殊講義を履修していることが望ましい。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

レポート

<テキスト>

レポート

機会の定義：企業における経営戦略とシックスシグマとTQM

DMAIC概要、DFSS概要、TQMとビジネスモデル

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 プロセスの文書化と分析

プロセスの文書化と分析

顧客要求の定義

日常管理の進め方

第4回 品質機能展開(QFD)

品質機能展開(QFD)

言語データ・情報整理法(親和図法) & 演習

新製品開発

第5回 言語データ・情報整理法(系統図法) & 演習

言語データ・情報整理法(系統図法) & 演習

情報収集の方法(グループインタビュー、アンケート調査法)

測定概論

第6回 測定対象の決定

測定対象の決定

因果マトリックス

測定を管理する

第7回 バラツキを把握する

バラツキを把握する

シグマパフォーマンスの算出

ヒストグラムと工程能力

第8回 測定の誤差を把握する

測定の誤差を把握する

パフォーマンスを分析する

管理図法

第9回 ANALYZE概論

ANALYZE概論

真の原因を特定する(フットマップ・因果マトリックス演習)

特性要因図

第10回 故障の木解析(原因解析としてのFTA)

故障の木解析(原因解析としてのFTA)

第11回 仮説検定・推定

仮説検定・推定

検定の考え方

計量値に関する検定推定 & 演習

計数値に関する検定推定 & 演習

第12回 分散分析(ANOVA)

分散分析(ANOVA)

変動の分解

交互作用

第13回 実験計画法

実験計画法

実験計画法とは

第14回 要因配置実験(一元、二元、多元配置実験)

要因配置実験(一元、二元、多元配置実験)

第15回 直交表実験

直交表実験

線形推定論

応答曲面法

第16回 相関・回帰分析

相関・回帰分析

第17回 重回帰分析 & 演習

重回帰分析 & 演習

重回帰分析とその応用(数量化 類)

Lasso, リッジ回帰

第18回 信頼性(ワイブル解析・累積ハザード解析)

信頼性(ワイブル解析・累積ハザード解析)

まとめと質疑

第19回 パフォーマンスの改善序論

パフォーマンスの改善序論

改善案の創出(TRIZ一部含む)

第20回 FMEA：故障影響マトリクス解析(背反防止のFMEA：演習含む)

FMEA：故障影響マトリクス解析(背反防止のFMEA：演習含む)

第21回 タグチヨット概論

タグチヨット概論

第22回 技術論、動特性のSN比とパラメータ設計

技術論、動特性のSN比とパラメータ設計

第23回 タグチヨット：静特性のSN比とパラメータ設計

タグチヨット：静特性のSN比とパラメータ設計

第24回 機能窓法

機能窓法

第25回 ワークショップ演習(グループ演習)

ワークショップ演習

動特性の解析

第26回 損失関数

損失関数

標準SN比

第27回 ソリューションの評価と選定

ソリューションの評価と選定

変更の実施

パイロット計画の策定と実施

第28回 管理図

管理図

QC工程表

第29回 標準化

標準化

第30回 問題解決ワークショップ

シックスシグマ、TQMの全体の見直し

授業で出題される課題を自分で解くこと。目安の時間は、1時間。

システム分析の課題を2回提出してもらう

出席回数及び受講態度50%、課題提出50%によって評価する。 オリジナルパワーポイント資料 オリジナル演習データ

2022年度 前期～後期

4.0単位

システム分析論特殊講義

今野 勤

<授業の方法>

講義、演習

<授業の目的>

企業をひとつのシステムと見たときに、どのように分析

し、問題点を明らかにし、そのシステムをどのように再構築するか、その方法論を習得する。システム分析論特殊講義で学んだ内容を、演習を通じて理解する。

なお、経済学研究科のディプロマポリシー

1.知識・理解

経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。

2.思考・判断

経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。

3.関心・意欲

修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。

4.技能・表現

修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる。

いずれにも対応している。

<到達目標>

シックスシグマの考え方、手法を理解することによって、企業におけるプロジェクトによる問題解決ができるようになる。

<授業のキーワード>

シックスシグマ DMAIC

<授業の進め方>

オリジナルパワーポイント資料による講義と、EXCELによる演習問題を解くことによって、プロジェクトによる問題解決の疑似体験する。

<履修するにあたって>

経営学部における基礎経営統計学を履修しているか、同等の知識があることが望ましい。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

グループ

<テキスト>

グループ

機会の定義：企業におけるシックスシグマ戦略とその可能性
DMAIC概要とDMAICストーリー
DFSS概要

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 プロセスの文書化と分析

プロセスの文書化と分析

顧客要求の定義

第4回 品質機能展開(QFD)

品質機能展開(QFD)

言語テ-タ・情報整理法(親和図法) & 演習

第5回 言語テ-タ・情報整理法(系統図法) & 演習

言語テ-タ・情報整理法(系統図法) & 演習

情報収集の方法(グループインタビュー、アンケート調査法)

測定概論

第6回 測定対象の決定

測定対象の決定

因果マトリックス

測定を管理する

第7回 バラツキを把握する

バラツキを把握する

シグマパフォーマンスの算出

第8回 測定の誤差を把握する

測定の誤差を把握する

パフォーマンスを分析する

第9回 ANALYZE概論

ANALYZE概論

真の原因を特定する(フロヒスマップ・因果マトリックス演習含む)

第10回 故障の木解析(原因解析としてのFTA)

故障の木解析(原因解析としてのFTA)

第1週復習と質疑, 重要ポイント

第11回 仮説検定・推定

仮説検定・推定

検定の考え方

計量値に関する検定推定 & 演習

計数値に関する検定推定 & 演習

第12回 分散分析(ANOVA)

分散分析(ANOVA)

変動の分解

第13回 実験計画法

実験計画法

実験計画法とは

第14回 要因配置実験(一元、二元、多元配置実験)

要因配置実験(一元、二元、多元配置実験)

第15回 直交表実験

直交表実験

第16回 相関・回帰分析

相関・回帰分析

第17回 重回帰分析 & 演習

重回帰分析 & 演習

重回帰分析とその応用(数量化 類)

第18回 信頼性(ワイブル解析・累積ハザード解析)

信頼性(ワイブル解析・累積ハザード解析)

まとめと質疑

第19回 パフォーマンスの改善序論

パフォーマンスの改善序論

改善案の創出(TRIZ一部含む)

第20回 FMEA: 故障影響モード解析(背反防止のFMEA: 演習含む)

FMEA: 故障影響モード解析(背反防止のFMEA: 演習含む)

第21回 タグチメット 概論

タグチメット 概論

第22回 技術論、動特性のSN比とパラメータ設計

技術論、動特性のSN比とパラメータ設計

第23回 タグチメット: 静特性のSN比とパラメータ設計

タグチメット: 静特性のSN比とパラメータ設計

第24回 機能窓法

機能窓法

第25回 ワークショップ演習(グループ演習)

ワークショップ演習(グループ演習)

・パラメータ設計

第26回 損失関数

損失関数

タグチメット 全体の復習

第27回 ソリューションの評価と選定

ソリューションの評価と選定

変更の実施

パイロット計画の策定と実施

第28回 管理図

管理図

QC工程表

第29回 標準化

標準化

第30回 問題解決ワークショップ

問題解決ワークショップ

授業で出題される課題を自分で解くこと。目安の時間は、1時間。

システム分析の課題を2回提出してもらう

出席回数及び受講態度50%、課題提出50%によって評価

する。 オリジナルパワーポイント資料 オリジナル

演習データ

2022年度 前期～後期

4.0単位

システム分析論特別演習（1年次）

今野 勤

< 授業の方法 >

講義、演習

< 授業の目的 >

企業をひとつのシステムと見たときに、どのように分析し、問題点を明らかにし、そのシステムをどのように再構築するか、その方法論を習得する。システム分析論特殊講義で学んだ内容を、演習を通じて理解する。

なお、経済学研究科のディプロマポリシー

1.知識・理解

経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。

2.思考・判断

経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。

3.関心・意欲

修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。

4.技能・表現

修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる。

いずれにも対応している。

< 到達目標 >

シックスシグマの考え方、手法を理解することによって、企業におけるプロジェクトによる問題解決ができるようになる。

< 授業のキーワード >

シックスシグマ DMAIC

< 授業の進め方 >

オリジナルパワーポイント資料による講義と、EXCELによる演習問題を解くことによって、プロジェクトによる問題解決の疑似体験する。

< 履修するにあたって >

経営学部における基礎経営統計学を履修しているか、同等の知識があることが望ましい。

< 提出課題など >

第1回～第5回

< 成績評価方法・基準 >

研究対象の設定

< テキスト >

DMAIC概要とDMAICストーリー、TQMに則った研究対象の設定と研究計画の作成

< 参考図書 >

第6回～第10回

< 授業計画 >

第11回～第15回 研究対象企業の問題点を分析する
研究対象企業の問題点には、自分でコントロールできるものとそうでないものがある。これらを分類・整理する。

第16回～第20回 自社のビジネスモデルを分析する
現状を認識するために、自社のビジネスモデルを分析する

第21回～25回 他社のビジネスモデルとの比較
問題を解決するために、他社のビジネスモデルと自社のビジネスモデルを比較し、解決策を検討する

第26回～第30回 新しいビジネスモデルの構築
新しいビジネスモデルを構築する

授業で出題される課題を自分で解くこと。目安の時間は、1時間。

システム分析の課題を2回提出してもらう

出席回数及び受講態度50%、課題提出50%によって評価する。 オリジナルパワーポイント資料 オリジナル演習データ

2022年度 前期～後期

4.0単位

システム分析論特別演習（2年次）

今野 勤

< 授業の方法 >

講義、演習

< 授業の目的 >

企業をひとつのシステムと見たときに、どのように分析し、問題点を明らかにし、そのシステムをどのように再構築するか、その方法論を習得する。システム分析論特殊講義で学んだ内容を、演習を通じて理解する。

なお、経済学研究科のディプロマポリシー

1.知識・理解

経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。

2.思考・判断

経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。

3.関心・意欲

修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。

4.技能・表現

修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる。

いずれにも対応している。

<到達目標>

シックスシグマの考え方、手法を理解することによって、企業におけるプロジェクトによる問題解決ができるようになる。

<授業のキーワード>

シックスシグマ DMAIC

<授業の進め方>

オリジナルパワーポイント資料による講義と、EXCELによる演習問題を解くことによって、プロジェクトによる問題解決の疑似体験する。

<履修するにあたって>

経営学部における基礎経営統計学を履修しているか、同等の知識があることが望ましい。

<提出課題など>

第1-5回

<成績評価方法・基準>

新しいビジネスモデルの比較

<テキスト>

新しいビジネスモデルと類似ビジネスモデルの比較
ファイブフォース分析 SWOT分析

<参考図書>

第6-10回

<授業計画>

第11-15回 新しいビジネスモデルの修正

新しいビジネスモデルの問題点を対策する

第16-20回 新しいビジネスモデルの模擬実験

様々な経済環境を想定し、ビジネスモデルの頑健性をシミュレーションする

第21-25回 論文作成

これまでの研究成果を論文にまとめる

第26-30回 論文発表準備

論文の発表訓練と論文修正

授業で出題される課題を自分で解くこと。目安の時間は、1時間。

システム分析の課題を2回提出してもらう

出席回数及び受講態度50%、課題提出50%によって評価する。 オリジナルパワーポイント資料 オリジナル演習データ

2022年度 前期～後期

4.0単位

システム分析論特別演習（3年次）

今野 勤

<授業の方法>

講義、演習

<授業の目的>

企業をひとつのシステムと見たときに、どのように分析し、問題点を明らかにし、そのシステムをどのように再構築するか、その方法論を習得する。システム分析論特殊講義で学んだ内容を、演習を通じて理解する。

なお、経済学研究科のディプロマポリシー

1.知識・理解

経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。

2.思考・判断

経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。

3.関心・意欲

修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。

4.技能・表現

修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる。

いずれにも対応している。

<到達目標>

シックスシグマの考え方、手法を理解することによって、企業におけるプロジェクトによる問題解決ができるようになる。

<授業のキーワード>

シックスシグマ DMAIC

<授業の進め方>

オリジナルパワーポイント資料による講義と、EXCELによる演習問題を解くことによって、プロジェクトによる問題解決の疑似体験する。

<履修するにあたって>

経営学部における基礎経営統計学を履修しているか、同等の知識があることが望ましい。

<提出課題など>

第1-5回

<成績評価方法・基準>

新しいビジネスモデルの構想をまとめる

<テキスト>

前回のビジネスモデルの問題点を整理し、新しいビジネスモデルの構想を立てる

< 参考図書 >

第6~10回

< 授業計画 >

第11~15回 新しいビジネスモデルの修正

新しいビジネスモデルの問題点を対策する

第16~20回 新しいビジネスモデルの模擬実験

様々な経済環境を想定し、ビジネスモデルの頑健性をシミュレーションする

第21~25回 論文作成

これまでの研究成果を博士論文にまとめる

第26~30回 論文発表準備

論文の発表訓練と論文修正

授業で出題される課題を自分で解くこと。目安の時間は、1時間。

システム分析の課題を2回提出してもらう

出席回数及び受講態度50%、課題提出50%によって評価する。 オリジナルパワーポイント資料 オリジナル

演習データ

2022年度 前期～後期

4.0単位

社会保障論演習 (1年次)

田宮 遊子

2022年度 前期～後期

4.0単位

社会保障論特殊研究

田宮 遊子

2022年度 前期

4.0単位

社会保障論特殊講義

田宮 遊子

2022年度 前期～後期

4.0単位

社会保障論特別演習 (1年次)

田宮 遊子

2022年度 前期～後期

4.0単位

情報管理論演習 (1年次)

林坂 弘一郎

< 授業の方法 >

「演習」

< 授業の目的 >

本演習では、情報管理特殊講義で理解した基盤技術を使って実際の情報管理システムとして構築するための技術を習得することを目的とする。

< 到達目標 >

各自のPCに開発環境を構築できる。

リレーショナルデータベースやNoSQLデータベースを使った情報管理システムを構築できる。

ネットワーク、データベースを組合せたシステムの構築ができる。

構築したシステムに情報セキュリティを確保する仕組みを導入できる。

< 授業のキーワード >

データベース、ネットワーク、システム開発

< 授業の進め方 >

学生各自が所有するPCを用いた演習を実施する

< 提出課題など >

第1回? 第3回

< 成績評価方法・基準 >

開発環境の構築

< テキスト >

各自のPCに仮想OSを導入するとともに、様々な開発環境を構築する

< 参考図書 >

第4回? 第6回

< 授業計画 >

第7回? 第9回 PHP または Python によるWebシステムの構築

リレーショナルデータベースを利用した Web サービスを PHP または Python により構築する

第10回? 第12回 NoSQL

MongoDB を用いたドキュメント指向データベースの操作を理解する

第13回? 第14回 Web システムの構築

バックエンドに NoSQL データベースを利用した Web システムを PHP または Python より構築する

第15回 プレゼンテーション

構築したシステムについてのプレゼンテーションを行う

第16回? 第17回 Web アクセスログ

Web アクセスログの集計、解析方法について理解する

第18回? 第20回 WAF

WAF (Web Application Firewall) を導入し、Web サイ

トのセキュリティ対策を実施する
第21回? 第23回 ユーザ認証
Web サービスにユーザ認証機能を導入する
第24回? 第26回 マルチ認証
Web サービスにマルチ認証機能を導入する
第27回? 第29回 システム構築と自動テスト
Web システムを構築し、自動テストによるテストの効率化を行う
第30回 プレゼンテーション
構築したシステムについてのプレゼンテーションを行う
授業時間で理解した内容を実際に動くコードとして実現させるため、コードの記述だけでなくやデバッグまで行う必要がある。
レポートを課す予定である。
プレゼンテーション30%とレポート70%で評価する

2022年度 前期～後期

4.0単位

情報管理論演習 (2年次)

林坂 弘一郎

< 授業の方法 >

「演習」

< 授業の目的 >

本演習では、1年次で習得した開発技術を用いて、新たな情報管理システムを構築するとともに、その成果を修士論文としてまとめる。

< 到達目標 >

ネットワーク、データベースを組合せた情報管理システムの構築ができる。

< 授業のキーワード >

データベース、ネットワーク、システム開発

< 授業の進め方 >

学生各自が所有するPCを用いた演習を実施する

< 提出課題など >

第1回? 第3回

< 成績評価方法・基準 >

開発環境の構築

< テキスト >

各自のPCに仮想OSを導入するとともに、様々な開発環境を構築する

< 参考図書 >

第4回? 第6回

< 授業計画 >

第7回? 第9回 NoSQL

ドキュメント指向データベースによる全文検索システムを構築する

第10回 プレゼンテーション

構築したシステムについてのプレゼンテーションを行う

第11回? 第12回 データベースの性能評価

データベースの検索性能やデータ・インデックスの更新性能に関する評価実験を行う

第13回? 第14回 データベースの負荷テスト

データベースの同時接続に関する負荷テストを行う

第15回 プレゼンテーション

データベースの性能評価、負荷テストに関する実験結果についてプレゼンテーションを行う

第16回? 第18回 システム構築

取り組む研究課題となるシステムの構築を行う

第19回? 第21回 性能評価

構築したシステムに関する性能評価を実施する

第22回? 第24回 信頼性評価

構築したシステムの信頼性に関する評価を行う

第25回? 第27回 報告

研究課題について報告し、ディスカッションを行う

第28回? 第30回 修士論文の完成

修士論文を完成させる

授業時間で理解した内容を実際に動くコードとして実現させるため、コードの記述だけでなくやデバッグまで行う必要がある。

レポートを課す予定である。

プレゼンテーション20%、レポート30%と修士論文50%で評価する

2022年度 前期～後期

4.0単位

情報管理論特殊研究

林坂 弘一郎

< 授業の方法 >

「講義」

< 授業の目的 >

情報管理やその他多くの分野において確率理論がその基盤を支えている。この授業の目的は、確率論の基礎からその応用まで詳細に理解し、研究課題を理論的に考察するための技術を習得することにある。

< 到達目標 >

確率変数や確率分布の概念を説明できる。

マルコフ連鎖を用いて実問題をモデル化し解析できる。

ポアソン過程のモデル化と解析ができる。

待ち行列モデルの解析ができる。

< 授業のキーワード >

確率分布、マルコフ連鎖、ポアソン過程、再生過程、待ち行列、信頼性理論

< 授業の進め方 >

講義を中心に行うが、受講生によるプレゼンテーションも実施する。

またPCを用いた演習も行う。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

確率論の導入

< テキスト >

標本空間、事象、条件付き確率、独立事象とベイズの定理について学ぶ

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 確率変数と分布(2)

期待値と確率変数、多変量確率変数、モーメント母関数、極限定理、確率過程について学ぶ

第4回 条件付き確率と条件付き期待値(1)

離散型分布と連続型分布の期待値、条件付き期待値の計算

第5回 条件付き確率と条件付き期待値(2)

条件付き確率の計算、リストモデルやランダムグラフなどのいくつかの応用例について学ぶ

第6回 マルコフ連鎖(1)

マルコフ連鎖、チャップマン・コルモゴロフ方程式、状態の分類について学ぶ

第7回 マルコフ連鎖(2)

極限推移確率と有限マルコフ連鎖について学ぶ

第8回 マルコフ連鎖(3)

過渡的状态の平均滞在時間、分枝過程について学ぶ

第9回 マルコフ連鎖(4)

可逆マルコフ連鎖、マルコフチェーン・モンテカルロ法について学ぶ

第10回 マルコフ連鎖(5)

マルコフ決定過程について学ぶ

第11回 指数分布とポアソン過程(1)

指数分布の定義、性質、指数分布のたたみこみについて学ぶ

第12回 指数分布とポアソン過程(2)

計数過程、ポアソン過程の定義、到着時間と待ち時間の分布について学ぶ

第13回 指数分布とポアソン過程(3)

ポアソン過程の性質、到着時間の条件付き分布、ソフトウェア信頼性の推定について学ぶ

第14回 指数分布とポアソン過程(4)

ポアソン過程を一般化した非定常ポアソン過程について学ぶ

第15回 連続時間マルコフ連鎖(1)

連続時間マルコフ連鎖と出生死滅過程について学ぶ

第16回 連続時間マルコフ連鎖(2)

推移確率関数、極限確率、可逆性について学ぶ

第17回 連続時間マルコフ連鎖(3)

連続時間マルコフ連鎖の一般化と推移確率の計算方法について学ぶ

第18回 再生過程とその応用(1)

$N(t)$ の分布と極限定理について学ぶ

第19回 再生過程とその応用(2)

再生報酬過程、Markov Regenerative Process について学ぶ

第20回 再生過程とその応用(3)

セミ・マルコフ過程、点検のパラドックス、再生関数の計算について学ぶ

第21回 待ち行列理論(1)

待ち行列、リトルの公式、定常確率について学ぶ

第22回 待ち行列理論(2)

待ち行列の理論における用語や基本的なモデルについて学ぶ

第23回 待ち行列理論(3)

単一待ち行列モデルである $M/M/1$ 待ち行列モデルと $M/M/1/N$ 待ち行列モデルについて学ぶ

第24回 待ち行列理論(4)

待ち行列ネットワークについて学ぶ

第25回 待ち行列理論(5)

$M/G/1$ 待ち行列モデルと $G/M/1$ 待ち行列モデルについて学ぶ

第26回 待ち行列理論(6)

複数待ち行列モデルについて学ぶ

第27回 信頼性理論(1)

信頼性理論の基礎とシステムの構造関数について学ぶ

第28回 信頼性理論(2)

独立コンポーネントの信頼性と信頼度関数の上下限について学ぶ

第29回 信頼性理論(3)

期待残存寿命の計算について学ぶ

第30回 信頼性理論(4)

修理系システムの信頼性について学ぶ

予習ができていることを前提に講義を進めるので、配布資料を利用して毎回欠かさず予習を行うことが必要である。

前期と後期にレポート提出を予定している。また、数回のプレゼンテーションを課す予定である。

プレゼンテーション(30%)と前期・後期のレポート(70%)により評価する。 指定しない

2022年度 前期～後期

4.0単位

情報管理論特殊講義

林坂 弘一郎

< 授業の方法 >

「講義」

< 授業の目的 >

本講義では、情報管理のための基盤技術を習得することを目的とする。

< 到達目標 >

各自のPCに開発環境を構築できる。
リレーショナルデータベースやNoSQLデータベースを使った情報管理システムを構築できる。
ネットワーク、データベースを組合せたシステムの構築ができる。
構築したシステムに情報セキュリティを確保する仕組みを導入できる。
<授業のキーワード>
データベース、ネットワーク、システム開発
<授業の進め方>
学生各自が所有するPCを用いた演習を実施する
<提出課題など>
第1回? 第3回
<成績評価方法・基準>
開発環境の構築
<テキスト>
各自のPCに仮想OSを導入するとともに、様々な開発環境を構築する
<参考図書>
第4回? 第6回
<授業計画>
第7回? 第9回 PHP または Python によるWebシステムの構築
リレーショナルデータベースを利用した Web サービスを PHP または Python により構築する
第10回? 第12回 NoSQL
MongoDB を用いたドキュメント指向データベースの操作を理解する
第13回? 第14回 Web システムの構築
バックエンドに NoSQL データベースを利用した Web システムを PHP または Python より構築する
第15回 プレゼンテーション
構築したシステムについてのプレゼンテーションを行う
第16回? 第17回 Web アクセスログ
Web アクセスログの集計、解析方法について理解する
第18回? 第20回 WAF
WAF (Web Application Firewall) を導入し、Web サイトのセキュリティ対策を実施する
第21回? 第23回 ユーザ認証
Web サービスにユーザ認証機能を導入する
第24回? 第26回 マルチ認証
Web サービスにマルチ認証機能を導入する
第27回? 第29回 システム構築と自動テスト
Web システムを構築し、自動テストによるテストの効率化を行う
第30回 プレゼンテーション
構築したシステムについてのプレゼンテーションを行う
授業時間で理解した内容を実際に動くコードとして実現させるため、コードの記述だけでなくやデバッグまで行う必要がある。

レポートを課す予定である。
プレゼンテーション30%とレポート70%で評価する

2022年度 前期～後期
4.0単位
情報管理論特別演習 (1年次)
林坂 弘一郎

<授業の方法>
「演習」
<授業の目的>
博士論文の研究課題を選定し、学会発表や論文投稿に向けた準備を行う。
<到達目標>
既存の研究を俯瞰するとともに、社会の問題を数理モデルとして定式化する。
<授業の進め方>
自ら選定した研究課題の進捗状況や既存研究について毎回報告し、必要な助言を受ける。
<提出課題など>
第1回
<成績評価方法・基準>
ガイダンス
<テキスト>
演習の進め方、成績評価方法などを説明するとともに、今後の研究方針について検討する。
<参考図書>
第2回
<授業計画>
第3回 文献調査
研究課題に関連する分野の文献について調査する。
第4回 文献調査
研究課題に関連する分野の文献について調査する。
第5回 文献調査
研究課題に関連する分野の文献について調査する。
第6回 文献調査
研究課題に関連する分野の文献について調査する。
第7回 文献調査
研究課題に関連する分野の文献について調査する。
第8回 研究課題の決定
研究課題の方向性を決定する。
第9回 研究課題の決定
研究課題の方向性を決定する。
第10回 研究課題の決定
研究課題の方向性を決定する。
第11回 モデルの定式化
研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。
第12回 モデルの定式化
研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。
第13回 モデルの定式化

研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。
第14回 モデルの定式化
研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。
第15回 前期のまとめと報告
前期の進捗状況について報告する。
第16回 モデルの解析
定式化された数理モデルの解析を行う。
第17回 モデルの解析
定式化された数理モデルの解析を行う。
第18回 モデルの解析
定式化された数理モデルの解析を行う。
第19回 モデルの解析
定式化された数理モデルの解析を行う。
第20回 モデルの解析
定式化された数理モデルの解析を行う。
第21回 アルゴリズムの検討
研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討する。
第22回 アルゴリズムの検討
研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討する。
第23回 アルゴリズムの検討
研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討する。
第24回 アルゴリズムの実装
検討されたアルゴリズムをプログラムとして実装する。
第25回 アルゴリズムの実装
検討されたアルゴリズムをプログラムとして実装する。
第26回 アルゴリズムの実装
検討されたアルゴリズムをプログラムとして実装する。
第27回 シミュレーション実験
実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。
第28回 シミュレーション実験
実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。
第29回 シミュレーション実験
実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。
第30回 まとめと報告
1年間の研究成果について報告する。
研究課題に可能な限りの時間を使って取り組むことが求められる。
口頭発表と研究成果で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

情報管理論特別演習（2年次）

林坂 弘一郎

< 授業の方法 >

「演習」

< 授業の目的 >

選定した研究課題について研究を進め、学会発表や論文投稿を行う。

< 到達目標 >

社会の問題を数理モデルとして定式化し、その問題に対する最適解を導出する。

< 授業の進め方 >

自ら選定した研究課題の進捗状況や既存研究について毎回報告し、必要な助言を受ける。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方、成績評価方法などを説明するとともに、今後の研究方針について検討する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究課題の検討

研究課題とその発展可能性について検討する。

第4回 文献調査

研究課題に関連する分野の文献について調査する。

第5回 文献調査

研究課題に関連する分野の文献について調査する。

第6回 文献調査

研究課題に関連する分野の文献について調査する。

第7回 文献調査

研究課題に関連する分野の文献について調査する。

第8回 文献調査

研究課題に関連する分野の文献について調査する。

第9回 モデルの定式化

研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。

第10回 モデルの定式化

研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。

第11回 モデルの定式化

研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。

第12回 モデルの解析

定式化された数理モデルの解析を行う。

第13回 モデルの解析

定式化された数理モデルの解析を行う。

第14回 モデルの解析

定式化された数理モデルの解析を行う。

第15回 前期のまとめと報告

前期の進捗状況について報告する。

第16回 アルゴリズムの検討

研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討する。

第17回 アルゴリズムの検討

研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討する。

第18回 アルゴリズムの検討

研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討する。

第19回 アルゴリズムの検討

研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討する。

第20回 アルゴリズムの実装

検討されたアルゴリズムをプログラムとして実装する。

第21回 アルゴリズムの実装

検討されたアルゴリズムをプログラムとして実装する。

第22回 アルゴリズムの実装

検討されたアルゴリズムをプログラムとして実装する。

第23回 アルゴリズムの実装

検討されたアルゴリズムをプログラムとして実装する。

第24回 シミュレーション実験

実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。

第25回 シミュレーション実験

実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。

第26回 シミュレーション実験

実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。

第27回 実験結果の考察

シミュレーション実験で得られた結果を考察する。

第28回 実験結果の考察

シミュレーション実験で得られた結果を考察する。

第29回 実験結果の考察

シミュレーション実験で得られた結果を考察する。

第30回 まとめと報告

2年間の研究成果について報告する。

研究課題に可能な限りの時間を使って取り組むことが求められる。

口頭発表と研究成果で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

情報管理論特別演習（3年次）

林坂 弘一郎

< 授業の方法 >

「演習」

< 授業の目的 >

学会発表や投稿論文をベースに博士論文を完成させて公表する。

< 到達目標 >

博士論文を完成させて公表する。

< 授業の進め方 >

自ら選定した研究課題の進捗状況や既存研究について毎回報告し、必要な助言を受ける。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方、成績評価方法などを説明するとともに、今後の研究方針について検討する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究課題の検討と文献調査

研究課題に関連する分野の文献について調査し、その発展可能性について検討する。

第4回 研究課題の検討と文献調査

研究課題に関連する分野の文献について調査し、その発展可能性について検討する。

第5回 モデルの定式化

研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。

第6回 モデルの定式化

研究課題の問題を数理モデルとして定式化する。

第7回 モデルの解析

定式化された数理モデルの解析を行う。

第8回 モデルの解析

定式化された数理モデルの解析を行う。

第9回 アルゴリズムの検討と実装

研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討し、それを実装する。

第10回 アルゴリズムの検討と実装

研究課題を解決するためのアルゴリズムについて検討し、それを実装する。

第11回 シミュレーション実験

実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。

第12回 シミュレーション実験

実装されたアルゴリズムを使ったシミュレーション実験を行う。

第13回 実験結果の考察

シミュレーション実験で得られた結果を考察する。

第14回 実験結果の考察

シミュレーション実験で得られた結果を考察する。

第15回 前期のまとめと報告

前期の進捗状況について報告する。

第16回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第17回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第18回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第19回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第20回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第21回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第22回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第23回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第24回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第25回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第26回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第27回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第28回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第29回 論文指導

これまでの研究成果を取りまとめた博士論文を作成するための指導を受ける。

第30回 まとめと報告

3年間の研究成果について報告する。

研究課題に可能な限りの時間を使って取り組むことが求められる。

口頭発表と研究成果で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

数量経済学特殊研究

柴田 淳子

2022年度 前期～後期

4.0単位

数量経済学特殊講義

柴田 淳子

2022年度 前期～後期

4.0単位

数量経済学特別演習（1年次）

柴田 淳子

2022年度 前期～後期

4.0単位

西洋経済史演習（1年次）

岡部 芳彦

2022年度 前期～後期

4.0単位

西洋経済史演習（2年次）

岡部 芳彦

2022年度 前期～後期

4.0単位

西洋経済史特殊研究

岡部 芳彦

2022年度 後期

4.0単位

西洋経済史特殊講義

岡部 芳彦

2022年度 前期～後期

4.0単位

西洋経済史特別演習（1年次）

岡部 芳彦

2022年度 前期～後期

4.0単位

西洋経済史特別演習（2年次）

岡部 芳彦

2022年度 前期～後期

4.0単位

西洋経済史特別演習（3年次）

岡部 芳彦

2022年度 前期

4.0単位

地域経済分析特殊講義

田口 順等

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

修士論文の作成においては、データを収集し加工・分析することでより客観的かつ説明力の高い主張をすることが可能になる。本講義では地位経済分析や修士論文の作成に必要な様々な分析ツールとそれに必要な数学・統計学について紹介し、さらに具体的な事例や論文を精読する。これらの分析ツールや研究手法は修士論文の作成など実証的な研究に応用可能である。

本講義は経済研究科DPの「1.知識・理解：経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。」や「2.思考・判断：経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」に対応している。

< 到達目標 >

1. 修士論文作成に必要な統計分析の手法を把握する。（知識）

統計学やデータ分析の解説部分から始まり、定義・計算の方法やその背景、理由を解説します。背景や理由を知ることによって分析手法が必要な理由や応用事例を知ることができます。

2. 修士論文作成に必要な統計分析を実践する。（技能）
ただ知識として把握するだけでなく、練習問題や課題を行うことで社会などの現場や卒業論文のデータ分析に応用できる能力を身に着けます。今は何に役立つのか実感がわからないかもしれませんが、ツールを先に知っておかないと必要な時に役立ちません。

3. 関連する論文や書籍を精読し、修士論文の作成に役立てる。（習慣・態度）

修士論文を作ったことのない人が修士論文を作成するには大変な苦勞と労力が発生します。まずはほかの修士論

文や、学術論文、書籍を読みそれらの構成や分析方法や問題点を考察・分析する必要があります。

< 授業のキーワード >

統計学・地域経済・産業連関分析

< 授業の進め方 >

・講義 演習 課題 解説の4段階で授業を行いますので、課題に取り組むには講義・演習にしっかり取り組む必要があります。理解を深めるためには時間外の課題や復習を行い、解説で正誤を確かめる必要があります。演習以降部分ではPCを使用する。

・紹介された逐次論文や書籍を事前に読んでおくこと。
・進捗状況や受講者の研究計画修士論文のテーマによっては下記の講義計画は変更される場合がある。

< 履修するにあたって >

・学部とは違い、講義が終わったら次の講義まで何もしていないのではなく、大学院では関連書籍を読んで予習・復習を行い、講義時間外の勉強を行ってください。

< 提出課題など >

第1回第2回

< 成績評価方法・基準 >

講義概要

< テキスト >

本講義の紹介と、修士論文について

< 参考図書 >

第3回第4回

< 授業計画 >

第5回第6回 統計学の基礎(2)

母集団の推定・検定

第7回第8回 統計学の基礎(3)

相関係数、無相関の検定

第9回第10回 統計学の基礎(4)

クロス集計、独立性の検定、クラメールの連関係数

第11回第12回 統計学の基礎(5)

分散分析、残差分析

第13回第14回 重回帰分析(1)

最小二乗法、中心極限定理、決定係数

第15回第16回 重回帰分析(2)

検定、信頼区間

第17回第18回 重回帰分析(3)

ダミー変数、非線形回帰分析

第19回第20回 論文精読(1)

関連する論文を分析・考察する。

第21回第22回 産業連関分析(1)

産業連関表、投入係数表

第12回 産業連関分析(2)

逆行列表、経済波及効果

第13回 産業連関分析(3)

最終需要、税収推計、誘発雇用人員

第14回 論文精読(2)

関連する論文を分析・考察する。

第15回 非市場価値の推計

環境評価、パブリシティ効果など

単位制をとる大学では講義時間の約2倍の事前学習と事後学習が必要とされています。大学院では修士論文作成を達成するためにはこのルール(本講義の場合週6時間)を厳格に守れば単位認定だけでなく、理解度、論文作成にも役立ちます。

課題や論文についての要約・レポートを各週ごとに実施する予定

上述の課題やコメント、論文報告やレポートで10割の評価とする 必要な文献は適宜指示する。

安田秀穂『自治体の経済波及効果の算出』学陽書房2007年

2022年度 前期～後期

4.0単位

中小企業論演習 (1年次)

江頭 寛昭

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この授業は、修士課程経営学専攻に属する経営学分野の科目です。中小企業は、産業活動のあらゆる場面に存在する。また経営にかかわる資源制約が大きいため産業を取り巻く環境変化による影響を強く受けることとなる。そこで、この授業では中小企業の実態と経営環境の双方について、理解するための経済学・経営学の高度な知識を習得し、修士論文作成に必要な能力を身につけることを目的とする。

< 到達目標 >

- ・ 中小企業に関する多様な情報を収集し、的確に中小企業が置かれた状況を把握できる
- ・ 把握した状況から、解決すべき課題を的確に抽出できる
- ・ 抽出した課題に向けて、状況を理論的に分析できる
- ・ 研究成果を適切に論文にまとめることができる

< 授業の進め方 >

履修者の研究報告をもとに議論を進めていく。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

修士課程における研究内容とスケジュールの確認

< 参考図書 >

第2-3回

< 授業計画 >

第4-9回 基本文献のサーベイ

必要な基本文献をリストアップし、内容を理解する

第10-15回 先端文献のサーベイ

先行研究のうち、先端的な文献をリストアップし、内容を理解する

第16-18回 研究内容の検討

先行研究のサーベイをもとに研究内容を検討する

第19-21回 研究報告1

先行研究を手掛かりに、中小企業に関する諸理論にもとづいて研究課題を整理し報告する

第22-24回 研究報告2

研究課題のうち、経営体としての中小企業に内在する課題について報告する

第25-27回 研究報告3

研究課題のうち、中小企業を取り巻く経営環境変化に伴う課題について報告する

第28-30回 研究報告 まとめ

ここまでの研究内容の論点を整理し、修士論文の作成に向けて論点を整理する

第10回

中小企業に関する基本的な文献については通読しておくこと。

毎回の報告内容50%、提出物の内容50%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

中小企業論演習 (2年次)

江頭 寛昭

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

この授業は、修士課程経営学専攻に属する経営学分野の科目です。中小企業は、産業活動のあらゆる場面に存在する。また経営にかかわる資源制約が大きいため産業を取り巻く環境変化による影響を強く受けることとなる。そこで、この授業では中小企業の実態と経営環境の双方について、理解するための経済学・経営学の高度な知識を習得し、修士論文作成につなげることを目的とする。

< 到達目標 >

- ・ 中小企業に関する多様な情報を収集し、的確に中小企業が置かれた状況を把握できる
- ・ 把握した状況から、解決すべき課題を的確に抽出できる
- ・ 抽出した課題に向けて、状況を理論的に分析できる
- ・ 研究成果を適切に論文にまとめることができる

< 授業の進め方 >

履修者の研究報告をもとに議論を進めていく。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

<テキスト>

修士論文作成に向けて研究内容とスケジュールの確認

<参考図書>

第2-3回

<授業計画>

第4-6回 先行研究のサーベイ

修士論文作成に必要な基本文献をリストアップし、内容を整理する

第7-9回 研究フレームワークの構築

先行研究を参考に研究テーマを決定し、研究の枠組みを確定する

第10-14回 研究経過の報告

確定した研究枠組をもとに研究成果の中間的とりまとめ

第15-16回 研究の中間とりまとめ

中間発表に向けて修士論文の中間的な経過報告を行う

第17-18回 研究課題の再検討

修士論文の完成に向けて、研究課題のうち残されたものの確認と検討

第19-20回 論文構成の確定

修士論文の構成要素を検討する

第21-28回 論文のブラッシュアップ

修士論文の完成に向けて各章の内容と各章間の流れを検討する

第29回 最終報告準備

修士論文最終報告に向けた準備

第30回 修士論文の完成

修士論文の完成に向けた最終調整

中小企業に関する基本的な文献については通読しておくこと。

毎回の報告内容50%、提出論文の内容50%で評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

中小企業論特殊講義

江頭 寛昭

<授業の方法>

講義

<授業の目的>

この授業は、経営学専攻に属する経営学分野の科目です。中小企業は、多様な特徴を有している極めて現実的な存在であり、その経済学的、経営学的な分析や理論的な整理をおこなうために、中小企業を構成するそれぞれの要素や中小企業を取り巻く諸条件についての基本的な事実認識ができるようになることを目指す。本講義はこうした現実的存在としての中小企業について客観的に把握し、その社会における存在意義を判断・評価できるようにすることを目的とする。

なお、この授業の担当者は、自治体附属の調査研究機関の研究者として、17年にわたる地域産業の実態調査研究に携わってきた実務経験を有する教員である。より具体的な例をもとに企業活動の実際を紹介する。

<到達目標>

この科目では、中小企業研究の前提条件となる、日本の中小企業がおかれている歴史的、社会的背景や経営者、労働者が有する特徴を通して、産業活動や社会の中で果たす日本の中小企業の意義・役割について理解し、その発展のために必要な課題を導き出すことができる。

<授業のキーワード>

中小企業、下請システム、サプライヤ、技術

<授業の進め方>

指定したテキストを基に、適宜論旨をまとめていただいたうえで、解説、ディスカッションを繰り返します。

<履修するにあたって>

受身の授業参加者になることなく、積極的な議論の主体となること。

<提出課題など>

第1～3回

<成績評価方法・基準>

社会学から見た中小企業

<テキスト>

中小企業とはどのような存在か、観察者の視点から概観する。

<参考図書>

第4～6回

<授業計画>

第7～9回 戦後の中小企業

戦後復興から高度成長期にいたる中小企業の発展と産業に果たす役割について概観する。

第10～12 戦後の中小企業

高度成長期以降の中小企業の存立の特徴について概観する。

第13～15回 中小企業経営者像

中小企業経営者の特徴について、時代の流れの中での変化を踏まえながら検討する。

第16～18回 中小企業を取り巻く環境

現代の中小企業を取り巻く環境の変化について、社会の成熟化との関連から検討する。

第19～21回 中小企業を取り巻く環境

現代の中小企業を取り巻く環境変化について、グローバル化と情報化との関連の中で検討する。

第21～24回 新規創業環境

現代の中小企業の新規創業環境について、人材の視点から考察する。

第25～27回 新規創業環境

現代の中小企業の新規創業環境について、資金調達の視

点から考察する。

第28～30回 中小企業の展望

中小企業を取り巻く、現代の厳しい経営環境の中で、どのような展望が拓けるのかを検討する。

授業当日までに、テキストの指定した範囲を簡潔にまとめ、内容の概略を理解しておいてください。

前期、後期の期末に講義内容をもとにレポートを提出していただきます。

授業時の発言内容、議論の姿勢30%、期末レポート70%
寺岡 寛著『中小企業の社会学 もうひとつの日本社会論』信山社 ￥2500+税

そのほか、必要があればその都度指示します。

2022年度 前期～後期

4.0単位

中小企業論特殊研究

江頭 寛昭

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

本特殊研究の目的は、経済学研究科・博士後期課程のDPに掲げる、「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」に関係する。具体的には、ものづくりに関する先行研究の成果を用いて、経営環境が変化するなかでの日本の中小製造業の現状と存立条件について分析を行い、論文にまとめる。

< 到達目標 >

- ・内外の競争環境変化や技術変化の動向などの中小製造業を取り巻く状況変化について、適切な状況把握と分析を高度に行うことができる。
- ・文献研究、関連資料を論理的に解釈することができる。
- ・研究結果を内容・形式ともに適切に論文としてまとめることができる。

< 授業の進め方 >

講義と参加者による発表、質疑応答で進める。

< 提出課題など >

第1-2回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

中小企業論の概要と基本的な知識を理解する。

< 参考図書 >

第3-5回

< 授業計画 >

第6-8回 ものづくりに関する理論

ものづくりに関する主な理論について理解する。

第9-11回 産業集積と企業間関係に関する理論

産業集積と企業間関係に関する主な理論を理解する。

第12-15回 論文のテーマ

論文のテーマを決定する。

第16-18回 基本文献のサーベイ

基本的な文献のサーベイを行う。

第19-22回 先行研究のサーベイ

研究テーマに沿った先行研究をサーベイする。

第23-27回 研究内容の再検討

先行研究を踏まえて、研究内容を再検討する。

第28-29回 論文構成の検討

論文の構成、各章の内容を検討する。

第30回 最終報告

完成した論文の最終報告。

関連する論文や資料を整理し、まとめておく必要があります。学修の目安としては、概ね予習復習に各2時間程度が必要。

毎回の報告と質疑応答50%、提出論文と発表50%で評価する。必要があれば、その都度支持する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

中小企業論特別演習（1年次）

江頭 寛昭

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

本特別演習の目的は、経済学研究科・博士後期課程のDPに掲げる、「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」に関係する科目である。具体的には、先行研究の成果を用いて、経営環境が変化するなかでの日本の中小製造業の現状と存立条件についての現状把握・分析、課題抽出をおこない、博士論文に向けての研究を深めることを目的とする。

< 到達目標 >

- ・先行研究の成果と多様なデータ、資料を基に、適切に研究テーマを設定できる
- ・中小企業が抱える課題を適切に把握するための、データ・資料の適切な選定と解釈ができる
- ・研究結果を論文として適切にまとめることができる

< 授業の進め方 >

履修者の研究報告を基に議論を進めていく

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

修士論文の内容と研究課題に対する認識の確認

<参考図書>

第2-3回

<授業計画>

第4-7回 先行研究のサーベイ1

基本的文献を読み込み、理解を深める

第8-11回 先行研究のサーベイ2

研究テーマに近接的な分野の先行研究についての内容を理解する

第12-15回 研究課題の検討

近似的な分野の先行研究の内容を踏まえて、今後の研究内容について検討する

第16-18回 研究概要の報告

研究目的、現状把握、分析方法等研究の概要を報告する

第19-21回 研究報告1

先行研究サーベイの結果を報告する

第22-24回 研究報告2

資料、データ分析の結果を報告する

第25-27回 研究報告3

各種調査結果について報告する

第28-29回 論文構成と内容の検討

論文構成の流れと各章の内容の妥当性について検討する

第30回 総括

博士論文作成に向けて、次年度以降に取り組むべき課題の確認と作成した論文の総括

先行研究について主だったものについては目を通し、内容を把握しておくことが必要である。

各回の報告の作成内容50%、提出論文の内容50%で評価する

2022年度 前期～後期

4.0単位

中小企業論特別演習（2年次）

江頭 寛昭

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

本特別演習の目的は、経済学研究科・博士後期課程のDPに掲げる、「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」に関係する科目である。具体的には、先行研究の成果を用いて、経営環境が変化するなかでの日本の中小製造業の現状と存立条件についての現状把握・分析、課題抽出をおこない、博士論文に向けての研究を深めることを目的とする。

<到達目標>

・先行研究の成果と多様なデータ、資料を基に、適切に研究テーマを設定できる

・中小企業が抱える課題を適切に把握するための、データ・資料の適切な選定と解釈ができる

・研究結果を論文として適切にまとめることができる

<授業の進め方>

履修者の研究報告を基に議論を進めていく

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

修士論文の内容と研究課題に対する認識の確認

<参考図書>

第2-3回

<授業計画>

第4-7回 先行研究のサーベイ1

基本的文献を読み込み、理解を深める

第8-11回 先行研究のサーベイ2

研究テーマに近接的な分野の先行研究についての内容を理解する

第12-15回 研究課題の検討

近似的な分野の先行研究の内容を踏まえて、今後の研究内容について検討する

第16-18回 研究概要の報告

研究目的、現状把握、分析方法等研究の概要を報告する

第19-21回 研究報告1

先行研究サーベイの結果を報告する

第22-24回 研究報告2

資料、データ分析の結果を報告する

第25-27回 研究報告3

各種調査結果について報告する

第28-29回 論文構成と内容の検討

論文構成の流れと各章の内容の妥当性について検討する

第30回 総括

博士論文作成に向けて、次年度以降に取り組むべき課題の確認と作成した論文の総括

先行研究について主だったものについては目を通し、内容を把握しておくことが必要である。

各界の報告の作成に内容50%、提出論文の内容50%で評価する

2022年度 前期～後期

4.0単位

中小企業論特別演習（3年次）

江頭 寛昭

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

本特別演習の目的は、経済学研究科・博士後期課程のDP

に掲げる、「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」に係る科目である。具体的には、先行研究の成果を用いて、経営環境が変化するなかでの日本の中小製造業の現状と存立条件についての現状把握・分析、課題抽出をおこない、博士論文に向けての研究を深めることを目的とする。

<到達目標>

・先行研究の成果と多様なデータ、資料を基に、適切に研究テーマを設定できる

・中小企業が抱える課題を適切に把握するための、データ・資料の適切な選定と解釈ができる

・研究結果を論文として適切にまとめることができる

<授業の進め方>

履修者の研究報告を基に議論を進めていく

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

研究課題に対する認識の確認

<参考図書>

第2-3回

<授業計画>

第4-7回 先行研究のサーベイ1

基本的文献を読み込み、理解を深める

第8-11回 先行研究のサーベイ2

研究テーマに近接的な分野の先行研究についての内容を理解する

第12-15回 研究課題の検討

近似的な分野の先行研究の内容を踏まえて、今後の研究内容について検討する

第16-18回 研究概要の報告

研究目的、現状把握、分析方法等研究の概要を報告する

第19-21回 研究報告1

先行研究サーベイの結果を報告する

第22-24回 研究報告2

資料、データ分析の結果を報告する

第25-27回 研究報告3

各種調査の成果について報告する

第28-29回 論文構成と内容の検討

論文構成の流れと各章の内容の妥当性について検討する

第30回 総括

博士論文提出に向けて、残された課題の確認と作成した論文の総括

先行研究について主だったものには目を通し、内容を把握しておくことが必要である。

各界の報告の作成に内容50%、提出論文の内容50%で評価する

2022年度 前期

1.0単位

データサイエンス特殊研究

齋藤 政彦

<授業の方法>

遠隔授業

<授業の目的>

インターネットやコンピュータサイエンスの発達において、様々な分野において計算機科学、統計学などをベースとしてデータから有意義な情報を引き出すことができるようになった。各専攻で学ぶ大学院生にとって、データサイエンスを学ぶと、各自の研究範囲を拡げ、社会の課題を解決することのできる可能性を引き出すものである。

<到達目標>

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につける。

<授業のキーワード>

インターネット、ビッグデータ、データサイエンス、AI、統計学、データ利活用

<授業の進め方>

遠隔授業

<履修するにあたって>

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につけるとともに、パソコンを使って実際のデータ解析についても解説するので、パソコンを使って復習できる事が望ましい。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

社会におけるデータ・AI活用1

<テキスト>

データサイエンスの必要性、ビッグデータ、IoT、AI活用について学ぶ

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 データを読む

データの種類、データの分布、データのばらつき、相関関係について学ぶ

第4回 データを説明する

データの表現、グラフによる可視化、データの比較について学ぶ

第5回 データを扱う

データ解析ツールによるデータ解析を学ぶ

第6回 データを扱う上での留意事項

データやAIを扱う上で、法規、倫理的側面、個人の権利保護について学ぶ

第7回 統計的データ解析

ビジネスやアンケート調査における統計的推定、仮説検定について学ぶ

第8回 最終課題

与えられたデータセットに対して課題を設定し、その課題の解決を提案する。

各回の講義の復習としてエクセル等を使った実際のデータ解析を行ってもらおう。また、データの取得方法等について各自学んでもらう。

毎回の授業後にコミュニケーションシートを提出する。

最終課題に関するレポートを提出する。

毎回のコミュニケーションシートによる評価50%、最終レポートが50%で評価する。 『データサイエンス講座 1 データサイエンス基礎』

齋藤政彦・小澤誠一・羽森茂之・南知恵子 編

培風館

ISBN:978-4-563-01610-4

特に指定なし

2022年度 前期

1.0単位

データサイエンス特殊講義

齋藤 政彦

< 授業の方法 >

遠隔授業

< 授業の目的 >

インターネットやコンピュータサイエンスの発達において、様々な分野において計算機科学、統計学などをベースとしてデータから有意義な情報を引き出すことができるようになった。各専攻で学ぶ大学院生にとって、データサイエンスを学ぶと、各自の研究範囲を拡げ、社会の課題を解決することのできる可能性を引き出すものである。

< 到達目標 >

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につける。

< 授業のキーワード >

インターネット、ビッグデータ、データサイエンス、AI、統計学、データ利活用

< 授業の進め方 >

遠隔授業

< 履修するにあたって >

社会におけるデータ・AI利活用を理解し、データを扱う上での基礎を身につけ、データに関する留意点・情報セキュリティに関して必要な知識・考え方を身につけるとともに、パソコンを使って実際のデータ解析についても解

説するので、パソコンを使って復習できる事が望ましい。
< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

社会におけるデータ・AI活用 1

< テキスト >

データサイエンスの必要性、ビッグデータ、IoT、AI活用について学ぶ

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 データを読む

データの種類、データの分布、データのばらつき、相関関係について学ぶ

第4回 データを説明する

データの表現、グラフによる可視化、データの比較について学ぶ

第5回 データを扱う

データ解析ツールによるデータ解析を学ぶ

第6回 データを扱う上での留意事項

データやAIを扱う上で、法規、倫理的側面、個人の権利保護について学ぶ

第7回 統計的データ解析

ビジネスやアンケート調査における統計的推定、仮説検定について学ぶ

第8回 最終課題

与えられたデータセットに対して課題を設定し、その課題の解決を提案する。

各回の講義の復習としてエクセル等を使った実際のデータ解析を行ってもらおう。また、データの取得方法等について各自学んでもらう。

毎回の授業後にコミュニケーションシートを提出する。

最終課題に関するレポートを提出する。

毎回のコミュニケーションシートによる評価50%、最終レポートが50%で評価する。 『データサイエンス講座 1 データサイエンス基礎』

齋藤政彦・小澤誠一・羽森茂之・南知恵子 編

培風館

ISBN:978-4-563-01610-4

特に指定なし

2022年度 前期～後期

4.0単位

統計学演習（1年次）

西山 茂

2022年度 前期～後期
4.0単位
統計学演習（2年次）
西山 茂

<到達目標>
日本経済史に関する一考察に相当するレポート（1200字×10枚程度）を作成することができる。
<授業の進め方>
講義前に指定された書籍を読み、講義では意見を提示する。その内容にもとづいて、自身の考えを文章として蓄積していく。

2022年度 前期～後期
4.0単位
統計学特殊研究
西山 茂

<提出課題など>
第1回
<成績評価方法・基準>
研究テーマの選定

2022年度 前期～後期
4.0単位
統計学特殊講義
西山 茂

<テキスト>
日本経済史に関する研究テーマを書籍（まず最初に読む書籍として）選定する。

2022年度 前期～後期
4.0単位
統計学特別演習（1年次）
西山 茂

<参考図書>
第2~29回
<授業計画>
第30回 論文の完成
推敲したものを完成原稿としてまとめる。
資料調査（10時間程度）、論文の作成（30時間程度）
レポートの完成度（100%）

2022年度 前期～後期
4.0単位
統計学特別演習（2年次）
西山 茂

2022年度 前期～後期
4.0単位
日本経済史演習（2年次）
関谷 次博

2022年度 前期～後期
4.0単位
統計学特別演習（3年次）
西山 茂

<授業の方法>
演習
<授業の目的>
日本経済の歴史事象について、経済学の理論をもちいて分析する。
本講義は、DPの「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」ことに対応している。

2022年度 前期～後期
4.0単位
日本経済史演習（1年次）
関谷 次博

<到達目標>
日本経済史に関する一考察に相当するレポート（1200字×10枚程度）を作成することができる。
<授業の進め方>
講義前に指定された書籍を読み、講義では意見を提示する。その内容にもとづいて、自身の考えを文章として蓄積していく。

<授業の方法>
演習
<授業の目的>
日本経済の歴史事象について、経済学の理論をもちいて分析する。
本講義は、DPの「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」ことに対応している。

<提出課題など>
第1回
<成績評価方法・基準>
研究テーマの選定
<テキスト>
日本経済史に関する研究テーマを書籍（まず最初に読む書籍として）選定する。
<参考図書>

第2-29回

< 授業計画 >

第30回 論文の完成

推敲したものを完成原稿としてまとめる。

資料調査（10時間程度）、論文の作成（30時間程度）

レポートの完成度（100%）

2022年度 前期～後期

4.0単位

日本経済史特殊講義

関谷 次博

< 授業の方法 >

対面講義

< 授業の目的 >

日本経済について、歴史を通じて見る目を養う。江戸時代から現代へと日本経済を概観した上で、歴史にまつわるトピックに焦点をあてて議論を重ねていく。

今回は、持続可能性をテーマに、事例として美術・芸術がどのようにして持続されていくのかについて、経済史の視点から考える。

本講義はDPの2「経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」に対応しています。

< 到達目標 >

1．日本経済の歴史を知ることができる。

2．問題提起ができるとともに、問題解決のための意見を述べるができる。

< 授業の進め方 >

テーマにそくした書籍を受講者とともに読み進め、内容を議論します。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

日本経済史を学ぶ意義

< テキスト >

日本経済史を学ぶにあたって必要な取り組みを教示する。

< 参考図書 >

第2-6回

< 授業計画 >

第7回 総評

上記の書物について、全体の内容について議論するとともに、関連する書籍等について話し合う。

第8～29回 議論と総評

第2～7回におこなってきたことを、別の書籍についても繰り返す。

第30回 まとめ

講義中に読んだ全ての本についての総評をする。

次回講義で該当する部分を熟読しておく。（1時間程度）

講義中の発表40%、まとめのレポート60%

宮本又郎編著『新版 日本経済史』放送大学出版会、2008年

2022年度 前期～後期

4.0単位

ファイナンス論演習（1年次）

林 隆一

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

演習(1年次)の目的は、修士論文のテーマを選び、その下で基礎的な研究を進め、修士論文の構想を立てることである。その過程で、経済学研究科修士課程のDPに掲げる、「1.知識・理解：経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。」、「2.思考・判断：経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」、「3.関心・意欲：修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。」、「4.技能・表現：修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる」をある程度達成する。この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている。

なお、この授業の担当者は、機関投資家などで証券アナリストとして企業評価分析や資金運用等に19年間携わり、現在は上場企業の社外取締役を兼務する「実務経験のある教員」であり、より実践的な観点から上記の内容等を解説するものである。

< 到達目標 >

・修士論文のテーマを確定する。
・関連する文献を整理し、修士論文の一部を構成できるようまとめておく。
・修士論文の構想を発表し、2年次4月末に提出する研究計画書の準備をする。

< 授業のキーワード >

コーポレート・ガバナンス（企業統治）、IR（Investor Relations）、企業分析・評価（バリュエーション）、機械・ロボット産業、エコシステム

< 授業の進め方 >

ゼミ生の報告と討論を中心にすすめる。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習の進め方，研究倫理等

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第4回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第5回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第6回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第7回 基本的文献の整理

基本的文献の概要の作成

第8回 文献リストの作成

研究テーマの絞り込み，関連する文献のリストアップ

第9回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第10回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第11回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第12回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第13回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第14回 関連文献の整理

関連文献の概要の作成

第15回 前期のまとめ

前期のまとめと夏季休暇中の計画

第16回 研究テーマの確定

修士論文の研究テーマの確定

第17回 研究テーマの背景

研究テーマの背景の報告と討論

第18回 研究テーマの背景

研究テーマの背景の報告と討論

第19回 研究課題の検討

研究課題についての報告と検討

第20回 研究課題の設定

研究課題の設定

第21回 研究方法の検討

研究課題に適切な研究方法の検討

第22回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第23回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第24回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第25回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第26回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第27回 研究方法の適用

修得した研究方法の研究課題への適用

第28回 研究方法の適用

修得した研究方法の研究課題への適用

第29回 論文の構想

修士論文の構想の発表と討論

第30回 後期のまとめ

後期のまとめと春季休暇中の計画

毎回の授業に対して、予習と復習に3時間以上は必要である。

演習での報告や討論，提出物などを総合的に評価する。
『工作機械・ロボット産業のエコシステム 日本企業が支える世界の「モノづくり」基盤』晃洋書房 978-4-7710-3453-2

2022年度 前期～後期

4.0単位

ファイナンス論特殊研究

林 隆一

<授業の方法>

講義と演習

<授業の目的>

この授業は、経済学研究科のDPが示すように、経済学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つこと目指している。具体的には、日本の企業活動・ファイナンスに関する研究を行うこととする。

<到達目標>

企業・ファイナンスに関する分析に必要な手法について身に付けることができる。

研究テーマに関する高度な専門知識を修得し、理論的・実証的な分析を通して分析結果を導き、あり方について提言を行うことができる。

<授業のキーワード>

コーポレート・ガバナンス（企業統治）、IR（Investor Relations）、企業分析・評価（バリュエーション）

<授業の進め方>

受講生の報告を中心に授業を進める。

<履修するにあたって>

受講者は毎時間、報告の準備が必要である。

<提出課題など>

第1回・第2回

<成績評価方法・基準>

研究テーマの設定

<テキスト>

研究テーマを設定する。

< 参考図書 >

第3回・第4回

< 授業計画 >

第5回・第6回 研究テーマに関する基礎的な文献の講読
研究テーマに関する基本的な文献をいくつか紹介し、それらの文献の内容を受講者に報告してもらい、適宜、解説を行う。

第7回・第8回 分析方法の学習

企業分析・ファイナンス分析の内容を扱ったテキストを購読することで、分析に必要な手法を習得する。

第9回・第10回 分析方法の学習

企業分析・ファイナンス分析の内容を扱ったテキストを購読することで、分析に必要な手法を習得する。

第11回・第12回 分析方法の学習

企業分析・ファイナンス分析の内容を扱ったテキストを購読することで、分析に必要な手法を習得する。

第13回・第14回 分析方法の学習

企業分析・ファイナンス分析の内容を扱ったテキストを購読することで、分析に必要な手法を習得する。

第15回・第16回 先行研究に関するサーベイ

研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第17回・第18回 先行研究に関するサーベイ

研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第19回・第20回 先行研究に関するサーベイ

研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第21回・第22回 先行研究に関するサーベイ

研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第23回・第24回 先行研究に関するサーベイ

研究テーマをめぐる先行研究に関する文献を講読する。

第25回・第26回 分析を行う

研究テーマについて、先行研究の分析方法を踏襲して、分析を行い、その分析結果について検討する。

第27回・第28回 分析を行う

研究テーマについて、先行研究の分析方法を踏襲して、分析を行い、その分析結果について検討する

第29回・第30回 分析を行う

研究テーマについて、先行研究の分析方法を踏襲して、分析を行い、その分析結果について検討する

毎回の授業に対して、予習と復習にそれぞれ5時間以上は必要である。

授業での報告以外にレポートの提出を求める。

毎時間の発表内容とレポートによって評価する。 授業中に適宜、指示する。

授業中に適宜、指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

ファイナンス論特殊講義

林 隆一

< 授業の方法 >

演習形式

< 授業の目的 >

・本講義は、ファイナンス（資金調達）の視点から企業活動を理解する応用科目と位置づけられる。

・DP（学位授与方針）の「経済学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができ」、コーポレートファイナンスの考え方を通し、「修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝える」能力取得を目的とする。

なお、この授業の担当者は、機関投資家などで証券アナリストとして企業評価分析や資金運用等に19年間携わり、現在は上場企業の社外取締役を兼務する「実務経験のある教員」であり、より実践的な観点から上記の内容等を解説するものである。

< 到達目標 >

（1）企業の『ファイナンス（資金調達）』の基本的な体系を把握することができる（知識）。

（2）企業評価の手法を、実際の企業に適用し、企業価値ができる（技能）。

（3）講義を通して、企業ファイナンスの理論がどのように、ビジネスの現場で具体的に活用されているかイメージできる（態度・習慣）。

< 授業のキーワード >

現在価値、DCF、企業価値（企業評価）、資本コスト（投資家の要求リターン）、企業経営、MM命題、M&A

< 授業の進め方 >

講義は基本的に、テキスト『企業価値経営』の受講生による発表と、それに対する議論に沿って進めるが、受講者の理解度を考慮しながら、具体的な企業のケーススタディを取り上げていく。

< 履修するにあたって >

社会情勢の変化や受講生の理解動向を踏まえ、受講生と相談の上、授業計画は随時見直す可能性がある。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

講義の全体像・評価方法などを説明し、講義進行について議論する

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 第2章「企業価値評価のフレームワーク」
テキスト『企業価値経営』の第2章「企業価値評価のフレームワーク」に則して、企業価値創造のフレームワークを学ぶ。

第4回 第3章「財務諸表から読む企業活動」(1)
テキスト『企業価値経営』の第3章「財務諸表から読む企業活動」に則して、基本を学ぶ。

第5回 第3章「財務諸表から読む企業活動」(2)
テキスト『企業価値経営』の第3章「財務諸表から読む企業活動」に則して、応用を学ぶ。

第6回 第4章「戦略的ファンダメンタルズ分析」(1)
テキスト『企業価値経営』の第4章「戦略的ファンダメンタルズ分析」に則して、基本を学ぶ。

第7回 第4章「戦略的ファンダメンタルズ分析」(2)
テキスト『企業価値経営』の第4章「戦略的ファンダメンタルズ分析」に則して、応用を学ぶ。

第8回 第5章「経営戦略分析」(1)
テキスト『企業価値経営』の第5章「経営戦略分析」に則して、基本を学ぶ。

第9回 第5章「経営戦略分析」(2)
テキスト『企業価値経営』の第5章「経営戦略分析」に則して、応用を学ぶ。

第10回 第6章「会計戦略分析」(1)
テキスト『企業価値経営』の第6章「会計戦略分析」に則して、基本を学ぶ。

第11回 第6章「会計戦略分析」(2)
テキスト『企業価値経営』の第6章「会計戦略分析」に則して、応用を学ぶ。

第12回 第7章「[ケーススタディ]電機業界のファンダメンタルズ分析」(1)
テキスト『企業価値経営』の第7章「電機業界のファンダメンタルズ分析」に則して、ケーススタディの基本を学ぶ。

第13回 第7章「[ケーススタディ]電機業界のファンダメンタルズ分析」(2)
テキスト『企業価値経営』の第7章「電機業界のファンダメンタルズ分析」に則して、ケーススタディの基本を学ぶ。

第14回 第8章「企業価値とバリュエーション」(1)
テキスト『企業価値経営』の第8章「企業価値とバリュエーション」に則して、基本を学ぶ。

第15回 第8章「企業価値とバリュエーション」(2)
テキスト『企業価値経営』の第8章「企業価値とバリュエーション」に則して、応用を学ぶ。

第16回 第9章「証券市場と企業評価」(1)
テキスト『企業価値経営』の第9章「証券市場と企業評価」に則して、基本を学ぶ。

第17回 第9章「証券市場と企業評価」(2)
テキスト『企業価値経営』の第9章「証券市場と企業評価」に則して、応用を学ぶ。

第18回 第10章「資本コストの測定と管理」(1)
テキスト『企業価値経営』の第10章「資本コストの測定と管理」に則して、基本を学ぶ。

第19回 第10章「資本コストの測定と管理」(2)
テキスト『企業価値経営』の第10章「資本コストの測定と管理」に則して、応用を学ぶ。

第20回 第11章「ピジョンの企業価値評価」(1)
テキスト『企業価値経営』の第11章「ピジョンの企業価値評価」に則して、企業価値評価のケーススタディの基本を学ぶ。

第21回 第11章「ピジョンの企業価値評価」(2)
テキスト『企業価値経営』の第11章「ピジョンの企業価値評価」に則して、企業価値評価のケーススタディの基本を学ぶ。

第22回 第12章「EVAバリュエーション」(1)
テキスト『企業価値経営』の第12章「EVAバリュエーション」に則して、基本を学ぶ。

第23回 第12章「EVAバリュエーション」(2)
テキスト『企業価値経営』の第12章「EVAバリュエーション」に則して、応用を学ぶ。

第24回 第13章「M&A戦略」(1)
テキスト『企業価値経営』の第13章に則して、M&Aの基本を学ぶ。

第25回 第13章「M&A戦略」(2)
テキスト『企業価値経営』の第13章に則して、M&Aの応用を学ぶ。

第26回 第14章「無形資産の価値評価と戦略的活用」
テキスト『企業価値経営』の第14章「無形資産の価値評価と戦略的活用」に則して、基本を学ぶ。

第27回 第15章 非財務・ESG情報
テキスト『企業価値経営』の第15章に則して、非財務・ESG情報を学ぶ。

第28回 第16章「青天の霹靂」
テキスト『企業価値経営』の第16章「青天の霹靂」に則して、実際の企業の応用を学ぶ。

第29回 第17章「価値思考」
テキスト『企業価値経営』の第17章「価値思考」に則して、実際の企業の応用を学ぶ。

第30回 まとめ
さらなる企業価値創造について考える
授業時間以外で、テキスト『企業価値経営』の担当部分の(講義内での)発表準備、および、最終的に実際の企業に当てはめて企業分析レポートを作成する必要がある。
学修の目安となる時間は、平均的には予習復習で毎回3

時間程度が必要となると考えられる

テキスト『企業価値経営』で学んだ企業価値評価の方法に基づいて、最終的に実際の企業に当てはめて作成した企業分析レポート60%、講義内でのテキスト発表内容40% 『企業価値経営』伊藤 邦雄 (著)/日本経済新聞出版社 (710ページ) 2021年

(受講者と相談の上、変更する場合がある。受講希望者(検討中も含む)は、事前に確認すること。)

『経済学は生き抜く智剣』(第2版)神戸学院大学経済学部編の「企業ファイナンス論」

『ファイナンス論・入門(有斐閣コンパクト)』俊野雅司・白須 洋子・時岡 規夫 (著)/有斐閣

『コーポレートファイナンス入門 第2版 (日経文庫)』砂川 伸幸 (著)/日本経済新聞出版社

『入門コーポレート・ファイナンス』島 義夫(著)/日本評論社、

『コーポレート・ファイナンス実務の教科書』松田 千恵子 (著)/日本実業出版社

『大学生のための人生とお金の知恵』金融広報中央委員会

(お金とは)『フェリックスとお金の秘密』ニコラウス・ピーパー(著), Nikolaus Piper (原著)他/徳間書店

(お金とは)『MIND OVER MONEY 193の心理研究でわかったお金の支配されない13の真実』クラウディア・ハモンド (著), 木尾糸己 (翻訳)/あさ出版

(金融全般の入門)『1からのファイナンス』榊原茂樹, 岡田克彦 (著)/碩学舎

(金融全般の入門)『金融論』(【ベーシック+])家森信善 (著)/中央経済社

(会計入門)『決算書はここだけ読もう』矢島雅己(著)/弘文堂

(会計入門)『Yahoo!ファイナンスで速攻決算書分析』坂本剛(著)/中央経済社

(会計)『グラフィック経営財務(グラフィック経営学ライブラリ8)』境 睦 (編), 落合 孝彦 (編)/新世社

(初歩)『あれか、これかー「本当の値打ち」を見抜くファイナンス理論入門』野口真(著)/ダイヤモンド社

(新書)『ファイナンス プロが猿に勝てない不思議な話』山本和隆 (著)/日本経済新聞出版社

(入門)『[実況]ファイナンス教室(グロービスMBA集中講義)』グロービス・星野優(監)/PHP研究所

(入門)『この1冊ですべてわかる ファイナンスの基本』佐藤公亮(著)/日本実業出版社

(企業評価入門)『パンダをいくらで買いますか?』野口真(著)/日経BP社

(企業評価入門)『はじめての企業価値評価(日経文庫)』砂川 伸幸 (著), 笠原 真人 (著)/日本経済新聞出版社

(企業評価)『企業評価論入門』奈良 沙織 (著)/中央

経済社

(企業評価・実務)『図解入門ビジネス最新企業価値評価の考え方と実践がよ~くわかる本』笠原真人(著)/秀和システム

(企業評価・実務)『図解入門ビジネス最新企業価値評価の基本と仕組みがよ~くわかる本』バリュークリエイト/秀和システム

(企業評価・実務)『図解入門ビジネス 最新コーポレートファイナンスの基本と仕組みがよ~くわかる本』松田千恵子 (著)/秀和システム

(行動経済学)『ケースメソッドMBA実況中継 04 行動経済学』岩澤誠一郎 (著) ディスカヴァー・トゥエンティワン

(社債)『入門 社債のすべて---発行プロセスから分析・投資手法と倒産時の対応まで』土屋 剛俊(著)/ダイヤモンド社

(応用)『ゼミナール企業価値評価』伊藤邦雄(著)/日本経済新聞出版社

(応用)『バリューエーションの教科書』森生明(著)/東洋経済新報社

(実務基礎)『ファイナンス思考 日本企業を蝕む病と、再生の戦略論』朝倉 祐介 (著)/ダイヤモンド社

(実務基礎)『この1冊ですべてわかるコーポレートガバナンスの基本』手塚 貞治 (著)/日本実業出版社

(実務応用)『入門 リアル・オプション』山本 大輔 (著), 刈屋 武昭 (監修)/東洋経済新報社

(実務応用)『トップアナリストがナビする金融の「しくみ」と「理論」』野崎浩成 (著)/同文館出版

(実務応用)『まだ「ファイナンス理論」を使いますか?- MBA依存症が企業価値を壊す』手島直樹(著)/日本経済新聞

(全般・応用)『ファイナンスの哲学---資本主義の本質的な理解のための10大概念』堀内勉(著)/ダイヤモンド社

(全般)『企業価値の神秘』宮川壽夫(著)/中央経済社

(全般)『[新版]この1冊ですべてわかる 金融の基本』田淵 直也 (著)/日本実業出版社新版 (2019)

2022年度 前期~後期

4.0単位

北米経済論演習 (1年次)

中村 亨

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

大恐慌(Great Depression)、米国の所得格差(income inequality)、移民の米国における賃金、雇用、財政に与えるインパクト等を計量的手法で分析するための実証分

析の方法を学ぶ。

<到達目標>

米国の経済成長と金融との相互依存をDSGEモデルにより研究し、経済政策の有効性を検討することができる。

米国中間層の没落の要因を 技術、 貿易、 政治の側面から理解することができる。

移民の米国に与える影響を計量的手法で分析することができる。

<授業のキーワード>

大恐慌、中間層 (middle class)、所得格差 (income inequality)、移民

<授業の進め方>

毎回、計量経済学の習得とstataやmatlabのcodeを読み込む演習を行う。論文を中心に議論し、数式の展開も含め最先端のトピックを理解できるようにすすめていく。

<履修するにあたって>

労働経済学、マクロ経済学及び計量経済学の基礎知識があることが望ましい。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

イントロダクション

<テキスト>

大恐慌と近年の世界金融危機を学ぶ意義

格差のメカニズムを学ぶ意義

移民の経済学を学ぶ意義

<参考図書>

第2回-第3回

<授業計画>

第4回から第5回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depression (第3章)を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第6回-第7回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depression (第4章)を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第8回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第1章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第9回-第10回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第2章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第11回-第12回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第3章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第13回-第14回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第4章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果

を修得する。

第15回-第16回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第5章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第17回-第19回 移民の経済学

Borjasの移民データベースを使った移民の賃金・雇用・財政に与える影響に関する実証分析(演習)を行う。

第20回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Autorの論文"Skills, Tasks, and Technologies: Implications for Employment and Earnings"(Handbook of Labor Economics Vol. 4)を精読して、米国における、IT、ロボット、人工知能が雇用をどのように変容させるかを学ぶ。

第21回-第23回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Autorの論文"Skills, Tasks, and Technologies: Implications for Employment and Earnings"(Handbook of Labor Economics Vol. 4)を精読して、米国における、IT、ロボット、人工知能が雇用をどのように変容させるかを学ぶ。

第24回-第25回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Restrepoの"The wrong kind of AI? AI and the future of labor demand"を精読してAIと雇用の最先端の分析を学ぶ。

第26回-第27回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Restrepoの"The wrong kind of AI? AI and the future of labor demand"を精読してAIと雇用の最先端の分析を学ぶ。

第28回-第30回 格差の分析

Pikettyの新著"Capital and Ideology"の第1章から第3章を読み、格差分析の最先端を学ぶ。

課題となるテキストと副読本としてキンドルバーガーの『大不況下の世界 1929-1939』の通読が事前必要である。テキスト、副読本を事前学習として目安として2時間読んでおく。

授業時に指定された課題を事後学習として1時間で解く。重要なトピックについて数回の提出課題があります。

提出課題の内容(100%)で評価する 1) Essays on the Great Depression, by B. Bernanke, Princeton Univ. Press. (邦訳『大恐慌論』(日本経済新聞出版社))

2) 『国家は破綻する』、カーメン・M ラインハート, ケネス・S ロゴフ著, 日経BP

3) The Vanishing Middle Class, by Peter Temin, MIT Press.

4) Immigration Economics, by George Borjas, Harvard University Press.

2022年度 前期～後期

4.0単位

北米経済論演習（2年次）

中村 亨

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

大恐慌(Great Depression)と2007年以降の大収縮(Great Contraction)の比較を行う。

米国の所得格差(income inequality)を中間層の没落の観点から考察する。

移民の米国における賃金、雇用、財政に与えるインパクトを計量的手法で分析する。

< 到達目標 >

米国の経済成長と金融との相互依存をDSGEモデルにより研究し、経済政策の有効性を検討することができる。

米国中間層の没落の要因を技術、貿易、政治の側面から理解することができる。

移民の米国に与える影響を計量的手法で分析することができる。

< 授業のキーワード >

大恐慌、中間層(middle class)、所得格差(income inequality)、移民

< 授業の進め方 >

毎回、計量経済学の習得とstataやmatlabのcodeを読み込む演習を行う。論文を中心に議論し、数式の展開も含め最先端のトピックを理解できるようにすすめていく。

< 履修するにあたって >

労働経済学、マクロ経済学及び計量経済学の基礎知識があることが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの輪読をするためのイントロ講義を行う。

< 参考図書 >

第2回-第3回

< 授業計画 >

第4回から第5回 人的資本の基礎理論

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第2章、Human Capital and Signalingを中心に学ぶ。

第6回-第7回 人的資本の基礎理論

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第3章、Externalities and Peer Effectsを中心に学ぶ。

第8回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第4章、Moral Hazard modelを中心に学ぶ。

第9回-第10回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第5章、Moral Hazard : Applicationsを中心に学ぶ。

第11回-第12回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第6章、Incomplete Contractsを中心に学ぶ。

第13回-第14回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第7章、Efficiency Wage Modelsを中心に学ぶ。

第15回-第16回 Investment in Skills

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第8章、Traning Investmentsを中心に学ぶ。

第17回-第19回 Investment in Skills

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第9章、Skills and Learningを中心に学ぶ。

第20回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第10章、部分均衡モデルを中心に学ぶ。

第21回-第23回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第11章、基本均衡モデルを中心に学ぶ。

第24回-第25回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第12章、仕事の構成を中心に学ぶ。

第26回-第27回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第13章、賃金の設定とサーチを中心に学ぶ。

第28回-第30回 全体のまとめ

全体の復習

課題となるテキストの通読が事前に必要である。テキストを事前学習として目安として2時間読んでおく。授業時に指定された課題を事後学習として1時間で解く。重要なトピックについて数回の提出課題があります。提出課題の内容(100%)で評価する Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economics (PDFファイル)

2022年度 前期～後期

4.0単位

北米経済論特殊研究

中村 亨

< 授業の方法 >

講義と演習

< 授業の目的 >

大恐慌(Great Depression)と2007年以降の大収縮(Great Contraction)の比較を行う。

米国の所得格差(income inequality)を中間層の没落の観点から考察する。

移民の米国における賃金、雇用、財政に与えるインパクトを計量的手法で分析する。

< 到達目標 >

米国の経済成長と金融との相互依存をDSGEモデルにより研究し、経済政策の有効性を検討することができる。

米国中間層の没落の要因を 技術、貿易、政治の側面から理解することができる。

移民の米国に与える影響を計量的手法で分析することができる。

< 授業のキーワード >

大恐慌、中間層(middle class)、所得格差(income inequality)、移民

< 授業の進め方 >

毎回、課題とする論文を中心に議論し、数式の展開も含めマクロ経済学の最先端のトピックを理解できるようにすすめていく。

< 履修するにあたって >

労働経済学、マクロ経済学及び計量経済学の基礎知識があることが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

大恐慌と近年の世界金融危機を学ぶ意義

格差のメカニズムを学ぶ意義

移民の経済学を学ぶ意義

< 参考図書 >

第2回-第3回

< 授業計画 >

第4回から第5回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depression(第3章)を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第6回-第7回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depression(第4章)を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第8回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第1章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第9回-第10回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第2章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第11回-第12回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第3章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第13回-第14回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第4章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第15回-第16回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第5章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第17回-第19回 移民の経済学

Borjasの移民データベースを使った移民の賃金、雇用、財政に与える影響に関する実証分析(演習)を行う。

第20回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Autorの論文"Skills, Tasks, and Technologies: Implications for Employment and Earnings"(Handbook of Labor Economics Vol. 4)を精読して、米国における、IT、ロボット、人工知能が雇用をどのように変容させるかを学ぶ。

第21回-第23回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Autorの論文"Skills, Tasks, and Technologies: Implications for Employment and Earnings"(Handbook of Labor Economics Vol. 4)を精読して、米国における、IT、ロボット、人工知能が雇用をどのように変容させるかを学ぶ。

第24回-第25回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Restrepoの"The wrong kind of AI? AI and the future of labor demand"を精読してAIと雇用の最先端の分析を学ぶ。

第26回-第27回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Restrepoの"The wrong kind of AI? AI and the future of labor demand"を精読してAIと雇用の最先端の分析を学ぶ。

第28回-第30回 格差の分析

Pikettyの新著"Capital and Ideology"の第1章から第3章を読み、格差分析の最先端を学ぶ。

課題となるテキストと副読本としてキンドルバーガーの『大不況下の世界 1929-1939』の通読が事前必要である。テキスト、副読本を事前学習として目安として2時間読んでおく。

授業時に指定された課題を事後学習として1時間で解く。重要なトピックについて数回の提出課題があります。

提出課題の内容(100%)で評価する 1) Essays on the Great Depression, by B. Bernanke, Princeton Univ. Press. (邦訳『大恐慌論』(日本経済新聞出版社))

2) 『国家は破綻する』、カーメン・M ラインハート, ケネス・S ロゴフ著, 日経BP

3) The Vanishing Middle Class, by Peter Temin, MI

T Press.

4) Immigration Economics, by George Borjas, Harvard University Press.

2022年度 前期～後期

4.0単位

北米経済論特別演習 (1年次)

中村 亨

< 授業の方法 >

講義と演習

< 授業の目的 >

大恐慌(Great Depression)と2007年以降の大収縮(Great Contraction)の比較を行う。

米国の所得格差(income inequality)を中間層の没落の観点から考察する。

移民の米国における賃金、雇用、財政に与えるインパクトを計量的手法で分析する。

< 到達目標 >

米国の経済成長と金融との相互依存をDSGEモデルにより研究し、経済政策の有効性を検討することができる。

米国中間層の没落の要因を 技術、貿易、政治の側面から理解することができる。

移民の米国に与える影響を計量的手法で分析することができる。

< 授業のキーワード >

大恐慌、中間層(middle class)、所得格差(income inequality)、移民

< 授業の進め方 >

毎回、課題とする論文を中心に議論し、数式の展開も含めマクロ経済学の最先端のトピックを理解できるようにすすめていく。

< 履修するにあたって >

労働経済学、マクロ経済学及び計量経済学の基礎知識があることが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

大恐慌と近年の世界金融危機を学ぶ意義

格差のメカニズムを学ぶ意義

移民の経済学を学ぶ意義

< 参考図書 >

第2回-第3回

< 授業計画 >

第4回から第5回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depression(第3章)を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第6回-第7回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depression(第4章)を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第8回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第1章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第9回-第10回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第2章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第11回-第12回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第3章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第13回-第14回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第4章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第15回-第16回 移民の経済学

Borjasの「Immigration Economics」(第5章)を精読し、移民の賃金・雇用・財政に与える効果に関する研究成果を修得する。

第17回-第19回 移民の経済学

Borjasの移民データベースを使った移民の賃金、雇用、財政に与える影響に関する実証分析(演習)を行う。

第20回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Autorの論文"Skills, Tasks, and Technologies: Implications for Employment and Earnings"(Handbook of Labor Economics Vol. 4)を精読して、米国における、IT、ロボット、人工知能が雇用をどのように変容させるかを学ぶ。

第21回-第23回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Autorの論文"Skills, Tasks, and Technologies: Implications for Employment and Earnings"(Handbook of Labor Economics Vol. 4)を精読して、米国における、IT、ロボット、人工知能が雇用をどのように変容させるかを学ぶ。

第24回-第25回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Restrepoの"The wrong kind of AI? AI and the future of labor demand"を精読してAIと雇用の最先端の分析を学ぶ。

第26回-第27回 IT、ロボット、格差の分析

Acemoglu & Restrepoの"The wrong kind of AI? AI and the future of labor demand"を精読してAIと雇用の最先端の分析を学ぶ。

第28回-第30回 格差の分析

Pikettyの新著"Capital and Ideology"の第1章から第3章を読み、格差分析の最先端を学ぶ。

課題となるテキストと副読本としてキンドルバーガーの

『大不況下の世界 1929-1939』の通読が事前に必要である。テキスト、副読本を事前学習として目安として2時間読んでおく。

授業時に指定された課題を事後学習として1時間で解く。重要なトピックについて数回の提出課題があります。

提出課題の内容(100%)で評価する 1) Essays on the Great Depression, by B. Bernanke, Princeton Univ. Press. (邦訳『大恐慌論』(日本経済新聞出版社))

2) 『国家は破綻する』、カーメン・M ラインハート, ケネス・S ロゴフ著, 日経BP

3) The Vanishing Middle Class, by Peter Temin, MIT Press.

4) Immigration Economics, by George Borjas, Harvard University Press.

2022年度 前期～後期

4.0単位

北米経済論特別演習 (2年次)

中村 亨

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

大恐慌(Great Depression)と2007年以降の大収縮(Great Contraction)の比較を行う。

米国の所得格差(income inequality)を中間層の没落の観点から考察する。

移民の米国における賃金、雇用、財政に与えるインパクトを計量的手法で分析する。

< 到達目標 >

米国の経済成長と金融との相互依存をDSGEモデルにより研究し、経済政策の有効性を検討することができる。

米国中間層の没落の要因を 技術、貿易、政治の側面から理解することができる。

移民の米国に与える影響を計量的手法で分析することができる。

< 授業のキーワード >

大恐慌、中間層(middle class)、所得格差(income inequality)、移民

< 授業の進め方 >

毎回、計量経済学の習得とstataやmatlabのcodeを読み込む演習を行う。論文を中心に議論し、数式の展開も含め最先端のトピックを理解できるようにすすめていく。

< 履修するにあたって >

労働経済学、マクロ経済学及び計量経済学の基礎知識があることが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの輪読をするためのイントロ講義を行う。

< 参考図書 >

第2回-第3回

< 授業計画 >

第4回から第5回 人的資本の基礎理論

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第2章、Human Capital and Signalingを中心に学ぶ。

第6回-第7回 人的資本の基礎理論

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第3章、Externalities and Peer Effectsを中心に学ぶ。

第8回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第4章、Moral Hazard modelを中心に学ぶ。

第9回-第10回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第5章、Moral Hazard : Applicationsを中心に学ぶ。

第11回-第12回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第6章、Incomplete Contractsを中心に学ぶ。

第13回-第14回 インセンティブ・エージェンシー・効率賃金

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第7章、Efficiency Wage Modelsを中心に学ぶ。

第15回-第16回 Investment in Skills

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第8章、Traning Investmentsを中心に学ぶ。

第17回-第19回 Investment in Skills

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第9章、Skills and Learningを中心に学ぶ。

第20回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第10章、部分均衡モデルを中心に学ぶ。

第21回-第23回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第11章、基本均衡モデルを中心に学ぶ。

第24回-第25回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第12章、仕事の構成を中心に学ぶ。

第26回-第27回 サーチと失業

Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economicsの第13章、賃金の設定とサーチを中心に学ぶ。

第28回-第30回 全体のまとめ

全体の復習

課題となるテキストの通読が事前が必要である。 テキストを事前学習として目安として2時間読んでおく。授業時に指定された課題を事後学習として1時間で解く。重要なトピックについて数回の提出課題があります。提出課題の内容(100%)で評価する Acemoglu and Autor著、Lectures in Labor Economics (PDFファイル)

2022年度 前期～後期

4.0単位

北米経済論特別演習 (3年次)

中村 亨

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

米国経済に関する博士論文作成の際に用いる計量経済学・実証分析の手法を修得する。

実証分析に不可欠な因果推論を修得する。

< 到達目標 >

米国の経済成長と金融との相互依存をDSGEモデルにより研究し、経済政策の有効性を検討することができる。

米国経済成長の要因を 技術、貿易、政治の側面から理解することができる。

移民の米国に与える影響を因果推論を含めた計量的手法で分析することができる。

操作変数法、差分の差分、回帰不連続デザイン、分位点回帰モデルといった因果推論的手法を運用することができる。

< 授業のキーワード >

大恐慌、中間層(middle class)、所得格差(income inequality)、移民

< 授業の進め方 >

毎回、計量経済学の習得とstataやmatlabのcodeを読み込む演習を行う。論文を中心に議論し、数式の展開も含め最先端のトピックを理解できるようにすすめていく。

< 履修するにあたって >

労働経済学、マクロ経済学及び計量経済学の基礎知識があることが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の内容を確認するためのイントロ講義を行う。

< 参考図書 >

第2回-第3回

< 授業計画 >

第4回から第5回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第1章から第3章の内容を確認する。

第6回-第7回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第1章から第3章の内容を確認する。

第8回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第1章から第3章の内容を確認する。

第9回-第10回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第4章の内容を確認し、操作変数とLATEの一般化を学ぶ。

第11回-第12回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第4章の内容を確認し、操作変数とLATEの一般化を学ぶ。

第13回-第14回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第5章の内容を確認し、パネルデータ、差分の差分の手法を学ぶ。

第15回-第16回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第5章の内容を確認し、パネルデータ、差分の差分の手法を学ぶ。

第17回-第19回 因果推論の基礎理論

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第5章の内容を確認し、パネルデータ、差分の差分の手法を学ぶ。

第20回 因果推論の応用

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第6章の内容を確認し、回帰不連続デザインを中心に学ぶ。

第21回-第23回 因果推論の応用

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第6章の内容を確認し、回帰不連続デザインを中心に学ぶ。

第24回-第25回 因果推論の応用

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第6章の内容を確認し、回帰不連続デザインを中心に学ぶ。

第26回-第27回 因果推論の応用

Anglist and Pischke著、Mostly Harmless Econometrics の第6章の内容を確認し、回帰不連続デザインを中心に学ぶ。

第28回-第30回 全体のまとめ

全体の復習

課題となるテキストの通読が事前が必要である。 テキ

ストを事前学習として目安として2時間読んでおく。
授業時に指定された課題を事後学習として1時間で解く。
重要なトピックについて数回の提出課題があります。
提出課題の内容(100%)で評価する Anglist and P
ischke著、Mostly Harmless Econometrics (NTT出版)

2022年度 前期～後期

4.0単位

北米経済論特殊講義

中村 亨

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

大恐慌(Great Depression)と2007年以降の大収縮(Great
Contraction)の比較を行う。

米国の所得格差(income inequality)を中間層の没落の
観点から考察する。

< 到達目標 >

米国の経済成長と金融との相互依存をDSGEモデルにより
研究し、経済政策の有効性を検討することができる。

米国中間層の没落の要因を 技術、 貿易、 政治の側
面から理解することができる。

< 授業のキーワード >

大恐慌、中間層(middle class)、所得格差(income i
nequality)、金融危機

< 授業の進め方 >

講義形式にて、課題とする論文を中心に議論し、数式の
展開も含めマクロ経済学の最先端のトピックを理解でき
るようにすすめていく。

< 履修するにあたって >

大恐慌・格差の研究では最新のトピックを扱う。計量経
済学の基本を習得しているのが望ましい。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

イントロダクション

< テキスト >

大恐慌と近年の世界金融危機を学ぶ意義

格差のメカニズムを学ぶ意義

< 参考図書 >

第2回-第4回

< 授業計画 >

第5回-第6回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depressionの第4章
-第6章を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第7回-第8回 大恐慌論の基礎

バーナンキのEssays on the great Depressionの第7章
-第9章を精読し、大恐慌論の基礎を学ぶ。

第9回-第10回 金融危機の基礎

ラインハート、ロゴフの『国家は破綻する』の第1章-
第3章を精読し、2007年以降の世界金融危機の理論的フ
レームワーク、及び基礎を学ぶ。

第11回-第12回 金融危機の基礎

ラインハート、ロゴフの『国家は破綻する』の第4章-
第6章を精読し、2007年以降の世界金融危機の理論的フ
レームワーク、及び基礎を学ぶ。

第13回-第14回 金融危機の基礎

ラインハート、ロゴフの『国家は破綻する』の第7章-
第9章を精読し、2007年以降の世界金融危機の理論的フ
レームワーク、及び基礎を学ぶ。

第15回-第17回 金融危機の基礎

ラインハート、ロゴフの『国家は破綻する』の第10章
-第12章を精読し、2007年以降の世界金融危機の理論
的フレームワーク、及び基礎を学ぶ。

第18回-第20回

金融危機の基礎

ラインハート、ロゴフの『国家は破綻する』の第13章
-第15章を精読し、2007年以降の世界金融危機の理論
的フレームワーク、及び基礎を学ぶ。

第21回-第22回 金融危機の基礎

ラインハート、ロゴフの『国家は破綻する』の第16章
-第17章を精読し、2007年以降の世界金融危機の理論
的フレームワーク、及び基礎を学ぶ。

第23回-第24回 金融危機分析の総括

Brunnermeier and Sannikov(2014), "A Macroeconomic
Model with a Financial Sector," American Economic
Review, 104(2)の論文を読み、金融部門をマクロモデ
ルに明示的に取り込んだ画期的なアイデアを学ぶ。同じ
目的で書かれたその他の論文も紹介し、金融危機分析の
最先端を展望できるようにする。

第25回 米国格差分析

Peter Temin著『The Vanishing Middle Class』を中心
に、米国の格差の要因を 技術、 貿易、 政治の観点
から考察する。

第26回 米国格差分析

Peter Temin著『The Vanishing Middle Class』を中心
に、米国の格差の要因を 技術、 貿易、 政治の観点
から考察する。

第27回 米国格差分析

Thomas Pikettyの『21世紀の資本』を題材に格差分析の
ツールを身につける。

第28回-第29回 米国格差分析

Piketty & Saezのデータベースを使って格差分析の実習
を行う。

第30回 米国格差分析

Piketty & Saezのデータベースを使って格差分析の実習
を行う。

課題となるテキストと副読本としてキンドルバーガーの

『大不況下の世界 1929-1939』の通読が事前に必要である。テキスト、副読本を事前学習として目安として2時間読んでおく。

授業時に指定された課題を事後学習として1時間で解く。重要なトピックについて数回の提出課題があります。

提出課題の内容(100%)で評価する。1) Essays on the Great Depression, by B. Bernanke, Princeton Univ. Press. (邦訳『大恐慌論』(日本経済新聞出版社))

2) 『国家は破綻する』、カーメン・M ラインハート, ケネス・S ロゴフ著, 日経BP

3) The Vanishing Middle Class, by Peter Temin, MIT Press.

2022年度 前期～後期

4.0単位

マーケティング論演習 (1年次)

辻 幸恵

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

マーケティング論の理論と応用を学ぶが学部よりもより高度な専門知識を習得することを目的とする。具体的には理論は先行研究の論文や本から、修士論文のテーマとなるようなものを探索する。先行研究の論文はマーケティングの基礎となる部分の知識の補充となるからである。また、それらの原因を比較、理解、考察し、自ら設定した課題を総合的に考察することができるようになることを目的とする。実践については、会社見学や聞き取り調査も含む。本科目の担当者は大学以外での実務経験がある。主に洋服など女性が好む商品のマーケット予測などをしてきた。

< 到達目標 >

1. 経済学・経営学の高度な専門知識を習得するために、マーケティング論の理論と実践を学ぶ。
2. 企業におけるマーケティングの有用性について事例から考察し、設定した課題を総合的に考察できる力を養う。
3. 社会貢献を考える、すなわちソーシャルマーケティングについて理解する。
4. 修得した知識をもとに、社会に向けて的確に伝えることができるように、学会などで発表をする。また会社見学や聞き取り調査も実施し、現代の市場において確かな洞察ができる力を養う。

< 授業のキーワード >

ブランド、マーケティング、リサーチ、ケーススタディ、消費者心理

< 授業の進め方 >

連続して前半と後半で1つずつのテーマを終えていく。1年次は幅広くまた深く先行研究を学ぶ。日本の論文だ

けではなく、英語の論文も対象とする。授業では先行研究である理論を先に学習し、その後にケーススタディを学ぶ。ケーススタディについては論文で学ぶだけではなく、会社見学や聞き取り調査も実践する。

< 履修するにあたって >

英語論文は事前に単語や意味を調べ、読んでおくこととする。ケースは特別な企業を取り上げているわけではないので、企業を知らない場合は、事前その企業については調べておくようにする。

< 提出課題など >

1回目

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

マーケティング論演習としては理論と実践(ケーススタディ)の両輪で授業をすすめる。授業の具体的なすすめかた、評価方法、授業内容の理解度のチェック方法など、初回の本講義内で説明をする。また、マーケティング論の基礎は学習しているはずではあるが、今回から18回目までで基礎的な部分の復習をおこなう。

< 参考図書 >

2回目

< 授業計画 >

3回目 戦略計画とプロセス

無印良品のケーススタディをおこなう。また、日本におけるマーケティング環境の変化、ポストモダンのマーケティングについて学ぶ。

4回目 リレーションシップ・マーケティング

リレーション・シップマーケティングの概念について学び、同時にネットワークとマーケティングのパラダイム革新についても理解する。つまり最近の日本の現状がここで理解できる。

5回目 コカ・コーラウエストのケース

コカ・コーラウエストのケースを取り上げる。ここで消費者行動とその概念モデルについても学ぶ。

6回目 消費者の意思決定プロセスについて

消費者の意思決定プロセスについて学ぶ。外的影響要因と個人差要因について理解する。

7回目 タカラcanチューハイのケース

タカラcanチューハイのケースを取り上げる。ここでマーケティングにおけるSTPについて具体的に学ぶ。

8回目 マーケティングのセグメンテーションについて

マーケティングのセグメンテーション、ターゲティング、ポジショニングについて学ぶ。

9回目 小括として2回目から8回目までの復習をする

マーケティングの概念、環境変化、関係性マーケティング、消費者行動と概念モデルなど重点的に復習をする。

10回目 ブランドについて

江崎グリコの商品である「ポッキー」を取り上げる。ブランドとは何かという定義からはじまり、ブランディン

グ(ブランド構築)の始まりについて説明をする。

11回目 ブランド評価について

使用者拡大とブランドについて学び、競争優位を考察する。また、ブランドの構成要素をふまえて、ブランドのメカニズムを理解する。

12回目 ブランド・ロイヤルティとコミュニティについて

ブランドへの消費者の態度や行動について学ぶ。ブランド・リレーションシップを説明するので、その構築と測定について理解する。

13回目 ブランド・コミュニティの管理について

消費者にとってのブランド・コミュニティの役割と企業にとってのブランド・コミュニティについて学ぶ。これを価値共創という。そしてコミュニティへの参加について理解する。

14回目 ハンドメイド、雑貨の広告戦略について

ハンドメイドという大量生産ではない商品の広告戦略について学ぶ。同時に雑貨と呼ばれる多品種多種類の製品をどのように企画し、あるいは統一的なコンセプトで売り出すのかについても事例で説明をする。ハンドメイドの販売店として「手作り市場」を見学する。

15回目 小括として10回目から14回目までをまとめる
ブランドとは何かという定義からはじまった。定義、概念、そして日本の市場、また、ブランド構築についてのまとめをおこなう。

16回目 後期のガイダンス

前期の学習を思い出すと共に、後期の授業の流れについて説明をする。評価方法、発表方法は前期と同じであるが、後期初回であるので確認のために再度、説明をする。

17回目 パナソニック「GOPAN」のケース

パナソニックの「GOPAN」を取り上げる。GOPANはお米からパンができるという世界初の商品である。このケースを学び、新市場の創出について考察する。

18回目 製品戦略として便益の束としての製品について製品概念を復習する。これはマーケティングの基本であるので思い出してほしい。そこから製品の分類基準と類型を学ぶ。

19回目 製品ミックスと製品差別化について

製品差別化の次元としてサービスの特性、知覚品質を理解する。また、そこから知覚品質の創造について考察する。

20回目 新製品の企画・開発について

ブルボンの新製品開発の事例を学ぶ。コンセプトの創出にはじまり、製品と戦略立案、試作品のテストなど、市場への導入までを学ぶ。

21回目 製品のライフサイクルについて

製品のライフサイクルとマーケティングとの関係を理解する。ここではP.コトラーの論文を引用して学ぶ。

22回目 場のマネジメントのケーススタディ

百貨店内の特設会場などの非日常的空間での販売につい

て具体的事例を学ぶ。商品としては雑貨を考え、場の空間と商品とのバランスや顧客目線などをふまえ、どのような空間配置が最適かをシュミレーションする。

23回目 小括として17回目から22回目までの復習をする
製品を中心に学んできたことを復習する。戦略、開発、ライフサイクルなどの重点事項をまとめる。

24回目 マクドナルドのケース

企業には成功事例と失敗事例がある。今回はマクドナルドをとりあげて、成功と失敗のそれぞれの事例を分析する。なお、視点としては商品の成功などではなく、ビジネスモデルとしての成否を論じる。

25回目 価格戦略の基本について

コスト志向価格戦略について学ぶ。具体的にはマークアップ価格設定やターゲットリターン価格設定を理解する。そして損益分岐点の活用を考察する。

26回目 競争志向の価格戦略について

市場浸透価格、上澄み吸収価格、補完的価格などのバリエーションを学ぶ。そこからメーカーの価格政策を考察する。

27回目 消費者志向の価格戦略について

需要の価格弾力性について理解する。また差別価格法、知覚価値価格設定についても学ぶ。

28回目 消費者心理からみた価格受容

消費者の目線からみた価格の受容範囲とその推定方法を学ぶ。過去の市場データの分析、顧客へのリサーチ方法について説明する。

29回目 小括として24回目から29回目をまとめる

価格をテーマにその戦略や消費者にとっての需要範囲について復習をする。ここで価格とこだわりについて消費者心理を考察する

30回目 今後の研究の方向性と問題点について

1年間でブランド、製品、価格を中心に学んできた。またケースも取り上げてきた。その中で問題点は何か、という意識を持ってもらうために、最終時間を活用して、日本社会の今後の市場について考察する。

マーケティングに関する基本的な書物を読んでおくこと(わからない場合はこちらから指定する)

授業内で課題を出すので、その課題は授業内に仕上げてもその場で提出する。

評価は以下の3つの方法の総計とする。

1. 毎回の授業内で課題を出すのでその場で解答を作成する。

2. ディスカッション・タイムでの発言を加算する。

3. 前期と後期のまとめの時間内で理解度をチェックする課題を点数化する。

配点は1の課題については4点(4点×13回)で52点。

2のディスカッション・タイムについては1点~6点の配点とする。前期の授業内で3回実施する(6点×3回)で18点。後期の授業内で6回実施する(3点×6回)で18点。

3の最終的な理解度をチェックする課題については1点

～30点の配点とする。

なお、前期のディスカッション・タイムの予定は6、7、8回目を予定している。15回目は理解度のチェックをかねて実施する。後期のディスカッション・タイムの予定は19、20、21、23、27、28回目を予定している。授業内にて適宜プリントを配布する。

和田充夫監訳『マーケティング原理 第9版』ダイヤモンド社、2003年

2022年度 前期～後期

4.0単位

マーケティング論演習（2年次）

辻 幸恵

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

マーケティング論の理論と実践をさらに深く学ぶ。具体的には1年次と同様に理論は先行研究の論文や本をから、実践はケーススタディから選択するが、専門的な部分を優先する。先行研究の論文はマーケティングの応用となる部分の知識の習得となる。また、それらの原因を比較、理解、考察することを目的とする。実践については、店舗見学や聞き取り調査も含み、さらにはバイヤーや店長などの運営側の聞き取りも実施する。本科目の担当者は大学以外での実務経験がある。主に洋服など女性が好む商品のマーケット予測などをしてきた。

< 到達目標 >

1. 経済学・経営学の高度な専門知識を習得するために、マーケティング論の理論と実践を学ぶ。
2. 企業におけるマーケティングの有用性について事例から考察し、設定した課題を総合的に考察できる力を養う。また研究に役立つ事例を自ら集め、考察できる能力を養う。
3. 社会貢献を考える、すなわちソーシャルマーケティングについて理解する。
4. 修得した知識をもとに、社会に向けて的確に伝えることができるように、論文を作成する。また会社見学や聞き取り調査も実施し、現代の市場において確かな洞察ができる力を養う。

< 授業のキーワード >

ブランド、マーケティング、リサーチ、ケーススタディ、消費者心理

< 授業の進め方 >

連続して2回ないしは3回で1つのテーマを終えていく。後半はブランドに焦点をあて、その後、日本と海外の企業のマーケティングを学ぶために販売促進、戦略にもふれる。授業では先行研究である理論を先に学習し、その後ケーススタディを学ぶ。ケーススタディについては論文で学ぶだけではなく、店舗見学や聞き取り調査も実

践する。

< 履修するにあたって >

ケースは特別な企業を取り上げているわけではない。次回の予告をするので、企業を知らない場合は、事前その企業については調べておくようにする。

< 提出課題など >

1回目

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

マーケティング論演習としては理論と実践（ケーススタディ）の両輪で授業をすすめる。授業の具体的なすすめかた、評価方法、授業内容の理解度のチェック方法など、初回の本講義内で説明をする。また、マーケティング論の基礎は学習しているはずではあるが、今回から4回目までで基礎的な部分の復習をおこない、さらにブランド論や消費者心理の基礎も復習する。

< 参考図書 >

2回目

< 授業計画 >

3回目 ユニクロのケース

ユニクロのケーススタディをおこなう。また、日本におけるマーケティング環境の変化、ポストモダンのマーケティングについて学ぶ。ユニクロという身近なブランドが日本社会で、若者にどのようにとらえられているのかわかり、変化しつつある消費者の意識を学ぶ。消費者の意識については過去のブランド研究を参考とする。

4回目 消費者志向のケースについて学ぶ

コンビニで若者に人気の商品に対する消費者のニーズについて学び、同時にネットワークとマーケティングのパラダイム革新についても理解する。ここでは単純に店頭販売だけではなく、その告知方法をSNSでどのように発信しているのかを同時に知り、マーケティングの4Pである販売促進に焦点を当てる。過去の広告に関する研究と現在、実施されている告知方法を比較することにより、より高度な研究手法を知ることになる。

5回目 スイーツのメーカーのケース

日本の菓子の老舗である虎屋とたねやを取り上げる。ここで消費者行動とその概念モデルについても学ぶ。先行研究からスイーツに関しては商品だけではなく、消費者の嗜好の変化について学び、より専門的な視点から売れ筋商品開発を議論する。

6回目 伊藤園のケースについて学ぶ

伊藤園のケースから消費者の意思決定プロセスについて学ぶ。外的影響要因と個人差要因について理解する。

7回目 サントリーのケースについて学ぶ

サントリーの社会貢献につながる事業を取り上げる。ここでマーケティングにおける社会性について具体的に学ぶ。ソーシャルマーケティングの事例となる。ソーシャルマーケティングは今後、学んだことを社会に還元する

役割を担うと考えられる。

8回目 不二家のケースについて学ぶ

前回に老舗の虎屋やたねやからマーケティングのセグメンテーション、ターゲティング、ポジショニングについて学んだが、今回はバレンタインというチョコレートのギフトをしかけた不二家に関する戦略を学ぶ。また、ペこちゃんという企業キャラクターを使って不祥事を乗り越えたりリスクヘッジの事例についても学ぶ。そのことによって菓子戦略を社会現象にまで拡大した原因を考察することができる。

9回目 小括として2回目から8回目までの復習をする

ケーススタディから、社会と企業の環境変化、消費者との関係性、消費者行動と概念モデルなど重点的に復習をする。そのことによって、経済学・経営学に関するより高度な専門的知識を構築し、個々の研究を進めることができるからである。

10回目 イベントとブランドについて

バレンタインの商品であるチョコレートを取り上げる。ブランドとは何かという定義からはじまり、ブランディング(ブランド構築)の始まりについて説明をする。

11回目 ブランド評価について

使用者拡大とブランドについて学び、競争優位を考察する。また、ブランドの構成要素をふまえて、ブランドのメカニズムを理解する。

12回目 ブランド・ロイヤルティとコミュニティについて

ブランドへの消費者の態度や行動について学ぶ。ブランド・リレーションシップを説明するので、その構築と測定について理解する。広告による消費者の反応についても学ぶ。

13回目 ブランド・コミュニティの管理について

消費者にとってのブランド・コミュニティの役割と企業にとってのブランド・コミュニティについて学ぶ。これを価値共創という。そしてコミュニティへの参加について理解する。

14回目 ブランド構築とエクイティンについて

ハンドメイドという大量生産ではない商品のブランド戦略について学ぶ。同時に雑貨と呼ばれる多品種多種類の製品をどのように企画し、あるいは差別化で売り出すのかについても事例で説明をする。

15回目 小括として10回目から14回目までをまとめる

ブランドとは何かという定義からはじまった。定義、概念、そして日本の市場、また、ブランド構築についてのまとめをおこなう。

16回目 後期のガイダンス

前期の学習を思い出すと共に、後期の授業の流れについて説明をする。評価方法、発表方法は前期と同じであるが、後期初回であるので確認のために再度、説明をする。

17回目 製品を中心としたマーケティングの進化のケース

パナソニックの「GOPAN」を取り上げる。GOPANはお米からパンができるという世界初の商品である。このケースを学び、新市場の創出について考察する。

18回目 製品戦略として便益の束としての製品について製品の概念を復習する。これはマーケティングの基本であるので思い出してほしい。そこから製品の分類基準と類型を学ぶ。

19回目 製品ミックスと製品差別化について

製品差別化の次元としてサービスの特性、知覚品質を理解する。また、そこから知覚品質の創造について考察する。

20回目 新製品の伝え方・広告について

明治の新製品開発の事例を学ぶ。コンセプトの創出にはじまり、製品と戦略立案、試作品のテストなど、市場への導入、そして広告戦略を分析する。

21回目 製品のライフサイクルとそれぞれの広告について

製品のライフサイクルとマーケティングとの関係を理解する。ここではP.コトラーの論文を引用して学ぶ。

22回目 場のマネジメントのケーススタディ

百貨店内の特設会場などの非日常的空間での販売について具体的事例を学ぶ。商品としては雑貨を考え、場の空間と商品とのバランスや顧客視線などをふまえ、どのような空間配置が最適かをシュミレーションする。

23回目 小括として17回目から22回目までの復習をする製品を中心に学んできたことを復習する。戦略、開発、ライフサイクルなどの重点事項をまとめる。

24回目 マクドナルドの広告戦略について

企業には成功事例と失敗事例がある。今回はマクドナルドをとりあげて、成功と失敗のそれぞれの事例を分析する。なお、視点としては商品の成功などではなく、ビジネスモデルとしての成否を論じる。

25回目 価格戦略の基本について

コスト志向価格戦略について学ぶ。具体的にはマークアップ価格設定やターゲットリターン価格設定を理解する。そして損益分岐点の活用を考察する。

26回目 競争志向の価格戦略と広報戦略について

市場浸透価格、上澄み吸収価格、補完的価格などのバリエーションを学ぶ。そこからメーカーの価格政策を考察する。

27回目 消費者志向の価格戦略と伝える流儀について

需要の価格弾力性について理解する。また差別価格法、知覚価値価格設定についても学ぶ。また、価格に対する消費者心理を学び、いかに伝えることが大事なのか、どのように誰にいつ伝えるべきなのかを考察する。

28回目 消費者心理からみた価格受容と情報の共有について

消費者の視線からみた価格の受容範囲とその推定方法を学ぶ。過去の市場データの分析、顧客へのリサーチ方法について説明する。

29回目 小括として24回目から29回目をまとめる
広告と価格をテーマにその戦略や消費者にとっての需要
範囲について復習をする。ここで広告に接する消費者心
理を考察する

30回目 今後の研究の方向性と問題点について
1年間でブランド、製品、広告、価格を中心に学んできた。
また前半はケースも取り上げてきた。その中で問題
点は何か、という意識を持ってもらうために、最終時間
を活用して、世界に今後の市場について考察する。

マーケティングに関する基本的な書物を読んでおくこと
(わからない場合はこちらから指定する)

最初にテーマにそって授業内容を説明する。45分後に授
業内で課題を出すので、その課題は授業内に仕上げても
その場で提出する。フィードバックを兼ねて、後半はその
課題にそって議論をする。そのことによって、より高度
で専門的な内容に踏み込み、明確にテーマの問題などを
意識することができる。

評価は以下の3つの方法の総計とする。

1. 毎回の授業内で課題を出すのでその場で解答を作成
する。
2. ディスカッション・タイムでの発言を加算する。
3. 前期と後期のまとめの時間内で理解度をチェックす
る課題を点数化する。

配点は1の課題については4点(4点×13回)で52点。
2のディスカッション・タイムについては1点~6点の配
点とする。前期の授業内で3回実施する(6点×3回)で1
8点。後期の授業内で6回実施する(3点×6回)で18点。
3の最終的な理解度をチェックする課題については1点
~30点の配点とする。

なお、前期のディスカッション・タイムの予定は6、7、
8回目を予定している。15回目は理解度のチェックをか
ねて実施する。後期のディスカッション・タイムの予定
は19、20、21、23、27、28回目を予定している。 辻幸
恵著『こだわりと日本人 - 若者の新生活感：選択基準と
購買行動 - 』白桃書房、2013年。2800円(税別)
陶山計介、鈴木雄也、後藤こず恵編『よくわかる現代マ
ーケティング』ミネルヴァ書房、2017年

2022年度 前期~後期

4.0単位

マーケティング論特殊研究

辻 幸恵

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

マーケティング論の理論と実践を学ぶことによって経済
学・経営学の高度な専門知識を習得する。具体的には
ケーススタディから成功要因と失敗要因を比較し、それ

らの原因を比較、理解、考察することを目的とする。こ
のことによって、研究者として基本的な研究を行う態度が
できる力が養えるからである。なお、本科目の担当者は
大学以外での実務経験がある。主に洋服など女性が好む
商品のマーケット予測などをしてきた。

< 到達目標 >

1. 経済学・経営学の高度な専門知識を習得するために、
マーケティング論の理論と新しい研究を学び、社会の
発展に貢献できる能力を身につける。
2. 企業におけるマーケティングの有用性について事例か
ら考察し、設定した課題を総合的に考察できる力を養う。
また研究に役立つ事例を自ら集め、考察できる能力を養
うとともに、社会的な意味のある研究を模索する。
3. 社会貢献を考える、すなわちソーシャルマーケティング
について理解すると共に、今後の社会生活にいかにかソ
ーシャルマーケティングが活用できるのかを提案できる
能力を身につける。
4. 修得した知識をもとに、社会に向けて的確に伝えるこ
とができるように、論文を作成する。また会社見学や聞
き取り調査も実施し、現代の市場において確かな洞察が
できる力を養う。

< 授業のキーワード >

マーケティング、リサーチ、ケーススタディ、消費者

< 授業の進め方 >

毎回、異なる企業を例示し、幅広く日本の企業のマーケ
ティングを学ぶ。また論文を読む場合もある。授業では
理論を先に学習し、その後にケーススタディを学ぶ。ケ
ーススタディについてディスカッションをした後に、簡
単な課題を用意するので、解答を授業内で仕上げる。

< 履修するにあたって >

ケースは特別な企業を取り上げているわけではない。次
回の予告をするので、企業を知らない場合は、事前その
企業については調べておくようにする。

< 提出課題など >

1回目

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

マーケティング論特殊講義としては理論と実践(ケース
スタディ)の両輪で授業をすすめる。授業の具体的なす
めかた、評価方法、授業内容の理解度のチェック方法
など、初回の本講義内で説明をする。また、マーケティ
ング論の基礎は学習しているはずではあるが、今回から
4回目までで基礎的な部分の復習をおこなう。

< 参考図書 >

2回目

< 授業計画 >

3回目 マーケティング論の基礎の復習(価格)

マーケティングの4Pのうち、今回は価格について説明
をする。価格破壊、価格創造など、価格にまつわるキー

ワードは多い。特に価格破壊については1970年代～1980年に飛躍的に成長した企業を例示しながら、大衆と呼ばれた人々の価格への意識変化について説明をする。

4回目 マーケティング論の基礎の復習（広告）

マーケティングの4Pのうち、今回は広告について説明をする。インターネットの普及によって、昨今の広告はネット広告が盛んであるが、広告そのものは、古い時代から存在している。近代の広告の変遷と広告の重要性について学習をする。また具体例としてキャラクター効果を事例として学ぶ。教科書（第4章 キャラクター・マーケティング）

5回目 ジンメルの理論と社会・地域の差別化について
ドイツの社会学者のジンメルは同調と差別化について述べている。この理論に基づいて地域を事例とし、現在でもその理論が通じていること、あるいは日本では差別化が先行していることなどを説明する。教科書（第2章 地域マーケティング）

6回目 ギフトの戦略について

不二家などの菓子メーカーの販売戦略について説明をする。バレンタインに対する消費者ニーズについてディスカッションをする。その後、各企業が顧客ニーズにどのように対応しているのかを説明し、過去からの顧客ニーズの変化について考察する。教科書（第3章 ギフト・マーケティング）

7回目 日本のアート販売の改革について

日本のアートの要素を包括する商品について取り上げる。レトロブームもあったが、その中でアートの売り方が成功したものと失敗したものを例示し、成功要因と失敗要因を比較する。今回もディスカッションを実施し、より考察を深める。教科書（第5章 アート・マーケティング）

8回目 前期前半のまとめ

マーケティングの基礎（4P）の地域、キャラクター、ギフト、アートの各マーケティングについて学んできた。今回は復習をしてそれらを総括して、今後の売り方には何が必要であるのかを共通テーマとして、各自の意見を発表する。これは発表点として評価にも加える。また社会の中での動きを踏まえソーシャル・マーケティングを学ぶ。教科書（第6章 ソーシャル・マーケティング）

9回目 理論と情報の伝播

ここからは消費者の変化について学ぶ。最初にもづくりの手法が多様化してきた現在において、どのような手法がどの対象に影響があるのかを学ぶ。ジンメルのトリクルダウン・セオリーを中心にどのような情報やモノの流れができていくのかを確認する。そして消費者側が製作者になるという位置づけの変化を把握する。教科書（第7章 ものづくりをする消費者）

10回目 販売効果について

広告の効果測定法については先行研究がいくつもある。その中からいくつかを選択して、売り方が人々に与える

影響の度合いについて学ぶ。また、最近はブログやツイッターなど個人間の情報のやり取りもあるので、それらを含めて考察する。教科書（第8章 売り手になる消費者）

11回目 場における心理について

前回の消費者の変化に続き、場面による消費者の心理の変化について述べる。これは刺激と反応の理論を用いる。ただし、今回は単純な刺激だけではなく、場面情報の蓄積、知覚、認知など心理学の分野も引用しながら、消費者心理を考察する。教科書（第9章 「ハレ」の場を意識する消費者と和への回帰）

12回目 消費者の変化について

所有することを求めない消費者の行動や心理について説明をする。教科書（第10章 消費者の変化と社会のニーズ）

13回目 ファッション業界の広告戦略について

前回の化粧品に引き続き、ファッションの世界でも広告戦略は重要である。ユニクロ、無印良品などと海外有名ブランドとの広告戦略の相違点について学ぶ。

14回目 ハンドメイド、雑貨の広告戦略について

ハンドメイドという大量生産ではない商品の広告戦略について学ぶ。同時に雑貨と呼ばれる多品種多種類の製品をどのように企画し、あるいは統一的なコンセプトで売り出すのかについても事例で説明をする。この授業の終わりに次回の発表課題を各自が選択をする。発表課題は前半の学習範囲から選択する。

15回目 前期のまとめ

前期の最後の時間なので、課題について各自が発表をおこなう。これは発表点として評価に加点する。

16回目 後期のガイダンス

前期の学習を思い出すと共に、後期の授業の流れについて説明をする。評価方法、発表方法は前期と同じであるが、後期初回であるので確認のために再度、説明をする。

17回目 顧客志向のマーケティング

顧客満足、顧客感動はどのようにすれば生じてくるのかを学ぶ。事例としてディズニーランドのサービスやホテルのサービスを学習する。また、身近な飲食店のサービスも例示して、顧客の気持ちについて考察し、リピーターをつくる戦略について学ぶ。

18回目 顧客ニーズの変化と価値観

チェーン展開をしているファーストフードに対して、個人経営のカフェは独自の世界がある。マニュアル化されたサービスと個のサービスを比較し、現在の顧客ニーズへの対応とニーズそのものの変化、さらには現在人の価値観の変化について学ぶ。

19回目 顧客ニーズと市場提供物について

日本においてのエコ意識や東日本の震災後の若者の意識変化について学ぶ。今回は論文を用意しているので、論文を読み、そこから問題点を整理した後、ディスカッションをする。

20回目 価値観の変化とイベント企画について

2014年は食に関するイベントが流行した。飽食気味の日本において食をテーマにしたイベントが盛況な理由を分析する。これは大阪府吹田市の万博公園でのイベントと東京での食フェスとよばれるイベントを事例とする。前回に続き、問題点をあきらかにした後、ディスカッションをする。

21回目 場のマネジメントについて

前回では場とイベント内容について分析をしたが、「場」に着目して見識を深める。ここでは伊丹敬之著『場のマネジメント - 経営の新パラダイム』をベースに場のマネジメントについて考察する。「場」の創造性についてディスカッションをする。

22回目 場のマネジメントのケーススタディ

百貨店内の特設会場などの非日常的空間での販売について具体的な事例を学ぶ。商品としては雑貨を考え、場の空間と商品とのバランスや顧客視線などをふまえ、どのような空間配置が最適かをシュミレーションする。

23回目 後期における前半のまとめ

顧客満足、顧客感動を生み出す場についてここではディスカッションをする。その後、時間内に課題を出すので、解答を各自が作成し、後期の中間課題とする。

24回目 戦略の基礎について

企業には成功事例と失敗事例がある。今回はマクドナルドをとりあげて、成功と失敗のそれぞれの事例を分析する。なお、視点としては商品の成功などではなく、ビジネスモデルとしての成否を論じる。

25回目 企業戦略、資源配分とポートフォリオ分析

成長戦略を類型し、経営資源の配分、ポートフォリオ分析について学ぶ。企業の成長のためには、市場浸透、市場開発、製品開発、多角化の方向がある。これらを市場成長率と相対市場シェアから考察する。

26回目 消費者データと関与水準の分析

知識と関与の分析フレームについて説明をする。ここでは消費者情報処理の分析モデルを中心に学習をする。これらは概念モデルとして長く論じられてきたが、昨今では、解析モデルとしてあらわされている。

27回目 競争環境の分析

マーケティングと取り巻く環境にはマクロ的な要因である人口動態的環境、経済的環境、政治・法的環境、物的環境、技術的環境、社会・文化的環境があげられる。競争要因としては業界内の競合他社、潜在的参入者と移動の脅威などが考えられる。ここでは競争優位を得るための方策の事例をあげて考察する。また、今回はディスカッションにより、環境要因と競争への戦略について考察する。

28回目 関係性マーケティング

関係性マーケティングが生まれてきた背景から学習し、その重要性について考察する。ここでは概念定義を説明した後、キーワードである信頼、コミットメント、相互

作用、顧客維持などの知識を深める。今回もディスカッションを実施し、顧客の類型による関係性マーケティングについて考える。

29回目 サービス・マーケティング

サービス財の特徴から説明をする。サービスの知覚品質と評価尺度の具体的な事例を提供するので、尺度の持つ意味とそれらを現実的にはどのように戦略に対応させているのかを知る。

30回目 今後の研究の方向性と問題点について

マーケティングにおける社会性について考える。企業の社会的責任についてとわれることが多くなった現在で、地域貢献や社会貢献をボランティアではなく、マーケティングの原理にかなった方法でどのように実践していくのかについて考える。今回は、このテーマ以外に、最後の授業となるので、これまでの復習と理解度をみるために、課題を出す。その課題についての解答を求めめる。マーケティングに関する新しい論文および重要だと判断した書物を読んでおくこと（わからない場合はこちらから指定する）

授業内で課題を出すので、その課題は授業内に仕上げてもその場で提出する。

評価は以下の3つの方法の総計とする。

1. 毎回の授業内で課題を出すのでその場で解答を作成する。
2. ディスカッション・タイムでの発言を加算する。
3. 前期と後期のまとめの時間内で理解度をチェックする課題を点数化する。

配点は1の課題については4点（4点×13回）で52点。2のディスカッション・タイムについては1点～6点の配点とする。前期の授業内で3回実施する（6点×3回）で18点。後期の授業内で6回実施する（3点×6回）で18点。3の最終的な理解度をチェックする課題については1点～30点の配点とする。

なお、前期のディスカッション・タイムの予定は6、7、8回目を予定している。15回目は理解度のチェックをかねて実施する。後期のディスカッション・タイムの予定は19、20、21、23、27、28回目を予定している。授業内にて適宜プリントを配布する。前期は辻幸恵（2020）『持続可能な社会のマーケティング』白嶽野書院、2400円＋税をテキストとして使用する。

E. グメソン著 若林靖永、太田真治、崔容薫、藤岡章子訳『リレーションシップ・マーケティング - ビジネスの発想を変える30の関係性 - 』中央経済社、2007年、3800円＋税

2022年度 前期～後期

4.0単位

マーケティング論特殊講義

辻 幸恵

< 授業の方法 >

講義

< 授業の目的 >

マーケティング論の理論と実践を学ぶことによって経済学・経営学の高度な専門知識を習得する。具体的にはケーススタディから成功要因と失敗要因を比較し、それらの原因を比較、理解、考察することを目的とする。このことによって、研究者として基本的な研究を行う態度ができる力が養えるからである。なお、本科目の担当者は大学以外での実務経験がある。主に洋服など女性が好む商品のマーケット予測などをしてきた。

< 到達目標 >

1. 経済学・経営学の高度な専門知識を習得するために、マーケティング論の理論と新しい研究を学び、社会の発展に貢献できる能力を身につける。
2. 企業におけるマーケティングの有用性について事例から考察し、設定した課題を総合的に考察できる力を養う。また研究に役立つ事例を自ら集め、考察できる能力を養うとともに、社会的な意味のある研究を模索する。
3. 社会貢献を考える、すなわちソーシャルマーケティングについて理解すると共に、今後の社会生活にいかに関係が活用できるのかを提案できる能力を身につける。
4. 修得した知識をもとに、社会に向けて的確に伝えることができるように、論文を作成する。また会社見学や聞き取り調査も実施し、現代の市場において確かな洞察ができる力を養う。

< 授業のキーワード >

マーケティング、リサーチ、ケーススタディ、消費者

< 授業の進め方 >

毎回、異なる企業を例示し、幅広く日本の企業のマーケティングを学ぶ。また論文を読む場合もある。授業では理論を先に学習し、その後にケーススタディを学ぶ。ケーススタディについてディスカッションをした後に、簡単な課題を用意するので、解答を授業内で仕上げる。

< 履修するにあたって >

ケースは特別な企業を取り上げているわけではない。次の予告をするので、企業を知らない場合は、事前その企業については調べておくようにする。

< 提出課題など >

1回目

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

マーケティング論特殊講義としては理論と実践（ケーススタディ）の両輪で授業をすすめる。授業の具体的なすすめかた、評価方法、授業内容の理解度のチェック方法など、初回の本講義内で説明をする。また、マーケティング論の基礎は学習しているはずではあるが、今回から4回目までで基礎的な部分の復習をおこなう。

< 参考図書 >

2回目

< 授業計画 >

3回目 マーケティング論の基礎の復習（価格）

マーケティングの4Pのうち、今回は価格について説明をする。価格破壊、価格創造など、価格にまつわるキーワードは多い。特に価格破壊については1970年代～1980年に飛躍的に成長した企業を例示しながら、大衆と呼ばれた人々の価格への意識変化について説明をする。

4回目 マーケティング論の基礎の復習（広告）

マーケティングの4Pのうち、今回は広告について説明をする。インターネットの普及によって、昨今の広告はネット広告が盛んであるが、広告そのものは、古い時代から存在している。近代の広告の変遷と広告の重要性について学習をする。また具体例としてキャラクター効果を事例として学ぶ。教科書（第4章 キャラクター・マーケティング）

5回目 ジンメル理論と社会・地域の差別化について
ドイツの社会学者のジンメルは同調と差別化について述べている。この理論に基づいて地域を事例とし、現在でもその理論が通じていること、あるいは日本では差別化が先行していることなどを説明する。教科書（第2章 地域マーケティング）

6回目 ギフトの戦略について

不二家などの菓子メーカーの販売戦略について説明をする。バレンタインに対する消費者ニーズについてディスカッションをする。その後、各企業が顧客ニーズにどのように対応しているのかを説明し、過去からの顧客ニーズの変化について考察する。教科書（第3章 ギフト・マーケティング）

7回目 日本のアート販売の改革について

日本のアートの要素を包括する商品について取り上げる。レトロブームもあったが、その中でアートの売り方が成功したものと失敗したものを例示し、成功要因と失敗要因を比較する。今回もディスカッションを実施し、より考察を深める。教科書（第5章 アート・マーケティング）

8回目 前期前半のまとめ

マーケティングの基礎（4P）の地域、キャラクター、ギフト、アートの各マーケティングについて学んできた。今回は復習をしてそれらを総括して、今後の売り方には何が必要であるのかを共通テーマとして、各自の意見を発表する。これは発表点として評価にも加える。また社

会の中での動きを踏まえソーシャル・マーケティングを学ぶ。教科書(第6章 ソーシャル・マーケティング)

9回目 理論と情報の伝播

ここからは消費者の変化について学ぶ。最初にもものづくりの手法が多様化してきた現在において、どのような手法がどの対象に影響があるのかを学ぶ。ジゼル・トリクルダウン・セオリーを中心にどのような情報やモノの流れができてきているのかを確認する。そして消費者側が製作者になるという位置づけの変化を把握する。教科書(第7章 ものづくりをする消費者)

10回目 販売効果について

広告の効果測定法については先行研究がいくつもある。その中からいくつかを選択して、売り方が人々に与える影響の度合いについて学ぶ。また、最近はブログやツイッターなど個人間の情報のやり取りもあるので、それらを含めて考察する。教科書(第8章 売り手になる消費者)

11回目 場における心理について

前回の消費者の変化に続き、場面による消費者の心理の変化について述べる。これは刺激と反応の理論を用いる。ただし、今回は単純な刺激だけではなく、場面情報の蓄積、知覚、認知など心理学の分野も引用しながら、消費者心理を考察する。教科書(第9章 「ハレ」の場を意識する消費者と和への回帰)

12回目 消費者の変化について

所有することを求めない消費者の行動や心理について説明をする。教科書(第10章 消費者の変化と社会のニーズ)

13回目 ファッション業界の広告戦略について

前回の化粧品に引き続き、ファッションの世界でも広告戦略は重要である。ユニクロ、無印良品などと海外有名ブランドとの広告戦略の相違点について学ぶ。

14回目 ハンドメイド、雑貨の広告戦略について

ハンドメイドという大量生産ではない商品の広告戦略について学ぶ。同時に雑貨と呼ばれる多品種多種類の製品をどのように企画し、あるいは統一的なコンセプトで売り出すのかについても事例で説明をする。この授業の終わりに次回の発表課題を各自が選択をする。発表課題は前半の学習範囲から選択する。

15回目 前期のまとめ

前期の最後の時間なので、課題について各自が発表をおこなう。これは発表点として評価に加点する。

16回目 後期のガイダンス

前期の学習を思い出すと共に、後期の授業の流れについて説明をする。評価方法、発表方法は前期と同じであるが、後期初回であるので確認のために再度、説明をする。

17回目 顧客志向のマーケティング

顧客満足、顧客感動はどのようにすれば生じてくるのかを学ぶ。事例としてディズニールンドのサービスやホテルのサービスを学習する。また、身近な飲食店のサービ

スも例示して、顧客の気持ちについて考察し、リピーターをつくる戦略について学ぶ。

18回目 顧客ニーズの変化と価値観

チェーン展開をしているファーストフードに対して、個人経営のカフェは独自の世界がある。マニュアル化されたサービスと個のサービスを比較し、現在の顧客ニーズへの対応とニーズそのものの変化、さらには現在人の価値観の変化について学ぶ。

19回目 顧客ニーズと市場提供物について

日本においてのエコ意識や東日本の震災後の若者の意識変化について学ぶ。今回は論文を用意しているので、論文を読み、そこから問題点を整理した後、ディスカッションをする。

20回目 価値観の変化とイベント企画について

2014年は食に関するイベントが流行した。飽食気味の日本において食をテーマにしたイベントが盛況な理由を分析する。これは大阪府吹田市の万博公園でのイベントと東京での食フェスとよばれるイベントを事例とする。前回に続き、問題点をあきらかにした後、ディスカッションをする。

21回目 場のマネジメントについて

前回では場とイベント内容について分析をしたが、「場」に着目をして見識を深める。ここでは伊丹敬之著『場のマネジメント - 経営の新パラダイム』をベースに場のマネジメントについて考察する。「場」の創造性についてディスカッションをする。

22回目 場のマネジメントのケーススタディ

百貨店内の特設会場などの非日常的空間での販売について具体的事例を学ぶ。商品としては雑貨を考え、場の空間と商品とのバランスや顧客目線などをふまえ、どのような空間配置が最適かをシュミレーションする。

23回目 後期における前半のまとめ

顧客満足、顧客感動を生み出す場についてここではディスカッションをする。その後、時間内に課題を出すので、解答を各自が作成し、後期の中間課題とする。

24回目 戦略の基礎について

企業には成功事例と失敗事例がある。今回はマクドナルドをとりあげて、成功と失敗のそれぞれの事例を分析する。なお、視点としては商品の成功などではなく、ビジネスモデルとしての成否を論じる。

25回目 企業戦略、資源配分とポートフォリオ分析

成長戦略を類型し、経営資源の配分、ポートフォリオ分析について学ぶ。企業の成長のためには、市場浸透、市場開発、製品開発、多角化の方向がある。これらを市場成長率と相対市場シェアから考察する。

26回目 消費者データと関与水準の分析

知識と関与の分析フレームについて説明をする。ここでは消費者情報処理の分析モデルを中心に学習をする。これらは概念モデルとして長く論じられてきたが、昨今では、解析モデルとしてあらわされている。

27回目 競争環境の分析

マーケティングと取り巻く環境にはマクロ的な要因である人口動態的環境、経済的環境、政治・法的環境、物的環境、技術的環境、社会・文化的環境があげられる。競争要因としては業界内の競合他社、潜在的参入者と移動の脅威などが考えられる。ここでは競争優位を得るための方策の事例をあげて考察する。また、今回はディスカッションにより、環境要因と競争への戦略について考察する。

28回目 関係性マーケティング

関係性マーケティングが生まれてきた背景から学習し、その重要性について考察する。ここでは概念定義を説明した後、キーワードである信頼、コミットメント、相互作用、顧客維持などの知識を深める。今回もディスカッションを実施し、顧客の類型による関係性マーケティングについて考える。

29回目 サービス・マーケティング

サービス財の特徴から説明をする。サービスの知覚品質と評価尺度の具体的な事例を提供するので、尺度のもつ意味とそれらを現実的にはどのように戦略に対応させているのかを知る。

30回目 今後の研究の方向性と問題点について

マーケティングにおける社会性について考える。企業の社会的責任についてとわることが多くなった現在で、地域貢献や社会貢献をボランティアではなく、マーケティングの原理にかなった方法でどのように実践していくのかについて考える。今回は、このテーマ以外に、最後の授業となるので、これまでの復習と理解度をみるために、課題を出す。その課題についての解答を求め、マーケティングに関する新しい論文および重要だと判断した書物を読んでおくこと（わからない場合はこちらから指定する）

授業内で課題を出すので、その課題は授業内に仕上げたその場で提出する。

評価は以下の3つの方法の総計とする。

1. 毎回の授業内で課題を出すのでその場で解答を作成する。
2. ディスカッション・タイムでの発言を加算する。
3. 前期と後期のまとめの時間内で理解度をチェックする課題を点数化する。

配点は1の課題については4点（4点×13回）で52点。2のディスカッション・タイムについては1点～6点の配点とする。前期の授業内で3回実施する（6点×3回）で18点。後期の授業内で6回実施する（3点×6回）で18点。3の最終的な理解度をチェックする課題については1点～30点の配点とする。

なお、前期のディスカッション・タイムの予定は6、7、8回目を予定している。15回目は理解度のチェックをかねて実施する。後期のディスカッション・タイムの予定は19、20、21、23、27、28回目を予定している。 授業

内にて適宜プリントを配布する。前期は辻幸恵（2020）『持続可能な社会のマーケティング』白嶽巖野書院、2400円＋税をテキストとして使用する。

E. グメソン著 若林靖永、太田真治、崔容薫、藤岡章子訳『リレーションシップ・マーケティング - ビジネスの発想を変える30の関係性 - 』中央経済社、2007年、3800円＋税

2022年度 前期～後期

4.0単位

マーケティング論特別演習（1年次）

辻 幸恵

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

マーケティング論の理論と実践を学ぶ。具体的には理論は先行研究の論文や本をから、実践はケーススタディから選択する。先行研究の論文はマーケティングと消費者行動の応用となるものを教材として選択し、博士論文の基礎となるようにする。また、多くの論文を比較、理解、考察し、博士論文のテーマを確定、すすめることを目的とする。実践については、会社見学や聞き取り調査も含む。本科目の担当者は大学以外での実務経験がある。主に洋服など女性が好む商品のマーケット予測などをしてきた。

<到達目標>

マーケティング論の理論と実践を学び、会社見学や聞き取り調査というリサーチ手法についても学ぶことによって、現代の市場において確かな洞察ができる力を養う。

1. マーケティング論に関する高度な専門知識を有するために、マーケティングの理論と実践を学び、企業におけるマーケティングの有用性について考察をすることができる力を養う
2. マーケティングの学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。
3. 修得したマーケティングの専門知識を用いて、現在社会の発展に貢献したいという態度を身につける。この場合ソーシャルマーケティングを応用できる力をつける。
4. 修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる力を養う。

<授業のキーワード>

ブランド、マーケティング、リサーチ、ケーススタディ、消費者心理

<授業の進め方>

連続して2回ないしは3回で1つのテーマを終えていく。1年次は幅広く、日本だけではなく、英語を含めたマーケティング論文からマーケティングの有用性を学ぶ。授業では先行研究である理論を主に学習し、その後ケー

スタディを学ぶ。また学んだ後に、日本ではどのような実践例があるのかを考察する。

<履修するにあたって>

英語論文の場合は事前にわからない単語や意味は調べておくこと。また、関連する論文も事前にあげておくことを徹底する。ケースは特別な企業を取り上げているわけではないので、事前その企業については調べておくようにする。

<提出課題など>

1回目

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

マーケティング論演習としては理論と実践(ケーススタディ)の両輪で授業をすすめる。授業の具体的なすすめかた、評価方法、授業内容の理解度のチェック方法など、初回の本講義内で説明をする。また、マーケティング論の基礎は学習しているはずではあるが、前半は基礎的な部分の復習をかねて、主にP.コトラーのマーケティング原理の復讐をおこなう。

<参考図書>

2回目

<授業計画>

3回目 マーケティング環境の変化

企業のミクロ的環境(企業、供給業者、仲介業者、顧客、競合他社など)について整理する。また、マクロ環境の人口動態的環境、経済的環境を主に日本の場合について把握する。

4回目 マーケティング・リサーチと情報について

マーケティング情報システムの概念について学び、同時にネットワークとマーケティングのパラダイム革新についても理解する。つまり最近の日本の現状がここで理解できる。リサーチの手順も説明する。

5回目 消費財市場と消費者行動

消費者行動に影響を与える特性(文化的特性、社会的特性、個人的特性、心理的特性)についても学ぶ。

6回目 消費者の意思決定プロセスについて

消費者の意思決定プロセスについて学ぶ。外的影響要因と個人差要因について理解する。

7回目 生産財市場と企業の購買行動

生産財市場の特性とその購買行動について学ぶ。さらに主な購買状況、購買プロセス、影響についても考察する。

8回目 マーケティングのセグメンテーションについて

マーケティングのセグメンテーション、ターゲティング、ポジショニングについて学ぶ。

9回目 小括として2回目から8回目までの復習をする

マーケティングの概念、環境変化、関係性マーケティング、消費者行動と概念モデルなど重点的に復習をする。

10回目 製品およびサービスに関する戦略

製品の分類(消費財、生産財など)、個人製品について

の意思決定について、製品ラインについての意思決定について学ぶ。

11回目 ブランド評価について

使用者拡大とブランドについて学び、競争優位を考察する。また、ブランドの構成要素をふまえて、ブランドのメカニズムを理解する。

12回目 ブランド・ロイヤルティとコミュニティについて

ブランドへの消費者の態度や行動について学ぶ。ブランド・リレーションシップを説明するので、その構築と測定について理解する。

13回目 ブランド・コミュニティの管理について

消費者にとってのブランド・コミュニティの役割と企業にとってのブランド・コミュニティについて学ぶ。これを価値共創という。そしてコミュニティへの参加について理解する。

14回目 製品開発と製品のライフサイクルについて

新製品開発戦略について、そのアイデア創出、アイデア・スクリーニング、コンセプト開発とテストなどを検討する。同時に採算分析も考察する。ライフサイクル戦略として4つの各段階の特長を学ぶ。

15回目 小括としてここまでをまとめる

ブランドとは何かという定義からはじまった。定義、概念、そして日本の市場、また、ブランド構築についてのまとめをおこなう。

16回目 後期のガイダンス

前期の学習を思い出すと共に、後期の授業の流れについて説明をする。評価方法、発表方法は前期と同じであるが、後期初回であるので確認のために再度、説明をする。

17回目 パナソニック「GOPAN」のケース

パナソニックの「GOPAN」を取り上げる。GOPANはお米からパンができるという世界初の商品である。このケースを学び、新市場の創出について考察する。

18回目 製品戦略として便益の束としての製品について 製品の概念を復習する。これはマーケティングの基本であるので思い出してほしい。そこから製品の分類基準と類型を学ぶ。

19回目 製品ミックスと製品差別化について

製品差別化の次元としてサービスの特性、知覚品質を理解する。また、そこから知覚品質の創造について考察する。

20回目 新製品の企画・開発について

ブルボンの新製品開発の事例を学ぶ。コンセプトの創出にはじまり、製品と戦略立案、試作品のテストなど、市場への導入までを学ぶ。

21回目 製品の価格について

製品のライフサイクルと価格との関係を理解する。ここではP.コトラーの論文を引用して学ぶ。

22回目 価格のマネジメントのケーススタディ

百貨店内の特設会場などの非日常的空間での販売につい

て具体的事例を学ぶ。商品としては雑貨を考え、場の空間と商品とのバランスや顧客目線などをふまえ、どのような価格が最適かをシュミレーションする。また価格調整戦略以外にも価格変更の影響についても考察する。

23回目 小括として17回目から22回目までの復習をする製品を中心に学んできたことを復習する。戦略、開発、ライフサイクルなどの重点事項をまとめる。また価格の戦略性についてもまとめる。

24回目 マクドナルドのケース

企業には成功事例と失敗事例がある。今回はマクドナルドをとりあげて、成功と失敗のそれぞれの事例を分析する。なお、視点としては商品の成功などではなく、ビジネスモデルとしての成否を論じる。

25回目 価格戦略と顧客価値について

コスト志向価格戦略について学ぶ。具体的にはマークアップ価格設定やターゲットリターン価格設定を理解する。そして損益分岐点の活用を考察する。

26回目 競争志向の価格戦略について

市場浸透価格、上澄み吸収価格、補完的価格などのバリエーションを学ぶ。そこからメーカーの価格政策を考察する。

27回目 消費者志向の価格戦略について

需要の価格弾力性について理解する。また差別価格法、知覚価値価格設定についても学ぶ。

28回目 消費者心理からみた価格受容

消費者の目線からみた価格の受容範囲とその推定方法を学ぶ。過去の市場データの分析、顧客へのリサーチ方法について説明する。

29回目 小括として24回目から29回目をまとめる

価格をテーマにその戦略や消費者にとっての需要範囲について復習をする。ここで価格とこだわりについて消費者心理を考察する

30回目 今後の研究の方向性と問題点について

1年間でブランド、製品、価格を中心に学んできた。またケースも取り上げてきた。その中で問題点は何か、という意識を持ってもらうために、最終時間を活用して、日本社会の今後の市場について考察する。

マーケティングに関する基本的な書物を読んでおくこと（わからない場合はこちらから指定する）

授業内で課題を出すので、その課題は授業内に仕上げたその場で提出する。

評価は以下の3つの方法の総計とする。

1. 毎回の授業内で課題を出すのでその場で解答を作成する。
2. ディスカッション・タイムでの発言を加算する。
3. 前期と後期のまとめの時間内で理解度をチェックする課題を点数化する。

配点は1の課題については4点（4点×13回）で52点。

2のディスカッション・タイムについては1点～6点の配点とする。前期の授業内で3回実施する（6点×3回）で1

8点。後期の授業内で6回実施する（3点×6回）で18点。3の最終的な理解度をチェックする課題については1点～30点の配点とする。

なお、前期のディスカッション・タイムの予定は6、7、8回目を予定している。15回目は理解度のチェックをかねて実施する。後期のディスカッション・タイムの予定は19、20、21、23、27、28回目を予定している。授業内にて適宜プリントを配布する。

和田充男監修『マーケティング原理 第9版』ダイヤモンド社、2003年

2022年度 前期～後期

4.0単位

マーケティング論特別演習（2年次）

辻 幸恵

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

引き続きマーケティング論の理論と実践を学ぶ。具体的には理論は先行研究の論文や本をから、実践はケーススタディから選択する。先行研究の論文はマーケティングと消費者行動の応用となるものを教材として選択し、博士論文の根幹となるようにする。また、多くの論文を比較、理解、考察し、博士論文のテーマを確定、すすめることを目的とする。実践については、アンケート調査の実施も含む。本科目の担当者は大学以外での実務経験がある。主に洋服など女性が好む商品のマーケット予測などをしてきた。

<到達目標>

マーケティング論の理論と実践を学び、企業におけるマーケティングの有用性について両面から考察をすることができる能力と分析できる力を養う。またアンケート調査というリサーチ手法についても理解し、実践ことによって、現代の市場において消費者心理の確かな洞察ができる力を養う。

<授業のキーワード>

ブランド、マーケティング、リサーチ、ケーススタディ、消費者心理

<授業の進め方>

連続して2回ないしは3回で1つのテーマを終えていく。2年次はより深く、日本だけではなく、英語を含めたマーケティング論文からマーケティングの根幹を学ぶ。授業では先行研究である理論を主に学習した後に、自身の博士論文に通じるテーマとの関わりを考察する。

<履修するにあたって>

英語論文の場合は事前にわからない単語や意味は調べておくこと。また、関連する論文も事前にあげておくことを徹底する。ケースは特別な企業を取り上げているわけではないので、事前その企業については調べておくよう

にする。また自身のテーマに関連する分野の論文を収集する。

< 提出課題など >

1回目

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

授業の具体的なすすめかたは前年度と同様とする。評価方法、授業内容の理解度のチェック方法など、初回の本講義内で説明をする。また、マーケティング論の基礎は学習しているはずではあるが、復習もかねて、主にP.コトラーのマーケティング原理を使用し、自身のテーマ分野の知識をさらに補うことをおこなう。

< 参考図書 >

2回目

< 授業計画 >

3回目 マーケティング環境の変化と小売業の在り方
小売業の環境（企業、顧客、競合他社など）について整理する。また、日本の社会環境の変化とその対応について把握する。

4回目 統合型マーケティング・コミュニケーションについて

マーケティング情報システムの概念について学び、同時にコミュニケーションとマーケティングの変化についても理解する。最近の日本の現状がここで理解できる。変化しつつあるコミュニケーション環境についても説明する。

5回目 コミュニケーション・プロセスの概要

消費者の特性（文化的特性、社会的特性、個人的特性、心理的特性）と踏まえて標的となる対象の識別、コミュニケーション目標の決定、メッセージの選択について考察する。

6回目 消費者の意思決定プロセスについて

コミュニケーションの成否を見る指標としての消費者の意思決定プロセスについて学ぶ。外的影響要因と個人差要因について理解する。

7回目 プロモーション予算とプロモーション・ミックスの決定について

プロモーション予算総額の決定について学ぶ。さらに総合的プロモーション・ミックスの設定や統合についても考察する。

8回目 マーケティング・コミュニケーションの社会的責任

主に広告と販売促進の基礎、人的販売について学ぶ。

9回目 小括として2回目から8回目までの復習をする
マーケティング・コミュニケーションの概念を重点的に復習をする。

10回目 広告、販売促進および広報に関する戦略

広告目的の設定、広告予算の設定、広告戦略の展開、広告の評価について学ぶ。

11回目 販売促進について

使用者拡大と顧客心理について学び、販売促進を考察する。また、販売促進の構成要素をふまえて、そのメカニズムを理解する。

12回目 販売促進と広報活動

製品情報への消費者の態度や行動について学ぶ。広報活動の主な手段について理解する。

13回目 人的販売と販売管理

人的販売の役割、特性について学ぶ。具体的に販売部隊の管理などの事例を学ぶ。

14回目 人的販売のモラルと原則

人的販売のプロセス、販売プロセスの段階、リレーションシップ・マーケティングを学ぶ。

15回目 小括としてここまでをまとめる

販売促進とは何かという定義からはじまった。定義、概念、そして人的販売についてのまとめをおこなう。

16回目 後期のガイダンス

前期の学習を思い出すと共に、後期の授業の流れについて説明をする。評価方法、発表方法は前期と同じであるが、後期初回であるので確認のために再度、説明をする。

17回目 ダイレクト・マーケティングとオンライン・マーケティング

ダイレクト・マーケティングの定義、利便性について学ぶ。

18回目 顧客データベースとダイレクト・マーケティング

前回のダイレクト・マーケティングの概念を復習する。また、個別販売、テレマーケティング、ダイレクト・メール・マーケティング、カタログ・マーケティングなどの具体例の功罪について学ぶ。

19回目 オンライン・マーケティングと電子商取引について

オンライン・マーケティングの急速な発展の現状について考察する。また将来性と課題についても検討する。

20回目 総合型ダイレクト・マーケティングについて
ダイレクト・マーケティングに関する公共政策と倫理的問題を取り上げる。不正利用、詐欺、違反行為、プライバシーの侵害など具体的な課題を検討する。

21回目 競争戦略

顧客との関係を理解する。顧客を引き付け、その関係を維持し、さらに利益を増大していく方法について考察する。

22回目 対顧客とのリレーションシップ・マーケティングのケーススタディ

百貨店内の特設会場などの非日常的空間での販売について具体的事例を学ぶ。商品としては雑貨を考え、場の空間と商品とのバランスや顧客視線などをふまえ、どのような関係性が最適かをシュミレーションする。

23回目 小括として17回目から22回目までの復習をする
ダイレクト・マーケティング、顧客との関係を中心に学

んできたことを復習する。

24回目 競争的マーケティング戦略

企業には成功事例と失敗事例がある。それらを取りあげて、成功と失敗のそれぞれの事例を分析する。なお、視点としては商品の成功などではなく、ビジネスモデルとしての成否を論じる。

25回目 競合他社との関係性と対応

競合他社分析の方法と他社との差別化戦略について学ぶ。

26回目 競争志向の価格戦略について

市場浸透価格、補完的価格などのバリエーションを学ぶ。そこからメーカーの価格政策と顧客の価格に対する心理的価値を検討する。

27回目 消費者志向の価格戦略について

需要の価格弾力性について理解する。また差別価格法、知覚価値価格設定についても学ぶ。

28回目 顧客志向と競争志向のバランス

消費者の目線からみた企業サービス・製品価値、価格の受容範囲について説明する。

29回目 小括として24回目から29回目をまとめる

主に競争志向のマーケティングについて復習をする。ここで顧客との関係性について考察する

30回目 今後の研究の方向性と問題点について

1年間で販売促進、競争的戦略を中心に学んできた。また顧客との関係性も取り上げてきた。その中で問題点は何か、という意識を持ってもらうために、最終時間を活用して、日本社会の今後の市場について考察する。マーケティングに関する基本的な書物を読んでおくこと（わからない場合はこちらから指定する）

授業内で課題を出すので、その課題は授業内に仕上げたその場で提出する。

評価は以下の3つの方法の総計とする。

1. 毎回の授業内で課題を出すのでその場で解答を作成する。
2. ディスカッション・タイムでの発言を加算する。
3. 前期と後期のまとめの時間内で理解度をチェックする課題を点数化する。

配点は1の課題については4点（4点×13回）で52点。

2のディスカッション・タイムについては1点～6点の配点とする。前期の授業内で3回実施する（6点×3回）で18点。後期の授業内で6回実施する（3点×6回）で18点。

3の最終的な理解度をチェックする課題については1点～30点の配点とする。

なお、前期のディスカッション・タイムの予定は6、7、8回目を予定している。15回目は理解度のチェックをかねて実施する。後期のディスカッション・タイムの予定は19、20、21、23、27、28回目を予定している。授業内にて適宜プリントを配布する。

和田充男監修『マーケティング原理 第9版』ダイヤモンド社、2003年

2022年度 前期～後期

4.0単位

マーケティング論特別演習（3年次）

辻 幸恵

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

引き続きマーケティング論の理論と実践を学びながら博士論文を仕上げることを目標とする。具体的には理論は先行研究の論文や本から、実践はケーススタディかあるいは自身が調査した結果からまとめる。先行研究の論文はマーケティングと消費者行動の応用となるものを教材として選択し、昨年度比較検討をしたはずであるので、博士論文のテーマにそった形でまとめる。本科目の担当者は大学以外での実務経験がある。主に洋服など女性が好む商品のマーケット予測などをしてきた。

<到達目標>

1. 経済学・経営学の高度な専門知識を習得するために、マーケティング論の理論と新しい研究を学ぶ。
2. 企業におけるマーケティングの有用性について事例から考察し、設定した課題を総合的に考察できる力を養う。また研究に役立つ事例を自ら集め、考察できる能力を養うとともに、社会的な意味のある研究を模索する。
3. 社会貢献を考える、すなわちソーシャルマーケティングについて理解すると共に、今後の社会生活にいかにかにソーシャルマーケティングが活用できるのかを提案できる能力を身につける。
4. 修得した知識をもとに、社会に向けて的確に伝えることができるように、論文を作成する。また会社見学や聞き取り調査も実施し、現代の市場において確かな洞察ができる力を養う。

<授業のキーワード>

ブランド、マーケティング、リサーチ、ケーススタディ、消費者心理

<授業の進め方>

自身が選択したテーマにそって先行研究を分析、活用していく。2年次よりも最終学年なのでより深く、テーマを掘り下げる。もちろん同時にマーケティングの根幹を学ぶ。授業では博士論文のテーマにそった先行研究である理論を主に学習し、テーマとの関わりを系統だてて説明する。

<履修するにあたって>

英語論文の場合は事前にわからない単語や意味は調べておくこと。また、関連する論文も事前に予習して要点をまとめておくことを徹底する。以下のシラバスでは消費者行動と広告に関しては授業形式でまとめてあるが、この2つのポイントはどのようなテーマの博士論文になるとしても含まれる要因であるので、できうる限り日ごろ

から関心をもっておく。

< 提出課題など >

1回目

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

授業の具体的なすすめかたは前年度と同様とする。評価方法、授業内容の理解度のチェック方法など、初回の本講義内で説明をする。また、自身のテーマにそったマーケティング理論を再度、整理する。今年度の博士論文作成の予定と方向性を確認する。

< 参考図書 >

2回目

< 授業計画 >

3回目 マーケティングと消費者理解

消費環境の変化とその対応について把握し、プロダクト・アウトからプロダクト・インへの発想転換を理解する。顧客志向の経営理念について考察する。

4回目 モチベーション理論と顧客の選択について

1950年代にはモチベーション・リサーチ（動機付け調査）が多く研究された。「人はなぜモノを買うのか」という根源的なメカニズムを解明する研究である。これらの成果が現代日本社会の中ではどのような意味があるのかを考察する。そのことは高度な専門知識を社会で応用することにつながる。

5回目 消費者行動のモデル化について

消費者の特性（文化的特性、社会的特性、個人的特性、心理的特性）を踏まえて標的となる対象の行動パターンをモデル化している先行研究が多い。それらのモデルについて検討する。また、モデルを自身でも構築できる能力を身につける。それは独創的な研究をする上では必要なスキルである。

6回目 消費者の意思決定プロセスについて

コミュニケーションの成否を見る指標としての消費者の意思決定プロセスについて学ぶ。外的影響要因と個人差要因について理解する。これは高度な専門知識を社会で応用するためのプロセスを構築することの基本となる。

7回目 消費者の関与という概念

関与の概念について学ぶ。さらに「こだわり」の正体について分析をする。具体例としてハンドメイド作品をあげ、そこでの顧客志向の実践と作り手としてのこだわりの実態を説明する。

8回目 使用する側の社会的責任

使用する側、つまり消費者のモラルや倫理感について学ぶ。また、それらを企業はどのようにとらえているのかもギフトマーケティングの事例から理解する。ギフトされたものを使用するということも、消費者のモラルに関係している。ギフトの背景には慣習、伝統、地域性など文化的要因もある。幅広い知識が必要となるが、その文化的要因は倫理観にもつながる。

9回目 小括として2回目から8回目までの復習をする

消費者の意識や関与の概念を重点的に復習をする。このことはより高度な専門的知識をつけると共に、今後の消費者行動をふまえ、社会に提案できる研究の基礎となる。

10回目 広告が消費者に与える影響

広告の消費者側からの評価について学ぶ。SNSが日常的に使用されている中で、いかに消費者に伝えることができるのかということがメーカーだけではなく、マーケティングの中でも昨今、議論されている。他人に正確に伝えるということの基本とした販売戦略についても考察する。

11回目 消費者ニーズに合致した広告について

広告と顧客心理について学び、伝える本質のメカニズムを理解する。顧客心理の中で、顧客満足はマーケティングの中では重要な要素である。実際に企業でも「お客様の声」をいかにフィードバックするかを考えている。ここでは先行研究の顧客満足に関する研究論文を中心に議論をする。

12回目 販売促進と広報活動

製品情報への消費者の態度や行動について学ぶ。広報活動の主な手段について理解する。

13回目 広告と情報管理

広告の役割、特性について学ぶ。具体的な情報の管理などの事例を学ぶ。

14回目 広告のモラルと原則

広告企画のプロセス、段階、広告心理を学び、現在のモラル感と比較する。

15回目 小括としてここまでをまとめる

企業からの広告と消費者との関係からはじまった。定義、概念、そして影響についてのまとめをおこなう。

16回目 後期のガイダンス

前期の学習を思い出すと共に、後期の授業の流れについて説明をする。評価方法、発表方法は前期と同じであるが、後期初回であるので確認のために再度、説明をする。

17回目 マーケティング論文の基本的な構成について
マーケティングの定義、流れを復習し、学説などの時系列を確認する。

18回目 データベースとなる数値

マーケティング・リサーチの概念を復習する。また、データの数値の示し方などを確認する。

19回目 問題提起と論文の筋道について

マーケティングの発展と消費者の生活の現状について考察する。また将来性と課題についても検討する。

20回目 マーケティングの日本における変化

マーケティングに関する倫理的問題を取り上げる。データの不正利用、捏造、違反行為、プライバシーの侵害など具体的な課題を検討する。

21回目 市場の中での消費者のとらえ方

消費者である顧客群との関係を理解する。顧客について

博士論文内で記述している箇所についてさらに深く考察する。

22回目 顧客とのリレーションシップ・マーケティングの復習

顧客目線からの購買行動と消費行動間の関係性を考察する。博士論文テーマ内においても顧客の行動についてこれらの関係性を明確にする。

23回目 小括として17回目から22回目までの復習をする論文をまとめるにあたり、基本的な事項を確認する。そのことによって、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つことになるからである。

24回目 マーケティング戦略の復習

博士論文で取り上げたテーマ内のマーケティング戦略が論理的に合致しているのか成否を論じる。

25回目 競合他社との関係性と対応の復習

競合他社分析の方法と他社との差別化戦略について昨年、学んでいるが、特に差別化について復習する。博士論文のテーマにそった形で、差別化戦略について議論をする。

26回目 競争志向と顧客志向の関連性について

市場浸透価格、補完的価格などのバリエーションを昨年、学んでいるが、そこからメーカーの顧客の価格に対する心理的価値を博士論文のテーマにそって検討する。

27回目 消費者志向の価格戦略についての復習

根本的な需要の価格弾力性について整理する。また差別価格法、知覚価値価格設定についても復習し、博士論文テーマ内で価格に対する理解を深める。またマーケティングの4pの中でも価格は取り上げられてきたが、ここでは最新の価格に対する論文を読み、より、高度な専門性を学ぶ。

28回目 博士論文の読み合わせ1回目

博士論文の読み合わせを行い、不適切な部分を修正する。

29回目 博士論文の読み合わせ2回目

博士論文の読み合わせを行い、不適切な部分を修正する。

30回目 博士論文の読み合わせ3回目

博士論文の読み合わせを行い、不適切な部分を修正する。マーケティングに関する基本的な書物を読んでおくこと（わからない場合はこちらから指定する）

授業内で課題を出すので、その課題は次週までに仕上げて提出する。

評価は以下の3つの方法の総計とする。

1. 毎回の授業内で課題を出すのでその場で解答を作成する。
2. ディスカッション・タイムでの発言を加算する。
3. 前期と後期のまとめの時間内で理解度をチェックする課題を点数化する。

配点は1の課題については4点（4点×13回）で52点。

2のディスカッション・タイムについては1点～6点の配点とする。前期の授業内で3回実施する（6点×3回）で18点。後期の授業内で6回実施する（3点×6回）で18点。

3の最終的な理解度をチェックする課題については1点

～30点の配点とする。

なお、前期のディスカッション・タイムの予定は6、7、8回目を予定している。15回目は理解度のチェックをかねて実施する。後期のディスカッション・タイムの予定は19、20、21、23、27、28回目を予定している。授業内にて適宜プリントを配布する。

青木幸弘『消費者行動の知識』日本経済新聞出版社、2010年

2022年度 前期～後期

4.0単位

流通システム論特殊講義

島永 嵩子

<授業の方法>

演習形式。

<授業の目的>

本講義は、商業の理論を「構造」「関係」「行動」の3つの次元で整理し、それらを説明できる理論的枠組みを学習するとともに、現実における流通の変化を的確に分析できるようになることを目的としている。

<到達目標>

1. 流通の変化を捉えるための基本的な理論概念を理解できるようになる。
2. 流通システムのメカニズムを理解する力を養う。

<授業の進め方>

流通研究に関する主なテーマについて、指定文献や報告者の作成資料・プレゼンを基に議論を重ね、理解を深めることとする。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

本講義の概要を説明する

<参考図書>

第2～3回

<授業計画>

第4～5回 小売商業の構造的変化

小売店舗がどれだけ必要かについて説明する

第6～7回 卸売商業の構造

なぜ流通が多段階になるのかについて説明する

第8回 現代の流通構造

eコマースによって流通はどう変わるかについて学習する

第9～10回 商業における信頼関係

商業者はなぜ信頼を重視するのかについて学習する

第11～12回 商業におけるパワー関係

いかにして取引を統制するかについて説明する

第13～14回 生産者による流通系列化

なぜ商業者を統制するのかについて説明する
第15回 前半のまとめ
前半の講義内容をまとめる
第16～17回 小売業者による製販統合
小売主導の多頻度少量配送システムについて説明する
第18～19回 小売業者によるPB開発
なぜ小売業者が商品を開発するのかについて説明する
第20～22回 小売業者の行動
小売業における競争と戦略について学習する
第23～24回 卸売業者の行動
環境変化に対応する卸売業について学習する
第25～27回 商業における革新
商業はいかに変化するのかについて説明する
第28～29回 中小商業問題
小売商業振興政策をどう考えるのかについて説明する
第30回 全体のまとめ
全体の講義内容をまとめる
テキストを事前に熟読した上、レジュメを作成し、講義に参加すること。
講義内容の理解度を確認するために、不定期で簡単なレポートの提出を課す。
講義に参加する姿勢(30%)や口頭発表の内容(30%)、レポート(40%)によって総合的に評価する。 高嶋克義著『現代商業学 新版』有斐閣アルマ、2012年。

2022年度 前期～後期
4.0単位
理論経済学演習（2年次）
竹治 康公

<授業の方法>
研究成果の報告と指導による。
<授業の目的>
受講者との議論を通じて、テーマを決定し、先行研究のサーベイ、実地調査の指導等を通じて修士論文を完成さ
を目指す。
<到達目標>
修士論文をほぼ完成できる。

<授業の進め方>
受講者と相談の上、先行研究のサーベイ、調査結果の検
討、執筆原稿についての議論を?う。
<提出課題など>
第1-2回
<成績評価方法・基準>
研究の推進方法
<テキスト>
前年度の研究内容などを踏まえて、本年度の研究推進計
画を立てる。
<参考図書>

第3-14回
<授業計画>
第15-16回 修士論文の見直し
前回までの結果に基づき、内容や構成の修正を検討する。
第17-26回 修士論文執筆の推進
論文執筆の推進に従って、その内容を精査する。
第27-30回 修士論文予備原稿の完成
修士論文が完成できるように、論文を書き進める。
論文の執筆
論文の進捗と内容による。

2022年度 前期～後期
4.0単位
理論経済学演習（2年次）
佐藤 伸明

<授業の方法>
対面授業
<授業の目的>
ディプロマポリシーの(1.知識・理解)(2.思考・
判断)並びにカリキュラム・ポリシーの2に資する科目
である。
特に、経済理論の専門的知識の習得を目指す。
<到達目標>
経済理論やそれに関連した実証研究の専門的論文が読め
るようになること。
<授業の進め方>
テキストの輪読と報告および質疑応答により進める。
<提出課題など>
第1回

<成績評価方法・基準>
テキストの選択と授業の進め方
<テキスト>
受講生の希望と学力に基づいて最適なテキストを選ぶ。
テキストの読み方や授業の進め方を説明する。
<参考図書>
第2回
<授業計画>
第3回
第1章に内容について
第1章の内容について報告と研究
第4回 前回の続き
第5回
第2章
第2章の内容について報告と研究
第6回 前回の続き
第7回
第3章
第3章の内容について報告と研究

第8回 前回の続き
第9回
第4章
第4章の内容について報告と研究
第10回 前回の続き
第11回 第5章
第5章の内容について報告と研究
第12回 前回の続き
第13回 第6章
第6章の内容について報告と研究
第14回 前回の続き
第15回 第7章
第7章の内容について報告と研究
第16回 前回の続き
第17回 第8章
第8章の内容について報告と研究
第18回 前回の続き
第19回 第9章
第9章の内容について報告と研究
第20回 前回の続き
第21回 第10章
第10章の内容について報告と研究
第22回 前回の続き
第23回 第11章
第11章の内容について報告と研究
第24回 前回の続き
第25回 第12章
第12章の内容について報告と研究
第26回 前回の続き
第27回 学習・研究まとめ 1
学習・研究した内容のまとめ報告 1
第28回 前回の続き
第29回 学習・研究まとめ 2
学習・研究した内容のまとめ報告 2
テキストの予習と復習、特に予習に力を入れること。内容理解のうえ問題点を考えておくこと。

授業中の報告とまとめ報告に基づく。まとめ報告は文章として提出してもらう。

提出先などは、授業時に知らせる。 E.Malinvaud, Lectures on Microeconomic Theory,1985, (日本語訳がある)。

E.Malinvaud, Macroeconomic Theory, 1998.

または

現代古典派経済学の書物。

Kurz and Salvadori, Theory of Production, 1995

ただし、受講生の希望に基づいて、上記以外からテキストを選ぶ場合がある。

授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学演習 (1年次)

竹治 康公

<授業の方法>

研究成果の報告と指導による。

<授業の目的>

受講者との議論を通じて、テーマを決定し、先行研究のサーベイ、実地調査の指導等を通じて次年度の修士論文完成を目指す。

<到達目標>

修士論文をほぼ完成できる。

<授業の進め方>

受講者と相談の上、先行研究のサーベイ、調査結果の検討、執筆原稿についての議論を?う。

<提出課題など>

第1-2回

<成績評価方法・基準>

研究の推進方法

<テキスト>

前年度の研究内容などを踏まえて、本年度の研究推進計画を立てる。

<参考図書>

第3-14回

<授業計画>

第15-16回 修士論文の見直し

前回までの結果に基づき、内容や構成の修正を検討する。

第17-26回 修士論文執筆の推進

論文執筆の推進に従って、その内容を精査する。

第27-30回 修士論文予備原稿の完成

次年度で修士論文が完成できるように、前回までの成果と次年度の執筆方針を検討する。

論文の執筆

論文の進捗と内容による。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学演習 (1年次)

佐藤 伸明

<授業の方法>

対面授業

<授業の目的>

ディプロマポリシーの(1.知識・理解)(2.理解・判断)並びにカリキュラムポリシーの2に資する科目である。特に、経済理論の専門的知識の習得を目指す。

<到達目標>

経済理論やそれに関連した実証研究の専門的論文が読めるようになること。

<授業の進め方>

テキストの輪読と報告および質疑応答により進める。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

テキストの選択と授業の進め方

<テキスト>

受講生の希望と学力に基づいて最適なテキストを選ぶ。

テキストの読み方や授業の進め方を説明する。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回

第1章に内容について

第1章の内容について報告と研究

第4回 前回の続き

第5回

第2章

第2章の内容について報告と研究

第6回 前回の続き

第7回

第3章

第3章の内容について報告と研究

第8回 前回の続き

第9回

第4章

第4章の内容について報告と研究

第10回 前回の続き

第11回 第5章

第5章の内容について報告と研究

第12回 前回の続き

第13回 第6章

第6章の内容について報告と研究

第14回 前回の続き

第15回 第7章

第7章の内容について報告と研究

第16回 前回の続き

第17回 第8章

第8章の内容について報告と研究

第18回 前回の続き

第19回 第9章

第9章の内容について報告と研究

第20回 前回の続き

第21回 第10章

第10章の内容について報告と研究

第22回 前回の続き

第23回 第11章

第11章の内容について報告と研究

第24回 前回の続き

第25回 第12章

第12章の内容について報告と研究

第26回 前回の続き

第27回 学習・研究まとめ 1

学習・研究した内容のまとめ報告 1

第28回 前回の続き

第29回 学習・研究まとめ 2

学習・研究した内容のまとめ報告 2

テキストの予習と復習，特に予習に力を入れること。内容理解のうえ問題点を考えておくこと。

授業中の報告とまとめ報告に基づく。まとめ報告は文章として提出してもらう。

提出先などは，授業時に知らせる。丸山徹著『新版経済原論』（第3版）岩波書店，新古典派に重点を置いたミクロ・マクロのテキスト。日本経済への適応を一つの主題とした日本経済論でもある。これより少し難しいテキスト，E.Malinvand, Lectures on Microeconomic Theory, 1985, (日本語訳がある)。E.Malinvand, Macroeconomic Theory, 1998

または

現代古典派経済学の書物。

例えば，

Pasinetti, L.L., Theory of Production, 1977. (日本語訳がある)。

Kurz and Salvadori, Theory of Production, 1995 など。

ただし，受講生の希望に基づいて，上記以外からテキストを選ぶ場合がある。

授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学特殊研究

竹治 康公

<授業の方法>

研究成果の報告と指導による。

<授業の目的>

受講者との議論を通じて、テーマを決定し、先行研究のサーベイ、実地調査の指導等を通じて博士論文を完成さを目指す。

<到達目標>

3年間で博士論文執筆が可能となるよう、最初の論文を執筆することができる。

<授業の進め方>

受講者と相談の上、先行研究のサーベイ、調査結果の検討、執筆原稿についての議論を行う。

< 提出課題など >

第1-2回

< 成績評価方法・基準 >

研究テーマの決定

< テキスト >

博士前期課程での研究内容などを踏まえて、研究テーマを決定する。

< 参考図書 >

第3-4回

< 授業計画 >

第5-12回 基本文献講読

研究計画に沿って、まず基本文献の講読を行う。

第13-22回 先行研究文献講読

基本文献に引き続き先行研究文献の講読を行う。また、必要な実地調査等が

あれば、実地調査等の結果についての検討も行う。

第23-26回 研究計画の再検討

これまでの研究成果を検討し、論文の内容や構成について再検討を行う。

第27-30回 論文の記述指導

再検討の結果に基づいて論文を完成させる。

論文の購読

平常点による

受講者のテーマに沿って検討する。

2022年度 後期

4.0単位

理論経済学特殊研究

佐藤 伸明

< 授業の方法 >

対面授業

< 授業の目的 >

ディプロマポリシー並びにカリキュラムポリシーの1に資する科目である。

特に、経済理論の専門的知識の習得を目指す。

< 到達目標 >

経済理論やそれに関連した実証研究の専門的論文が読めるようになること。

< 授業の進め方 >

テキストの輪読と報告および質疑応答により進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

テキストの選択と授業の進め方

< テキスト >

受講生の希望と学力に基づいて最適なテキストを選ぶ。

テキストの読み方や授業の進め方を説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回

第1章に内容について

第1章の内容について報告と研究

第4回 前回の続き

第5回

第2章

第2章の内容について報告と研究

第6回 前回の続き

第7回

第3章

第3章の内容について報告と研究

第8回 前回の続き

第9回

第4章

第4章の内容について報告と研究

第10回 前回の続き

第11回 第5章

第5章の内容について報告と研究

第12回 前回の続き

第13回 第6章

第6章の内容について報告と研究

第14回 前回の続き

第15回 第7章

第7章の内容について報告と研究

第16回 前回の続き

第17回 第8章

第8章の内容について報告と研究

第18回 前回の続き

第19回 第9章

第9章の内容について報告と研究

第20回 前回の続き

第21回 第10章

第10章の内容について報告と研究

第22回 前回の続き

第23回 第11章

第11章の内容について報告と研究

第24回 前回の続き

第25回 第12章

第12章の内容について報告と研究

第26回 前回の続き

第27回 学習・研究まとめ 1

学習・研究した内容のまとめ報告 1

第28回 前回の続き

第29回 学習・研究まとめ 2

学習・研究した内容のまとめ報告 2

テキストの予習と復習，特に予習に力を入れること。内

容理解のうえ問題点を考えておくこと。

授業中の報告とまとめ報告に基づく。まとめ報告は文章として提出してもらう。

提出先などは、授業時に知らせる。丸山徹著『新版 経済原論』（第3版）岩波書店、新古典派に重点を置いたミクロ・マクロのテキスト。日本経済への適応を一つの主題とした日本経済論でもある。これより少し難しいテキスト、E. Malinvaud, Lectures on Microeconomic Theory, 1985, (日本語訳がある)。

または

現代古典派経済学の書物で経済発展論や産業造分析の理論と実証研究に役立つ書物。

例えば、

Pasinetti, L. L., Theory of Production, 1977. (日本語訳がある)。

Kurz and Salvadori, Theory of Production, 1995 など。

ただし、受講生の希望に基づいて、上記以外からテキストを選ぶ場合がある。

授業中に指示する。

2022年度 後期

4.0単位

理論経済学特殊講義

竹治 康公

< 授業の方法 >

テキストの輪読による。

< 授業の目的 >

(主題)現代の世界経済を理解する上で新古典派経済学だけでは不十分であり、代替的な分析手法と

してのマルクス経済学を含む古典派経済学の理論体系を理解することを目的とする。

(目標)上記の内容について理論・応用の各分野での研修を進めるのに十分なミクロ的分析能力を習

得する。

< 到達目標 >

1. 各分野で修士論文を書くためのミクロ経済学の知識の習得

2. スラッファによるリカードの定式化の数理的側?の研究の基礎?の習得

< 授業の進め方 >

テキストや関連論?の輪読

< 提出課題など >

第1-3回

< 成績評価方法・基準 >

数学の準備 微積分 1

< テキスト >

微積分法の最適化問題への応用について理解する。

< 参考図書 >

第4-6回

< 授業計画 >

第7, 8回 数学の準備 線形代数 1

線形代数の比較静学問題や価値論への応用について理解する。

第9, 10回 数学の準備 線形代数 2

引き続き、線形代数の比較静学問題や価値論への応用について理解する。

第11, 12回 消費者行動と企業行動 1

消費者行動については効用の性質、予算制約付き効用最大化、主体均衡の性質、

顕示選好などについて理解する。企業行動については生産関数の性質、

費用関数の導出、短期と長期の関係、結合生産などについて理解する。

第13, 14回 消費者行動と企業行動 2

引き続き、消費者行動については効用の性質、予算制約付き効用最大化、主

体均衡の性質、顕示選好などについて理解する。企業行動については生産関

数の性質、費用関数の導出、短期と長期の関係、結合生産などについて理解

する。

第15, 16回 一般均衡と厚生経済学 1

一般均衡の性質、一般均衡とパレート効率性の関連について理解する。

また市場の失敗について理解する。

第17, 18回 一般均衡と厚生経済学 2

引き続き、一般均衡の性質、一般均衡とパレート効率性の関連について理解する。また市場の失敗について理解する。

第19, 20回 マルクスとスラッファの価値理論 1

マルクスやスラッファのような再生産体系を基礎とする価値論・価格論について理解する。

第21, 22回 マルクスとスラッファの価値理論 2

引き続き、マルクスやスラッファのような再生産体系を基礎とする価値論・

価格論について理解する。

第23, 24回 市場経済と計画経済 1

市場経済と計画経済を?較し、それぞれのメリット・デメリットについて理

解する。

第25, 26回 市場経済と計画経済 2

引き続き、市場経済と計画経済を?較し、それぞれのメリット・デメリット

について理解する。

第27, 28回 古典派経済学と新古典派経済学 1
古典派の再生産可能体系を基礎とした価値論と新古典派の主観的価値論の思想と現実への応用について理解する。
第29, 30回 古典派経済学と新古典派経済学 2
引き続き、古典派の再生産可能体系を基礎とした価値論と新古典派の主観的価値論の思想と現実への応用について理解する。
論文の講読、数学の演習
講義での討論の内容50%, レポート(7回提出)50% 講義中に指示する。
講義中に指示する。

2022年度 前期
4.0単位
理論経済学特殊講義
佐藤 伸明

< 授業の方法 >
対面授業
< 授業の目的 >
ディプロマポリシーの(1. 知識・理解)(2. 思考・判断)並びにカリキュラムポリシーの1に資する科目である。
特に、経済理論の専門的知識の習得を目指す。
< 到達目標 >
経済理論やそれに関連した実証研究の専門的論文が読めるようになること。
< 授業の進め方 >
テキストの輪読と報告および質疑応答により進める。
< 提出課題など >
第1回

< 成績評価方法・基準 >
テキストの選択と授業の進め方
< テキスト >
受講生の希望と学力に基づいて最適なテキストを選ぶ。
テキストの読み方や授業の進め方を説明する。
< 参考図書 >

第2回
< 授業計画 >
第3回
第1章に内容について
第1章の内容について報告と研究
第4回 前回の続き
第5回
第2章
第2章の内容について報告と研究

第6回 前回の続き
第7回
第3章
第3章の内容について報告と研究
第8回 前回の続き
第9回
第4章
第4章の内容について報告と研究
第10回 前回の続き
第11回 第5章
第5章の内容について報告と研究
第12回 前回の続き
第13回 第6章
第6章の内容について報告と研究
第14回 前回の続き
第15回 第7章
第7章の内容について報告と研究
第16回 前回の続き
第17回 第8章
第8章の内容について報告と研究
第18回 前回の続き
第19回 第9章
第9章の内容について報告と研究
第20回 前回の続き
第21回 第10章
第10章の内容について報告と研究
第22回 前回の続き
第23回 第11章
第11章の内容について報告と研究
第24回 前回の続き
第25回 第12章
第12章の内容について報告と研究
第26回 前回の続き
第27回 学習・研究まとめ1
学習・研究した内容のまとめ報告1
第28回 前回の続き
第29回 学習・研究まとめ2
学習・研究した内容のまとめ報告2
テキストの予習と復習、特に予習に力を入れること。内容理解のうえ問題点を考えておくこと。
授業中の報告とまとめ報告に基づく。まとめ報告は文章として提出してもらおう。
提出先などは、授業時に知らせる。 丸山徹著『新版 経済原論』(第3版)岩波書店、新古典派に重点を置いたミクロ・マクロのテキスト。日本経済への適応を一つの主題とした日本経済論でもある。これより少し難しいテキスト、E. Malinvaud, Lectures on Microeconomic Theory, 1985, (日本語訳がある)。
E. Malinvaud, Macroeconomic Theory, 1998.

または

現代古典派経済学の書物。

例えば、

Pasinetti, L. L., Theory of Production, 1977. (日本語訳がある)。

Kurz and Salvadori, Theory of Production, 1995
など。

ただし、受講生の希望に基づいて、上記以外からテキストを選ぶ場合がある。

授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学特別演習 (1年次)

竹治 康公

< 授業の方法 >

研究成果の報告と指導による。

< 授業の目的 >

受講者との議論を通じて、テーマを決定し、先行研究のサーベイ、実地調査の指導等を通じて次年度の修士論文完成を目指す。

< 到達目標 >

修士論文をほぼ完成できる。

< 授業の進め方 >

受講者と相談の上、先行研究のサーベイ、調査結果の検討、執筆原稿についての議論を行う。

< 提出課題など >

第1-2回

< 成績評価方法・基準 >

研究の推進方法

< テキスト >

前年度の研究内容などを踏まえて、本年度の研究推進計画を立てる。

< 参考図書 >

第3-14回

< 授業計画 >

第15-16回 修士論文の見直し

前回までの結果に基づき、内容や構成の修正を検討する。

第17-26回 修士論文執筆の推進

論文執筆の推進に従って、その内容を精査する。

第27-30回 修士論文予備原稿の完成

次年度で修士論文が完成できるように、前回までの成果と次年度の執筆方針を検討する。

論文の執筆

論文の進捗と内容による。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学特別演習 (1年次)

佐藤 伸明

< 授業の方法 >

演習

対面授業

< 授業の目的 >

ディプロマポリシーの(1. 知識・理解)(2. 思考・判断)並びにカリキュラムポリシーの2に資する科目である。

特に、経済理論の専門的知識の習得を目指す。

< 到達目標 >

経済理論やそれに関連した実証研究の専門的論文が読めるようになること。

< 授業の進め方 >

テキストの輪読と報告および質疑応答により進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

テキストの選択と授業の進め方

< テキスト >

受講生の希望と学力に基づいて最適なテキストを選ぶ。

テキストの読み方や授業の進め方を説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回

第1章に内容について

第1章の内容について報告と研究

第4回 前回の続き

第5回

第2章

第2章の内容について報告と研究

第6回 前回の続き

第7回

第3章

第3章の内容について報告と研究

第8回 前回の続き

第9回

第4章

第4章の内容について報告と研究

第10回 前回の続き

第11回 第5章

第5章の内容について報告と研究

第12回 前回の続き

第13回 第6章

第6章の内容について報告と研究

第14回 前回の続き

第15回 第7章

第7章の内容について報告と研究

第16回 前回の続き

第17回 第8章

第8章の内容について報告と研究

第18回 前回の続き

第19回 第9章

第9章の内容について報告と研究

第20回 前回の続き

第21回 第10章

第10章の内容について報告と研究

第22回 前回の続き

第23回 第11章

第11章の内容について報告と研究

第24回 前回の続き

第25回 第12章

第12章の内容について報告と研究

第26回 前回の続き

第27回 学習・研究まとめ 1

学習・研究した内容のまとめ報告 1

第28回 前回の続き

第29回 学習・研究まとめ 2

学習・研究した内容のまとめ報告 2

テキストの予習と復習，特に予習に力を入れること。内容理解のうえ問題点を考えておくこと。

授業中の報告とまとめ報告に基づく。まとめ報告は文章として提出してもらう。

提出先などは，授業時に知らせる。丸山徹著『新版経済原論』（第3版）岩波書店，新古典派に重点を置いたミクロ・マクロのテキスト。日本経済への適応を一つの主題とした日本経済論でもある。これより少し難しいテキスト，E.Malinvaud, Lectures on Microeconomic Theory, 1985, (日本語訳がある)。

E.Malinvaud, Macroeconomic Theory, 1998.

または

現代古典派経済学の書物。

例えば，

Pasinetti, L.L., Theory of Production, 1977. (日本語訳がある)。

Kurz and Salvadori, Theory of Production, 1995

など。

ただし，受講生の希望に基づいて，上記以外からテキストを選ぶ場合がある。

授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学特別演習（2年次）

竹治 康公

<授業の方法>

研究成果の報告と指導による。

<授業の目的>

受講者との議論を通じて、テーマを決定し、先行研究のサーベイ、実地調査の指導等を通じて博士論文を完成さ
を目指す。

<到達目標>

博士論文をほぼ完成できる。

<授業の進め方>

受講者と相談の上、先行研究のサーベイ、調査結果の検
討、執筆原稿についての議論を?う。

<提出課題など>

第1-2回

<成績評価方法・基準>

研究の推進方法

<テキスト>

前年度の研究内容などを踏まえて、本年度の研究推進計
画を立てる。

<参考図書>

第3-14回

<授業計画>

第15-16回 博士論文の見直し

前回までの結果に基づき、内容や構成の修正を検討する。

第17-26回 博士論文執筆の推進

論文執筆の推進に従って、その内容を精査する。

第27-30回 博士論文予備原稿の完成

次年度で博士論文が完成できるように、前回までの成果
と次年度の執筆方針を検討する。

論文の執筆

論文の進捗と内容による。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学特別演習（2年次）

佐藤 伸明

<授業の方法>

対面授業

輪読，質疑応答

<授業の目的>

ディプロマポリシーの（1．知識・理解）（2．思考・
判断）並びにカリキュラムポリシーの2に資する科目で
ある。

特に、経済理論の専門的知識の習得を目指す。

<到達目標>

経済理論やそれに関連した実証研究の専門的論文が読めるようになること。

<授業の進め方>

テキストの輪読と報告および質疑応答により進める。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

テキストの選択と授業の進め方

<テキスト>

受講生の希望と学力に基づいて最適なテキストを選ぶ。

テキストの読み方や授業の進め方を説明する。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回

第1章に内容について

第1章の内容について報告と研究

第4回 前回の続き

第5回

第2章

第2章の内容について報告と研究

第6回 前回の続き

第7回

第3章

第3章の内容について報告と研究

第8回 前回の続き

第9回

第4章

第4章の内容について報告と研究

第10回 前回の続き

第11回 第5章

第5章の内容について報告と研究

第12回 前回の続き

第13回 第6章

第6章の内容について報告と研究

第14回 前回の続き

第15回 第7章

第7章の内容について報告と研究

第16回 前回の続き

第17回 第8章

第8章の内容について報告と研究

第18回 前回の続き

第19回 第9章

第9章の内容について報告と研究

第20回 前回の続き

第21回 第10章

第10章の内容について報告と研究

第22回 前回の続き

第23回 第11章

第11章の内容について報告と研究

第24回 前回の続き

第25回 第12章

第12章の内容について報告と研究

第26回 前回の続き

第27回 学習・研究まとめ1

学習・研究した内容のまとめ報告1

第28回 前回の続き

第29回 学習・研究まとめ2

学習・研究した内容のまとめ報告2

テキストの予習と復習、特に予習に力を入れること。内容理解のうえ問題点を考えておくこと。

授業中の報告とまとめ報告に基づく。まとめ報告は文章として提出してもらう。

提出先などは、授業時に知らせる。丸山徹著『新版経済原論』（第3版）岩波書店、新古典派に重点を置いたミクロ・マクロのテキスト。日本経済への適応を一つの主題とした日本経済論でもある。これより少し難しいテキスト、E.Malinvand, Lectures on Microeconomic Theory, 1985, (日本語訳がある)。

E.Malinvand, Macroeconomic Theory, 1998.

または

現代古典派経済学の書物。

例えば、

Pasinetti, L.L., Theory of Production, 1977. (日本語訳がある)。

Kurz and Salvadori, Theory of Production, 1995

など。

ただし、受講生の希望に基づいて、上記以外からテキストを選ぶ場合がある。

授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学特別演習 (3年次)

竹治 康公

<授業の方法>

研究成果の報告と指導による。

<授業の目的>

受講者との議論を通じて、テーマを決定し、先行研究のサーベイ、実地調査の指導等を通じて博士論文を完成さ

を目指す。

<到達目標>

博士論文を完成させる。

<授業の進め方>

受講者と相談の上、先行研究のサーベイ、調査結果の検討、執筆原稿についての議論を行う。

< 提出課題など >

第1-2回

< 成績評価方法・基準 >

研究の推進方法

< テキスト >

前年度の研究内容などを踏まえて、本年度の研究推進計画を立てる。

< 参考図書 >

第3-14回

< 授業計画 >

第15-16回 博士論文の見直し

前回までの結果に基づき、内容や構成の修正を検討する。

第17-26回 博士論文執筆の推進

論文執筆の推進に従って、その内容を精査する。

第27-30回 博士論文の完成

博士論文を完成させる。

論文の執筆

論文の進捗と内容による。

2022年度 前期～後期

4.0単位

理論経済学特別演習（3年次）

佐藤 伸明

< 授業の方法 >

対面授業

< 授業の目的 >

ディプロマポリシー並びにカリキュラムポリシーの2に資する科目である。

特に、経済理論の専門的知識の活用を目指す。

< 到達目標 >

経済理論やそれに関連した実証研究の専門的論文が読めるようになること。

< 授業の進め方 >

テキストの輪読と報告および質疑応答により進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

テキストの選択と授業の進め方

< テキスト >

受講生の希望と学力に基づいて最適なテキストを選ぶ。

テキストの読み方や授業の進め方を説明する。

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回

第1章に内容について

第1章の内容について報告と研究

第4回 前回の続き

第5回

第2章

第2章の内容について報告と研究

第6回 前回の続き

第7回

第3章

第3章の内容について報告と研究

第8回 前回の続き

第9回

第4章

第4章の内容について報告と研究

第10回 前回の続き

第11回 第5章

第5章の内容について報告と研究

第12回 前回の続き

第13回 第6章

第6章の内容について報告と研究

第14回 前回の続き

第15回 第7章

第7章の内容について報告と研究

第16回 前回の続き

第17回 第8章

第8章の内容について報告と研究

第18回 前回の続き

第19回 第9章

第9章の内容について報告と研究

第20回 前回の続き

第21回 第10章

第10章の内容について報告と研究

第22回 前回の続き

第23回 第11章

第11章の内容について報告と研究

第24回 前回の続き

第25回 第12章

第12章の内容について報告と研究

第26回 前回の続き

第27回 学習・研究まとめ1

学習・研究した内容のまとめ報告1

第28回 前回の続き

第29回 学習・研究まとめ2

学習・研究した内容のまとめ報告2

テキストの予習と復習、特に予習に力を入れること。内容理解のうえ問題点を考えておくこと。

授業中の報告とまとめ報告に基づく。まとめ報告は文章として提出してもらう。

提出先などは、授業時に知らせる。 E.Malinvaut, Lectures on Microeconomic Theory,1985, (日本語訳

がある)。

E.Malinvaud, Macroeconomic Theory, 1998.

または

現代古典派経済学の書物。

Kurz and Salvadori, Theory of Production, 1995

ただし、受講生の希望に基づいて、上記以外からテキストを選ぶ場合がある。

授業中に指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労働経済学演習 (1年次)

圓生 和之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

演習(1年次)の目的は、修士論文のテーマを選び、その下で基礎的な研究を進め、修士論文の構想を立てることである。その過程で、経済学研究科修士課程のDPに掲げる、「1.知識・理解：経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。」、「2.思考・判断：経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」、「3.関心・意欲：修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。」、「4.技能・表現：修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる」をある程度達成する。なお、この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている。

< 到達目標 >

- ・ 修士論文のテーマを確定する。
- ・ 関連する文献を整理し、修士論文の一部を構成できるようまとめておく。
- ・ 修士論文の構想を発表し、2年次4月末に提出する研究計画書の準備をする。

< 授業の進め方 >

ゼミ生の報告と討論を中心にすすめる。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習(M1)の進め方、研究倫理等

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第4回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第5回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第6回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第7回 基本的文献の整理

基本的文献の概要の作成

第8回 文献リストの作成

研究テーマの絞り込み、関連する文献のリストアップ

第9回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第10回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第11回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第12回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第13回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第14回 関連文献の整理

関連文献の概要の作成

第15回 前期のまとめ

前期のまとめと夏季休暇中の計画

第16回 研究テーマの確定

修士論文の研究テーマの確定

第17回 研究テーマの背景

研究テーマの背景の報告と討論

第18回 研究テーマの背景

研究テーマの背景の報告と討論

第19回 研究課題の検討

研究課題についての報告と検討

第20回 研究課題の設定

研究課題の設定

第21回 研究方法の検討

研究課題に適切な研究方法の検討

第22回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第23回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第24回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第25回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第26回 研究方法の修得

研究課題に必要な研究方法の修得

第27回 研究方法の適用

修得した研究方法の研究課題への適用

第28回 研究方法の適用

修得した研究方法の研究課題への適用

第29回 論文の構想

修士論文の構想の発表と討論

第30回 後期のまとめ

後期のまとめと春季休暇中の計画

学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には15時間以上が必要となる。

演習での報告や討論，提出物などを総合的に評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労働経済学演習（2年次）

圓生 和之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

演習(2年次)の目的は、テーマに沿った研究をさらに進め、修士論文として完成させることである。その過程で、経済学研究科修士課程のDPに掲げる、「1.知識・理解：経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する。」、「2.思考・判断：経済学・経営学の学問領域の高度な研究方法をもって、自ら設定した課題を総合的に考察することができる。」、「3.関心・意欲：修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心があり、社会の発展に貢献したいと考えている。」、「4.技能・表現：修得した高度な専門知識を社会に向けて的確かつ簡明に伝えることができる」を達成する。なお、この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている。

< 到達目標 >

・経済学研究科学位論文審査基準や経済学研究科学位論文作成細則に示された要件を満たす修士論文を完成させる。

< 授業の進め方 >

ゼミ生の報告と討論を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

演習(M2)の進め方，研究倫理等

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究計画書の作成

研究計画書の作成と提出

第4回 研究結果の報告

研究結果の報告と討論

第5回 研究結果の報告

研究結果の報告と討論

第6回 研究結果の報告

研究結果の報告と討論

第7回 修士論文の構想の見直し

研究課題・文献リスト・研究方法の再検討

第8回 研究結果の報告

研究結果の報告と討論

第9回 研究結果の報告

研究結果の報告と討論

第10回 考察

研究結果を用いた研究目的及び研究課題の解説

第11回 考察

先行研究との違いや論文の貢献の検討

第12回 考察

論文の問題点や今後の課題の検討

第13回 結論

研究の結論のまとめ

第14回 論文題目・論文計画書の検討

修士論文題目・修士論文計画書の検討

第15回 前期のまとめ

前期のまとめと夏季休暇中の計画

第16回 論文題目・論文計画書

論文題目の確定，論文計画書の作成と提出

第17回 修士論文作成

序章の作成

第18回 修士論文作成

先行研究のサーヴェイの章の作成

第19回 修士論文作成

研究課題に関する章の作成

第20回 修士論文作成

結びの章と参考文献一覧の作成

第21回 中間報告会の準備

修士論文中間報告会の準備

第22回 修士論文の修正

中間報告会でのコメントへの対応

第23回 修士論文の修正

中間報告会でのコメントへの対応

第24回 修士論文の推敲

論文の構成，明瞭性などの確認と修正

第25回 修士論文の校正

誤字・脱字その他の確認と修正

第26回 修士論文の提出

修士論文と論文要旨の完成と提出

第27回 最終試験の準備

修士論文最終試験の準備

第28回 最終試験の準備

修士論文最終試験の準備

第29回 最終試験の準備

修士論文最終試験の準備

第30回 最終試験の準備

修士論文最終試験の準備

学修の目安となる時間は、一律ではないものの、平均的には30時間以上が必要となる。

演習での報告や討論，修士論文などを総合的に評価する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労働経済学特殊研究

圓生 和之

< 授業の方法 >

オンライン演習

< 授業の目的 >

労働市場の事象について、経済学の理論をもとに分析し、データを用いて計量的に実証することによる研究を進める。

本特殊研究は、経済学研究科博士後期課程のDPに掲げる「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つ」ことに対応している。

< 到達目標 >

・労働市場にかかる課題を設定し、適切な実証分析を行うことができる（意識，技能）。

・実証分析結果を論理的に解釈することができる（知識）。

・研究結果を内容・形式ともに適切に論文としてまとめることができる（技能）。

< 授業のキーワード >

労働経済学、労働市場、計量実証分析

< 授業の進め方 >

報告とそれに対する質疑応答を中心に進める。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

研究課題の確認

< テキスト >

修士論文の成果と課題の確認

< 参考図書 >

第2回？ 第3回

< 授業計画 >

第4回？ 第6回 先行研究のサーベイ1

基本的な文献のサーベイ

第7回？ 第9回 先行研究のサーベイ2

最先端の文献のサーベイ

第10回？ 第12回 研究内容の検討

先行研究を踏まえた研究内容の検討

第13回？ 第14回 研究報告1

研究の目的、背景、分析手段についての報告

第15回？ 第16回 研究報告2

先行研究のサーベイのまとめの報告

第17回？ 第19回 研究報告3

計量分析結果の報告

第20回？ 第22回 研究報告4

計量分析結果の解釈の報告

第23回？ 第24回 研究報告5

研究のまとめと政策的含意についての報告

第25回 論文の構成の検討

論文の構成の検討

第26回？ 第28回 論文の各章の検討

論文の各章の検討

第29回 論文最終報告

作成した論文の最終報告

第30回 まとめ

博士論文の完成に向けての課題の総括

学習に必要な時間の目安は、一律ではないものの、各回およそ90分程度が必要となる。

各回の報告と質疑応答の内容50%、提出論文50%で評価する。

2022年度 後期

4.0単位

労働経済学特殊講義

岡本 弥

2022年度 前期

4.0単位

労働経済学特殊講義

圓生 和之

< 授業の方法 >

オンライン講義、演習

< 授業の目的 >

労働経済学の基本的な理論を学び、現代の労働市場を分析します。さらに、特に内部労働市場の分析を取りあげ、人事の経済学について学びます。

いずれも、指定するテキストや論文を輪読し議論することを基本に講義を行います。

本講義科目は、経済学研究科修士課程のDPに掲げる「経済学・経営学に関する高度な専門知識を有する」こと、「修得した高度な専門知識を社会で応用することに関心をもって社会に貢献」することを目指すものです。

< 到達目標 >

・労働市場について経済学の観点から分析できる(知識)、
・労働市場の動向について日頃から高い関心持つ(態度・習慣)、
・労働市場に関する問題について自分の考えを述べることができる(技能)、ことを目指します。

< 授業のキーワード >

労働市場、労働供給、労働需要、賃金と雇用、人事

< 授業の進め方 >

指定するテキストや論文を輪読し議論することを基本的に講義を進めます。

<履修するにあたって>

講義の進め方や、成績評価方法について、第1回の講義で説明しますので、受講する場合は必ず第1回の講義を受講してください。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

労働経済学の考え方

<テキスト>

開講にあたり、講義の目的、概要、進め方、受講に際しての注意点などのガイダンスを行います。

<参考図書>

第2回

<授業計画>

第3回 Labor markets

現代の労働市場を具体的なデータで概観します。労働力人口、労働時間、産業と職業、賃金などを上げるとともに、高学歴化と高齢化という近年の我が国の労働市場の動向を概観します。

第4回 Labor economic data

代表的な労働経済データについて学びます。現金給与総額、所定外労働時間、常用雇用指数、有効求人倍率、完全失業率等を取り上げ、データの本質を見抜く力を養います。

第5回 How to decide wages and employment

労働需要と労働供給の基本的な構造について学びます。労働需要と労働供給が一致する均衡点で決まる賃金と雇用の決め方を理解します。労働市場の不完全性にも言及します。

第6回 Wage disparity

なぜ人によって賃金は違うのかという賃金格差の問題を考えます。限界生産性価値、補償賃金格差、効率賃金、支払能力、労働市場の分断などの論点について議論します。

第7回 Education and training

「学び」と「訓練」について議論します。学歴間の賃金格差はなぜ生じるか、企業による訓練について、その費用は誰が負担すべきかといったことを考えます。

第8回 Fluidization of employment

会社を辞めるといことについて考えます。様々な形態の離職、転職率の推移、会社を辞めるメカニズム、企業による解雇権の規制などを取り上げ、労働市場の変化と雇用の流動化について議論を深めます。

第9回 Unemployment and Employment Policy

労働政策の中心的な課題である失業について考えます。失業の実態を概観し、失業が発生するメカニズムとして、総需要の不足、雇用のミスマッチなどの観点から分析します。

第10回 Unemployment and Employment Policy

失業率を下げるための政策について考えます。マクロ経済政策、積極的労働市場政策、企業の活性化政策を取り上げるとともに、ワークシェアリングなど近年の動向についても紹介します。

第11回 Employment of women

女性労働の課題について考えます。女性の活躍推進が求められる中、女性労働の現実を概観し、結婚・育児等による非労働力化、女性の非正規労働の拡大、男女間の処遇格差などについて議論します。

第12回 Employment of youth

若年労働の課題について考えます。労働者としての若者の特徴を分析し、若者の置かれた状況として、失業者やニート、非正規労働(フリーター)、若者の高離職率などを概観します。

第13回 Employment of the elderly

高齢者の雇用問題について考えます。少子高齢化が進展する中での高齢労働のあり方について議論します。高齢者の雇用が若年など他の世代の雇用に与える影響についても考えます。

第14回 Challenges of Labor Economics

これまでの講義の内容を総括したうえで、労働経済学の意義と役割について議論します。

第15回 中間テスト

前半の講義の理解を確認するための中間テストを行います。

第16回 前半のまとめ

中間テストの解説を行うとともに、これまでの講義の内容を総括し、労働経済学の意義と役割について再確認します。

第17回 Concept of Personnel Economics

後半の講義では、「内部労働市場の分析」として「人事の経済学」について学びます。組織の人事に関する事項を経済学的にアプローチする意味について考えます。

第18回 Hiring and personnel changes

人事部門が新入社員の採用に当たってどのような考え方を基本としているのか。採用基準の設定の問題を取り上げ、相対賃金と相対生産性の考え方などを学びます。

第19回 Hiring and personnel changes

適任者の採用について議論を進めます。採用者の募集を想定し、不確定契約の基本構造を学びます。また、労働者の生産性を知ることについて考えます。配属先の決定の問題についても議論します。

第20回 Hiring and personnel changes

社員の採用について、日本企業における現在の状況を踏まえ具体的な議論を進めます。

第21回 Wage determination Wage determination

賃金の基本的な構造について学びます。固定賃金と変動賃金について、産出(アウトプット)と投入(インプット)に基づくものと捉えて分析します。リスク回避と賃金決定のメカニズムについても議論します。

第22回 Wage determination Seniority-based incentive

年功型インセンティブについて考えます。効率性に欠けると考えられやすい年功型の賃金について、理論的な分析を行い、経済合理性を検証します。国際比較も行います。

第23回 Wage determination Fundamentals of wage practice

賃金の基礎として、賃金表の基本的な構造を理解したうえで、ベースアップと定期昇給など、賃金実務の基礎的な事項について学びます。

第24回 Non monetary compensation

非金銭的報酬について考えます。非金銭的な要因を金銭相当額に換算することで進展した近年の研究の状況を概観します。また、非金銭的報酬を考える拠り所として補償賃金格差の仮説を取り上げ、議論を深めます。

第25回 Personnel assessment

人事評価の目的、人事評価で得られる情報について確認し、誰が誰をどのように評価すべきかについて、評価の頻度、項目、手法などの論点ごとに、近年の研究知見を踏まえて議論します。

第26回 Promotion

昇進に関わる事項を取り上げます。まずトーナメントモデルによる分析を学びます。また昇進の機能を最大に発揮させる賃金体系の設計について検討します。これらにより昇進の機能を考えます。

第27回 Human Capital Theory and Education

人的資本理論の基本的な考え方を紹介し、教育の経済学の基本を学びます。また、職場における教育訓練について経済学的な分析を行います。これらを踏まえ、仕事の技能と若者の雇用についての政策的含意を議論します。

第28回 Retirement management and career change

退職管理について考えます。生産性の低い労働者の退職管理について分析し、退職誘導と逆選択など、退職管理の合理性について考えます。また、転職についても、データと近年の研究成果を紹介し議論します。

第29回 期末テスト

これまでの学習を振り返り、学びの達成度を確認するため期末テストを実施します。

第30回 まとめ

期末テストの解説を行うとともに、これまでの講義の内容を総括し、労働経済学の意義と役割、今後の課題について検討します。

必要となる時間は、一律ではないものの、平均的には90分程度が目安となります。

・指定するテキストや論文を輪読し議論することを基本に講義を進めます。

・その上で、講義中に「中間テスト」「期末テスト」を行うほか、小テストを行います。いずれも、実施後、講義の中で解説と講評を行います。

講義中の「中間テストと期末テスト」60%、小テスト40%（このほか、講義中の発言等講義への貢献に依って加減します。）下記の参考書欄のテキストを予定していますが、受講生の学習の進捗等を考慮して、講義中に指示します。

George J Borjas(2019)"Labor Economics;8th edition" McGraw-Hill Education.

Edward P.Lazear & Mike Gibbs(2015)"Personnel Economics in Practice;3rd edition" Wiley.

2022年度 前期～後期

4.0単位

労働経済学特別演習（1年次）

圓生 和之

<授業の方法>

演習

<授業の目的>

特別演習(1年次)の目的は、博士論文の構想を立て、設定した研究課題に基づいて研究を進め、博士論文の一部を構成する論文を作成することである。その過程で、経済学研究科博士後期課程のDPに掲げる、「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し、研究者として独創的な研究を行い、社会の発展に貢献できる能力を持つとともに、研究科が定める修了要件を満たすことによって、博士の学位を授与する」をある程度達成する。なお、この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている。

<到達目標>

- ・博士論文のテーマを確定する。
- ・関連する文献のサーヴェイや研究課題に沿った研究結果をまとめ、博士論文の一部を構成する論文を完成させる。
- ・博士論文の構想を発表し、2年次4月末に提出する研究計画書の準備をする。
- ・学会誌、あるいはそれに準ずる雑誌等への投稿の準備を進める。

<授業の進め方>

ゼミ生の報告と討論を中心にすすめる。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス

<テキスト>

特別演習(D1)の進め方、研究倫理等

<参考図書>

第2回

< 授業計画 >

第3回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第4回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第5回 基本的文献の講読

研究テーマ選定のための基本的文献の講読

第6回 基本的文献の整理

講読した基本的文献の概要の作成

第7回 文献リストの作成

研究テーマの絞り込み，関連する文献のリストアップ

第8回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第9回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第10回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第11回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第12回 関連文献の講読

テーマに関連する論文の講読

第13回 関連文献の整理

関連文献の概要の作成

第14回 研究テーマの確定

博士論文の研究テーマの確定

第15回 前期のまとめ

前期のまとめと夏季休暇中の計画

第16回 研究テーマの背景

研究テーマの背景の報告と討論

第17回 研究課題の検討

研究課題についての報告と検討

第18回 研究課題の設定

研究課題の設定

第19回 研究方法の検討

研究課題に適切な研究方法の検討

第20回 研究方法の修得

研究に必要な研究方法の修得

第21回 研究方法の修得

研究に必要な研究方法の修得

第22回 研究方法の修得

研究に必要な研究方法の修得

第23回 研究方法の適用

修得した研究方法の研究課題への適用

第24回 研究方法の適用

修得した研究方法の研究課題への適用

第25回 研究結果の報告

研究結果の報告と討論

第26回 考察

研究結果を用いた研究目的及び研究課題の解説

第27回 考察

先行研究との違いや論文の貢献の検討，論文の問題点や今後の課題の検討

第28回 結論の検討

研究の結論のまとめ

第29回 研究概要報告書の作成

博士論文の構想，研究概要報告書の作成と提出

第30回 後期のまとめ

後期のまとめと春季休暇中の計画

学修の目安となる時間は，一律ではないものの，平均的には30時間以上が必要となる．

演習での報告や討論，提出物などを総合的に評価する．

2022年度 前期～後期

4.0単位

労働経済学特別演習（2年次）

圓生 和之

< 授業の方法 >

演習

< 授業の目的 >

特別演習(2年目)の目的は，D1で進めた研究をさらに進めるとともに，博士論文の構想を見直し，各自の設定した研究課題の下で，博士論文の一部を構成する論文を作成することである．その過程で，経済学研究科博士後期課程のDPに掲げる，「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し，研究者として独創的な研究を行い，社会の発展に貢献できる能力を持つとともに，研究科が定める修了要件を満たすことによって，博士の学位を授与する」をある程度達成する．なお，この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている．

< 到達目標 >

・研究課題に沿った研究を行い，博士論文を構成する論文を完成させる．

・博士論文の構想を見直し，3年次4月末に提出する研究計画書の準備をする．

・学会誌，あるいはそれに準ずる雑誌等へ投稿する．

< 授業の進め方 >

ゼミ生の報告と討論を中心にすすめる．

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

特別演習(D2)の進め方，研究倫理等

< 参考図書 >

第2回

< 授業計画 >

第3回 研究課題の設定

研究課題の見直しと新たな設定

第4回 文献リストの作成
 新たな研究課題に関連する文献のリストアップ
 第5回 関連文献の講読
 テーマに関連する論文の講読
 第6回 関連文献の講読
 テーマに関連する論文の講読
 第7回 関連文献の整理
 講読した関連文献の概要の作成
 第8回 研究方法の検討
 研究課題に適切な研究方法の検討
 第9回 研究方法の修得
 研究課題に必要な研究方法の修得
 第10回 研究方法の適用
 修得した研究方法の研究課題への適用
 第11回 研究結果の報告
 研究結果の報告と討論
 第12回 考察
 研究結果を用いた研究目的及び研究課題の解説
 第13回 考察
 先行研究との違いや論文の貢献の検討，論文の問題点や今後の課題の検討
 第14回 結論の検討
 研究の結論のまとめ
 第15回 前期のまとめ
 前期のまとめと夏季休暇中の計画
 第16回 研究課題の設定
 研究課題の見直しと新たな設定
 第17回 文献リストの作成
 新たな研究課題に関連する文献のリストアップ
 第18回 関連文献の講読
 テーマに関連する論文の講読
 第19回 関連文献の講読
 テーマに関連する論文の講読
 第20回 関連文献の整理
 講読した関連文献の概要の作成
 第21回 研究方法の検討
 研究課題に適切な研究方法の検討
 第22回 研究方法の修得
 研究課題に必要な研究方法の修得
 第23回 研究方法の適用
 修得した研究方法の研究課題への適用
 第24回 研究結果の報告
 研究結果の報告と討論
 第25回 研究結果の報告
 研究結果の報告と討論
 第26回 考察
 研究結果を用いた研究目的及び研究課題の解説
 第27回 考察
 先行研究との違いや論文の貢献の検討，論文の問題点や今後の課題の検討

第28回 結果の検討
 研究の結論のまとめ
 第29回 研究概要報告書の作成
 博士論文の構想の見直し，研究概要報告書の作成と提出
 第30回 後期のまとめ
 後期のまとめと春季休暇中の計画
 学修の目安となる時間は，一律ではないものの，平均的には30時間以上が必要となる。
 演習での報告や討論，提出物などを総合的に評価する。

 2022年度 前期～後期
 4.0単位
 労働経済学特別演習（3年次）
 圓生 和之

 <授業の方法>
 演習
 <授業の目的>
 特別演習(3年次)の目的は，D2で進めた研究を深化・拡張し，博士論文として完成させることである。その過程で，経済学研究科博士後期課程のDPに掲げる，「経済学・経営学の高度な専門知識を修得し，研究者として独創的な研究を行い，社会の発展に貢献できる能力を持つとともに，研究科が定める修了要件を満たすことによって，博士の学位を授与する」を達成する。なお，この科目は研究指導の場としての演習科目に位置づけられている。
 <到達目標>
 ・経済学研究科学位論文審査基準や経済学研究科学位論文作成細則に示された要件を満たす博士論文を完成させる。
 ・学会誌，あるいはそれに準ずる雑誌等へ投稿する。
 <授業の進め方>
 ゼミ生の報告と討論を中心にすすめる。
 <提出課題など>
 第1回
 <成績評価方法・基準>
 ガイダンス
 <テキスト>
 特別演習(D1)の進め方，研究倫理等
 <参考図書>
 第2回
 <授業計画>
 第3回 研究の発展
 これまでの研究の深化と拡張
 第4回 研究の発展
 これまでの研究の深化と拡張
 第5回 研究の発展
 これまでの研究の深化と拡張
 第6回 博士論文（草稿）の作成
 序章の作成

第7回 博士論文（草稿）の作成
 先行研究を展望する章の作成
 第8回 博士論文（草稿）の作成
 研究課題に関する章の作成
 第9回 博士論文（草稿）の作成
 研究課題に関する章の作成
 第10回 博士論文（草稿）の作成
 研究課題に関する章の作成
 第11回 博士論文（草稿）の作成
 研究課題に関する章の作成
 第12回 博士論文（草稿）の作成
 研究課題に関する章の作成
 第13回 博士論文（草稿）の作成
 結びの章，参考文献リストの作成
 第14回 博士論文中間報告書の作成
 博士論文中間報告書の検討・作成・提出
 第15回 前期のまとめ
 前期のまとめと夏季休暇中の学位予備論文の作成の計画
 第16回 論文題目・学位予備論文の作成
 博士論文題目の確定，学位予備論文と博士論文計画書の
 完成と提出
 第17回 博士論文の作成
 予備審査でのコメントへの対応
 第18回 博士論文の作成
 予備審査でのコメントへの対応
 第19回 博士論文の作成
 序章の作成
 第20回 博士論文の作成
 先行研究を展望する章の作成
 第21回 博士論文の作成
 研究課題の章の作成
 第22回 博士論文の作成
 結びの章，参考文献リストの作成
 第23回 博士論文の推敲
 論文の構成，明瞭性などの確認と修正
 第24回 博士論文の校正
 誤字・脱字その他の確認と修正
 第25回 博士論文の提出
 博士論文と論文要旨の完成と提出
 第26回 最終試験の準備
 博士論文最終試験にむけての準備
 第27回 最終試験の準備
 博士論文最終試験にむけての準備
 第28回 最終試験の準備
 博士論文最終試験にむけての準備
 第29回 最終試験の準備
 博士論文最終試験にむけての準備
 第30回 最終試験の準備
 博士論文最終試験にむけての準備
 学修の目安となる時間は，一律ではないものの，平均的

には30時間以上が必要となる．
 演習での報告や討論，博士論文を総合的に評価する．

 2022年度 前期～後期

4.0単位

労務管理論演習（1年次）

松田 裕之

<授業の方法>

演習形式：対面授業を実施

<授業の目的>

修士論文のテーマを選定し、文献資料の収集や実地調査を行う。

<到達目標>

・修士論文のテーマを決定し、それに必要な資料を収集する。

・資料を整理して、重要個所を抜粋する。

<授業のキーワード>

資料、史料、調査、取材、研究ノート

<授業の進め方>

・履修生の関心に合わせて、それを研究テーマに整理していくための指導を行う。

・資料の収集方法や調査・取材の作法について指導を行う。

・収集したデータの整理方法について指導を行う。

・研究ノートの作成に関する指導を行う。

<履修するにあたって>

あらゆるニュースソースに鋭い関心を抱き、常に観察疑問 原因究明 因果に関する私見を提示できるように鍛錬すること。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス（前半）

<テキスト>

修士論文の作成に関する基礎知識について。

<参考図書>

第2～3回

<授業計画>

第4～14回 テーマの設定

履修者の関心を提示させ、それに対して質疑応答を行いながら、修士論文のテーマを固めていく。

第15回 テーマの仮決定

設定テーマについて発表。

第16回 ガイダンス（後半）

修士論文作成のための技法について。

第17～18回 修士論文の形式と構造

「仮説」の意味とその実証の作法について、実例をもちいて解説。その後、簡単なシミュレーションを行う。

第19～29回 修士論文の準備作業

資料の収集と整理、重要箇所を抜粋したノートの作成、文献一覧の作成を進めながら、履修者の疑問や悩みについて相談・指導を行う。毎回進捗状況についての報告を行ってもらう。

第30回 修士論文作成の準備完了

テーマ設定・参考資料一覧の作成・重要箇所の抜粋ノートの作成の完了を確認する。

修士論文作成に必要な資料収集・調査取材に可能な限りの時間を傾注すること。

進捗状況を口頭もしくはレポートのかたちで適宜報告すること。

テーマ設定・参考資料一覧の作成・重要箇所の抜粋ノートの作成の完了を確認し、次年度からの修士論文作成に十分と判断できれば「合格」とする。履修生の関心や必要に応じて適宜教示。

とくになし。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労務管理論演習（2年次）

松田 裕之

< 授業の方法 >

演習形式：全面対面授業を実施。

< 授業の目的 >

1年次に設定した修士論文のテーマにもとづき、修士論文の執筆と完成を行う。

< 到達目標 >

修士論文を完成させて、修士（経済学）を取得する。

< 授業のキーワード >

執筆、貫徹、学位取得

< 授業の進め方 >

毎回論文執筆の進捗状況を報告し、それにもとづいて適宜必要な助言や指導を行う。

< 履修するにあたって >

絶対に修士（経済学）を本年度内に取得するという強い意志を以て臨むこと。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス（前半）

< テキスト >

修士論文の執筆作法に関する基礎知識について。

< 参考図書 >

第2～3回

< 授業計画 >

第4～14回 論文執筆（前半）

修士論文の執筆と適宜必要な指導。

第15回 第一次草稿の完成

第一次草稿を完成させる。夏季休暇中に徹底した朱入れ

を行う。

第16回 ガイダンス（後半）

朱入れした第一次草稿を返却し、必要な指示を行う。

第17～22回 第二次草稿の執筆

第二次草稿の執筆と進捗状況の報告。必要な指導を適宜行う。

第23～24回 第二次草稿の完成と朱入れ

第二次草稿を提出。朱入れを行い、問題点について指導。

第25～30回 修士論文の完成

修士論文を完成させる。進捗状況を報告。適宜必要な指導を行う。

修士論文の完成に可能な限りの時間を傾注すること。

進捗状況を口頭もしくはレポートのかたちで適宜報告すること。

修士（経済学）取得を以て「合格」とする。履修生の関心や必要に応じて適宜教示。

とくになし。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労務管理論特殊研究

松田 裕之

< 授業の方法 >

演習形式：対面授業を実施。

< 授業の目的 >

経営資源の要であるヒト＝人間を扱う労務管理は、文字どおり企業経営の核となる。モノ（設備）・カネ（資本）・情報も、ヒト資源の活用如何で、価値を減らしたり、高めたりするからだ。ヒト資源を有効に活用する企業は生き残り、できない企業は衰亡の途を辿るのが市場経済システムの掟となっている。この講義では、前期に労務管理の先進国アメリカで作られ、我が国の労務管理の在り方にも大きな影響を及ぼした管理理念・実践・制度を学び、後期に我が国労務管理の発展と現状の課題を展望する。

< 到達目標 >

(1) ヒト資源の特徴とはなにかが理解できる。

(2) アメリカで開発された労務管理の理念・実践・制度が理解できる。

(3) 日本とアメリカの労務管理の関連が理解できる。

(4) 企業経営における人間の喜怒哀楽への興味を深めることができる。

(5) 現代の企業経営に関する基本的知識を学修できる。

(6) 経営の問題を総合的に分析・解析できる知識と技能をできる。

< 授業のキーワード >

労働者・労働力・労働の意味、剰余価値、能率の論理と

人間性の論理

< 授業の進め方 >

前期は松田裕之（2006年）『物語 経営と労働のアメリカ史』現代図書を使用し、アメリカにおける近代的労務管理の理念や技法について講義します。後期は伊藤・渡辺・斉藤（2010年）『はじめて学ぶ人のための人材マネジメント論入門』文眞堂をテキストに使用し、各篇の内容を企業のケースにあてはめて、具体的に解析していきます。

< 履修するにあたって >

高校の「政治経済（現代社会）」のなかの経済にかんする部分および「世界史」のなかの近代～現代にかけての部分を復習しておくこと。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

上記にある講義の内容・形式・評価・注意事項についての確認を行ったあと、「労務管理」の内容とそれを学ぶ意義を解説。

< 参考図書 >

第2～3回

< 授業計画 >

第4～6回 なぜ「アメリカ合衆国」が労務管理において先進的であったのか？

産業革命の発信地にして、一時世界に多くの領土を築いたイギリスではなく、19世紀半ばにようやく工業化を開始した後進国アメリカが、なぜ企業経営の核である労務管理分野において先進的であったのかを検討。

第7～10回 「ヒト資源」の合理的・効率的活用はどのように行われたのか？

まず、ひたすら「ヒト資源」を効率的に活用するために、作業動作・手順・工程の改善が行われた。具体的には、成り行き管理～科学的管理～分業式流れ作業～コンベア式流れ作業という系譜を分析。

第11～13回 「ヒト資源」のもつ人間性・心性にはどのような配慮が払われたのか？

「ヒト」は機械ではなく、生身の人間であり、各々個性や感情をもっている。この人間性の側面を無視しては、合理的な作業動作・手順・工程を整備しても意味がない。そこで、「ヒト資源」の効率的活用の前提として、その人間性に対してもなんらかの働きかけが必要となる。具体的な系譜として、企業内福祉（福利厚生）～労使協議機関の設置～人間関係論（ヒューマン・リレーションズ）を分析。

第14～15回 「ヒト資源の」効率的活用と人間性への配慮はどのようにして両立させるのか？

効率性と人間性は相反するものではなく、同時並行的に追求・実現せねば「ヒト資源」の活用は図れない。そこ

で、「ヒト資源」が自発的・積極的に作業に取り組むような仕事内容を設計していくことが労務管理の課題となる。心理学・生物学・人類学の多彩な成果を活用した行動科学的労務管理が第二次大戦後に登場し、洗練化された。マズローの欲求段階説や職務拡大・職務充実の技法・動機付けの理論などを解説。

第16～17回 経営家族主義から日本型雇用システムの成立まで

我が国が欧米型の近代的企業制度を導入した明治期から、第二次大戦を経て、戦後復興・高度経済成長期に至る近現代の経営史をフォローしながら、いわゆる日本型雇用システム（長期継続雇用・年功序列型昇給昇進体系・企業別組合）の理念・実践・技法・制度がどのような環境要因の作用によって築かれてきたのかを分析。

第18～20回 日本型雇用システムの変貌と現代

戦後の我が国企業の大きな特徴とされた日本型雇用システムが、国内外の経済的・政治的・文化的な環境要因の変化を受けて、1980年代から次第に見直しが進められるプロセスを分析。

第21～23回 日本企業の雇用システム？ヒトはなぜ企業で働こうとするのか？？

雇用は労務管理の「入口」であり、企業の中に在る仕事とそれを担う能力があると考えられる外部の人間＝ヒト資源とを組み合わせる行為である。これは、採用・配置・配置転換・退職というかたちで頻繁に実施される。その実際を具体例によって検討。

第24～26回 日本企業の人材育成制度？企業はヒトをどのように育てるのか？？

仕事とヒト資源を適切に組み合わせるには、ヒトの能力を高めることで、彼ら彼女らが取り組める仕事を増やしていくことが必要。そのために、企業は人材育成や能力開発に積極的な取り組みを行う。その実践と問題点を具体例によって検討。

第27～28回 日本企業の人事組織構造？企業は仕事をどのようにヒトに分担させるのか？？

企業は採用・育成したヒト資源が各自の仕事の分担を守って効率的に働けるように、さまざまな組織的な仕組みや工夫を実施する。ヒト資源を動かす組織づくりの基礎と、ヒト資源各自の仕事の在り方について、具体例をまじえながら検討。

第29～30回 日本企業のモチベーションとリーダーシップ？企業はヒトをどのように刺激するのか？？

ヒト資源が仕事に期待するのは、賃金や役職といった「報酬」だけではない。彼ら彼女らには金銭欲・出世欲のほかにもさまざまな欲求があり、人生の時間の多くを占める仕事の中でそれらを実現したいという希望も抱いている。これらを叶えられるような、叶えた実感できるような刺激（インセンティブ）を与えることで、企業はヒト資源のもつ潜在力を発揮させることができる。具体的な技法にはどのようなものがあるのかを考察。

次回講義までのあいだで、復習を兼ねたノート作成に2時間を充当すること。

毎回の指定箇所のレジュメ

毎回の課題発表と質疑応答が50%、作成したノートの内容が50%で評価する。 適宜紹介もしくは指示する。 適宜紹介もしくは指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労務管理論特殊講義

松田 裕之

< 授業の方法 >

演習形式：対面授業を実施。

< 授業の目的 >

経営資源の要であるヒト＝人間を扱う労務管理は、文字どおり企業経営の核となる。モノ（設備）・カネ（資本）・情報も、ヒト資源の活用如何で、価値を減らしたり、高めたりするからだ。ヒト資源を有効に活用する企業は生き残り、できない企業は衰亡の途を辿るのが市場経済システムの掟となっている。この講義では、前期に労務管理の先進国アメリカで作られ、我が国の労務管理の在り方にも大きな影響を及ぼした管理理念・実践・制度を学び、後期に我が国労務管理の発展と現状の課題を展望する。

< 到達目標 >

- (1) ヒト資源の特徴とはなにかが理解できる。
- (2) アメリカで開発された労務管理の理念・実践・制度が理解できる。
- (3) 日本とアメリカの労務管理の関連が理解できる。
- (4) 企業経営における人間の喜怒哀楽への興味を深めることができる。
- (5) 現代の企業経営に関する基本的知識を学修できる。
- (6) 経営の問題を総合的に分析・解析できる知識と技能をできる。

< 授業のキーワード >

労働者・労働力・労働の意味、剰余価値、能率の論理と人間性の論理

< 授業の進め方 >

前期は松田裕之（2006年）『物語 経営と労働のアメリカ史』現代図書を使用し、アメリカにおける近代的労務管理の理念や技法について講義します。後期は伊藤・渡辺・斉藤（2010年）『はじめて学ぶ人のための人材マネジメント論入門』文眞堂をテキストに使用し、各篇の内容を企業のケースにあてはめて、具体的に解析していきます。

< 履修するにあたって >

高校の「政治経済（現代社会）」のなかの経済にかんす

る部分および「世界史」のなかの近代～現代にかての部分を復習しておくこと。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

上記にある講義の内容・形式・評価・注意事項についての確認を行ったあと、「労務管理」の内容とそれを学ぶ意義を解説。

< 参考図書 >

第2～3回

< 授業計画 >

第4～6回 なぜ「アメリカ合衆国」が労務管理において先進的であったのか？

産業革命の発信地にして、一時世界に多くの領土を築いたイギリスではなく、19世紀半ばによろやく工業化を開始した後進国アメリカが、なぜ企業経営の核である労務管理分野において先進的であったのかを検討。

第7～10回 「ヒト資源」の合理的・効率的活用はどのように行われたのか？

まず、ひたすら「ヒト資源」を効率的に活用するために、作業動作・手順・工程の改善が行われた。具体的には、成り行き管理～科学的管理～分業式流れ作業～コンベア式流れ作業という系譜を分析。

第11～13回 「ヒト資源」のもつ人間性・心性にはどのような配慮が払われたのか？

「ヒト」は機械ではなく、生身の人間であり、各々個性や感情をもっている。この人間性の側面を無視しては、合理的な作業動作・手順・工程を整備しても意味がない。そこで、「ヒト資源」の効率的活用の前提として、その人間性に対してもなんらかの働きかけが必要となる。具体的な系譜として、企業内福祉（福利厚生）～労使協議機関の設置～人間関係論（ヒューマン・リレーションズ）を分析。

第14～15回 「ヒト資源の」効率的活用と人間性への配慮はどのようにして両立させるのか？

効率性と人間性は相反するものではなく、同時並行的に追求・実現せねば「ヒト資源」の活用は図れない。そこで、「ヒト資源」が自発的・積極的に作業に取り組むような仕事内容を設計していくことが労務管理の課題となる。心理学・生物学・人類学の多彩な成果を活用した行動科学的労務管理が第二次大戦後に登場し、洗練化された。マズローの欲求段階説や職務拡大・職務充実の技法・動機付けの理論などを解説。

第16～17回 経営家族主義から日本型雇用システムの成立まで

我が国が欧米型の近代的企業制度を導入した明治期から、第二次大戦を経て、戦後復興・高度経済成長期に至る近現代の経営史をフォローしながら、いわゆる日本型雇用

システム（長期継続雇用・年功序列型昇給昇進体系・企業別組合）の理念・実践・技法・制度がどのような環境要因の作用によって築かれてきたのかを分析。

第18～20回 日本型雇用システムの変貌と現代戦後の我が国企業の大きな特徴とされた日本型雇用システムが、国内外の経済的・政治的・文化的な環境要因の変化を受けて、1980年代から次第に見直しが進められるプロセスを分析。

第21～23回 日本企業の雇用システム?ヒトはなぜ企業で働こうとするのか??

雇用は労務管理の「入口」であり、企業の中に在る仕事とそれを担う能力があると考えられる外部の人間=ヒト資源とを組み合わせる行為である。これは、採用・配置・配置転換・退職というかたちで頻繁に実施される。その実際を具体例によって検討。

第24～26回 日本企業の人材育成制度?企業はヒトをどのように育てるのか??

仕事とヒト資源を適切に組み合わせるには、ヒトの能力を高めることで、彼ら彼女らが取り組める仕事を増やしていくことが必要。そのために、企業は人材育成や能力開発に積極的な取り組みを行う。その実践と問題点を具体例によって検討。

第27～28回 日本企業の人事組織構造?企業は仕事をどのようにヒトに分担させるのか??

企業は採用・育成したヒト資源が各自の仕事の分担を守って効率的に働けるように、さまざまな組織的な仕組みや工夫を実施する。ヒト資源を動かす組織づくりの基礎と、ヒト資源各自の仕事の在り方について、具体例をまじえながら検討。

第29～30回 日本企業のモチベーションとリーダーシップ?企業はヒトをどのように刺激するのか??

ヒト資源が仕事に期待するのは、賃金や役職といった「報酬」だけではない。彼ら彼女らには金銭欲・出世欲のほかにもさまざまな欲求があり、人生の時間の多くを占める仕事の中でそれらを実現したいという希望も抱いている。これらを叶えられるような、叶えたと実感できるような刺激（インセンティブ）を与えることで、企業はヒト資源のもつ潜在力を発揮させることができる。具体的な技法にはどのようなものがあるのかを考察。

次回講義までのあいだで、復習を兼ねたノート作成に2時間を充当すること。

毎回の指定箇所のレジュメ

毎回の課題発表と質疑応答が50%、作成したノートの内容が50%で評価する。 適宜紹介もしくは指示する。 適宜紹介もしくは指示する。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労務管理論特別演習（1年次）

松田 裕之

<授業の方法>

演習形式：対面授業を実施

<授業の目的>

博士論文のテーマ選定にむけた文献資料の収集や実地調査を行う。

<到達目標>

- ・博士論文のテーマ決定に必要な資料を収集する。
- ・資料を整理して、重要箇所を抜粋する。

<授業のキーワード>

資料、史料、調査、取材、研究ノート

<授業の進め方>

- ・履修生の関心に合わせて、それを研究テーマに整理していくための指導を行う。
- ・資料の収集方法や調査・取材の作法について指導を行う。
- ・収集したデータの整理方法について指導を行う。
- ・研究ノートの作成に関する指導を行う。

<履修するにあたって>

あらゆるニュースソースに鋭い関心を抱き、常に観察疑問 原因究明 因果に関する私見を提示できるように鍛錬すること。

<提出課題など>

第1回

<成績評価方法・基準>

ガイダンス（前半）

<テキスト>

博士論文の作成に関する基礎知識について。

<参考図書>

第2～3回

<授業計画>

第4～15回 テーマの設定

履修者の関心を提示させ、それに対して質疑応答を行いながら、博士論文のテーマを固めていく。

第16～20回 博士論文の形式と構造

「仮説」の意味とその実証の作法について、実例をもちいて解説。その後、簡単なシミュレーションを行う。

第21～30回 博士論文の準備作業

資料の収集と整理、重要箇所を抜粋したノートの作成、文献一覧の作成を進めながら、履修者の疑問や悩みについて相談・指導を行う。毎回進捗状況についての報告を行ってもらう。

博士論文作成に必要な資料収集・調査取材に可能な限りの時間を傾注すること。

進捗状況を口頭もしくはレポートのかたちで適宜報告す

ること。
テーマ設定・参考資料一覧の作成・重要箇所の抜粋ノートの作成の完了を確認し、次年度からの博士論文作成に十分と判断できれば「合格」とする。履修生の関心や必要に応じて適宜教示。
とくになし。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労務管理論特別演習（2年次）

松田 裕之

< 授業の方法 >

演習形式：対面授業を実施

< 授業の目的 >

博士論文の作成にむけた文献資料や実地調査の結果の整理を行う。

< 到達目標 >

博士論文の執筆に必要な資料・データを整理し、仮説の設定と論文骨子の作成を行う。

< 授業のキーワード >

資料、史料、調査、取材、研究ノート

< 授業の進め方 >

・履修生の関心に合わせて、それを研究テーマに整理していくための指導を行う。

・収集したデータの整理方法について指導を行う。

・論文骨子の作成に関する指導を行う。

< 履修するにあたって >

あらゆるニュースソースに鋭い関心を抱き、常に観察疑問 原因究明 因果に関する私見を提示できるように鍛錬すること。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス

< テキスト >

仮説の設定や論文骨子の作成に関する技能と知識について。

< 参考図書 >

第2～10回

< 授業計画 >

第11～15回 仮説の検証作法

仮説の検証方法の好例と悪例を紹介し、適切な検証の方法を習得する。

第16～28回 博士論文の骨子作成

仮説検証の流れにしたがって論文の骨子を作成する。

第29～30回 博士論文の準備作業の完了

次年度からの博士論文の執筆にむけた準備作業を終える。

博士論文の仮説設定と骨子作成に可能な限りの時間を傾注すること。

進捗状況を口頭もしくはレポートのかたちで適宜報告すること。

仮説の設定と骨子の作成の完了を確認し、次年度からの博士論文執筆に十分な水準にあると判断できれば「合格」とする。履修生の関心や必要に応じて適宜教示。
とくになし。

2022年度 前期～後期

4.0単位

労務管理論特別演習（3年次）

松田 裕之

< 授業の方法 >

演習形式：対面授業を実施

< 授業の目的 >

博士論文のテーマにもとづき、論文の執筆と完成を行う。

< 到達目標 >

博士論文を完成させて、博士（経済学）を取得する。

< 授業のキーワード >

執筆、貫徹、学位取得

< 授業の進め方 >

毎回論文執筆の進捗状況を報告し、それにもとづいて適宜必要な助言や指導を行う。

< 履修するにあたって >

絶対に博士（経済学）を本年度内に取得するという強い意志を以て臨むこと。

< 提出課題など >

第1回

< 成績評価方法・基準 >

ガイダンス（前半）

< テキスト >

博士論文の執筆作法に関する基礎知識について。

< 参考図書 >

第2～3回

< 授業計画 >

第4～14回 論文執筆（前半）

博士論文の執筆と適宜必要な指導。

第15回 第一次草稿の完成

第一次草稿を完成させる。夏季休暇中に徹底した朱入れを行う。

第16回 ガイダンス（後半）

朱入れした第一次草稿を返却し、必要な指示を行う。

第17～22回 第二次草稿の執筆

第二次草稿の執筆と進捗状況の報告。必要な指導を適宜行う。

第23～24回 第二次草稿の完成と朱入れ

第二次草稿を提出。朱入れを行い、問題点について指導。

第25～30回 博士論文の完成

博士論文を完成させる。進捗状況を報告。適宜必要な指導を行う。

博士論文の完成に可能な限りの時間を傾注すること。
進捗状況を口頭もしくはレポートのかたちで適宜報告すること。

博士（経済学）取得を以て「合格」とする。もしくは、
数年後の論文博士の取得につながる完成度を持った草稿
の完成を以て「合格」とする。履修生の関心や必要に
応じて適宜教示。

とくになし。